えっ……!? WE ♥ JAPANESE MMA?

kamipro 紙のプロレス

MMA & P…G MAGAZIN…

enterbrain MOOK

2009
140

特別定価940yen

11.29内藤大助戦&12.31吉田秀彦戦で世間に風穴をブチ開けろ!
本誌独占! 衝撃のビッグマウス対談!!

石井慧×亀田興毅

世間なら こんな"スーパーハルク"を待っていた!! まかせろ!!

"世界最高峰"を取りもどせ!!
日本には"黄金のライト級"がある!

青木真也/川尻達也 北岡悟/菊野克紀/BJペン

我々はいまこそ彼の足跡を振り返る理由がある!

特集 ミルコ・クロコップ

人気企画が帰ってきた!! 愛弟子・柴田勝頼が緊急参戦!

船木誠勝"変態"座談会

吉田vs石井戦に大興奮だ!!

小林まこと

大好評「1993年の女子プロレス」

ブル中野

"打倒・猪木"の裏側を激白!

中邑真輔

kamipro

2009 No.140 CONTENTS

表紙写真／吉場正和

腐ってもボブ・サップ!? TBS健在!

MMA

004 石井 慧×亀田興毅
014 青木真也
018 川尻達也
022 菊野克紀
026 北岡 悟
030 BJペン
033 首脳陣に聞く大晦日興行戦争!
國保尊弘/笹原圭一/谷川貞治/佐伯繁
050 小林まこと『柔道部物語』作者
056 “ゴールドメダリストハンター”菊田早苗の憂鬱
060 堀辺正史「雷電とは何か?」
108 長尾メモ8が語る「俺の女子格闘技」
116 高谷裕之
120 髙阪剛の『DREAM.11』徹底解説
124 海外から見たDREAMとは?
126 『UFC103』&『DREAM.11』総括座談会
132 菊地成孔「黒魔術が解かれたK-1帝国」
138 UFCがアジア制覇に本腰!

これぞジャパニーズMMA!

MIRKO CROCOP

065 特集 ミルコ・クロコップ
ミルコ変態座談会／証言集／ミルコ語録

PRO-WRESTLING

081 “プロレスラー”船木誠勝 変態座談会 with柴田勝頼
088 中邑真輔、“打倒・猪木”の裏側!
092 “15歳のゲノム戦士”定アキラ with水道橋博士
097 1993年の女子プロレス ~ブル中野編~

Columns

064 花くまゆうさくの『豆リングの汁』/金原弘光の『どこまでやるの!?』
096 椎名基樹の『サムライ三昧』
106 掟ポルシェの『萌え萌え女々苑』

世間は何を観たいのか？

ある編集者のJAPANESE MMAな苦悩

言うのか。それは簡単に言うと楽しん

そうなんですよね、はい。いまの日本で格闘技のビッグイベントがテレビなしでは成り立たないことは百も承知です！　テレビに頼れない場合は、大企業のバックアップを背景にした〝スポンサーイベント〟に走らざるをえませんから。会場はガラガラでもチケットは完売みたいな。

　わかってます、充分にわかってますって。テレビというメディアを使って大衆を振り向かせる作業は非常に重要だってことは。しかし、しかし、でしゅよ。あ、噛みましたけど、気にしないでください。

　テレビ局の意向によって振り回される格闘技、そしてある意味で奇形して提供された格闘技を、本当に本当に、大衆は望んでいるんですかね。はたして楽しんでいるんでしょうか。

　芸能人や元メジャーリーガー、マンガのキャラクターが出たってかまいやしませんよ、ええ。キン肉マン、大好きですし。

　でも「キン肉マン太郎が負けちゃった！」とか「やったぜ、ボブ・サップ！」って興奮してる大衆ってホントにいるんですかっ!?　教えてください！　彼らを使うことが問題なんじゃない。いま問われているのは「テレビと格闘技」の姿勢だと思うんです。

　そう、いま思い出した。ちょうど1年前、本誌No・129で「テレビと格闘技」をテーマにさまざまな分野の方にお話を聞いたんですよ。いまあらためて読んでみても、「テレビと格闘技」の問題点を追求する関係者の言葉は有効のまま。ハッと気づかされる。

　その特集の中であの怪物番組『電波少年』のプロデュースを手がけた土屋敏男氏（日本テレビ）にインタビューをしてるんです。よく受けてくれましたよね、こんないいかげんな雑誌の取材を。ありがとうございました。その内容は、現在の「テレビと格闘技」がはらむ問題点を的確に指摘しているのですよ。せっかくの機会だから、あらためて掲載します。読んでみてください。

「わからないものだから『なんだ、これ!?』っていう反応が出てくるわけ。そこで観客が背伸びしていく、わかるための努力をするってことが、じつは作り手と受ける側のキャッチボールになるはずなんだよ。いまは作り手側からハードルを下げていくっていうのかな。それはじつは退化なんだよ」

「そもそも格闘技なんて小学校低学年の女子や、50代の主婦にはわからなくてもいいんでしょ？」

「間違ってもバブルがもう一回くるとは思わないほうがいいよ。バブル自体、間違ってたわけだから。バブルはかならず弾けてみんなが損するわけでしょ。いかにバブルを起こさないか」

「（全体が100だとすると、どれくらいの人に肯定されればいいのか？）51でいいんだよ。極端に言えばね。ひょっとしたら、30でいいのかもしれない。30の人間がおもしろいっていうものは、あとの40はなんだかわかんないって感想、あとの30はスッゲー嫌だ、と。スッゲー嫌だって思えるものしか、じつはもの凄くおもしろいっていうものはないんだよ。『電波少年』の最初なんかそうだもん。『スッゴイおもしろい！』って言われたよ。でも片方で『こんなふざけたものはない！』とも。だからそのときに『こんなふざけたものはない！』って声を聞いてたら、やってないって。続けてないって。

　たとえば猿岩石がゴールするときに『みんな感動したがっているようだ』と思って、逆にこいつらをこのままほかの土地に連れてってまたヒッチハイクさせるっていうことを選択させたわけだよね。そしたら何千本の抗議電話がきた。じゃあ結局、何がしたかったのか。そのとき客は泣こうと思って、感動しようと思ってハンカチを用意して待ってました。でも、そこを裏切ったわけだよね。だからエンターテインメントになった」

「演出のないエンターテインメントなんてありえないんだよ。それがみんなわかってるのに、なぜ『やらせ』と言うのか。それは簡単に言うと楽しんでないだけなんだよね。『やらせだ！』と思った瞬間に、『ボクは楽しくないです！』って言ってるのに等しいわけじゃない。そこに物語があり、リアリティがあり、心を沸き立たせるものがあれば、それがたとえやらせだろうがそんなことは絶対に言わない。だからそこは、やらせとかっていう問題じゃないんだよね。それは要するに作り手が客をナメてるだけでしょ」

　あ、もうスペースがない。よ〜くわかりました、土屋さん。こんなこと言うと間違って受けとめられそうですけど、〝やらせ〟〝八百長〟〝茶番〟は命懸けでやれってことですねっ！　うん。ほかにも、たくさん胸に響くことをおっしゃってます。興味のある方はバックナンバーを購入してください。

　というわけで、「テレビと格闘技」。11月下旬、亀田興毅と内藤大助の世界戦、これは凄く楽しみですね。たぶん格闘技界で今年一番の盛り上がりになるでしょう。試合前後の世間の騒ぎ方も注目です。

　そして『Dynamite!!』と『戦極』が大晦日に同日開催されます。水面下ではいろいろなことが起こってるようです。とにもかくにも今年も世間を考えなければならない季節がやってまいりましたが、我々の苦悩はまだまだ続くというところです……。

世の中に風穴を開けろっ！

スペシャル対談

く亀田興毅

独占スペシ

石井慧×

11・29内藤vs亀田、12・31吉田vs石井 これが世間を巻き込む闘いだ！

お茶の間もビックリ！　驚愕の顔合わせがついに実現！いま格闘技界、ボクシング界で最も世間に届き、そして世間を騒がせてきた二人が禁断の合体をはたした。ともにボクシング界と柔道界で賞賛とバッシングを浴びてきた二人は、かねてからエールを送り合っていた仲だが、実際に会うのがこれが初対面。大晦日の吉田秀彦戦、11・29内藤大助とのWBC世界戦という世間を巻き込む大一番を前にした二人の風雲児は、何を語り合ったのか。独占スペシャル対談をお届けします！　シャーオラーッ！

聞き手／堀江ガンツ　撮影／吉場正和

×亀田興毅

僕が大学2年のときに同い年の亀田選手が世界王者になったんで意識してました

亀田　でっかいなー！

石井　はい（微笑）。

亀田　体重どんだけあるん？

石井　いまは103キロぐらい。

亀田　俺の2倍やで。握力どのくらいなん？

石井　80ちょっとぐらい。

亀田　リンゴ潰せるやん！

石井　リンゴを潰すのはコツがあって、指立てたら潰せるんですよ。

亀田　そうなんかあ。いやあ、ゴツいなあ。上半身とかヤバいなあ！

――というわけで今日はビッグな対談が実現したわけですけど、実際お会いしたのはこれが初めてなんですよね？

亀田　初めてやな。

――お二人は同い年で同じ大阪出身、そして同じように世間の注目を浴びつつ、物議も醸してきたわけですけど（笑）。

亀田　べつに醸してないよ。盛り上げようとはしてるけど、そんな問題起こすようなことはしてないで。俺ら一生懸命ボクシングや柔道やってきただけやん。

石井　自分はちょっと、おもしろくしようとしてます（笑）。

亀田　まあ、何事もおもろいほうがええからな（笑）。

――でも、ひたすらボクシングと柔道の練習をしてきたっていうことについては同じですよね。お二人とも同じぐらいの年齢でボクシングと柔道を始めたんじゃないですか？

亀田　何歳からやってる？

石井　中学1年から。

亀田　そうなんや、俺、小学校6年から。

――ほぼ一緒ですね。

亀田　凄いよな、それでもうオリンピックで金メダル獲ってな。ホンマにオリンピックで金メダルって凄いと思うよ。4年に一回しか獲られへんから。

――世界タイトルマッチが4年待たないと来ないようなもんですかね。

亀田　そうそう。タイトルマッチは世界ランキングに入って、またチャンスが巡ってきたらできるやんか。それが4年に一回だったら、そのときの運もあるし、そのタイミングで最高の状態に持っていくわけやから。凄いと思うよ。

石井　自分は逆に若くして世界チャンピオンになったのが凄いと思いましたね。亀田選手は自分が大学2年ぐらいのとき、世界チャンピオンになられたんで、けっこう意識してたんですよ。

――同い年の人間が世界チャンピオンになって「先を越された」みたいな感じがありましたか。

石井　そうですね。

――それもあってか、石井選手は「亀田選手、朝青龍関を尊敬してる」っていう発言がありましたよね。

亀田　ああ、あったなあ！　おもしろいやん！　金メダル持ってカメラに向かってメンチ切ってたもんな。カリスマあるで。みんなでテレビ観て「おもろいなあ！」言うてたんや。

――「亀田選手を尊敬」というのは、どういった意味で言ってたんですか？

石井　やっぱり若くして世界チャンピオンになるっていうのが凄いことだし、それには大変な努力があったと思うんで、純粋にそういうところが凄いと思ったのと。自分も周りからけっこう叩かれてたんですけど、自分以上に叩かれながら三兄弟の長男として一家を守ってるところも好きになったというか。朝青龍関もそうですけど、自分を貫いて結果を出してるところが大好きですね。

亀田　やっぱな、横綱は何かとカリスマあるからな。

――朝青龍、亀田、石井というと共通してるのは、しっかり結果は出すけれど、結果以上の波風が起こることですよね？

亀田　俺ら、なんか知らんけど常にハプニングがあるよな。

――ハプニング（笑）。

亀田　なんやろうな。そんなつもりでやってへんけど。

――横綱はこのあいだ夏場所で優勝したのに、優勝以上にガッツポーズが話題になりましたよね。亀田選手も世界王座を奪取したとき、いろいろ言われて。

亀田　バッシングされたな～。まあ、あれはしゃあないけどな。あれだけこと言ってあんな試合したから。あれはしゃあない。

石井　自分も全日本選手権のときに一番いろいろ言われましたね。

――井上康生選手に勝ったものの、その勝ち方が物議を醸して。

石井　でも、やっぱりなんだかんだ言って、結果を残さなきゃダメじゃないですか。

亀田　そうやな。とりあえず、勝たなあかんからな。どんなに文句言われても、負けたらあかん。勝ったらまた次があるから。

――負けたら何も言う権利がない、ということか。

亀田　どんな試合やっても、結果として負けたら言葉出えへんやんか。今回の大毅

でもそう。やっぱり勝たなあかん。

――そのへんは石井選手も同じ考えなん

クチャ強いらしいけど、やったら勝てる？」とか言われて、「俺、絶対に勝つよ」

――ようやく気づきましたか（笑）。

亀田　最近ようやくわかってきたわ（笑）。

でもそう。やっぱり勝たなあかん。

――そのへんは石井選手も同じ考えなんじゃないですか?

石井　それはもう、そうですね。「自分のベストが出せれば、それで満足だ」とか言う人もいますけど、自分は練習したことが出せなくても、勝てばいいです。これは持論なんですけど、自分のいいところを出すよりも、相手のいいところを出さないことを最優先で考えるし。それでおもしろくない試合になったこともけっこうありましたけど、勝つためには必要なことだと思うんで。

――その闘い方で、結果的にオリンピックではほぼ全部一本勝ちで金メダルを獲ったわけですからね。

亀田　凄いよな。

石井　決勝は違うんですけど、そうですね。

――だからお二人とも、勝負に対しての執着心がほかの選手より強い気がするんですよ。

亀田　そうかもしれんけど、俺より（三男の）和毅のほうがあるよ。

――あ、そうなんですか。

亀田　あいつはメチャクチャしつこいしな、勝たな絶対気ぃ済まんしな、遊びでもなんでも。

――遊びまで勝負にこだわりますか（笑）。

亀田　うん、ほんまにひどいよ、あいつは。

――では、もともとのお互いの印象をうかがいたいんですけど。

石井　自分は亀田選手の名前を大学1年生ぐらいのときに初めて聞いたんですよ。当時はまだ知らなかったんですけど、同級生に「ボクシングで亀田って人がいるんだけど知ってる?」って聞かれて「いや、ちょっと知らん」って話になって。「メチャクチャ強いらしいけど、やったら勝てる?」とか言われて、「俺、絶対に勝つよ」って言ったんですよ。そしたら「絶対そう言うと思ったけど、向こうも絶対そう聞かれたらそう言う人やから、ちょっと見てみ?」って言われて、そこから見るようになりました。

亀田　大阪やなあ（笑）。

――やっぱり勝たなきゃダメ、おもろくなきゃダメ、という。

亀田　「勝てる?」って聞かれたら「あたりまえやん」って言うし。なんかおもろいこと言おうとしてしまうんやろうな。

――ナチュラルなんですね。

亀田　そうそう。でも、普通にしゃべってるだけやのに、東京やと勘違いして捉えられたりするから。俺、こっち来て3年経ったけど、最近ようやくわかってきたもん。

――ようやく文化の違いがわかってきましたか（笑）。

亀田　関西の記者と関東の記者は違うからな。関西だと普通に遊びみたいな感覚でしゃべってると、これは冗談で言ってるとか、ある程度解釈して書いてくれるんやけど、関東は全部そのまま書くから。

――活字になるとドギツくなってしまう、と。

亀田　関東で活字になると、なんか知らんけど偉そうやし。関西やと「あ、これ優しいしゃべり方してるな」とかわかって、冗談ふうに書いてくれるけど、関東はアラ探すからな。だから発言には気ぃつけなあかん。

オリンピックで金メダルって凄いと思うよ
世界戦が4年に一度みたいなもんやからな

石井慧×亀

――ようやく気づきましたか（笑）。

亀田　最近ようやくわかってきたわ（笑）。

――石井選手はマスコミに話すときは、関西弁使わずに必ず敬語ですよね?

石井　はい。そのへんは考えて（笑）。

亀田　うまいことしゃべるよな。俺はほんまに敬語へタクソやん。ちゃんとしゃべった謝罪会見のときとか気持ち悪いやろ?（笑）。

――敬語を使うだけで、あれだけイメージが違うのも凄いですよね。

亀田　ほんまに。自分でも思うわ。

――記者会見や囲み取材のときの発言って、あまり言うことを考えてたりはしないんですか?

亀田　ある程度「これ言うたらあかん」とかは考えるよ。

――言っちゃダメなことは気にするけど、「何をしゃべろう」とかは考えてないわけですか?

亀田　しゃべってて自然とノッてくるほうやからな。考えておもしろいこと言おうっていうのは難しい。（話すこと）用意してたらタイミングずれるやん。「あ、ここやなかった!」みたいな。そういうのあるからな。

――石井選手は話すことを用意しててタイミングがズレることって、たまにあるんじゃないですか?

石井　たまにあります（笑）。紙に書いてるんですけど。

亀田　書いてるんか。おもろいなあ（笑）。

石井　でも、そういうときにかぎって失敗するんですよ。

亀田　そうそう、紙に書いたら失敗するよな。俺も昔そうしたもん。

――あ、そうなんですか?

亀田　昔な。紙に書いて持っていっては

石井慧×亀田興毅

内藤戦はもうシバキ倒すよ！

いないけど。一番初めの頃、紙に書いてある程度覚えて、これを言おうって。でも結局、何も言われへんまま終わったり。

――なるほど（笑）。記者からそのネタを振られなきゃ言えませんしね。

亀田　そうやねん！　自分で一方的にしゃべるわけにいかないもんな。事前に「これ言うてきて」って記者に言っといたほうがおもろいかもわからんな（笑）。

――石井選手はオリンピックなんかで、「勝ったらこれを言おう」とか考えてたんですか？

石井　考えてましたね。やっぱり柔道界って固いから、ちょっとへんなこと言うと周りから凄い言われるんですよ。

亀田　アマチュアやもんな。アマチュアは固いな。

石井　そうなんです。だから、わざと言って、それで騒がれるのがちょっと楽しかったです（笑）。

――石井選手は以前から「アマチュアだったからこそプロの人に憧れる」って言われてましたよね。そういう部分で亀田選手にシンパシーを感じる部分っていうのはありますか？

石井　それもありますし、これ聞こうと思ってたんですけど、次男の大毅くんって3人の兄弟の中で一番運動音痴的なところがあるんですか？

亀田　昔からそうやな、覚えるのが遅かったな。

石井　自分も凄い運動音痴だったんで、大毅くんに共感する部分があるんですよ。自分もいま総合格闘技の練習やってても、飲み込みは遅いし。だからこそ、何回も何回も同じことやって身につけてるところなんで。

亀田　大毅は飲み込み遅いけど、その代わり俺たちに比べて今後一番伸びる。まだまだ伸びしろいっぱいあるから。全然できてない状態であそこまでのレベルに達してるから、これからなんぼでもできると思うよ。

――石井さんも柔道界ではそういうふうに言われてたんですよね？

石井　ドンくさいって言われてました。だから練習するしかないって。

――そういったことも含めて、お二人とも練習量には自信はあるんじゃないですか？

亀田　どうやろうな？　練習してるとは思うけど、もっとせなあかんと思うな。

――まだまだできますか。

亀田　その日練習するやんか。終わった直後はしんどいから「今日もいっぱいやったわ」と思うねんけど、終わって30分くらい経つとだんだん回復してくるやん。ほんなら、さっきの練習を振り返って「あのときもうちょっと手出せたな」とか思ってしまうねん。「もうちょっとできてたやん」とか、「あと1ラウンドやろう思ったらできてたんちゃうか？」みたいな。そのときはしんどかったから、「もうできへん」と思うけどな。だから一日一日悔い残さんためにも、もっともっとせなあかんと思うしな。

石井　自分の柔道時代の練習量には目安があって、それは亀田さんのお父さんの本に書いてあったことなんですよ。

亀田　あ、そうなん？　何？

石井　「練習して、ホントに限界になったら熱が出るから、そうなったら休めばいい」って。

亀田　そうそうそう。

――限界は自分が決めるんじゃなく、身体のほうからSOSが来る、と。

亀田　「身体のほうから〝しんどい〟って出るから、そこまでおまえらやれ」ってよう言われたわ。和毅はそれで何回も熱出たからな。和毅は俺らと同じぐらいの練習を小さいときからやってたから。

石井　自分もそこまでやってっていうのはありますね。まあ、それで練習をやりすぎてケガにつながったりもしたんですけど（笑）。

亀田　柔道っていっぱいケガしそうやもんな。首とかな。ケガしたら練習できなくなるし大変や。でも、勝つためには、チャンピオンになるためには、やらなあかんからな。というか、試合するんやったらあたりまえのことやからな。

――試合に出る人は最大限の練習をするのがあたりまえ。

亀田　そうやで。練習も減量も仕事やから。みんな誰でも一生懸命仕事してるやん。それと一緒で、俺らも一生懸命練習してあたりまえやから。

石井　だから自分は、早く試合がしたいですね。まだ練習してるだけで試合してないんで。

亀田　そうやねんな。12月31日やな。

――お二人とも大一番ですよね。石井選手のデビュー戦のちょうど1カ月前には、亀田選手の世界戦があって。

亀田　（語気を強めて）もうシバキ倒すよ！

――「世界タイトルマッチ」とか「内藤」って名前を聞くだけで、スイッチ入りますか？（笑）。

亀田　そりゃちょっとなるよ。そりゃそうやん。いままでは試合決まらへんかったからあんまり言えへんかったけどな、これからは言わせてもらうわ。関係あれへん、自分がやんねんから。負けたら自分に返ってくるだけやし。俺の相手なんやから。

――そして1カ月後の大晦日には石井選手のデビュー戦があります。

石井　でも、それは全然通過点なんで。

――通過点ですか。

亀田　そりゃそうやろうな。世界チャンピオン目指してるんだから、こんなところでつまずいてるわけにいかんからな。次にいかなあかんもん。

――3階級制覇を目指す亀田選手も同じ

石井慧と亀田興毅の初顔合わせとあって、本誌の企画にもかかわらず、地上波テレビ4局、主要朝刊スポーツ紙全紙が取材に訪れた。まさに世間に届く存在といえる。

内藤戦はもうシバキ倒すよ！
勝つだけやなく完勝せな意味ない

吉田選手に負ける要素が見つからない
でも100パーセントの力で挑みます

俺ら若い世代がお互いの分野で もっともっと盛り上げていこうや

ような考えですか?

亀田 そうやな。目指してるところってまだまだ先やから。ここで苦戦してるようではあかんねんな。もっともっと圧勝でいかんと、そういう声も出えへんだろうし。だからキッチリ勝たんとな。いうたって歳が違うやん。

——一回り以上、上ですもんね。

亀田 向こう、おっちゃんやで。そうやろ? こっち若いんやから。まだまだチンポ勃つし。向こうはチンポも元気ないやろ。

——ダハハハ! そっちはどうなんでしょうね。ちなみにたしか内藤選手って僕と同い年です(笑)。

亀田 そうなんか! ごめんごめん。内藤選手もチンポは元気かもな。もしかしたら、そこは負けるかもわからん(笑)。

——でも、ボクシングでは負けない、と。

亀田 そう。ほんま、これからは若いヤツの時代やで。俺たちは22歳で一緒やんか。若い世代で新しい時代を作っていかんと。おっちゃんクラスの人に負けたらあかんって。情けないって。「若い者が何してんねん!」ってなるよ。

——若いファンに夢を与えられないですよね。

亀田 うん、夢がない。向こうは向こうでおっさんパワー出してきよるけどな。こっちは若さでいかんと。

——石井選手も大先輩の吉田選手が相手ですけど、負けるわけにいかないですよね。

石井 というか、負ける要素が見つからない(キッパリ)。

——負ける要素が見つからない!

石井 でもそこで相手をナメるとね、足元すくわれるから。120パーセントの練習と研究をして、試合では100パーセントの力で挑みます。

——亀田vs内藤戦、石井vs吉田戦というのは、ボクシング界、格闘技界で世間的な注目度では、ここ数年でナンバーワンだと思いますけど、気負いはありませんか?

亀田 全然ないよ。試合に関しては、デビュー戦から全部一緒。全部勝たなあかん試合で、全部緊張もするし。どの試合も落とされへんから。

——石井選手はどうですか?

石井 自分はプレッシャーとか、極度の緊張があったほうが力になるというか、逆にそれがないと自分はダメになってしまうんですよ。

——追い込まれれば追い込まれるほど力が出ますか。

石井 そうですね。だから、もっともっとプレッシャーがほしいですね。オリンピックのときも興奮で緊張を通り越して、集中できたんで。ただ、今度は初めてリングでやる試合なんで、やってみないとどんな緊張感なのかはわからないですけどね。

亀田vs内藤、石井vs吉田。ともに新旧対決であり、世間が最も注目する最高のカードだ。亀田と石井はこれに勝って、さらに世間を騒がす存在になることができるか?

——いまは試合が楽しみですか?

石井 楽しみですね。楽しみっていう言葉以上に、燃えるっていうか、興奮する部分があります。やっぱりバーリ・トゥード、なんでもありで闘うっていうのは、昔からの憧れだったんで。

——亀田選手から観て、なんでもありの総合格闘技ってどう思いますか?

亀田 やるのは嫌やなあ(苦笑)。

——嫌ですか(笑)。

亀田 あれは痛いやろ。グローブ薄いやん。そこそも、俺は組んだらあかんし。ボクサーがK—1行って、蹴られて痛い思いして、やられてるのも観てるしな。やっぱり総合格闘技やるなら柔道とかは強いけど、立ち技の選手はキツいよ。

石井 でも、いまけっこう立ち技が有利ですよ。

亀田 ほんま?

石井 みんな寝技も覚えてきて。

亀田 あ、立ち技のヤツが寝技覚えてくんねや。俺もやるなら寝技を覚えなあかんな。

——まあ、投げ技は大毅選手が使ってバッシングされたこともありますけどね(笑)。

亀田 あれも総合なら使えるな(笑)。

——冗談はともかく、石井選手はいまボクシングや打撃を難しさを感じてるところなんじゃないですか?

石井 最初は殴られるのが凄く怖くて。ホントに殴られ慣れる練習をしてる感じでしたね。いまも凄いやられますけど、練習を始めた頃とは全然違うレベルにはあると思います。

亀田 子どもの頃から柔道やってた人間が打撃をやるって、俺がいまから寝技やるようなもんやからな。大変やと思うけど、頑張ってほしいわ。

——では、世紀の一戦に向けて、それぞれ意気込みを聞かせていただけますか?

亀田 意気込みなあ、とりあえずキッチリ勝つ。完勝する。それだけやな。

——ただ勝つだけでなく完勝ですか。

亀田 そう。勝つのはあたりまえ。どういう勝ち方をするか、どれだけ差を見せつけて勝つか、それが一番重要。

——石井選手はどうですか?

石井 エキサイティングな試合で勝ちます。つまらない寝技はしない。

亀田 ドツキにいく?

石井 ドツキにいく!

亀田 打ち合いでいくか〜、おもろいなあ。観てる人はドツキ合いが一番おもろいからな。組みにいったら向こうもうまいやろうしな。

石井 けっこう。

——けっこうって(笑)。

亀田 うまいと思うで。上から首絞めて勝ってたやん。

——よくご存知で。袖車ですね。

亀田 そうそうそう、それそれ! あれきよるやんな。

石井 でもあれ道衣着てないとできないんで。

亀田 今回着てないの? お互い。

石井 着ないと思います。

亀田 あ、ほんま? それやったら打ち合いやな。

石井 打ち合い。

亀田 打ち合いバーンッていってボテーバキ回してもらって、年末は自分が吉田選手をシバキます!

亀田 うまいこと言うなあ。

いやな。

石井　打ち合い。

亀田　打ち合いバーンッていってボテーンと倒れたらあかんで。

石井　右が重いらしいんで、右フックには注意して。

亀田　けっこう打ち合いしよるもんな。

石井　しますね、下向いても振り回して。

亀田　ああいうメチャクチャパンチはけっこう見えにくいんよ。〝内藤パンチ〟もそうや。

――ああ、確かにそうですよね。

亀田　どこに来るかわからへん。まあ、その対策もやっとるけどね。ただ、デビュー戦っていうのがあるからな。全然勝てると思うけど、初めてだとわからんことあるからな。それだけやな。

――石井選手は亀田選手と内藤選手の試合はご覧になられますか？

石井　もちろん。これまで亀田選手の大きな試合はテレビですけど、全部観てますから。今回も試合前なんで、会場に行けるかわからないけど、テレビでは観ます。

亀田　試合前は試合に集中せなあかんからな。大晦日はどこでやるの？

石井　有明コロシアムです。

――有明は亀田選手もいろいろ思い出がありますよね。

亀田　あるなあ、いろいろ。

――大晦日は応援に行ったりすることもありそうですか？

亀田　そうやな。俺は試合も終わってるし、何もなかったら行ってみたいな。まだ総合格闘技は生で観たことないしな。

――じゃあ最後にエール交換で締めたいと思います。まず石井選手。

石井　内藤選手はどちらかというと、井上康生派、白鵬派なので、亀田選手に先にシバキ回してもらって、年末は自分が吉田選手をシバキます！

亀田　うまいこと言うなあ。

――亀田、石井、朝青龍派vs内藤、井上康生、白鵬派ですか（笑）。

亀田　こっちはカリスマ派やな（笑）。

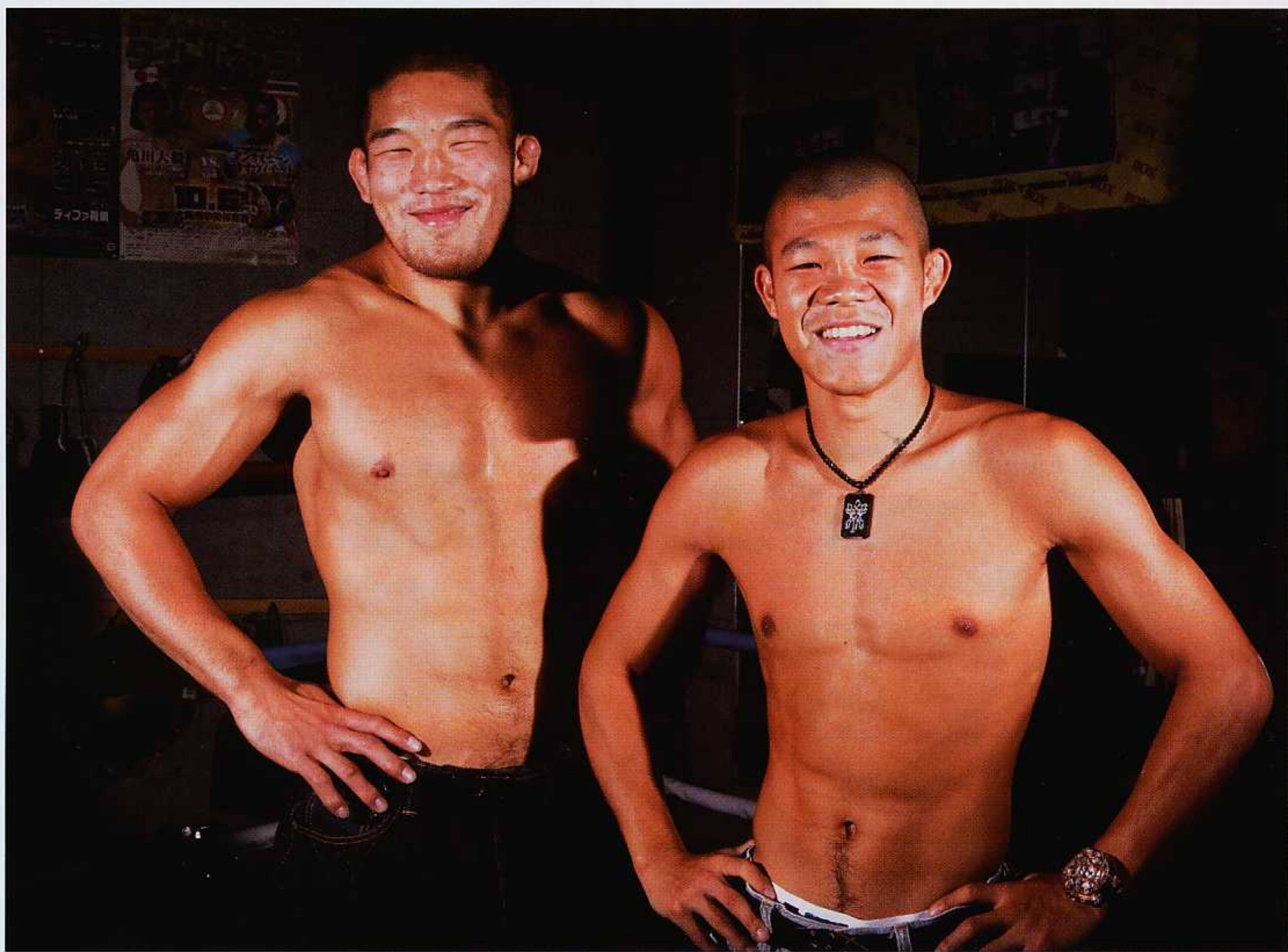
――では、亀田選手は？

亀田　俺はそんなうまいこと言えへんけど、お互いの分野で、若い世代で盛り上げていこうや。俺らでもっともっと盛り上げて、子どもらが観て「カッコええなあ、真似したいな」思われるようにならんとな。

――では、世間が大注目するお二人の大一番、期待してます！

【09年10月11日／葛飾区・亀田ジムにて収録】

石井慧×亀田興毅

俺ら若い世代がお互いの分野でもっともっと盛り上げていこうや

亀田選手に先にシバいてもらって年末は僕が吉田選手をシバキます

いしい・さとし■1986年12月19日、大阪府茨木市出身。中学で柔道を始め、06年に史上最年少19歳4カ月で全日本選手権優勝。08年には北京オリンピック100kg超級で金メダルを獲得する。その後、昨年11月にプロ総合格闘家転向を表明。大晦日の『SRC』で吉田秀彦相手にプロデビューが決定している。柔道五段。181cm、103kg。

かめだ・こうき■1986年11月17日、大阪府大阪市西成区天下茶屋出身。亀田三兄弟の長男。父・史郎からボクシングを教わり、17歳でプロデビュー。06年8月、ファン・ランダエタを破りWBA世界ライトフライ級王者となるが、その後、王座返上。今年11月29日に内藤大助の持つWBC世界フライ級王座挑戦が決定している。左ファイターボクサー。

激戦!!
黄金のライト級

青木劇的戴冠、川尻vs菊野浮上!!

かつて日本には〝世界最高峰〟と激賞されるリングがあった。いまやその称号は海の向こうに渡ってしまったが、日本のライト級だけは首の皮一枚、〝世界最高峰〟とつながっている。バカサバイバー、天下無双の火の玉、クラッシャー、空手幻想、キモ強……日本にはライト級がある!

ハンセンから劇的一本勝ち！ 次の標的はやっぱりこの男だ！

「一番闘いたいのはBJペンです！」

——昨日は「このベルトがほしかったんで
す！」なんて、心にもないことをおっしゃ

ったっす。初めて握手してもらいました。
——それにしても、今回のヨアキム戦はホ

室に前田（日明）さんがいたからおもしろ
かったんですよ。ボク、所英男選手と同じ

る。

DREAMライト級チャンピオン

青木真也
SHINYA AOKI

試合時間残り4秒で劇的一本勝ち! マッハ戦の敗北、シャオリン戦騒動、素人発言に『HERO'S』否定宣言……。
2009年のワオ木さんはいつ何時も物議を醸し続けてきたが、こうして一つの答えを出したバカサバイバーの今後とは? 気になる気になる。

聞き手/ジャン斉藤 撮影/菊池茂夫 試合写真/平工幸雄

―昨日は「このベルトがほしかったんです!」なんて、心にもないことをおっしゃってましたね。

青木 マルシアか、青木かみたいな!?

―マルシア?

青木 マルシアのウソ涙か、青木のウソ涙かみたいな。

―あ~、やっぱりウソだったんだ。

青木 ウソ泣きじゃないですよ!

―ホントですか。あと「もう泣かない」って言ってましたけど、ホントに泣かないんですか?

青木 はい。もう泣きません!

―でも、泣きながら「もう泣かない」って言ってたわけじゃないですか。

青木 泣いてないですよ!!

―そうですか(笑)。どうですか、チャンピオンになった感想は。

青木 DREAM初の日本人チャンピオンですからね。それは気持ちよかったですよね。

―これで三冠王ですね。

青木 そうですね。いちおうWAMMAライト級チャンピオンですからね。……いまだにベルトはもらってないけど。

―あと青木さんがどこかでなくした修斗世界ミドル級の……。

青木 (さえぎって)なくしてない、なくしてない。修斗はオファーがないだけです! なんか勘違いしてる人が多いけど。

―試合後のバックステージの反応はどうでした?

青木 PRIDE系のスタッフはみんな喜んでくれましたね。

―まるでFEG系が喜んでないみたいじゃないですか(笑)。

青木 あ、石井(元)館長に「感動したよ!!」って言われたんですよ。チョー嬉しかったっす。初めて握手してもらいました。

―それにしても、今回のヨアキム戦はホントにドラマ性がある試合でしたね。試合内容も、青木さんのこれまでの道のりも。関係者に聞くところ、残り1分間で仕留めることを、じつは狙ってたとか。

青木 というか、ずっとそういう練習してるんですよ。ラスト1分じゃなくてラスト20秒で取りにいく練習。

―1分じゃなくて20秒!

青木 どうして1分じゃなくて20秒かというと、残り1分で極めに行って逃げられたらパウンドアウトされちゃうかもしれない。ただ、20秒だと極めるための時間的余裕はそんなにない。だから何度も何度も20秒で極める練習をしてるんです。ぶっちゃけ判定になると思ったでしょ?

―判定になると思ったし、あたりまえですけど、判定と一本ではだいぶイメージは違いますね。青木さん、いちから試合を振り返りたいんですけど、今回はシャオリン戦問題や「DREAMが『HERO'S』になったら辞めますけどね」発言なんかで、試合前からあいかわらず物議を醸してましたよね。

青木 まあ、退路を断ってましたよね。

―凄くイジワルなことを言うと「ここまで言って負けたら、青木真也はどうなるんだろう?」っていう興味が湧いてたんですよね。

青木 そうなったら(格闘技を)辞めようかなって。ここで負けたら、もう格闘技を仕事にできなくなっていたと思いますから。だから絶ッ対に勝ってやろうと思ってました。背水の陣ですよ。

―じゃあ、普段よりテンションは違いました?

青木 スゲェ緊張しましたねぇ。でも、控室に前田(日明)さんがいたからおもしろかったんですよ。ボク、所英男選手と同じ控室だったから。

―それはおもしろそうですね(笑)。

青木 前田さん、所選手が負けたことがよっぽど悔しかったんでしょうね。KOされた所選手に「おまえ技術じゃ負けてないよ。気持ちで負けたんだよ」って熱く語り始めたんですよ。そうしたら北岡悟が「KOされてるんだから、休ませたほうがいい」って感じで前田さんを止めに行こうとしたら、『戦極』フェザー級チャンピオンの金原(正徳)選手があわてて「北岡さん、ちょっと落ちついてください!」って止めに入って。

―凄い光景だ!(笑)。

青木 前田日明、所英男も、北岡悟も、金原正徳も、みんなの個性がそれぞれ出てたでしょ?

―そんなドタバタをニヤニヤ眺める青木真也も(笑)。

青木 だから緊張してる場合じゃなかったですよ! で、前田さんがいつのまにかオレの前に立っていて、小指を立てながら「青木、コッチの調子はどうだ?」って。

―大一番の前に何を聞いてるんですか(笑)。で、ヨアキムとはこれで3回目の対戦でしたけど、正直やりづらくなかったですか?

青木 ホントにやりづらいっすね~。

―ヨアキムは青木対策を充分に練ってきてました?

青木 はい。でも、向こうに一つだけ計算違いがあるとすれば、テイクダウンされても、すぐ立ちあがれると思ってたはずなんですよ。でも、そうしないようにずっとパスガードを仕掛けてましたからね。つまり、攻撃を続けることで、相手の攻防を断

ってたんです。
——だから攻防に凄く緊張感がありましたね。
青木 緊張感ありました?
——かなりありましたよ。
青木 ああ、よかった。なんか●●●●のヤジがけっこう聞こえたからさ。ボクがローブローを蹴られたときも「演技してんな!」とか言われて。
——でも、あのときはカルバン戦の再来で「これはノーコンテストになるんじゃないかな」って思ったんですけど。
青木 ボクは何があってもやろうと思いました。
——闘える状態だったんですか?
青木 もう気持ちですよ。リングの周りにいたスタッフも「大丈夫だよな? だっておまえは大黒柱だろ?」って当然言ってくるし(笑)。
——大黒柱でも金的は痛いですよ!(笑)。金的と顔面蹴りはどっちが効きました?
青木 顔面蹴り。金的を蹴られて「うわっ!」って無防備になったときに、顔面を2回蹴られましたから。で、そこからボ〜〜〜〜ッとしちゃって。
——覚えてないんですか?
青木 そうですね。ちょっと休んでだいぶ回復してきたし。
——でも、あんなに時間を取ったら身体が冷えちゃうじゃないですか。あの中断を境に動きがガクンと落ちましたし。
青木 落ちましたねぇ。でも、とにかくプレッシャーをかけ続けることに専念して。再開後がホントに危なかった……。
——前回の対戦も金的から流れが変わっちゃいましたしね。しかし、ヨアキムって寝技が強いんですね。
青木 強い!! いやあ、やっぱり強いっすよ。3回もやりたくないっすよ!
——ハンセンの下からの十字は……。
青木 あの十字は全然、大丈夫です。殴るためにわざと取らしましたから。わざと取らして顔を殴ったり、足で顔面蹴ったりね。でも、今回はボクのパスガードの強さにビビってたと思いますけどね。で、2ラウンドのときにパスしてサイドを取れたから、「これでいける!」と思いました。
——あの局面で勝利を確信した、と。
青木 で、最後の2分でマウント取って、そこからわざと"極まらないギロチン"を仕掛けたんです。
——き、極まらないギロチン?
青木 はい。極めようと思えば極められるんだけど、相手を焦らせるためのギロチンですよね。
——確かにヨアキムは相当焦ってましたよね。
青木 フェイント、フェイント。あのギロチンで「オレ、おまえのこと極めるぞ!」って脅かして、それから逃げようと動いた

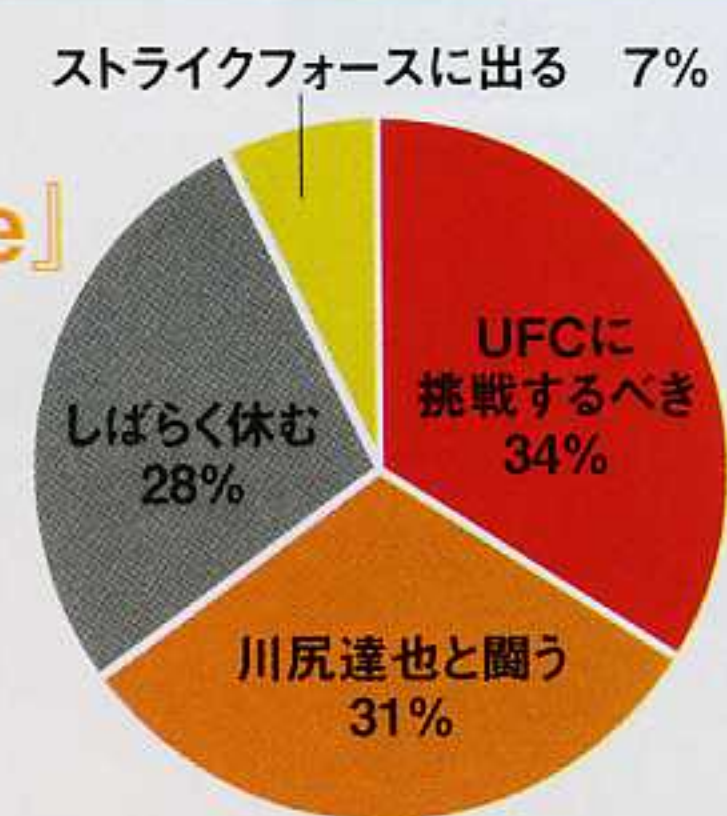
金的攻撃からの顔面蹴り2発で試合は中断。"カルバン戦の悪夢"が脳裏をよぎったシーン。モラルなきヤジを飛ばし続けた集団は、二度と会場に来ないでほしい。

青木真也 SHINYA AOKI

"極まらないギロチン"を仕掛けてハンセンの逃げを誘ったんです

ところを本命の十字で極めに行ったんです。
——すべて計算どおりですか!
青木 あのギロチンも極めようと思えば極められないこともないんですけどね。でも、あくまで恐怖を与えるのが目的ですから。で、ハンセンに凄く焦った雰囲気があったから、逃げるために絶対に動くだろうな、と。
——その前にマウントを取ったじゃないですか。あのときの動きが野生動物的でしたよね。
青木 あれ、得意なんです。ヒクソンっぽいでしょ。
——獲物を仕留めるのにず〜っと削って削って、じらしてじらして、ここだというときにバッと襲いかかるというか。
青木 だからね、マウントで押さえつけたときも、ヨアキムは相当焦っていたと思うんですよね。全然動けない。青木はいったい何をしてくるんだろう。そこでギロチンをかけられたから、焦って動いてボクの罠にハマってしまったんです。
——最後にヨアキムが回転して逃げようとしましたけど、あれも青木さんが動かしたんですか?
青木 はい。ハンセンが回転できるように仕向けて。ヨアキムが回転するのとボクが回したのと一緒だったんじゃないですか。
——思ったのは、シャオリン戦とはスタンドと寝技の違いはあると思うんですけど、青木さんのやりたいことは何一つ変わってないってことなんですよね。
青木 そうなんです。なんも変わらない。シャオリン戦の煽りVで「14分59秒で勝つ」とか宣言してたじゃないですか。だから今回もシャオリン戦も立ち技と寝技の違いはあるけど、本質的には変わりないんです。
——あのシャオリン戦の前には「BJペンにはまだまだ勝てない」って言ってましたけど。どうですか? シャオリン、ヨアキムを倒して。
青木 いやあ、まだまだ勝てないですよ。
——まだ勝てないですか。最近またUFCに対して毒を吐いてますけど。
青木 毒じゃないよ。リスペクトしてますよ。ただ、「日本人も強いんだぞ!」ってことが言いたいんです。

携帯サイト『kamipro.Move』緊急アンケート

Q.川尻達也の挑戦表明に「検討します」と応じた青木真也。今後どうすべきだと思いますか?

試合後に青木が「とにかく休みたい」と連呼していたせいもあるのか、「しばらく休む」にけっこうな票が集まった。1年半で11試合もやれば当然か……。ストライクフォース出撃は低支持だが、ファンからすればちょっと実感が湧かないということもあるのでしょう。ファンが望む青木真也のイメージはさまざま。それだけいろんなものを問われてるってことだ。

——次の対戦相手はどう考えてますか?
青木 ジョシュ・トムソンとかがいいんじ

ら。いまの段階じゃ何も答えられないですよね。

青木 「おまえは何様だ」っていうのはありますけど(笑)。でもマジメな話をすれ

だけ! それだったらいいでしょ?
——そんなことボクに言われても(笑)。

――次の対戦相手はどう考えてますか？

青木　ジョシュ・トムソンとかがいいんじゃないですか？

――ストライクフォースのライト級チャンピオン。実際に青木さんがストライクフォースに派遣されるプランもあるみたいですけど。大晦日はどうなるんですか？

青木　休もうかな。

――なんで（笑）。

青木　いやあ、試合が終わったばかりだから。いまの段階じゃ何も答えられないですよね。

――では、挑戦者はどういう規準で決めたいですか？

青木　ちゃんと格闘技をやってる選手とやりたいですね。よく知らない相手を倒しただけで挑戦なんて、それこそベルトの価値を下げるだけじゃないですか？

――要は川尻選手じゃ不服だってことですか？

ちゃんと格闘技をやってる選手なら ボクは誰の挑戦でも受けますよ

青木　「おまえは何様だ」っていうのはありますけど（笑）。でもマジメな話をすれば、不足でもないし、それはボクが決める問題じゃないけど、『Dynamite!!』じゃなくたっていいと思うんですよね。だって、今年の大晦日は魔裟斗選手の引退がメインになるわけでしょ。じゃあ、DREAMでやるのだっていいと思うんですけどね。

――そんなにDREAMのベルトを軽んじてくれるなということですか？

青木　そうですね。

――たとえば菊野選手がアルバレスに勝ったら挑戦者としてどうですか？

青木　全然やってもいいですよ。ちゃんと説得力のあることをすれば、ボクは誰の挑戦だって受けますよ。ボクもそれでやっとチャンピオンになったわけですからね。

――いまの青木さんは狙われる立場でもありながら、まだまだ挑戦しければいけない立場でもあるじゃないですか。いま一番誰とやりたいですか？

青木　BJペン!!

――UFCからオファーが来たらどうします？

青木　やる！　やらしてくれるんだったらやる。

――DREAMサイドは絶対に止めると思いますけど。

青木　ねぇ。だから絶対にありえないけど、UFCに独占されずに1試合だけ！　それだったらいいでしょ？

――そんなことボクに言われても（笑）。それでもDREAMは止めると思いますよ。それくらいDREAMが大事だってことですか？

青木　うん。オレ、DREAMが好きですからね。まあ、今後のことはゆっくり休んで考えます。でも長かったっすね、チャンピオンになるまで。

――濃密な1年半。

青木　11試合もやりましたよ（苦笑）。けっこういいドラマがなかったですか？

――ありましたね。だから昨日の試合に青木真也のこの1年半がすべて詰まってたと思いますけど。

青木　ホントはこのベルト、1年前に獲ってる予定だったんだもん。

――逆に、去年ダメだったからこそ、今回獲ったことに意味が出てきたと思いますよ。

青木　そうですね。ホントそうですね。いろいろと苦労したし。人生うまくいかねえな～。もっと強くなんなきゃいけねえなみたいな。まあ、チャンピオンになってもあまり変わらないですよ。ガストで祝勝会だし。

――青木さんはファミレスが最も似合う格闘家ですから（笑）。

青木　このあとだって指導があるんですよ？　6時半からパラエストラでレッスンして、夜9時からトイカツ道場でもレッスンするんですよ。

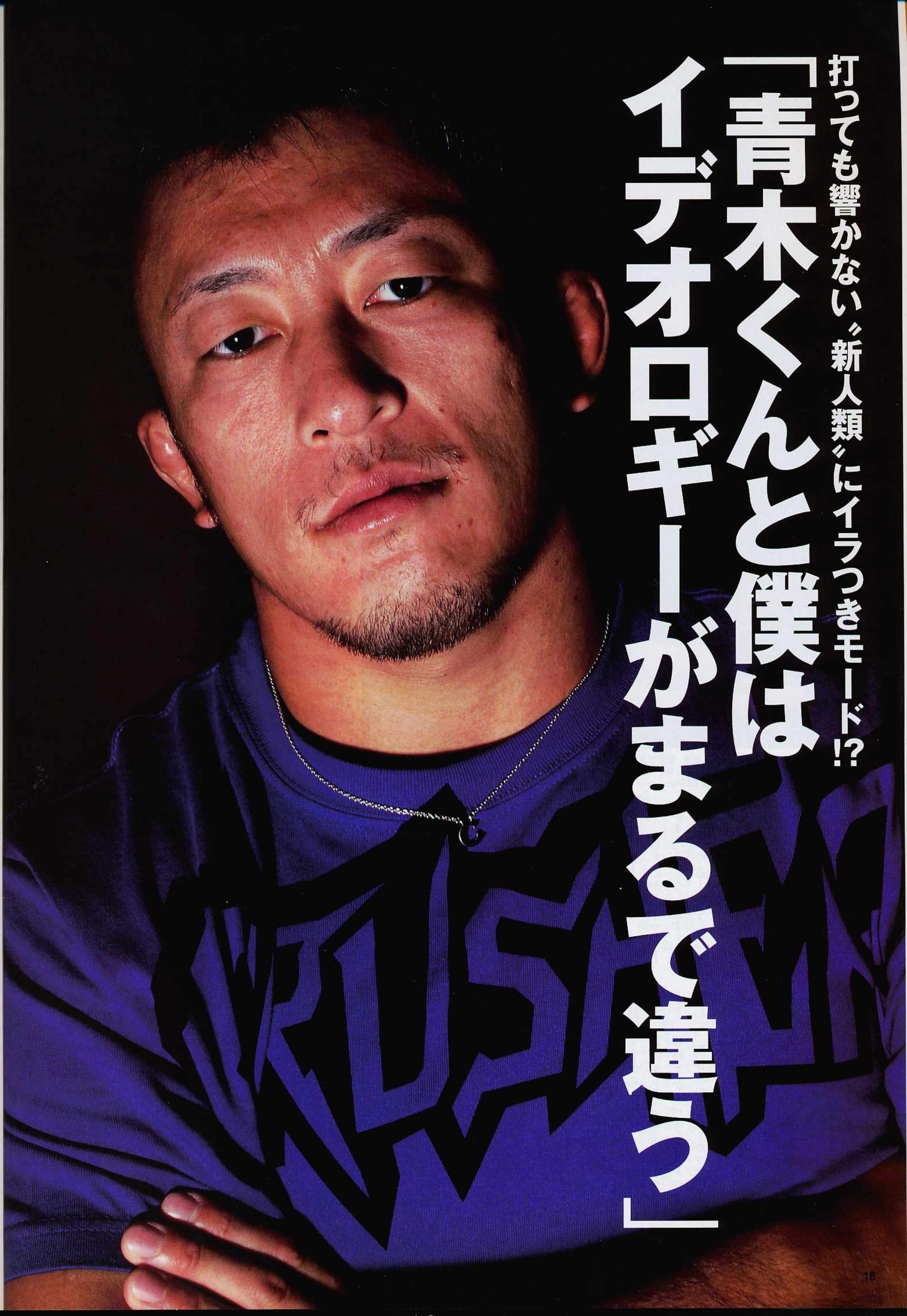
――うわ～、働いてるなあ。

青木　チャンピオンは稼がないとね！　DREAMさん、一生懸命働きますからいい仕事ください！

【09年10月7日／都内・某ホテルにて収録】

あおき・しんや■1983年5月9日、静岡県出身。現在世界が最も注目する日本人MMAファイター。変幻自在のグラウンドテクニック、ムエタイ仕込みのミドルキック、五輪レスラーをも転がすテイクダウン能力、ウェブに嵐を呼ぶ言動。"口は災いの元"とは彼のためにある言葉である。180cm、69.8kg。

打っても響かない〝新人類〟にイラつきモード!?

「青木くんと僕はイデオロギーがまるで違う」

――あれ、今日はなんだか表情がすぐれないですね、川尻さん。試合でお疲れです

川尻 いや、もう全然違いますよ！ ブログのアクセス数も格段に増えたし、食事と

負けた試合の次にタイトルマッチに臨むのも、普通に考えたらおかしな話ですよね。

検討されているクラッシャー

川尻達也

TATSUYA KAWAJIRI

5月のJ.Z.カルバン戦から7月の魔裟斗戦まで一気に駆け抜け、今年の日本格闘技界をおおいに盛り上げたクラッシャー。あとは念願のライト級王座に向けてまっしぐら！　の、はずだったのだが……。王者青木真也の返答は「検討します」というつれない一言。はたして川尻は難攻不落のバカサバイバーを攻略し、大晦日決戦までこぎつけることができるのか？　タイトルマッチ、お願いしやす！

聞き手／鈴木佑　撮影／菊池茂夫　試合写真／乾晋也

——あれ、今日はなんだか表情がすぐれないですね、川尻さん。試合でお疲れですか？　あ、ひょっとして昨日の大会でカチンとくることでもありましたか!?

川尻　なんかわざとらしいな〜。青木くんにマイクアピールでスカされたこと言ってるんでしょ？　べつに全然カチンときてないですよ。あれは想定内です、想定内。

——ホントかな〜？　とりあえず青木さんの話はおいおい聞くとして、先ほどの一夜明け会見で「もう次に向かって戦闘モードです。ビッシビシいきたい」ってコメントしてましたけど、あれってもしかして懐かしの魔界倶楽部じゃ……？

川尻　あ、気づきました？　そう、星野勘太郎です。

——やっぱり。まぁ、マスコミにはまったく届いてなかったでしょうけど。

川尻　いいんですよ、べつに。逆に気づかれたのが恥ずかしいくらいだから（笑）。

——それは失礼しました（笑）。さて、昨日のメルカ・バラクーダ戦は魔裟斗戦後、初のDREAMでの試合でしたけど。

川尻　やっぱりリングに向かうときはいつもより怖かったですよ。KO負けしてから一発目の試合だったし、まだ自分の中で魔裟斗戦を払拭できてないというか。だから闘って忘れようと思ったんですけど、煽りVであの映像が流れたもんだから、「なんだよ、ヘンに思い出しちゃうじゃないかよ！」みたいな（笑）。

——試合直前にマイナスイメージが（笑）。

川尻　でも、リングに上がったら関係なかったですね。いつもどおり動けましたし。

——ちなみに魔裟斗戦は高視聴率だったわけですが、そのあとは街での反応とかも変わったんじゃないですか？

川尻　いや、もう全然違いますよ！　ブログのアクセス数も格段に増えたし、食事とかに行くにしろ凄く声をかけられるようになって。いままで我が故郷茨城じゃありえなかった現象が起こってます（笑）。

——じゃあ、もうAVとかも気軽に借りられないと。

川尻　なんで借りる前提で話してるんですか、そんなのもう何年も借りてないですよ！　……昔は岩瀬（茂俊）さんと買いに行ったりもしましたけど（小声で）。

——そこまで聞いてないです（笑）。ちなみに昨日の会場の反応はどう感じました？

川尻　うん、魔裟斗選手にKO負けした僕のことをちゃんと受け入れてくれたから嬉しかったですね。でも、世界的に見ても強い相手と闘わないとやっぱり反応も薄くなるんだなっていうのも、ぶっちゃけ感じましたよ。納得してないお客さんもいるんだろうなって。

——ちょっと温度差は感じた、と。そもそも魔裟斗戦後には「できれば大晦日まで充電したい」って言ってましたけど、その中で川尻さんが今回出場した理由は？

川尻　それは……脅されたからです。

——あぁ、なるほど。上から。

川尻　冗談ですよ、真に受けないでくださいよ！

——（無視して）でもある種、今回の試合って顔見せ的な要素が強かったわけじゃないですか？　もちろん格闘技ですから何が起こるかわからないとしても。

川尻　まぁ、僕自身としては負けたままの状態でベルトに挑戦したくないっていう気持ちも大きかったんで。どんな相手であれ、ちゃんと勝ちを挟んでから一歩前に進みたかったっていうか。

——確かにMMAルールじゃないにしろ、負けた試合の次にタイトルマッチに臨むのも、普通に考えたらおかしな話ですよね。

川尻　あと、今回のDREAMはゴールデンタイムだったわけだし、僕にどれだけの力があるかわからないけど、少しでも役に立てるならって気持ちですよね。極端な話、僕が出なかったことで視聴率が悪くなって放送が打ち切りになるよりは、自分が試合をしたうえでダメだったほうが納得はいくし。

——なるほど。試合は危なげなく勝利したわけですが、ゴング直後にはバラクーダがいきなりラッシュをかけてきました。

川尻　あれも想定内ですよ。目を合わせた瞬間に「これはくるな」ってわかったんで、落ち着いて対処できました。

——で、試合後にはあらためてライト級タイトルへの挑戦として「青木選手、ハンセンのどちらでもいい」ってブチあげて。でも以前、大晦日は青木さんと闘いたいって言ってたと思うんですけど？

川尻　もちろん、DREAMのためなら青木くんとの日本人対決のほうが絶対に盛り上がるとは思いますよ。でも個人的に言えば、とにかく強さの象徴であるベルトがほしいだけだから、選手個人にはさほど興味はないっていうか。ベルトを持ってる人間が一番強い、その強い相手とやって勝ちたい、ただそれだけで。

——ファイターとしての純粋な気持ちですね。あと、今回は川尻さんが全幅の信頼を寄せてる山田トレーナーがセコンドにつけなかったわけですが？（日本ボクシングコミッションからボクシング以外のプロスポーツに関与したとして、川尻vs魔裟斗戦の7月13日から3ヵ月間セコンド資格を停止する処分を受けた）。

川尻　そうですね……。もちろん会場に

は来てくれてたんで試合前に話はしましたよ。相手の細かい対処法を確認して。

――山田さんがセコンドにいるかいないかで不安みたいなものは？

川尻　いや、それはないですよ（キッパリ）。もうやめました、そういうことを考えるのは。もちろん、山田さんは僕の試合が決定打になって処分を受けたわけだから、それは申し訳ないことをしたって思ってます。でも、それと山田さんがセコンドにいないから不安だとかいうのは別次元の話だし、そういうジンクスみたいなものは考えだすとキリがない。闘ううえではマイナスにしかならないんで。

――前に進むためにも気にしてられない、と。

川尻　どんな状況であれ、やることは一緒なんですよ。リング上で結果を出すだけ。あとは自分の心構えをどう持つかですよね。

――さて、冒頭に出た青木さんについて話を聞いていきたいんですけど、ハンセンとの試合はどう見ましたか？

川尻　いや、彼らしい闘い方だなって。そもそも青木くんはクレバーな選手じゃないですか？　きっとファンの中には青木くんのことを天才肌で、その場のひらめきで動く寝技師みたいなイメージを持ってる人も多いんでしょうけど、それは彼お得意の話術で作った幻想だと思うんですよ。むしろ彼の強さは緻密な戦略性や、スキを与えない完璧主義なところにあって。たとえば、けっこう地味に見える展開でも最後にはスパッと極めるっていうか。そういう意味では、昨日はそのとおりに実践した闘いだったなと思います。

――ラスト4秒で極めたって部分で場内

[09.10.06『DREAM.11』ライト級ワンマッチ]
神奈川・横浜アリーナ
○川尻達也 vs メルカ・バラクーダ×
(1R 3分48秒 TKO)
川尻はゴングと同時に突進してきたバラクーダをあわてることなく対処し、最後はパウンドを浴びせて完勝。そして青木の試合後には王座挑戦をアピールするも、「検討します！」の一言ではぐらかされてしまったのだった……合掌。

川尻達也
TATSUYA KAWAJIRI

も大歓声で。シャオリン戦のときは川尻さんも「ああいう闘い方ならKOか一本で極めないと」って言ってましたけど。

川尻　だから今回に関しては文句のつけようがないですね。いま、DREAMのライト級で一番強い選手は青木真也だってことじゃないですか？

――そういえば1ラウンドにハンセンの金的で試合が中断したとき、映像で川尻さんがけっこう抜かれてましたね。

川尻　そうそう、どういう表情していいのかちょっと戸惑いましたよ。でも、最初は金的ってわかんなかったんですよ。だから「あれ、顔って蹴っていいんだよな？」とか思ってたら、ローブローだったんで「あぁ、青木くんの試合のときによく見る光景だな」って感じでしたね（笑）。

――でも、そういう川尻さんも、いみじくも同じハンセン相手に修斗のリングでローブローを食らって悶絶してたことがありましたけど。

川尻　……あぁ！　全然忘れてました。あれ、カメラで抜かれたのってそういう意味だったんですかね？

――いや、そこまで考えてたわけじゃないと思いますけど（笑）。あの場面はけっこう長いインターバルだったんで、会場もちょっと不穏な空気になってましたね。

川尻　僕もこれで終わったらヤバイだろって思いましたよ。「ねぇ、俺の挑戦はどうなっちゃうの？」って（笑）。

――で、試合後に今度は面と向かって青木さんに対戦要求したわけですが、「検討します！」ってノラリクラリとはぐらかされて。たとえ想定内だったとしても、気分はよくなかったんじゃないですか？

川尻　そりゃイラっとはきましたよ！　でも、ファイトスタイルと一緒で彼はこっちが打っても響かない相手だから、言い返してもしょうがないって納得して。

――一回は川尻さんも「世界最高峰の闘いをしよう」って食らいついたら、また「世界最高峰は僕なんで、検討します！」ってスカされて。

川尻　彼は普段から最高峰だなんだって言ってるから、おまえだけじゃないよって伝えたかったんですけどね。

――青木さんは川尻さんが「（ハンセンに）しっかり勝ってこいよ！」ってエールを送ったときにも、会見で「おまえは何様だ」「勝ったら"川尻様"に"挑戦"できるみたいなんで」といった具合に、さっそく仕掛けてるフシもありますけど？

川尻　う～ん……（苦笑）。

――魔裟斗戦のときは試合前の舌戦で盛り上がりに拍車をかけたじゃないですか？　青木さんとも……。

川尻　（さえぎるように）いや、魔裟斗選手の場合は打てば響いたじゃないですか？　お互いに真っ正面から感情をぶつけ合って。青木くんの場合はこっちが真正面から行くとスカして、うしろを取る感じだからホントよくわからないっていうか。僕からしたら新人類（笑）。

――ダハハハハ！　新人類（笑）。

川尻　もう、全然つかめないですよ。僕の中での格闘技の魅力って、基本的には正面から真っ向勝負ってところなんですよ。もちろん作戦はいろいろ練るけど、単純に「リングでどっちが強いか決めようぜ」って、技術と感情をぶつけ合うっていうか。でも、少なくとも彼はそういう考えじゃないと思う。もっと理詰めでアスリート的っていうか、格闘技のドロくささみたいなのを感じさせない。お互いに世界最高峰っていう目指してるところは一緒だけど、

それに向けての考え方やアプローチの仕方はまったく違うなって思います。

言いたいこともわかりますけど、彼より僕のほうが強いとも思ってるし。まぁ、「大

川尻　いまもそう思ってますよ。でも、それは逆に言えばこっちに余裕があるから

――でも、川尻さんだって口喧嘩じゃ他人には負けないって言ってましたよね？

菊野選手も王座挑戦に名乗りあげてる？
いや、彼より僕のほうが強いと思うんで

それに向けての考え方やアプローチの仕方はまったく違うなって思います。

——観る側からすれば、そういうイデオロギーが違う者同士がぶつかるのはおもしろいですけどね。

川尻　僕もそう思いますよ。やるほうは大変ですけど（笑）。

——まあ、結果的に昨日は青木さんが口で一本取ったっていうか、川尻さんが損した感じになっちゃいましたけど。

川尻　そうですね、ちょっと負けたかな。

——また、「検討します」っていうのも、川尻さんが宇野さんに対戦表明したときに返されたフレーズですよね。言い方は青木さんのほうがずっといやらしかったですけど（笑）。

川尻　そうなんですよ、「それ宇野さんのマネだろ、そこ使うか？」って（笑）。でも、僕が逆の立場なら、チャンピオンになった瞬間に挑戦されても困るよっていうのは百も承知だから。あとはプロモーターの判断とファンの声にまかせるしかないですよ。まあ、自分の中ではやると思ってますよ。日本のMMAのためにもやらなきゃいけないなって。

——その決意に水を差すようですが、じつは菊野（克紀）選手が「僕のアルバレス戦の結果と内容を見たら、青木選手への挑戦者に誰がふさわしいかわかりますよ」ってことを不敵にも言ってるんですよね。

川尻　いやいや、だっていまの僕はアルバレスより全然強いし、負ける気はまったくしないですから（キッパリ）。菊野選手の言いたいこともわかりますけど、彼より僕のほうが強いとも思ってるし。まあ、「大晦日に青木vs菊野が観たい」っていうファンの声が上がるなら、それはそれでいいんじゃないですか？

——あくまでも周りの反応次第だ、と。

川尻　盛り上がるのが一番ですから。プロの選手にとって盛り上がらない試合をやるほど悲しいこともないんで。ただ、僕はこれまでに自分の通ってきた道に自信があるから挑戦するのは僕しかいないと思ってるし、誰にも邪魔させるつもりはないですよ。まあ、僕も菊野選手とはいずれやるんじゃないですか？

——川尻さんは菊野選手のことを「いずれDREAMを背負う選手になる」って高評価してましたよね。

かわじり・たつや■1978年5月8日、茨城県出身。04年修斗ウェルター級王座に君臨。PRIDEを経て08年からはDREAMを主戦場とする。同年の『Dynamite!!』では武田幸三からKO勝利。今年7月に魔裟斗のK-1 MAX最終試合の相手を務めた。171cm、69.9kg。

でも、ファイトスタイルと一緒で彼はこっ

川尻　いまもそう思ってますよ。でも、それは逆に言えばこっちに余裕があるから言えることで。だって、世間も注目する大晦日ですよ？「まだ顔じゃねえや、いまは外に出てろ」って感じですよ。

——なるほど。それにしても川尻さんも今年は試合がハイペースですね〜。大晦日を合わせたら5試合ですよ？

川尻　いや、もうぶっちゃけ、きついですよ！　だって、UFCでもほかの団体でも、僕の歳で年間5試合とかやる第一線の選手っていなくないですか？　よく「UFCにはヌルい試合がない」とか言われてますけど、それはちゃんと試合間隔があるわけですし。たとえばGSPだって、今年は1月と7月にやって2試合。僕はカルバンに魔裟斗に大晦日、それに加えてほかに2試合やってるわけで。べつにハイペースでやるのがいいとかじゃないですけどね。ただ、僕もそれなりにきつい道を通ってきてると思うし、だから……休みたい（笑）。

——休みたいですか（笑）。でも、ある部分で順風満帆というか、予定どおりに事は運んでるんじゃないですか？　結果はどうあれ魔裟斗戦も実現させて、大晦日に向けた流れも生まれて。

川尻　そうですね。まあ、言い換えれば谷川さんの思惑どおりっていうか（笑）。

——ダハハハハ！

川尻　これからも青木くんの口撃があると思いますけど、まあ、イライラしながらやってこうと思いますよ。

っていう目指してるところは一緒だけど、

——でも、川尻さんだって口喧嘩じゃ他人には負けないって言ってましたよね？

川尻　う〜ん、やっぱりなんか青木くんはタイプが違うんですよ。彼はひねくれてるっていうか、「これ、白だよね？」と言ったら「いや、黒です」って答える感じで。僕は「黒は黒でしょ」ってタイプなんで。うん、やっぱり新人類としか言いようがないです。

——理解できない、と。

川尻　まあ、第一、僕は青木くんみたいにリングであんなに泣けないですから（ニヤリ）。

——昨日、本人は試合後に「絶対にもう泣きません！」って、早くも泣きながら宣言してましたけど（笑）。川尻さんはリング上で泣いたことってないんですか？

川尻　いや、そりゃ僕だって人の子ですから泣いたことくらいありますよ！

——へ〜、ちなみにそれはいつのことで？

川尻　……ハンセンにキン●マを蹴られたとき（ボソッと）。

——ダハハハハ！　感きわまってとかじゃなく、悶絶したときですか（笑）。

川尻　僕の場合は自分が泣くんじゃなくて、僕の試合でお客さんを泣かせたいと思ってますから（キッパリ）。

——かっこいいですねぇ〜。

川尻　まあ、大晦日は青木くんっていう、いま一番の相手と一番の大舞台でそういう感情を揺さぶるような試合をやるだけ、世間を巻き込むような試合をやるだけですよ！「目指せ、視聴率目標30パーセント」で！

——なるほど。ではこっちはイライラする川尻さんに少しニヤニヤしつつ、今後の展開を見守りたいと思います！

【09年10月8日／都内・某ホテルにて収録】

巨大化する空手最強幻想

菊野克紀

KATSUNORI KIKUNO

7,20『DREAM.10』で強豪アンドレ・ジダに完勝し、DREAM満点デビューをはたした菊野克紀。10.25『DREAM.12』で行なわれる次戦の相手はなんとエディ・アルバレスに決定した。これに勝てば、一気にDREAMライト級にトップ戦線に食い込むことは確実だ。ライト級の台風の目が今月もまた静かに吠える。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／タイコウクニヨシ　試合写真／乾晋也

——先ほど『DREAM・11』が終了したばかりですけど、リングサイドでご覧になられて、どうでしたか？

菊野　おもしろかったですね。全体的にいい試合が多かったと思います。

——その中でも、菊野選手と同じライト級の青木選手、川尻選手がそれぞれ試合をしましたけど、どうご覧になりましたか？

菊野　まず川尻選手は安定してますね。相手がガーッと攻めてきても、落ち着いて対処して、しっかり押さえて極めきった。と。相手がどれぐらい強いのかわかりませんけど、ちゃんと仕留めたことはさすがでしたね。

——では、ヨアキム・ハンセンvs青木真也のタイトルマッチは？

菊野　ハイレベルな寝技の攻防が観られて、ボクにとっては凄くおもしろい試合でしたね。

——膠着した試合のように見えましたけど、菊野選手の見方は違うわけですか？

菊野　いや、あれは膠着じゃないですよ。お互いの寝技の駆け引きが凄かったです。ハンセン選手も青木選手の寝技を真っ向から受けて、逆に極めようとしてましたし、それに対して青木選手が最後にしっかり十字を極めましたからね。凄く緊張感のある勝負だったと思います。

——菊野選手がスタンドで空間の勝負をしていたのと同じように、青木選手とハンセンは、寝技で空間の勝負をしていた感じですかね？

菊野　そうですね。ボクの試合もそうですけど、あれは手を出さなくても攻めてるんですよ。だから、それを青木選手やハンセン選手からも感じて、ゾクゾクしましたね。いい試合でした。

——そして次の10・25『DREAM・12』では、菊野選手の大一番が控えていますね。

菊野　燃えてますよ。凄く楽しみです。

——『DREAM・12』はいいカードがほかにも組まれてますけど、菊野vsエディ・アルバレス戦は、ファンにとっても注目度ナンバーワンじゃないですかね。

菊野　ホントですか？

——今日は菊野選手自身もリングに上がって挨拶されてましたけど、かなり声援が飛んでましたからね。

菊野　やっぱりジダ選手に勝ったことで、少しずつボクのことを覚えていただけたかな、と思いますね。次も勝って、さらにドカーンといきたいですね。

——ドカーンといくイメージができていたからか、今日もリング上でニヤニヤしちゃったわけですか？（笑）

菊野　ニヤニヤしてましたかね？（笑）。でも、いまからもう勝つことしか考えてないですし、大晦日が見えてきたので、それでニヤニヤしちゃったのかもしれません。

——DREAM2戦目で、早くも大一番ですからね。

菊野　DREAMに出場してから、素敵な相手ばっかりで、ホントに嬉しいです。これはDREAMさんが、ボクとアルバレスが試合をしたら、どちらが勝つかわからないと思って組んでくださったんだと思いますんで、それが嬉しいですね。

——期待を込めたマッチメイクでしょうからね。では、オファーが来たら、二つ返事でしたか？

菊野　もちろんですよ！　アルバレスっていう名前を聞いて、もう嬉しくてしょうがなかったです。断る理由は何もないですよ！

——もともとアルバレス選手には、どんな印象を持ってましたか？

菊野　強いですよね。パンチの技術とレスリングの技術が高くて、しかもその二つがちゃんとつながっている。そして、それを組み合わせた技術が回転していって動きが止まらない。あのペースに巻き込まれたら、キツい相手ですよね。

——名勝負製造機と言われていますからね。

菊野　でも、ボクと闘ったら、そういう試合になりません。

——なりませんか！

菊野　ボクはあんなふうに殴られたり、転がされたりする試合はやりたくないです。このあいだのジダ選手との試合のように、ピリピリとした一瞬の隙を突いて、一撃で相手を倒す空間を作りたいんで。

——アルバレスの試合をさせない、と。

菊野　させないですよ。川尻選手との試合みたいに殴り合いじゃなくて、ボクだけが殴ります（キッパリ）。

——そのイメージはすでにできあがっているわけですか？

菊野　そうですね。基本的にアルバレス選手というのは、ボクが苦手な選手じゃないですから。ああいう選手はサクッと倒せると思います。

——アルバレスをサクッと倒せちゃいま

10・6『DREAM・11』の休憩明けに、前田吉朗、弘中邦佳とともにリングに上がった菊野。この3人の中でも菊野はひときわ大きな声援を浴びていた。ファンの期待は日に日に高まっている。

この男も大晦日のライト級タイトルマッチに名乗り！

「アルバレスと川尻選手には負ける気がしない」

ね。いい試合でした。
――そして次の10・25『DREAM・12』で

――もともとアルバレス選手には、どんな
印象を持ってましたか？

せると思います
――アルバレスをサクッと倒せちゃいま

打撃には定評があるアンドレ・ジダが、じりじりと下がっていった菊野のプレッシャー。ハードパンチャーであるアルバレスも、やはり菊野独特の間合いにハマってしまうのか？

菊野克紀

KATSUNORI KIKUNO

アルバレス選手に僕が負けているところはない。サクッと勝ちます

すか！

菊野　倒せますね。ボクが負けているところがないんですよ。打撃で負ける気はしませんし、レスリングは向こうが上かもしれませんけど、組んだらボクには柔道がありますし、寝技で極められる気はしない。だとしたら、ボクは全然怖くないです。

――それでも、アルバレスって世界的評価からいっても、BJペン、青木真也に次ぐ存在ですよね？

菊野　そうですね。アルバレス選手が強いことは間違いありませんけど、格闘技には相性もありますし、ボクはまったく負ける気がしません。

――では、このエディ・アルバレス戦というのは、自分の実力を世界に知らしめるチャンスだ、と。

菊野　大きなチャンスですね。ありがたいマッチメイクです。その期待に応え、その期待を上回る完璧な勝ち方をしたいですね。

――では今日、青木選手がDREAMライト級チャンピオンになったあと、川尻選手がベルトへの挑戦をアピールしてましたけど、菊野選手もアルバレスに勝ったら、挑戦したい気持ちはあるんじゃないですか？

菊野　そうですね。内容にもよりますけど、アルバレス選手に勝てば、その資格はあるんじゃないかと思いますね。

――アルバレスは川尻選手にKO勝ちしてますしね。

菊野　はい。それに川尻選手は、ボクからするとアルバレスと同じタイプなんで、まったく怖くないんですよ。だから、とにかくアルバレス選手を一撃で仕留める、そうしたら自然にタイトルマッチが見えてくるんじゃないですか。DREAM大阪大会が終わったら、誰が青木選手へのチャレンジャーとして本当にふさわしいかがわかると思います。

――アルバレスを倒したら、その機運は間違いなく高まるでしょうからね。

菊野　大晦日にタイトルマッチができたら最高ですね。今日の試合を観て、あらためて「青木選手は強いな」って思いましたし、「この人に勝ちたい」っていう気持ちがますます強くなりましたから。

――あのハンセンを寝技で終始押さえ込んで、最後はきっちりと一本勝ちするわけですからね。

昨年のDREAMライト級GP準決勝戦で、川尻達也と大激戦の末、KO勝ちを収めたアルバレス。打撃だけでなく寝技も強いオールラウンダーだけに、菊野相手にどんな闘いを見せるか。

菊野　あれをやられたら、ボクも負けてしまいますね。だからハンセン選手の敗因

大阪大会が終わったら、誰が青木選手の挑戦者にふさわしいかわかると思います

きくの・かつのり■1981年10月30日、鹿児島県出身。高校卒業後、極真会館（松井派）鹿児島県支部の内弟子生活を6年間送り、その後、高阪剛が主催する「A-SQUARE」に入門。06年にプロデビュー後、8戦全勝。現DEEPライト級王者。170cm、70kg。

菊野　あれをやられたら、ボクも負けてしまいますね。だからハンセン選手の敗因は、チャンスを逃したことだと思うんですよ。何度かスタンドの状況があったじゃないですか。その何度かのスタンドでの接触で倒さなきゃダメだったのに、寝技に持ち込まれて寝技vs寝技の勝負になってしまった。でも、ボクはスタンドでの一瞬のチャンスを逃しません。その一瞬を突くための空間を作りますから。そして一撃で青木選手を倒します。

――そこがハンセンとは違うぞ、と。

菊野　そうです。青木選手とはその瞬間の勝負になると思います。どっちのナイフが先に突き刺さるか。青木選手が寝技に持ち込むのか、その前にボクがスタンドで沈めるのか。

――いやあ、それはゾクゾクする試合になりそうですね。

菊野　でも、いまはアルバレス選手との試合だけに集中してますから。まずは次の大阪大会で、アルバレス選手を絶対に一撃で倒して、日本人の誇りと夢を持ってもらえるような試合をしたいと思いますんで、期待してください！

【09年10月6日／神奈川県・横浜アリーナにて収録】

『DREAM.12』

大阪・大阪城ホール
10月25日（日）開場14:00 開始15:00

主要対戦カード

菊野克紀vsエディ・アルバレス
前田吉朗vsチェイス・ビービ
弘中邦佳vsバーキ
メルヴィン・マヌーフvs"弁慶"ガレシック
パウロ・フィリオvsユン・ドンシク

チケット料金

VIP（特典付き）100,000円／RRS 22,000円
スタンドS 10,000円／スタンドA 5,000円

お問い合わせ

DREAM事務局 TEL.03-5775-5065

帰ってきた"キモ強"

——こうやって再び話を聞けるのは嬉しいですね。

家発電してるような感じだったとは思いますよ。

——ようやく！ じゃあ、落ち込んでばかりもいられないですね。

悟。
のか?

「これからはあまりキモくないかもしれません」

北岡悟

SATORU KITAOKA

8.2『戦極〜第九陣〜』(さいたまスーパーアリーナ)で廣田瑞人に敗れて、いつも肌身離さず持ち歩いて『戦極』ライト級のベルトを失なった北岡悟。試合前にはかなり精神的にも疲れていたことを告白しており、敗戦後には引退まで示唆していたが、いったいどういう心理状況で復帰を決意したのか？ 旗揚げ以来『戦極』を牽引してきた男は、いまの状況をどう捉えているのか聞いてみた。

聞き手／坂井ノブ　試合写真／乾晋也

――こうやって再び話を聞けるのは嬉しいですね。

北岡　廣田瑞人戦の翌日に電話で「辞めると思います」とマジで言ってましたからね。

――どうしようかと思いましたが、そこまで精神的に落ち込んでたんですね。

北岡　べつに廣田選手に負けたから辞めたいと思ったわけではないですけどね。

――いま思えば試合前から「もう疲れた」とか言ってましたよね。

北岡　そうやって弱音を吐いてる時点でダメだなって、いまとなってみれば思います。無理やり鼓舞してた自分にも疲れてる部分はあったんですよね。でも、あんまりこういう話もしたくはないんです。自分がいかにマイナスの状況だったか説明するっていうことは、廣田選手の勝利をクサすことになっちゃうから、それを基本的にはしたくはないんで。

――そのネガティブな精神状態から、どうやって前向きに持っていったんですか？

北岡　あんまりこれだっていうきっかけはないんですよね。試合から1週間後くらいまでは「ホントにもう辞めよう！」って勢いでしたけど、1週間すぎたくらいから、なんだかんだ言っても俺は今後も格闘技をやるんだろうなと思ってました。

――まず、これまでの流れを振り返ると去年11月にトーナメントで優勝して、今年1月に五味（隆典）選手に勝ってベルト巻いて、6月のパンクラスで坂口征夫戦があって、8月に廣田戦という流れでした。

北岡　いま思えば一人でラッパ吹いてるだけというか、『戦極』もパンクラスも、自家発電してるような感じだったとは思いますよ。

――それが最高におもしろかったんですけどね。

北岡　言ってみれば対戦相手の人たちはただ試合してるだけじゃないですか。年始にやった人もそうだし、夏にやった人もそうだし。「俺って強いよ、頑張りま〜す♪」って試合してるだけで楽だよねとは思うけど、そのハンデ戦は自分で望んでやってるから。

――でも、そのぶんの評価は得てると思いますよ。

北岡　もちろんそうです。僕のほうが出してるものが多いから、返ってきてるものが大きいですよね、勝ったときには。

――そういう努力ってスタッフには伝わってたりするんですか？

北岡　……負けて初めて伝わった気はします。

――ようやく！　じゃあ、落ち込んでばかりもいられないですね。

北岡　まあ、損得勘定で考えたら続けたほうが得だと思ったからやるわけですから。

――損得っていうのはお金の勘定？

北岡　お金ももちろんですよ。もう一回やろうと思った理由のいろいろな中で、お金はかなり大きいパーセンテージですね、20〜30パーセントぐらいあるかもしんない。

――つまり、そっちの評価も得たわけですね。

北岡　はい。でも、「俺に出さんでどうすんの?」みたいな話じゃないですか。

――そうですね。まあ、いくらなのかは知らないですけど（笑）。

北岡　柔道家に出すんだったら俺に出すほうがいいでしょ？　って正直思いますけど。これは載せてもいいです。

――プロの評価って勝ち負けが前提だけど、それを超えた部分もあるわけですよね。負けて評価されることに違和感はありましたか？

北岡　今後そこにあぐらをかいてやるつもりは一切ないですけど、利用はしますよ、自分の人生のために。いろいろ大きく立ち振る舞ったからこそ知ったこともあるから、それは活かしてやらないと。

――8月の試合直前は大きく振る舞うことで生じる状況の変化が嫌だって言ってましたよね？

北岡　そうですね。

（ここで偶然、ジムに〝プロレス界の帝王〟高山善廣が登場）

高山　おおっ、辞めるとか言ってたけど、

[09.8.2『戦極〜第九陣〜』]
さいたまスーパーアリーナ
○廣田瑞穂（挑戦者）vs（王者）北岡悟×
(4R 2分50秒 TKO)
果敢に組みついてテイクダウンしていった北岡だったが、廣田はフロントチョークを振りほどいて立ちあがるなど徹底して自分の土俵で勝負した。北岡のスタンドでの打撃もヒットしたが、グラウンドでコントロールできずスタミナ切れで逆に打撃を受けてTKO負けとなった。

「ファンと握手すると吸い取られる」と言った船木さんの感覚が今回わかった

どうしたの⁉ 頑張ってよ！ 応援してるからさ！ ガッハッハッハ！（と悠然と歩いていく）。

――ほら、帝王も待ってるみたいですよ。

北岡 ありがたいですね～。

――廣田戦の前に北岡さんが「次元の違う強さを見せる」って言ってたじゃないですか。試合はああいう結果になりましたけど、ここにきて求められることの強さを発揮してる気がするんですよね。

北岡 ああ、なるほど。いい言い方ですね。

――あの試合の後日談でおもしろいなと思ったのは、横田（一則）選手が北岡選手の試合を観て、一本を狙う姿勢に感銘を受けたって話ですよ。

北岡 それ、本人から直接聞きましたよ。9月のライアン・シュルツ戦のあとにも「君のおかげだよ」みたいなことを言われて。「おぉっ！ なんだそれ？」みたいな（笑）。でも彼はそれを観て感じ取れる素養があったということなんだと思います。で、感じ取ったからってノックアウトできるかというと、そういうものじゃない。それは別の話なんで、横田選手の実力が高いってことです。

――今度、光岡vs横田戦で勝ったほうがベルトに挑戦という流れもありつつ、北岡さんが戻ってくるじゃないですか。横田vs光岡戦に対する見解は？

北岡 二人とも相当実力が高い選手なんで楽しみですよね。まあ、どんな試合になるのかなって感じです。次に誰がベルトに挑戦するかは主催者が決めることだから、僕は僕の試合をやればいいだけです。廣田選手ともう一丁とかいうのはまったくないわけじゃないけど、超固執してるわけでもないし。

――むしろベルトに固執してます？

北岡 そうでもないんですね。もちろん部屋にあったものがなくなったのは寂しいですけど、それはフリマで売って部屋のモノが少なくなるのと一緒なんで。

――それ、ずいぶん軽いですね（笑）。

北岡 冗談ですよ！ なんか、いろんなそういう部分で粘着質ではないってことですね。どうせならほしいなってことです。

――前はもうちょっといろんなことに粘着質だった気がするんですけどサッパリしましたよね。

北岡 そのぶんスマートにいろんなことができるというか。自分が疲れすぎないようにするための自己防衛システムみたいな感じじゃないですか？ そういえば『kamipro』には「キモくなくなって普通の人になってた」って書いてありましたけど、これからはあまりキモくないかもしれないですよ。

――そうなんですか⁉ 残念だなぁ。でも、負けてから一皮剥けた感じですね。

北岡 でも、そのあいだに何をしてたかっていうと『ドラクエ』をダラダラやって、「ごはん食べよう」って言ってくれる人と会ったり。それこそ僕、負けたらいつも飲酒とかしてなかったんですけど、もう辞めようと思ったからこそ飲酒できたというか。開き直りは必要だなと感じて戻ってきましたよ。それこそ8月の試合直前は街で声かけられるのも嫌でしたから。

――そこは改善したんですか？

北岡 まあ、結局は開き直りですね。疲れてましたよ、やっぱり。船木（誠勝）さんがヒクソン・グレイシー戦の前に「『頑張ってください』みたいなファンと握手すると吸い取られる」って言ってたんですけど、その感覚がわかったです。なるほどな、と。負の循環ですよ。

――でも、ファンは当然ポジティブな感じで来るわけじゃないですか？

北岡 でも、こっちは「もう頑張ってるっちゅうねん！」って思うんですよね。「これ以上、俺から何を引き出そうとしてるんだ⁉」みたいな。やっぱり自分には船木さんに似た部分があるのかなと思いましたけど。船木さんと鈴木さんの系譜をもらってるなと思いました。

――まさにパンクラス伝承ですね。

北岡 そうですね。お二人とも気にもしてくださってるらしいですし。

――そういえば、船木さんの復帰戦があった両国大会を会場で観てたじゃないですか。あの試合はどうでしたか？

北岡 やっぱ船木さんはカッコよかったし、鈴木さんは言わずもがなだし。船木さん、いい感じでプロレスやってたんじゃないですか？ 僕、会話には入ってないんですけど、近藤さんと山宮さんが二人で9月の『戦極』の控室で、「船木さんと鈴木さん、プロレスでやるんだね、凄いね」みたいな話をしてて、あの世代は二人の狂気の直撃世代ですけど感慨深いんだと思います。みんな応援してますし、僕もホントに応援してます。あと、ついでに言うとプロサーファーを目指す人も応援してますし。

――出た！ 先日、記者会見で「プロサーファーを狙ってみたい」発言をした五味隆典選手ですね。

北岡 あのプロサーファーになりたい人は、負けた僕のこと踏みにじりましたからね～、『ゴング格闘技』の増刊号で「人の痛みを知ればいい」とか発言してましたよね？ 僕は彼の倍ぐらい負けてるんですけど！ 彼よりよっぽど知ってますよ、知ったうえでああいうふうにたち振る舞ってるんです！

――ここぞとばかりに言ってましたね。

北岡 まあ、今回で人と人とはわかり合えないってことも重々わかりましたよ（遠くを見ながら）。それ以外の部分もいろいろ人生の中で思うことがあって、そういう結論に達しました（達観した表情で）。しかし、わかり合えたわけじゃないですけど、横田選手みたいなケースもあるわけで（笑）。

――そのプロサーファーになりたい人は『バーリ・トゥード・ジャパン』に出ますね。

北岡 凄くありがたいことに「よかったらどう？」って僕にも声をかけていただいてたんです。でも、いまは『戦極』という舞

北岡悟

SATORU KITAOKA

あらゆるプレッシャーから解放されて、ひたすらDSで『ドラゴンクエスト』をやりこんでいたという北岡が、いきなりその模様を再現……。インタビュー中には“帝王”高山善廣が通りかかるなど、いろいろありました。

プロサーファーになってないんだから、いまはただのアマサーファーでしょ？

の『PRIDE』は
g。

きたおか・さとる■1980年2月4日、奈良県出身。パラエストラで総合格闘技の練習を積み、パンクラスismに入門。07年、DEEPで行なわれた『PRIDEライト級GP出場者決定戦』に勝ったものの『PRIDE』はその後、活動を休止して事実上の消滅へ。『戦極』参戦後はイアン・シャファー、クレイ・フレンチ、光岡映二、横田一則、五味隆典に勝利。11.7『戦極〜第十一陣〜』で再起戦に臨む。168cm、70kg。

プロサーファーになってないんだから、いまはただのアマサーファーでしょ？

台が僕にはあるんでお断りしたんですけど。サスティンの坂本（一弘）さんに声をかけてもらったことは、「出てくれ」ってこと以上に「格闘技を辞めないでほしい」みたいな話で声をかけてもらったんで、ありがたいですよ。

――機会があれば上がりたいですか？

北岡　そうですね、失礼のないかたちで上がりたいですよね。それは僕にとってもってことですけど。少なくとも僕がプロサーファーになりたい人の前座で出ることはないです。修斗の現役の世界チャンピオンの前座に出るのは一向にかまわないですけど。

――プロサーファーになりたい人と対戦というのは？

北岡　向こうが嫌がるでしょ？　僕はもういいっすよ。だって彼はプロサーファーを目指す人ですもん。プロになってない、いまはアマサーファーってことでしょ？　アマサーファーはどうか知りませんけど、僕は負けたら終わりですべてを失なうという気持ちで格闘技をやってきましたよ。『戦極』はとくにそう。パンクラスのときもそう思ってやってたし。

――北岡さんのそういうヒリヒリ感はいまの格闘技界では貴重ですよね。

北岡　そうですね。切ない感じですよね。

――でも『PRIDE』から……、もっと前かな、パンクラスからそうですけど、日本の格闘技ってそういう切なさが育ててきたようなものだと思うんですよ。

北岡　そういう緊張感が大事ですよね。淡白になっちゃってる部分あるじゃないですか。それが嫌なんですよね。でもまあ、わかんない人はわかんないから。僕、口ではこう言っても、アマサーファーにはけっこう感謝してるんですよ。

――まあ、アマサーファーに勝って北岡選手の評価は上がりましたからね。

北岡　うん、口ではいろいろ言いつつも、そこは感謝してますよ。でも、廣田選手は僕に対してそういう感情はないと思うんですよね。

――なるほどね。再戦が楽しみになってきたなあ。

北岡　まあ、僕が決めることじゃないですから（ニヤリ）。

【09年10月8日／東京・ゴールドジム原宿にて収録】

――おひさしぶりです。日本のMMAマガジン『kamipro』です。体調はどうですか？

プからコンディショニングがとてもよくできていたんで、最後まで自分のゲームができたことにも満足しているんだ。

満足しているよ。

――BJ選手のワンサイドゲームにも見えたんですけど、そうではなかった、と。

ンプの期間が長すぎて、試合当日のコンディション調整がうまくできなかったんじゃないかと思っている。だからこそ、ケニ

世界最強の男が語る“日本最激戦区”

LIGHT WEIGHT KING OF KINGS
B.J.PENN

「UFCライト級のトップで通用する他団体のファイターは5人いる」

いま日本格闘技界で“最激戦区”といえば、青木、川尻、北岡、廣田、五味らが名を連ねる黄金のライト級。そして、そのライト級で世界の頂点に立つのが、UFC世界ライト級王者BJペンだ。五味隆典が来年以降のUFC挑戦を匂わせ、青木真也がBJペン戦熱望を公言する中、王者は他団体のライト級戦線をどう見ているのか？ 12.12『UFC107』ではディエゴ・サンチェスの挑戦を受けるUFCライト級防衛戦を控えたBJに電話インタビューを試みた。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／Josh Hedges（UFC）

サンチェスに勝ってベルトを防衛したら ノンタイトルでGSPと再戦したいね

――おひさしぶりです。日本のMMAマガジン『kamipro』です。体調はどうですか？

BJ　いいトレーニングができているし、コンディションは最高だよ。ところで最近、日本の格闘技界の状況はどうなんだい？

――DREAMと『戦極』の2団体がメジャーとして盛り上げていて、UFCもWOWOWという有料衛星チャンネルで観られるようになってファンを増やしていますが、やはり全体的にPRIDEの頃のような熱を失なっている状態ですね。

BJ　なるほどな。

――ただ、ライト級はDREAMも『戦極』もいい選手が揃っているので盛り上がっているんです。ですから今回は、ライト級世界最強の男であるBJ選手にお話をうかがいたいと思ったんですよ。

BJ　OK。なんなりと聞いてくれ。

――まず前回、8・8『UFC101』でのケニー・フロリアン戦は完勝でしたね。あの試合の感想を聞かせてください。

BJ　ケニー戦は試合前のトレーニングキャンプも充実していたし、またいいかたちでそれが結果にも出たんで、とてもハッピーだった。とくにその前の試合（ジョルジュ・サンピエール戦）を落としていただけにね。試合内容も満足できるものだったし、ライト級のタイトルも防衛できたんだから最高の気分だったよ。ケニーは俺を疲れさせてから勝負に出ようというゲームプランだったんだと思うけど、キャンプからコンディショニングがとてもよくできていたんで、最後まで自分のゲームができたことにも満足しているんだ。

――ケニー・フロリアン戦では、相手のテイクダウンをすべて防ぎ、4ラウンドで完璧な一本勝ちを奪いましたが、作戦どおりでしたか？

BJ　いや、俺のゲームプランは、早いラウンドからスタンドのパンチで攻めて倒すものだったんだけど、ケニーにうまく距離をとられてしまって、なかなか自分のゲームをさせてもらえなかったんだ。でも、彼のアタックはすべて防ぐことができたし、スタミナも問題なかったから、最終的に4ラウンド目で仕留めることができて満足しているよ。

［2009.8.8 UFC101 Declaration］
米国ペンシルベニア州フィラデルフィア、ワコビアセンター
○BJペン vs ケニー・フロリアン×
（4R 3分45秒 チョークスリーパー）
"最強の挑戦者" を迎えたBJは、序盤からフロリアンのタックルを切り、相手にペースを握らせない。そして打撃でじわじわと追いつめ、最後はテイクダウンから一気にチョーク。見事な完勝でライト級王座防衛に成功した。

――BJ選手のワンサイドゲームにも見えたんですけど、そうではなかった、と。

BJ　やはりケニーほどの実力者を相手にしたら、すべて自分の思いどおりに試合を進めるというのは難しい。でも、辛抱強く自分のペースに持ち込んで、仕留めることが大事なんだ。

――ケニー・フロリアン戦後、「なるべく早く次の試合をしたい」と発言していましたが、どういった理由からですか？

BJ　ケニー戦前のキャンプからいいコンディションを作ることができていたし、またケニーとの試合でそれが確認できたんで、ぜひこのままの状態を維持して次の試合に臨みたいと思ったからさ。

――次のチャレンジャーであるディエゴ・サンチェスをどう評価していますか？

BJ　最高レベルのグラップリング、ストライキングのスキルを持ったオールラウンドで破壊力のあるファイターだよ。この試合は自分自身をテストするのにいいチャンスだし、ベストのトレーニングができているので、とても楽しみなんだ。

――元ウェルター級のサンチェスとの対戦は、あなたのウェルター級王座再挑戦の布石になりますか？

BJ　とにかく次の試合に勝たなければ始まらないけど、試合内容によって可能性はあるだろうね。ウェルター級で闘うことにはもちろん興味があるし、この質問は次のサンチェス戦で勝利を収めたあとに聞いてくれれば、答えやすくなると思うよ。

――前回、UFCウェルター級王座に挑戦したGSP戦の敗因はなんだと思いますか？

BJ　試合に向けてのトレーニングキャンプの期間が長すぎて、試合当日のコンディション調整がうまくできなかったんじゃないかと思っている。だからこそ、ケニー戦の前にキャンプの期間や内容を見直して、それが成功したんだ。また（GSPとの）試合に関しての分岐点は、2ラウンドでもらってしまったバックからのエルボーといいパンチ。あそこから動きが悪くなって、試合をコントロールされてしまったんだ。

――試合後、GSPのワセリン塗布疑惑に対して提訴したそうですが、結局どういった結果になりましたか？

BJ　ネバダ州アスレチック・コミッションを通じて、カナダのアスレチック・コミッションにワセリン禁止を忠告したのは知っているけど、俺自身、詳細は知らないんだ。まあ、このことで試合結果を覆せるわけじゃないし、済んでしまったことは仕方がないよ。

――GSPと3度目の対戦を希望しますか？

BJ　サンチェスから勝利を収め、チャンスがあったら対戦したいね。俺はライト級のタイトルを守らなければならない立場だから、前回のようにウェルター級のタイトル戦にこだわらず、ノンタイトル戦でいいと思う。

――GSPとの階級を超えた闘いが話題になるのは、あなたがライト級で無敵の強さを見せているからだと思います。UFCにかぎらず、あなたの王座を脅かす可能性のあるライト級ファイターは存在すると思いますか？

BJ　俺に勝てるかどうかはともかく、日本にもいいファイターがいるよね。アオキ、サクライ、エディ・アルバレス、ヨアキム・ハンセン……。もちろんUFCにも

素晴らしい柔術テクニックを持ったアオキと対戦したら凄い試合になる

B.J.PENN

たくさん若いファイターが台頭してきている。問題は誰がそこから這い上がってきて、ナンバーワン・コンテンダーになるかだろうね。

――いまストライクフォースが団体として成長してきていますが、ジョシュ・トムソン、ギルバート・メレンデスら、ストライクフォースのライト級トップファイターのことはどう評価していますか？

BJ　ジョシュもギルバートも間違いなくトップレベルの素晴らしいファイターだよ。ジョシュは昔、AKAで一緒にトレーニングしていたこともあり、よく知った仲なんだ。

――宇野薫選手が6月にUFCに復帰しましたが、彼の試合の感想を聞かせてください。

BJ　俺はウノがUFCに戻ってきたことを非常に喜んでいるんだ。前回の試合もいい内容だったよ。彼のスタイルは昔のまま変わっていないし、強いハートの持ち主だね。いままでの経験をもとに、トップファイターのスポットをつかんでほしいし、その可能性はあると思うよ。

――来年、青木真也選手や五味隆典選手がUFCに参戦するのではないか、という話がありますが、このプランについてどう思いますか？

BJ　彼らが俺たちの闘いに加わってきたら、間違いなくUFCにとってもMMA業界にとってもいい影響を与えると思う。ぜひUFCに来てほしいね。

――彼らはUFCでも通用すると思いますか？

BJ　ああ、彼らの実力は本物だからね。ただ、ゴミに関しては「UFCで成功するんだ」という意思が本物かどうかにかかっていると思う。ここ数年の彼は、このスポーツに対する情熱が欠けていたようにしか思えなかったからね。彼が昔のような強いハートを持って、本気でUFCの闘いに取り組むのであれば、いまでも充分に通用するだけの実力は残していると思うよ。

――五味選手が今年の5月、中蔵隆志という修斗のチャンピオンをKOしたのは、ご存知ですか？

BJ　そうなのかい？　それは全然知らなかった。その試合を観ていないからわからないけど、彼がもう一度、本気になったのであれば、MMA界にとっても喜ばしいことだろう。

――青木真也選手のことはどう評価していますか？

BJ　とてもテクニカルなファイターだと理解している。DREAMでの活躍は聞いているし、ぜひ彼の試合をライブで観てみたいよ。

――ショーン・シャークは「青木は過大評価されている」と言っていましたが、この発言についてどう思いますか？

BJ　ショーンがどういう理由でそう言っているのかわからないけど、アオキはいままでタフな対戦相手とも試合をしているし、柔術ベースで素晴らしいテクニックを持ってる。また、彼は自分の技術をMMAのゲームで活かす術をよく知っている印象がある。間違いなく世界トップレベルのファイターの一人だと思うよ。

――近い将来、もし青木真也選手との対戦が実現したら、どんな試合になると思いますか？

BJ　お互いに柔術のテクニックを持っているから、とてもテクニカルないい試合になることは間違いないよ。アオキはとくに素晴らしいガード、柔道、それにサブミッションのスキルを持っているからね。どんな局面も見逃せない、目まぐるしい試合展開になるんじゃないか。

――UFC以外の団体で闘っているファイターで、UFCライト級のタイトル戦線で通用しそうなファイターはいますか？

BJ　もちろん、UFC以外にも素晴らしい選手はたくさんいる。さっきも触れたように、アオキ、エディ・アルバレス、ヨアキム・ハンセン、ジョシュ・トムソン、ギルバート・メレンデスらは、間違いなくその可能性を秘めているよ。

――では、そんな中であなた自身の目標を聞かせてください。

BJ　とにかく俺はMMAというスポーツが好きなんで、自分の時代が終わるまでベルトを守り続けたいと思っている。最近はUFC内でも若手ファイターの台頭が著しいし、他団体からUFCへ参戦してくるトップレベルのファイターが今後も増え続けるだろうから、ケガのないように勝ち続け、長いあいだチャンピオンの座に君臨したいね。

【09年9月30日／電話取材にて収録】

B.J.PENN■1978年12月13日、米国ハワイ州出身。2000年、ブラジリアン柔術世界選手権（ムンジアル）をブラジル人以外で初めて制す。01年5月にUFCデビュー。04年にはマット・ヒューズを破りUFC世界ウェルター級王座を奪取。08年1月にはジョー・スティーブンを破りUFC世界ライト級王者となり、2階級制覇を達成。現在、自他ともに認めるライト級世界最強の男。175cm、70kg。

各団体首脳が語る

思惑と展望

さあ、今年も大晦日が近づいてまいりました! ひさびさに興行戦争となることが決定している今年の大晦日ですが、格闘技団体の首脳は年末に向けてどのような戦略を練っているのか。格闘技界のカギを握る4人にそれぞれの思惑と展望をズバッと直撃!

年末格闘技戦線異状あり!?

ウチの金網大会も注目だがや!!

――早速ですが、國保さん！　大晦日の
地上波中継はもう決まりました？　一部

したいというのはあると思うんですよ。
ただ、先ほど國保さんがおっしゃったよ

ル』を放送した実績もありますし。
國保　そのへんに関しては、なんとも言

かね。これは魔裟斗選手の試合にかぎら
ずですけど。

出でよ、雷電！『戦極』あらため『SRC』が大晦日から始動!!

SRC
2009年12月31日
有明コロシアム

吉田vs石井は“魔裟斗”に勝つ!?

ワールドビクトリーロード 代表取締役

國保尊弘

吉田秀彦vs石井慧という金メダリスト対決を一足早く発表し、年末の格闘技大戦争で一歩リードしたかたちとなっているのが『戦極』だ。大晦日からは『SRC』と大会名称を変更し、新たなステージに突入する『戦極』はいったいどこへ向かうのか？　ワールドビクトリーロード取締役にして『戦極』広報の国保尊弘氏に“シャキーン!”と直撃ッ!

聞き手／阿修羅チョロ　撮影／乾晋也

試合の興味や知名度で吉田vs石井に匹敵するカードはなかなかない

——早速ですが、國保さん！ 大晦日の地上波中継はもう決まりました？ 一部では『Dynamite!!』との二元中継が決定」なんて報道もありましたけど。

國保 この号の発売頃には、もしかしたら決まっているかもしれないですけど、現時点では何も言えることはないですね。

——何もないってことはないでしょう？

國保 いや、余計なことを言ってそれが載っちゃうと、話自体がなくなる可能性もありますからね。

——迂闊なことは言えない、と（笑）。でも、二元中継説は、いろんなことで出ちゃってましたよね。

國保 もちろん、TBSさんで検討してもらっているのは事実です。ただ、僕らとしては年末だけじゃなくて、この『戦極』というものを育ててもらえるのかという部分で。やはり地上波ということで、僕らがいままでやってきたコンセプトを変えていかなきゃならないことになるという懸念点があるんですよ。そういうことが話し合いでまとまるのであれば、お願いしたいとは思っていますけれど。

——そういったことも含めて、絶賛調整中なわけですね。

國保 そうですね。ただ、吉田秀彦vs石井慧という世紀の一戦ということで、少しでも多くの人にこの試合を観せてあげたい、という気持ちはあります。

——素人考えですと、『Dynamite!!』を中継するTBSさんとしては、視聴率だけ考えたら、当然そのカードは放送したいというのはあると思うんですよ。ただ、先ほど國保さんがおっしゃったように「その試合だけを中継したい」というかたちであれば本意ではない、と？

國保 そうですね。この試合を多くの人に観せてあげたい反面、現状としてはその試合だけではなく、ほかの選手もいることですし、そのあともイベントとして継続して育ててもらえるかどうかという点は大きいですね。

——となると、これも一部報道でありましたが、『戦極G！』あらため『格闘技ドキュメントSRC魂』を放送しているテレビ東京での中継が可能性は高いんですかね？ テレビ東京では大晦日に『ハッスル』を放送した実績もありますし。

國保 そのへんに関しては、なんとも言えないところがいっぱいあるんですよ。

——お察しします。でも、テレビ東京で放送中の『SRC魂』は一説には「9月で終了する」といった話も出たりしてましたけど、『戦極』から『SRC』へ名称変更とともに、番組名も変えて継続されているというのは、大晦日の中継も見据えてのことなのかな、と。

國保 なるほど。さすが、鋭いですねえ！

——あ、ありがとうございます。

國保 でも、ホントに何も決まってないんです。それに、なぜ番組が終了するという話が報じられたのかはわからないですけど、僕らは基本的に継続の方向で以前から話を進めていましたからね。

——そうでしたか。発表からはだいぶ経ちましたけど、石井vs吉田戦の反響ってどんな感じですか？

國保 まだより多くのところまで伝わりきっていないところがあるのかな、という感想です。知った人は必ず「えーーーっ!?」っていう反応をしますし、知れば響くカードだと思います。いま考え得る日本人同士では最高のカードだと思っていますし。コア層だけではなく、一般のマス層にも凄く響くカードだと思います。

——比べるのも変な話ですけど、同じ日に『Dynamite!!』で行なわれる魔裟斗選手の引退試合とはどちらが世間に届くカードだと思います？

國保 もちろん、魔裟斗選手の引退ということで注目は当然高いと思いますけど、対戦相手は決まってないわけですし、二人の知名度だったり、試合への興味ということでいえば、吉田vs石井戦に匹敵するカードはなかなかないんじゃないですかね。これは魔裟斗選手の試合にかぎらずですけど。

——初の金メダリスト同士の対決っていうのもありますし、試合内容もちょっと予想がつかないですからね。

國保 そうですよね。まあ、試合結果は展開次第じゃないですか。お互いに勝てると思っていますし、当然、お互いに負ける気はないでしょうし。本当に展開次第で勝ち負けが変わるんじゃないですかね。

——吉田さんは、基本的にオファーは断らないことで知られてますけど、今回の石井戦を受けたのは凄いなって声が多いんですよ。相手はデビュー戦ってことでリスクは高いだろうし、かなりの覚悟が必要だったんじゃないかと思うんですが。

國保 いや、それは両方ともですよ。吉田選手には「ここで負けたら……」というリスクがあるでしょうけど、石井選手にしてもこれだけ期待されて、「初戦を落としたら」というプレッシャーやリスクが当然ありますから。これはお互いにリスクのある闘いだと思いますよ。だからこそ観たいカードですよね。どういう結果になるか、まったく予想ができない！

——國保さんも自信満々なカードなわけですね。

國保 そりゃそうですよ（笑）。それ以上のカードは現時点では考えられないですから。

——まあ、そうでしょうね。では話題を変えます。前回の大会で発表されましたけど、大晦日から『戦極』あらため『SRC』になると。これは國保さんの中ではしっくり来てる感じですか？

國保 これまで、ずっと『戦極』『戦極』と言ってきたので、いきなり『SRC』だとまだしっくりこない部分は当然あるで

「これ以上のカードはない」と國保広報も自信満々の吉田vs石井戦。今年1月に吉田を下している“ゴールドメダリストハンター”菊田早苗や三崎和雄などともスパーリングを行なっているという石井。MMAデビュー戦で石井はいかなる闘いを見せてくれるのか？

も観ている者に勇気を与えたり「凄い！」
と絶賛されるような試合というのが、僕

ていうわけですね。
國保　そうなんです。チャンピオンシッ

るんですか？
國保　大晦日は厳しいと思いますね。そ

——熱望しているウェルター級の選手と
いうのは日本人ファイターですよね。

しょうけども、まあ、徐々になじんでくるかなとは思います。

——そういえば、11月の両国大会で「史上初の試みを行なう」と國保さんは言ってましたけど、何をやるつもりなんですか？

國保　これはですね、まだ正式決定できていないというか。それが本当にできるものであるのかどうかということを検証しないといけないので。発表できるのが10月末ぐらいになるのではないかと。

——それはリング上の闘いとは関係ない演出的なものですか？

國保　そうですね。お客さんに楽しんでもらうという試みです。

——なんだかよくわからないですけど、ちょっと期待しておきます。大晦日はまだ開始時間は決まっていないとはいえ、『Dynamite!!』との興行戦争になるわけですけど、たとえば、『戦極』とDREAMがお互いの大会で対抗戦を行なうとか、そういった可能性はありますか？

國保　今年にかぎっていえば、そういった可能性はまったくないと思います。

——まあ、そうですよね。

國保　ただ、『戦極』としては、DREAMだけじゃなく、海外を含めて、あそこの団体とはダメということはないですし、みんなそれなりに"見えない糸"では繋がっていると思いますし。

——"見えない糸"ですか（笑）。

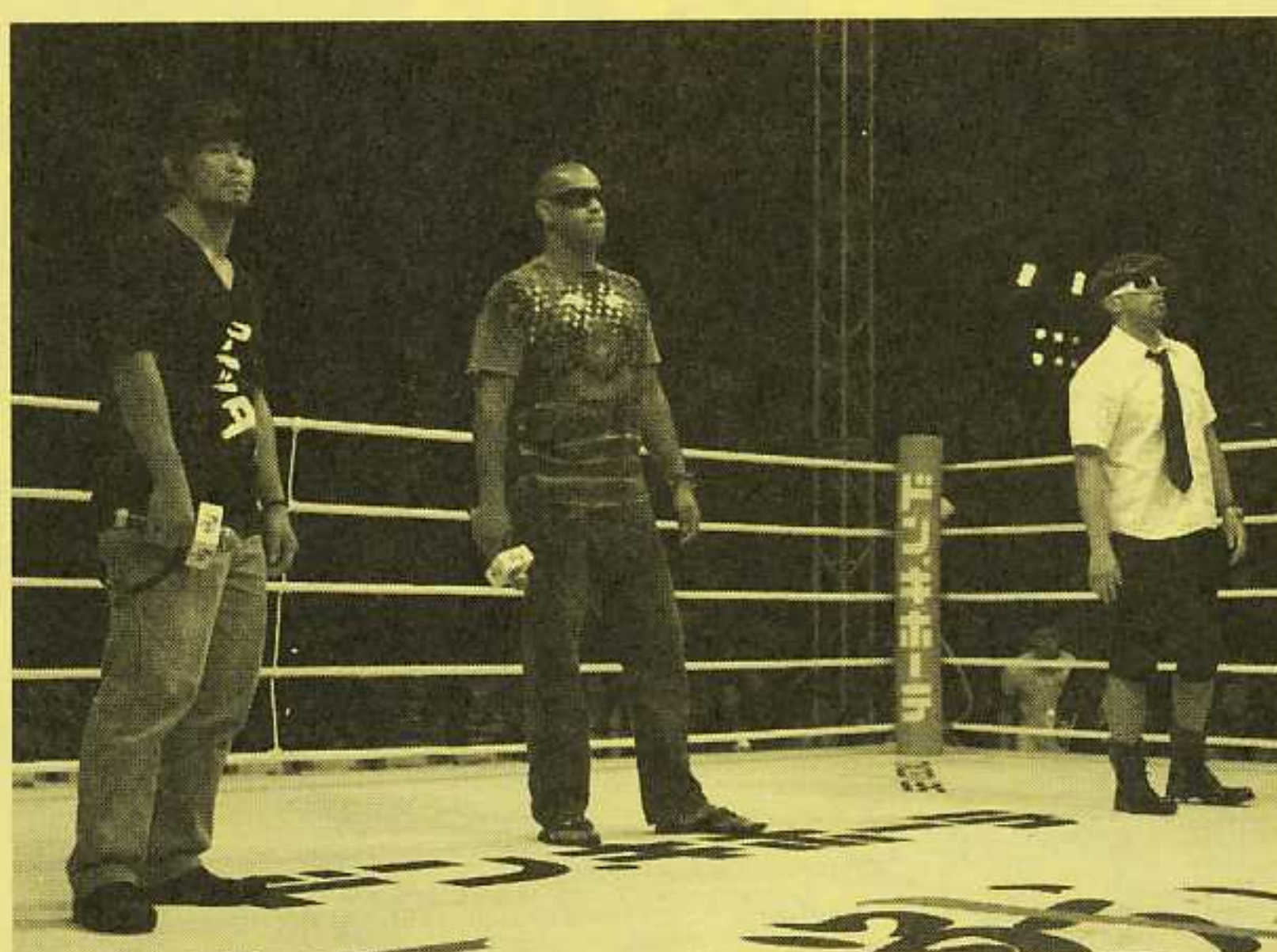
國保　見えない糸という表現はよくないかもしれないですけど、実際、海外のどの団体にしても話はできる状況にあります。表立っていなくてもお互いに協力し合っているような状況ではありますから。

——マスコミとしてちょっと困るのは、DREAMと『戦極』って会見の時間がかぶることが多いと思うんですけど、そのへんはどう思われます？

國保　いや、そこは意図的なものはないですからね。我々としても、時間だけではなく、できれば日程も違う日のほうがいいと思っていますから。だから、そこに関しては、記者をいっぱい増やしてもらうしかないですね（笑）。

——簡単に増やせるなら問題はないでしょうけど、そうもいかないですし、重なったら、そのぶん扱いは小さくなるわけですからね。

國保　当然そういうことも考えて、団体間で調整したりはしていますし、できるだけ、ずらそうという努力はしています。ただ、どうしても選手や会場の都合でずらせないときはしょうがないですけど。

——ファンとかには一番ライバル関係にあると思われているDREAMとも、そういった件も含めて、見えない糸はつながってるわけですか？

『戦極～第十陣～』で挨拶を行なった小見川道大、ジョルジ・サンチアゴ、郷野聡寛。3人は11.7『戦極～第十一陣～』への参戦が決定しており、小見川は日沖発に勝てば大晦日に金原正徳のフェザー級王座挑戦が内定。サンチアゴの防衛戦も大晦日が濃厚とのこと。

大晦日は『SRC』として初の大会となるので豪華な大会にしたいです

國保　そうですね。DREAMサイドと話し合うこともありますし、お互い話をできる状態にありますし。ただ、「DREAMと対抗戦」というのは、個人的には、その時期ではないと思っていますけどね。

——その時期ではないというのは、どういう意味ですか？

國保　いや、まだお互いのイベントとして、しっかりとしたものを定着させてからだと思いますよ。その上でじゃないと、安易に対抗戦をやってもダメなんじゃないかなと思うんですけどね。

——まだ、どちらのイベントもしっかり定着していないという認識があると？

國保　そうですね。それはDREAMだけでなく、『戦極』もそうだと思いますし。

——そういう意味で、地上波中継のあるDREAMに対して『戦極』ではどこをアピールしていこうと思っていますか。

國保　確かに地上波中継のあるなしは大きいのかもしれませんが、ウチはテレビありきでイベントをやってきたわけではないですから。そういう意味では『戦極』は旗揚げ当初から"リアル"というテーマでやってきていますし、そこですかね。

——確かに"リアル"は以前から『戦極』で打ち出していますけど、正直わかりづらいところもあると思うんですよ。じゃあ、ほかのイベントは"リアル"じゃないのかって見方も出てくるでしょうし。

國保　それに関して言えば、"リアル"といっても、さまざまな捉え方ができますからね。『戦極』の"リアル"は選手たちには厳しいでしょうけれど、非常にリスクのある試合の連続だと思うんですよ。顔見せ的な試合はほとんどないですから。

——地上波中継とかがあると、いわゆる視聴率のために、顔見せ的なマッチメークが望まれることもあるでしょうからね。

國保　まあ、そういった部分はDREAM以外でもありますからね。僕らはテレビがないぶん、本当にやりたいことができるというか。一番お客さんが観たいものを観せることができると思うんですね。

——やりたいことをやれているという実感はありますでしょうか？

國保　100パーセントできているかっていったら、それは無理ですよ。テレビ以外にもイベントにはいろんな事情がありますし、「こうしたいけどできないこと」ってたくさんあるんですよ（苦笑）。

——まあ、そうでしょうね。

國保　僕らは、その中でできるかぎりリスクがあって、ワクワクしたりドキドキするような試合を提供したいし、選手にもそれを乗り越えて強くなってもらいたい。実際に『戦極』のリングでは、勝っても負けても称賛されるような試合ってたくさん生まれてきていると思うんです。

——先日のフェザー級GP決勝戦とか、泉選手のデビュー戦も負けはしましたけど、インパクトのある試合内容でベストバウト賞を受賞されてましたし。

國保　"リアル"という意味では当然、勝たなければいけないんですけど、負けて

ぶることが多いと思うんですけど、その
がってるわけですか？
からね。『戦極』の"リアル"は選手たち
たなければいけないんですけど、負けて

も観ている者に勇気を与えたり「凄い！」と絶賛されるような試合というのが、僕らが求めているものなので。べつに地上波のあるなしが、大きな差別点ではないと思っています。それに、いまはＰＲＩＤＥの全盛時とは違って、格闘技を観るお客さんが「このイベントの信頼性で行こう」と"イベント"ではなく、「この選手を観に行こう」という感じで、"カード"であり、"選手"になっていると思うんですね。

―そこはＰＲＩＤＥ時代とは違ってきてますよね。

國保　もっと『戦極』のファン、ＤＲＥＡＭのファンというのがたくさんできて、それで初めて盛り上がると思うんですね。もし仮に対抗戦をやるんだったら。

―なるほど。

國保　プロレスで言うと、新日本プロレスなら新日本のファン、全日本プロレスなら全日本のファンというのがいると思うんです。新日本の一選手のファンというよりも新日本のファンになってもらっている。

―確かに、そういうかたちでなければ対抗戦は盛り上がらないですよね？

國保　盛り上がらないと思いますね。

―何かのきっかけで、機が熟したら、そういう可能性もなきにしもあらず？

國保　そうですね。ただ、それが今年の大晦日でどうかって言われたら、これはあり得ない話ですね。『Ｄｙｎａｍｉｔｅ‼』でどういったカードが組まれるかはわかりませんけど、『ＳＲＣ』では今年も一年間頑張ってきた選手たちがタイトルを賭けたりして対決するというストーリーがすでにできあがっていますから。

―正式発表はされていないですけど、すでにだいたいのマッチメークは決まっているわけですね。

國保　そうなんです。チャンピオンシップもいまの時点では３つぐらいの階級で決まっていますし、もしかしたら、もう１階級増える可能性もありますから。

―ちなみに、どの階級ですか？

國保　当初は11月の両国大会でミドル級のチャンピオンシップをやろうと思っていたのですが、そこはノンタイトル戦にして、年末にもう一度チャンピオンシップにしようかという案も出ていますので。大晦日に（ジョルジ・）サンチアゴの相手としてふさわしいという選手を持ってきて、４階級のチャンピオンシップをやる可能性も大いにありますね。

―そうなった場合、現在出場停止処分中の三崎選手が挑戦者となる可能性もあるんですか？

9.23『戦極～第十陣～』でキック王者ナンセン相手にデビュー戦を行なった泉浩。KO負けしたため11.7『第十一陣』へは参戦しないが2戦目は大晦日？　泉のセコンドに付いた三崎和雄は年内復帰は厳しそうな雲行きだ。

國保　大晦日は厳しいと思いますね。そこはもう僕の判断じゃないですから、わからないですけど。

―三崎さんの件はコミッションの判断に委ねるしかないという感じですか？

國保　そうですね。今度のコミッション委員会のときに、現状の報告というものをしなきゃいけないと思ってますけど、いままでのニュアンスから言うと、大晦日は厳しいのかなという気はしますね。

―そうですか。でも、これまでのＭＭＡのイベントでも４階級のタイトルマッチを一日でやるって前例がないんじゃないですかね？

國保　そうでしょうね。『戦極』として一年の総決算ですし、『ＳＲＣ』として初の大会となるので、豪華な大会にしなきゃいけないと思っています。

―ひさびさに復活となる『ＶＴＪ』に参戦する五味選手にも大晦日はオファーをかけたいと言ってましたけど、可能性はありますか？

國保　試合結果にもよるとは思いますけど、今度の試合が終わってから、出てもらえるチャンスがあれば、出てもらいたいとは思っていますね。

―ウェルター級戦線はどうなりそうな感じですか？　郷野さん、ニック・トンプソンに連勝したダン・ホーンバックルがチャンピオンシップの片側に入るのは決定的だという発言もありましたが。

國保　ホーンバックル選手は確定ですね。いままでは、ウェルター級は選手数が少なかったという点もありますけど、日本人選手もだいぶ揃ってきましたし、あとは僕らが熱望している選手にもそろそろ出てもらいたいと思っているんで。

―熱望しているウェルター級の選手というのは日本人ファイターですよね。

國保　そうですね。その選手に出てもらえたら、ウェルター級は日本人もかなり充実してきますから。外国人も呼んで、ウェルター級のトーナメントができるぐらいの選手層になると思います。

―その選手は僕の頭の中に浮かんでいる人と同じだと思うんですけど、『戦極』参戦の手応えはつかんでいるんですか。

國保　まあ、僕らは出てもらえると思っていますけどね。いまいる瀧本選手、郷野選手、そして、その選手が加わったらウェルター級もかなり充実しますから。

―ホーンバックルの相手は、やはり瀧本選手が有力候補なんですか？

國保　可能性は高いでしょうね。このあいだの試合でＫＯか一本で勝ってくれれば即座に決めたかったんですけどね。とは言え、ウェルターに落としてから２連勝。ウェルター級の中で２連勝している選手は『戦極』ではほかにいませんから、瀧本選手が第一候補というのは変わりないと思います。

―わかりました。最後に、確認しておきたいんですが、大晦日からの名称変更に伴い、最近人気も急上昇という戦極ガールも名前が変わるんでしょうか？

國保　あ、まったく考えてなかった（笑）。

―普通にＳＲＣガールですかね？

國保　何かつけないといけないですね。いいアイデアがあったらお願いします！

―とりあえず、『ｋａｍｉｐｒｏ』で大活躍中の戦極グリーンの西垣梓さんに聞いておきます！

國保　いやいや、ちゃんとした名前を考えてくださいよ！（笑）。

【09年10月9日・都内・J.ROCKにて収録】

——今日は『DREAM・11』の話をおうかがいします！ ……まあ、あたりまえ

——DREAMの瞬間最高視聴率は亀田大毅だった（笑）。

川さんが昨日の大会を「新日本のドーム大会みたいだった」って言ってたんです

ったら全部カットしちゃえばよかったかもしれないですし。

ライブと視聴率のはざまで悩めるDREAMの行方とは？

テレビ格闘技

“『HERO'S』”になったらボクも辞めます!?

DREAMイベントプロデューサー

笹原圭一

青木真也のライト級王座奪取、フェザー級GPの盛り上がりがありながら、
視聴率、ライブの熱と、なお悩ましいDREAMの現状。
そんな中、今回も笹原EPにはDREAMの課題やこれからについてうかがった。
DREAMはいったいどこへ行く〜。

聞き手／ジャン斉藤　撮影／乾晋也、菊池茂夫

世界観を作り直すことを考えないと たぶん視聴率もこのままですし

──今日は『DREAM・11』の話をおうかがいします！　……まあ、あたりまえなんですけど。

笹原　はい、ではちょっとだけDREAMの話をさせていただきましょう（笑）。

──まずは昨日のイベントはいかがでしたか？

笹原　うーん、ひとまず、いま持っている材料の中では見せられるものは全部見せられたかなとは思いますけどね。100パーセント満足かというと、いろいろ反省点はあるんですけど。

──反省点といいますと？

笹原　たくさんマイナス要素があったじゃないですか。それこそKID選手が出られないとか、桜庭選手にスクランブルに出てもらったり……。

──川尻選手にもっと勝負論のある相手を用意するとか。

笹原　そうそう。まあ、反省点は言いだしたらキリがないんですけど、現実的にそれができない中でなんとかパッケージにしてやった中では、かたちになったかなって。

──視聴率はどうですか？

笹原　そうですねぇ。盛り上がったとはいえ、正直数字もあまりパッとしてないですからね。12・7パーセントって、もちろんこのご時世の数字としては、評価に値すると思うんですけど、亀田大毅からバトンを受けた入りの数字が17パーセント。つまり、入りが瞬間最高なんですよね。ということは、その数字は亀田の数字なんですよね。

──DREAMの瞬間最高視聴率は亀田大毅だった（笑）。

笹原　そういうことになっちゃうんですよねぇ……。

──ボクは松林と一緒に観てたんですけど、松林はスーパーハルクを観ながら「これが笹原さんのやりたいことかっていうと違うんだろうな」と言ってたんですよ。

笹原　う〜ん、必ずしも違うわけではないんですけど……。ミノワマンの試合はテレビ的には絶対必要ですし、そして、ミノワマンのモンスタークエストシリーズの、ある意味集大成みたいな試合なわけじゃないですか。それこそ5年ぐらいこれをやり続けて、到達点を見せることができたと思いますけど。

──ハルク以前にミノワマンの世界観だった、と。

笹原　そうですね。ただ、ボクらは単純にあれだけ会場が盛り上がったからいいじゃないかとは言えないですし、じゃあボクらに改善の余地がないかというと、やっぱりあるんですよね。それはイベントとして世界観を作り直すことを考えないとたぶんあの数字のままですし、今後も下がっていくでしょうね。

──いまって絶対的エースというか、求心力と遠心力を兼ね備えたエースというのが生まれにくいと思うんですよね。谷川さんが昨日の大会を「新日本のドーム大会みたいだった」って言ってたんですけど、よく考えたら90年代の新日本でさえ複数スター制でしたし。

笹原　今朝、谷川さんともそういう話をしたんですよ。ライガーがいて、蝶野がいて、長州がいてというのは華やかでいろんなスターがいるという楽しさはあるんですけど、テーマがバラバラでぶつ切りというか。もちろん一つの戦略としてはありなんでしょうけどね。だからといって、ボクシングみたいにアンダーカードがあってタイトルマッチがメインにあるというスタイルというのも、いまのDREAMでは現実的じゃないんですよ。

欠場となったゲガール・ムサシの代打として出場したサップ。地上波ではやはり数字はよかったものの、お決まりの入場シーンでは驚くほど歓声がまばら。ライブと地上波との乖離を物語る光景だ。

──階級が細分化しているのもわかりづらさを誘発してますよね。ただ、階級が分かれてるのはあたりまえだし、格闘技ファンはそこは気にしないと思うんですけど、要はテレビに乗せたときのわかりづらさですよね。

笹原　そういう意味では地上波も含めて戦略が中途半端かもしれないですね。たとえば青木選手の試合もカットするんだったら全部カットしちゃえばよかったかもしれないですし。

──「青木真也の試合はPPVで！」という感じで。たとえば桜庭さんの試合にしても、対戦相手も含めて満足してないファンのほうが多いと思いますけど、でも今回は今回で40歳の選手が挑戦するというテーマは興味深いんです。だったらそういうドキュメンタリー番組にしたほうが伝わりますよね。

笹原　だから視聴率を獲る戦略と、ライブ熱を高める戦略というのをくっきり分けて考えないとダメですね。ライブとテレビの対応を兼ね備えてる選手って、DREAMじゃなくたって見当たらないですもんね。

──テレビの対応はできるけど、ライブに弱かったり。その逆もまたしかりで。

笹原　それだっていろんな意見があると思うんですよ。それぞれの立場から皆さんいろんな意見を言うんですけど、それぞれに正解があるんですよね。どれも否定はできないんですよ。で、今朝からいろんな人と話をして「じゃぁ、どうすりゃいいんだ！」と大会終わったばかりなのに、深い森をさまよっているような状態ですよ（笑）。

──そうやって周りの意見を聞いてばかりいると主体性がなくなってしまいかねないですね。

笹原　そうなんですね。いろんな意味で余裕があれば「地上波がなくても俺たちはライブでやっていくよ」って言えたりしますし、気持ちの中でもそういうのが生まれてくると思うんですけど、やっぱり経済的な面でも、ライト層をもう一度振り向かせるためにも地上波のテレビは必要だし、格闘技ファンをつなぎとめる

ためにもPPVは必要だし。当然実際の会場のお客さんを楽しませることも必要だし、どれに対してもいい顔しなきゃいけないから、やっぱり振りきれないですよねえ。どうするのがいいんですかねぇ。

——いまって一般層に売り込もうとしてる部分がコア層から批判されてる傾向にあると思うんですね。じゃあ、一般層に届いてるという手応えはありますか？

笹原　いや、届いてないでしょう（キッパリ）。

——んあ～！

笹原　かといってコア層が満足してるかというと、一部のファンは満足しているかもしれないですけど、そこまで到達してないですね。桜庭さんの試合とかでも、コアなファンからすると「もっと勝負論のある試合を観たい！」っていうのがあるじゃないですか。

——川尻さんのマイクも2回はよけいでしたしね。川尻さんは試合後にマイクで挑戦アピールして、青木さんの試合のあとにもアピールしたじゃないですか。

笹原　自分の試合のあとだけにするか、もしくは青木選手の試合のあとにするかどっちかということですよね。まあでも、普通の流れどおりに川尻選手と青木選手がリング上で睨み合ってれば、そういう蛇足感はなかったんでしょうけど、青木選手は青木選手で「検討します」っていう、また例によってわかりにくいネタを出すわけじゃないですか（笑）。

——ホントにわかりにくいですね（笑）。

笹原　宇野（薫）選手のパロディをするわけじゃないですか。ボクはアレ絶対に事前に考えたんだろうなぁって、ニヤニヤ笑いながら観てたんですけどそのあと川尻選手と会って話をしたんです。「川尻くん、ホントに怒ってたの？」って言ったら「いやいや、そんなことないですよ、あのときああいう表情したほうがいいかなって思って」とか言ってて。

——大人だなあ。

笹原　そうなると、「たぶん宇野くんが一番怒ってる」って話になって。でも、青木選手はあいかわらず「いやいや、そんなことないですよ。だって終わったあと、宇野さんが控室にいたからボク一緒に写真撮りましたもん」って言ってて。

——宇野くんも大人だなあ（笑）。

笹原　つまり大人じゃないのは青木真也だけですよっ！

——ダハハハハ！　青木真也もよく「調子に乗ってる」とか言われがちですけど、あれだけ強いんだから調子に乗ってあたりまえなんですけど。

笹原　逆に調子に乗らなきゃダメですよ！　だって身体一つで闘って多くの人を感動させて、普通の人とは違うお金をもらってるわけですからね。青木真也の表層的な部分だけを見て「調子に乗ってる」って言うのは簡単ですけど、ボクらが家でテレビ観てノンビリしているときだって、彼は練習してますし。そのことを格好つけてアピールするワケでもなく、勝利一点に収斂させていくってキツいことだし、ボクは男として普通に格好イイと思いますよ。まぁ、人間としては、そうは思わないですけど（笑）。

煽りVの中で、青木は写真のようなコメントを発信し、笹原EPも「気持ちは同じです!」と追随。ただ、理想と現実のはざまでどう見せていくかは非常に難しい問題である。

青木真也は調子に乗ってあたりまえ。身体一つであれだけ闘ってるわけですから

——でも、青木真也の場合は調子乗って、UFCに行っちゃう可能性はないんですか？　青木さん本人はずっとBJペンと闘いたいとコメントされてますよね。

笹原　だったらBJペンを引き抜いてきてやりますよぉぉぉ！

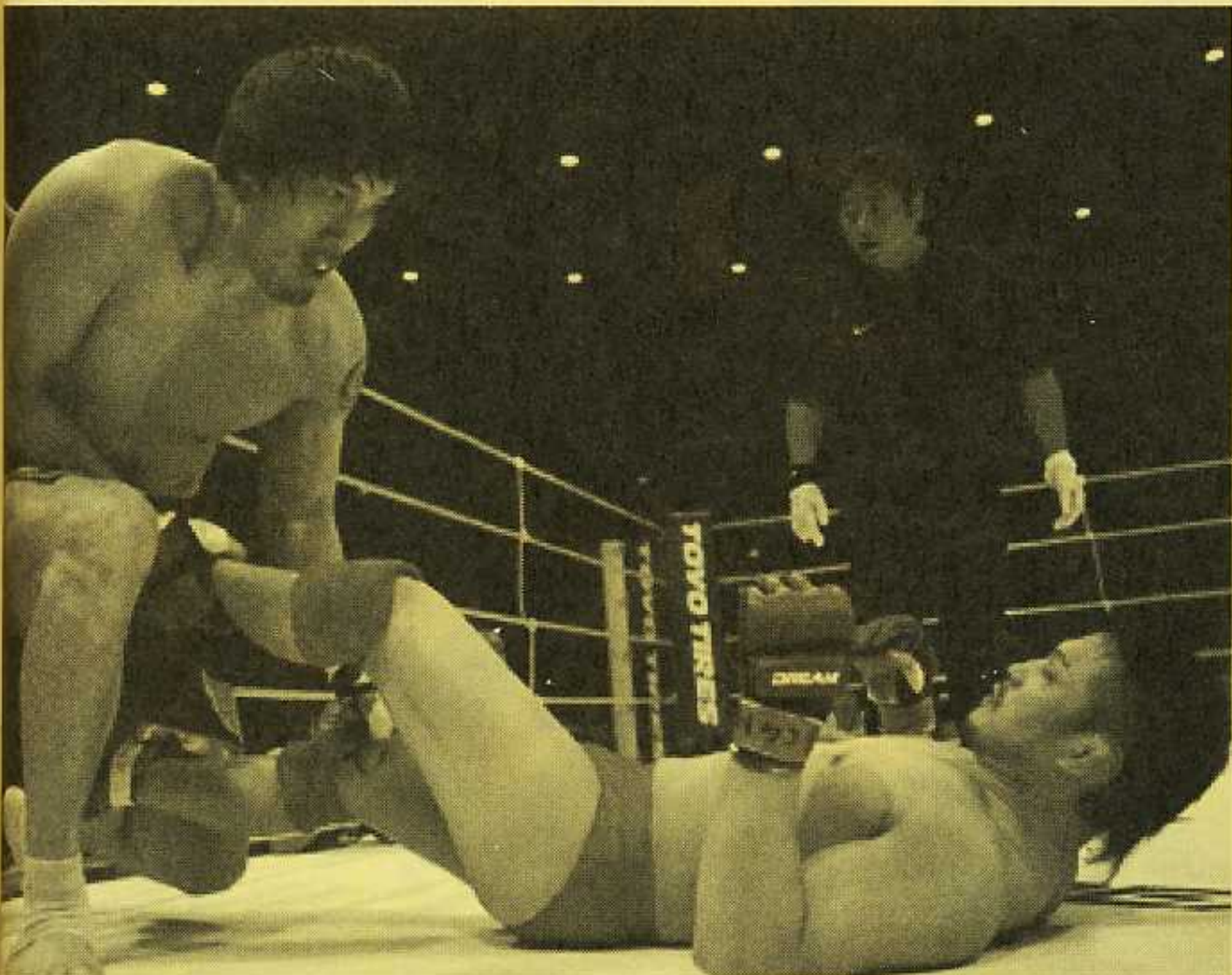
——た、頼もしい（笑）。

笹原　マジメな話、まだDREAMの中で闘ってないライト級の選手もいますし、そこはこちらから青木選手にテーマを提示すべきですね。

——ただ青木選手は『DREAMチャンネル』で流れていた煽り映像で「『HERO'S』になったら辞めますけどね」という、物議を醸しそうな発言をしてましたけど。

笹原　その気持ちはボクも同じですよ。いわゆる〝テレビ格闘技〟にはやっぱりアレルギーありますから。青木選手も〝『HERO'S』〟というのはいわゆる〝テレビのための格闘技〟という意味で使ってると思うんですよ。『HERO'S』その

『DREAM.12』参戦予定選手の田村潔司が「身に覚えがない」!?

本誌、締め切り間近の10月中旬、例によってなかなかカードが発表されないDREAMだが、一部マスコミによると、『DREAM.12』の参戦予定選手として名を連ねている田村潔司までも出場について「記憶にない」とキッパリ発言しているという。田村といえば、ポスターにも煽りVにも顔が登場している選手だが、本人いわく「ウワサが先行してできてしまった幻想じゃないんですか?」とのこと。こちらとしては、この田村の発言こそ幻想であってほしいのだが……。いったい『DREAM.12』のカードはどうなるのだろうか!?

『DREAM.11』で最高瞬間視聴率を獲得したのはミノワマンvsホンマン戦。視聴率とともに会場の熱も生んだ一戦だったが、DREAMの目指すべき世界がハルクなのかというのもまた難しい。今回のDREAMは、盛り上がった一方で、非常に悩み多き大会である。

軸足は変わらず純格闘技に置いているとボクは思ってますよ

――川尻さんのマイクも2回はよけいで

よ！　だって身体一つで闘って多くの人

てると思うんですよ。『HERO'S』その

ものを攻撃してるワケじゃなくて。だって『HERO'S』の中にも純格闘技的な部分もありましたし。DREAMをそういうふうにしたくないというのは、そこは青木真也とボクらは同じ気持ちですね。

――青木さんはいまのDREAMにそういう兆候があると感じての発言なんでしょうか。

笹原　それはあるし、青木選手なりに非常ベルを鳴らしてるんだと思います。そういう意味では青木真也のDREAMに対する愛情だと思いますね。

――笹原さんは笹原さんで、イベントをやっていくうえで多少そういうテレビ格闘技的なものをやらなきゃならないっていうのもあるわけですよね。

笹原　マインドのところでは純格闘技的なことをもちろんやりたいですけれど、でも現実を目にしたときには、それだけじゃ立ちゆかない時代というのは受け止めなきゃいけないですから。じゃあ軸足をどこに置くかとなると、軸足は変わらず純格闘技に置いているとボクは思っているので、青木選手にそう言われるとやっぱりハッとさせられますよね。

――その青木選手の試合ですが、笹原さんの注文どおり勝敗を超えられました？

笹原　最後よく一本取ったなと思いますよ。いまの総合格闘技のレベルで、実力者同士が対戦して2ラウンドで一本取るって難しいと思うんですよね。

――握力も体力も弱まっていきますし。

笹原　まあこれは結果論なんでしょうけど、シャオリン戦後のバッシングがあったりとか、マッハ戦の敗北があったからこそ一本取れたのかもしれないですし。

――一回目のカルバン戦の悪夢が頭をよぎったりと、結果的には青木真也のここ1～2年の要素が全部詰まった試合だなと思いますよね。最後はやっぱり泣くし（笑）。

笹原　観る側は簡単に「勝敗を超えた闘いを観たい」って口にしますけど、それって厳密に言うとリング上の闘い以外の因縁やストーリーといった、選手自身の周りの環境をボクらが作れるかどうかってことも大きな要因になってきますし。たとえば、川尻vs魔裟斗があれだけ盛り上がったのは、もちろん二人が素晴らしかったからというのはあるんですけど、決戦の空気がうまく作れたことも「勝敗を超えた闘い」になっているんだと思います。だから、そうした状況が作りづらい3度目の対戦で、最後に一本取ってドラマを作った青木真也は、やっぱり凄いなあと思いますよ。

「勝敗を超えた試合を～」と要求する笹原EPに対し、「だから素人って言われるんですよ!」と青筋を立てた青木。そうは言いつつも、今回のヨアキム戦では残り4秒というドキドキのタイミングで一本勝ちしてしまうから、やっぱりこの人は凄い!

――で、こうなると青木さんと川尻さんは大晦日で対決だと考えてよろしいでしょうか？

笹原　ボク個人としては大晦日として考えてます。一部ではDREAMでやったほうがいいという意見もありますけど、でもボクは『Dynamite!!』でやるべきだと思いますけどね。

――田村vs桜庭戦を『Dynamite!!』でやりましたけど、一部では『やれんのか！』というか、PRIDEの延長でやるべきだという意見がありました。

笹原　たぶんそれと同じ感情を青木vs川尻に抱いている方は多いと思いますね。でも、だからこそ『Dynamite!!』でやったほうがいい気がします。魔裟斗引退がある、いわゆるテレビ格闘技的な雰囲気の中で、青木vs川尻の因縁の試合がどう入るのかには興味がありますし。それに、やっぱり大晦日って最高の舞台じゃないですか。あの二人の試合は最高の舞台でやらせてあげたいと思ってますから、その感情もありますよね。

――なるほど。たとえば今回青木選手がライト級のチャンピオンになりましたけど、『DREAM・12』で菊野選手がアルバレスに勝ったら、挑戦者としてはありますか？

笹原　それはありえるんじゃないですか。だから、大阪はおそらく格闘技ファンにはマッチメイクや世界観も含めてイメージはいいですよね。というのも、結局ケージでやります、菊野vsアルバレス戦やりますとなると、前田吉朗vsチェイス・ビービ戦っていう、どっちかっていうと地味なカードに対しても「いいカード組むねぇ！」という声が聞こえてきますし。

――ゴールデンじゃないと、とたんにマニアックになるDREAM（笑）。

笹原　弘中vsパーキ戦も格闘技ファン的には「いいカード組むねぇ！」みたいなこと言われますけど、それがテレビにつながるかというと、なかなかそうでもないですよねぇ……。

――しばらくこの葛藤は続くかもしれないですね。

笹原　続くんだろうなあ。もう一回、視聴率も見直さないといけないですけど、所vs高谷戦よりもボブ・サップの試合のほうが数字がいいんですよね。それ聞いてショックだったなあ……。

――腐ってもボブ・サップですか（笑）。

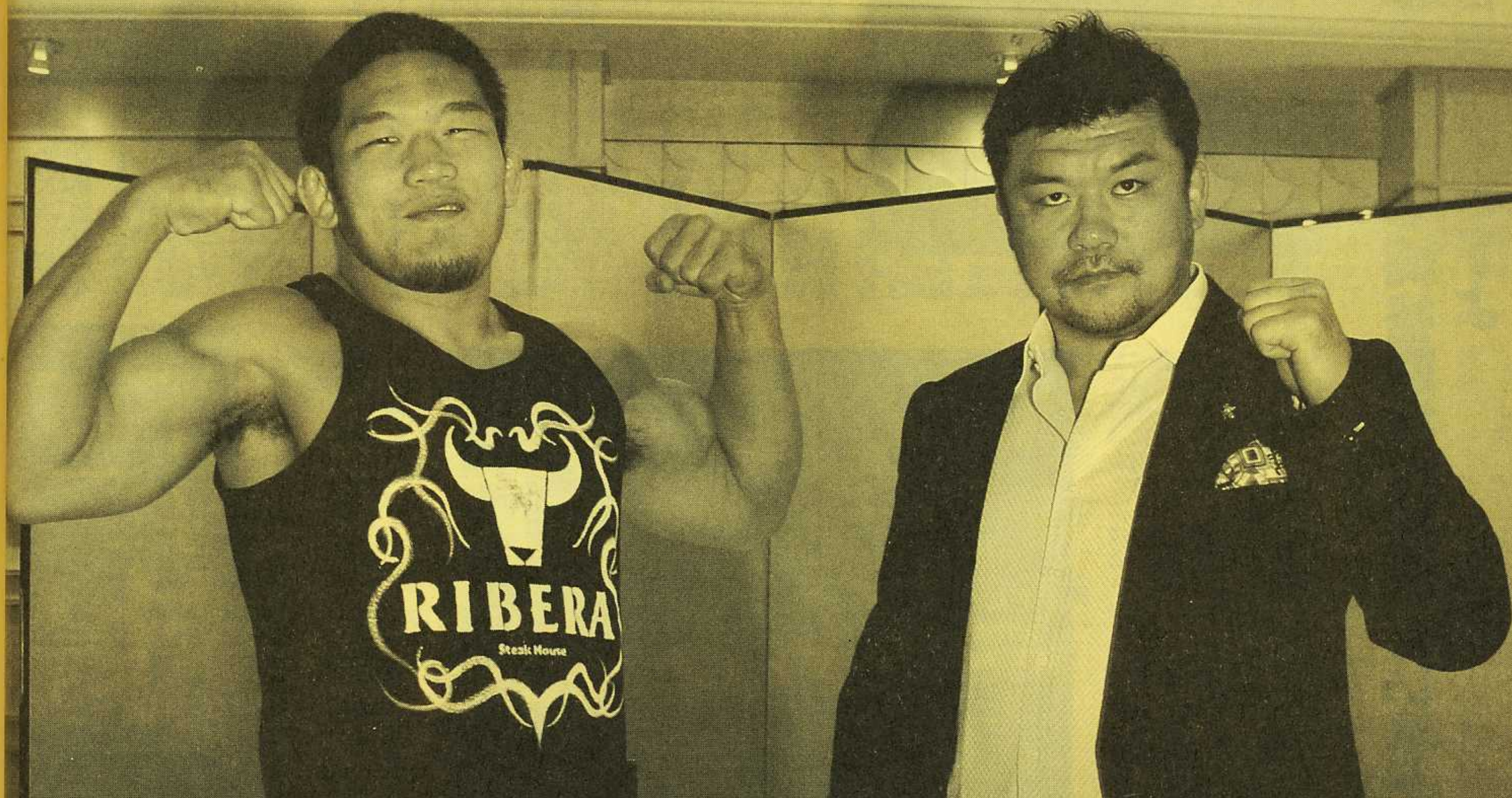
笹原　所選手も数字は持ってるんですけど、それでも数字が突き抜けないのは、やっぱり軽いクラスの限界なのかなと思ったり、いつも言うように圧倒的に強くてキャラの立った外国人がいないからだって思ったり、いろいろ要因はあるんでしょうけど。過去のデータを見ても数字を獲ってますし、あれだけ地上波に出てる選手なんですけど……（遠い目で）。

――笹原さん、どこを向いてしゃべってるんですか。

笹原　だからといって、青木真也の試合をフルで流すなんてことも難しいし……（ブツブツ）。

――笹原さん、笹原さ～～ん？　それ、ボクのカフェオレですよ！

【09年10月7日／都内・某ホテルにて収録】

『Dynamite!!』vs『戦極』の興行戦争に早くも火花!

石井vs吉田をTBSが放送!? それは絶対にありません!

FEG代表

谷川貞治

10月もいよいよ終盤。魔裟斗やら石井慧やらと、あちこちから大晦日のウワサが聞こえてくる時期となったが、"ミスター大晦日"サダハルンバは今年の大晦日についてどう考えているのか。気になる石井vs吉田の地上波放送のウワサについても直撃。今回のサダハルンバは強気です!!

聞き手/ジャン斉藤　撮影/乾晋也

『DREAM・11』は凄くいい興行だったけど、目線が多すぎたよね

――ジャニー谷川さん！　昨日の『DREAM・11』の視聴率はもう出たんでしょうか？

谷川　うん、平均が12・7パーセント。まあ、悪くはないけど、もうちょっとほしかったねぇ。前半の亀田大毅のボクシング世界戦が平均で19パーセントあったから、その数字を引き継いだDREAMもあの試合内容と、全体的なパッケージ感からいったら15～16パーセントは獲れたかなって。

――悪くないとはいえ、その数字に届かなかった要因ってなんだと思われますか？

谷川　やっぱりプロモーションでしょう。だって、試合前って所くんとチェ・ホンマンしか煽ってなかったでしょ？

――番組表にもミノワマンvsチェ・ホンマンの試合しか載ってなかったそうで……。そこまでビッグカードだとは知りませんでしたよ！（笑）。

谷川　だからホンマン、所を放送した22時までは数字が凄くいいんだけど、それ以外の試合は煽りきれてなかったぶん、視聴者からすると「あ、桜庭も出てたの？」って感じだったのかもね。まあ、昨日は凄くいい興行だったと思うんだけど、ちょっと目線が多すぎたね。K―1MAXの選手なんかはDREAMの選手より知られてないけど、MAXは全員70キロのトーナメントだから、みんなその頂点を目指してるというわかりやすさがあるじゃない。

――階級が一つだけだから、わかりやすいですね。

谷川　それに対して昨日の印象は、たとえば90年代の新日本プロレスのドーム興行じゃないけど、「蝶野が出てきた、長州力もライガーも出てきた。俺、みんな知ってる！　試合もおもしろい！」と。

――はあ。いまの読者には伝わらないたとえを使いますねぇ……。

谷川　試合内容は全然負けてないと思うんだけど、亀田選手の試合にかなう目線が作れてなかったですね。

――青木選手の試合も地上波でフルで流すのは、TBSなら無理だろうなと思いました。実際、見るも無残なダイジェストでしたし。

谷川　ああ、ボクはまだ地上波のほうは観てないんだよ。ホントに凄くマニアックな試合だったよね。でも最後に一本取ったからいいんじゃないの？

――そうなんですけど、この試合って、そこに至るまでの14分35秒間があったうえでのおもしろさってあるじゃないですか。ダイジェストじゃ絶対に伝わらないおもしろさ。

谷川　そうだね。

――そのおもしろさは、TBSが持っている「視聴率を狙う」というモノサシからすると、とても計れないんでしょうけど。

谷川　そこは難しいよねぇ。でも、ボクは青木くんの試合は格闘技としてのおもしろさは凄くあったと思う。

――昨日の大会で、最初からテーマやドラマが貼りついていたのは所選手だけだったと思うんですね。青木真也にもあったけど、前回のシャオリン戦問題を含んだ難しいテーマだから、それは視聴者には伝えにくいじゃないですか。

谷川　そういう意味ではテレビ的な見どころは所くんだけだったのかもしれないし、そのへんが数字に出たんだろうね。逆に、亀田選手はわかりやすいもんね。

――2年前の〝反則騒動〟からようやく陽のあたる場所に戻ってきたわけですからね。

谷川　あれからお父さんが追い出されたりさ、ジムのゴタゴタがあったうえでの今回のデンカオセーン戦だからね。しかも、次は興毅選手と内藤選手の試合があるし。そこはやっぱりドラマ性はちょっと負けてるよね。

――ただドラマって作ろうと思って作れるもんじゃないですよね。で、大晦日の目玉の一つとなりえる青木vs川尻戦が昨日の大会では思ったより気運が高まってないんじゃないかと思ったんです。

谷川　まあ、即答を避けた青木くんの気持ちがわからないわけではないんだけど、青木選手のゴールがやっぱり昨日だったからね。チャンピオンになって一区切りついたわけじゃない。いまいち気運が高まらないのはそこでしょ。

――いや、ボクは、川尻選手の今回のカードが、青木戦の気運が高まらないような相手だった気がするんですね。それは川尻選手が悪いわけじゃないんですけど。

谷川　そこは格闘技の難しいところなんだけど、たとえば昨日、青木くんはハンセンとの大一番が大きな山だったわけじゃない。でも、じつはああいう大一番やったからこそ次が大切なんだよね。川尻くんも魔裟斗戦が凄い疲れちゃうようなギリギリの試合だったけど、じつは次が大事なんですよ。だからプロモーターの欲からいうと、6月にカルバン戦、7月に魔裟斗戦をやってバーンと川尻くんが上がったところで、次にいい相手とやってほしいんですけど、選手のことを考えると、興行的にはそこで休んじゃうしタメようとするから、そこでなかなか熱がつかないんだろうね。

――選手のモチベーションとか体力を考えると、その調整は難しいですね。

谷川　たとえば、魔裟斗vsKIDという

04年大晦日の魔裟斗との激闘にてブレイクを遂げたKIDだが、サダハルンバいわく、大事なのは次どんな試合をするかということ。同じく魔裟斗戦を経た川尻にとっては今回のDREAM復帰戦が大事な試合だったのだが……。

のを04年の『Dynamite!!』でやったけど、そこでKIDくんがドカーンと上がったところで2月のK－1MAXで武田幸三と闘うとなったときに、チケットがめっちゃ売れたんですよ。そういうのが突き抜けるチャンスなんですよね。……でも、大会の前日にKIDくんが「ケガしました」っていうことで実際はなくなったんだけど。

――ああ、ありましたねぇ。

谷川 でも、そこで当時魔裟斗くんのライバルの一人だった武田幸三なんかとボンとカードを組むと、さらにKIDくんを観たいという気運が上がるんですよ。だからどこにゴールを持っていくか、そのタイミングが格闘技は非常に難しい。そういう意味では今回青木くんが川尻くんのマイクを受けて「検討します」って言ったけど、あれは本当はダメなんだよね。

――いや、ボクはあそこで青木選手が「大晦日やりましょう！」と叫ばなかったことで、逆に青木vs川尻はなんとか生き残ったと思うんですよね。

谷川 そう？

――あの場で受諾しても、そんなに盛り上がらなかったと思うんですよ。せっかくの好カードに傷がついてしまった可能性は高い。青木選手が図らずもスカすことで結論を先送りにしたことが、ある種のアングルになったというか。まあ、今後うまい具合に転がるかはわからないですけど。

谷川 ただ、大晦日に関しては、本当にコマがたくさんあるから凄くいいカードが組めると思うよ。KIDくんもいるし所もいる、青木くん、川尻くん、ホンマン、サップ……はちょっと使いものにならないけど。

――いいですよ、気にしないでどんどんサップを使ってください（笑）。

谷川 そうそう、ちゃんとファイトマネーを払っているジャカレイもいるしね！

――ダハハハ！ DREAMはジャカレイにギャラを払ってないって情報が流れてますけど。

谷川 そんなもの払ってるよお！

――あたりまえなんですから、胸を張らないでください（笑）。今年の大晦日のテーマはなんですか？

谷川 去年と同じで「勇気のチカラ」でやることになると思いますよ。プロモーション的には魔裟斗くんの引退が凄く前面に出て"お祭り"的な感じになると思うけど、カード的には勝負論があるカードを組みますから。

03年大晦日、フジ、日テレ、TBSの格闘技三つ巴戦争となったとき、TBSの中では放送をやめるという選択肢もあり、そうなった場合『Dynamite!!』も行なわれてなかったのだそう。曙vsサップ戦で達成できた「打倒・紅白」もマット界の歴史には刻まれてなかったかもしれないのだ。

もし大晦日に地上波放送がないんなら『Dynamite!!』はやらないよ

――そういう中で、石井慧選手の試合をTBSで放送するんじゃないかというウワサがありますが……。

谷川 （さえぎって）それは絶対にない！

――おっ！ 言いきりましたね。

谷川 だって、絶対ないもん、そんなこと。だって大晦日の『Dynamite!!』というのはFEGが契約してるもんだからね。

――たとえば昨年は『Dynamite!!』の前にボクシングの世界戦が放送されてたじゃないですか。ああいうかたちで『戦極』を放送することもないんですか？

谷川 現時点でそういう話はないです。

――じゃあ、『戦極』はどうなるんですかね、どこかしらでテレビ放映はするんでしょうけど。

谷川 ボクなんかは逆にそこはよくわからないですよ。まずさ、ボクらが大晦日にイベントをやる目的から話をすると、ボクらは『紅白歌合戦』の裏番組で、格闘技コンテンツで『紅白』に対抗しようというのがそもそもの原点で、それはTBS社内全体でも変わりないんですよ。でも、もしそういう目的がなかったらボクらは大晦日のイベントなんて絶対やらないですからね。だって、大晦日は休みたいもん。

――あ、休みたいですか（笑）。確かにボクも休みたいです。

谷川 だって、ボクなんかもう10年休んでないんだよお！ 99年のプロレスの『INOKI BOM－BA－YE』からだからさあ。だから、ボクらはテレビやスポンサーありきでビジネスとして成立するうえで興行を打ってるから、その条件が外れると大晦日にやる意味はないんだよね。たとえば03年の話をすると、PRIDEとK－1が分かれてしまって、さらに猪木さんが日テレに行ったじゃない。で、日テレとフジテレビが泥沼の闘いになったときに、ボクらはどうしようとしたかというと、一番の選択は興行をやめることだったんですよ。

――へぇ～、そんな話があったんですか。

谷川 そのときはTBSさんも「2局もやるんだったら今年はやめましょうか」と話してたんですよね。でもTBSの中ではやっぱりウチが老舗だというプライドを持ってる方もいたし、ボク自身も自分たちがやめるのも癪に障るなと思って、勝負できるものがあるんだったら勝負しようということで踏みとどまったんですよ。その切り札が曙さんで、結果的に一番になれたんだけど。だから、もし大晦日に地上波での放送がないんだったらボクらはやらないし、そういう意味でいうと、いまのところテレビが決まっていない『戦極』さんの目的はわからないよね。

――ちなみに、TBSは石井慧の"デビュー戦だけ"の放映に乗り気ってことはないんですか？ たとえば『やれんのか！』のときのように二元中継を……。

谷川 （即答で）まったくない！ まだ、ボクらと『戦極』さんが話ができてるんだ

いけど。

ど、カード的には勝負論があるカードを

でないんだよお！　99年のプロレスの『I

ボクらと『戦極』さんが話ができてるんだ

去年は一緒にやろうかという話は出たけど決裂してから話はなくなりました

ったら可能性はありますけどね。つまり『やれんのか！』はなぜ二元中継が実現したかというと、そもそもTBSは反対だったんですよ。大阪ドームで『Dynamite‼』やってるから、お客さんや話題も分散するんじゃないかという反対意見が凄く多かったんだよね。TBSは『Dynamite‼』の主催をやってて大阪ドームのほうのチケットを売ってるわけだから、「チェ・ホンマンや秋山選手をなぜさいたまで使うの？　それでチケットが売れなくなったらどうするんだ」という思いがあるわけだから。でも、ボクらは「これはスポンサーの問題もあるし。また、スポンサーの問題もあるし。

—それは何か障害があるんですか？

谷川　去年の大晦日、一緒にやろうかという話は出てたけど、それで決裂してからは話はなくなりました。

—決裂した要因はなんだったんですか？

谷川　いやぁ………言えないなあ。ビジネス的な話です。

—たとえば國保さんは「DREAMさんとは、やりたいことが違うから」とおっしゃってますけど、それもあります？

谷川　ボク、『戦極』さんのやりたいことがなんなのかもよく知らないんだけど、違うとも一緒とも、そんなこと考えたこともないよね。

—あの〜、仲がよろしくないのはしょうがないんですが、なんかDREAMと『戦極』って日時がバッティングするんですよね、記者会見とか。団体交流はしなくても、会見の調整をしたほうがいいと思うんですね。わざわざぶつけるメリットはどこにもないですし。

谷川　確かにバッティングさせるのは絶対によくないと思う。ズラしたほうが絶対いいですよ、それはお互いのために。それはデリカシーの問題にもなるし、そんなバカげたことをやってる場合じゃないしさ。

—話は戻りますが、普通に考えて『戦極』はテレビ東京での放送になると思われますが、それって『Dynamite‼』にとっては脅威じゃないんですか？

谷川　いや、全然。イヤですけど、そこは大きく差がつくと思いますよ。

—はー、凄い自信だなあ（笑）。そうなるとTBSとしては魔裟斗の引退だけを売りにしていきそうですね。

谷川　それはほかのマッチメイクにもよるんだけど。コアなファンはそこに敏感だし、マスのファンはあまりそこには関心がない。

—要するに中間層がいない、と。

谷川　それにテレビ自体、10年後、ヘタしたら5年後もどうなるか誰も見えてないですよね。平均視聴率だってフジテレビや日テレでさえ5パーセントは下がってますよ。それに、高齢化社会の日本はもう4人に一人はお年寄りなんでしょ？　そうなると、テレビを観る人の年齢も高いということだし、こないだのK−1WGPも視聴率は悪くなかったんだけど、高橋英樹が出てた『密室列車・特急かもしか、途中下車連続殺人！』とかいう2時間ドラマに負けたからね。いままでそんなことなかったですよ。

—TBSにしたってエースは『水戸黄門』ですからね。そこを楽しんでる視聴者が大半だとすると、DREAMは苦しいよなあ……。

谷川　それは地上波だけじゃなくて、スカパー！もそうらしくて、スカパー！に入る理由って、団塊の世代がリタイヤしてヒマつぶしで男性はプロ野球、女性は韓流ドラマを圧倒的に観てるんだって。やっぱりね、ボクらの世代もそうだけど、高齢層もテレビ大好き世代なんですよ。でも、いまの若い子たちは完全にネットでしょ。

—テレビはほとんど見ないですよね。でも、いちばん影響力のあるメディアがテレビ。

谷川　そのへんの変化も考えないとダメだよね。そういう意味でいうと、やっぱり格闘技というのは若者中心のコンテンツなんで、そこは考慮しないとね。だからへんな話、格闘技のゴールデンタイムはもしかしたら23時かもしれないし。そういう生活習慣とかも含めて劇的に変化していく状況をどうビジネスに変えていくか。ボクらがやってることは単にチケットを売るだけじゃなくて、そういうことも大事だからね。

—そこは大晦日でももちろん問われてきますよね。

谷川　もちろんそうだね。ただ『戦極』さんに関しては、フジテレビ、日テレあたりで放送されるんだったら凄くライバル視するんですけど、そうじゃなければ、お互いに頑張りましょうって感じですよ。

—わかりました。じゃあ、今年の大晦日は『Dynamite‼』独走だ、と（笑）。

谷川　そう、もう怖いものは何もありません！　ジャカレイにもギャラは払ってるし。

—んあ〜！　ジャカレイも出るかもしれない『Dynamite‼』に期待してます。

谷川　こんだけ言ってて石井vs吉田戦が『Dynamite‼』で流れてたりね。うふふふふふ。

【09年10月7日／都内・某ホテルにて収録】

07年に実現した『Dynamite!!』と『やれんのか!』の二元中継は、FEGサイドの説得によって実現したものだそう。『戦極』サイドとFEGが話ができない中で、いったい今年の大晦日の放送はどうなるのか!?

“マット界を動かす男”に
大晦日のウワサを
直撃！

「こっちの金網はもうとっくにできとるわ！」

DEEP代表

佐伯 繁

マット会首脳陣インタビューのトリは、前号で女子格を熱く語ってくれたサエキングだ！ DREAMのケージ導入についてうかがおうと思ったら、なんと計画はDEEPが先だった!? と、とにかく、ケージの話から大晦日の気になるウワサについても聞いてみた。

聞き手／松下ミワ　写真／乾晋也

佐伯　今日はなんの話？

―今日はDREAMのケージ大会についてお話をおうかがいしようと思ったんですけど、なんとDEEPでも金網大会を行なうことになったんですよね？

佐伯　行なうも何も、こっちがビックリだがや！

―あ、そうなんですか！　ちなみに、ケージ大会はいつ開催なんですか？

佐伯　12月19日、ディファ有明でね。

―ということは、金網はいま制作中なんですか？

佐伯　そんなもの、とっくにできとるわ！（鼻息荒く）。だってですよ、金網の話が上がったのは今年の1月とか2月だからね。で、どうしても後楽園（ホール）で金網というのはできんから、会場はディファ有明にして、ウチ来年50回大会で10周年記念もあるんで、数字の計算もいろいろあるわけよ。そういうのを考えたときに、もう3月か4月には金網をやろうというのは決めてましたから。

―はー、ということは、DREAMよりも早く計画してた、と。

佐伯　んー……、まあ発表も向こうが先にやったからしょうがないんだけど……（ブツブツ）。

―言い方はへんですけど、ぶっちゃけ佐伯さんからすると、これはちょっとくやしいですよねえ。

佐伯　くやしいというか……、「あれ？」っと思うよね（苦笑）。

―ワハハハハ！

佐伯　まあ、ただ基本的には形状もルールも違うんですよ。向こうは六角形でしょ、ウチは八角形でしょ。で、向こうはDREAMルールでしょ。こっちはヒジあり、踏みつけアリのルールでもやるんですよ。

―おお、ヒジありなんですね。

佐伯　まあ、そのバージョンと、ヒジなし、踏みつけなしバージョンと二つに分けようと思ってるんだけど、基本的にはアリ。だからまったく違うんですよ。

―でも、そもそもどうしてケージを導入しようと思ったんですか？　やっぱりアメリカ格闘技の隆盛というのが影響してるんでしょうか。

佐伯　んー、流れがいまそういう流れかなと思ったときだったから、逆に言ったら不思議なもんだなと思ったよね。つまり、なんでウチが金網をやるかというと、金網ってバイオレンス性が強いイメージじゃない。で、選手自体もあの中に入って試合をしてみたいという声が多いんですよ、実際。で、長南（亮）なんかもそうだけど、UFCに行く選手なんかにはやっぱり日本で金網を経験をさせてあげたいんだよね。その欲求を満たしてあげたいのよ。DEEP系の選手が金網に入ったらどうなるんだとか、それを観てみたいオレの気持ちもあったしね。だから、たとえば昔オレが『佐伯祭り』というのをやってDEEPに出てる選手みんなでプロレスをやったけども、それもやってみたいという選手が多かったのよ。あれも欲求から生まれたもんだからね。

―あ、『佐伯祭り』はプロレスをやりたいという選手の欲求解消のためだったんですか（笑）。

佐伯　だからね、いまは金網に出たいって言ってくる選手が多すぎてな、もう収拾つかなくなってきてるから。いまだけで、もう15〜16試合あるからね！

―16試合も！

佐伯　ただね、元も子もないようだけど、

意味合い的にはオレは金網はダメなんですよ。なんでかというと、試合がおもしろ

後もやるんですか？

佐伯　年に一回ね。ただ逆に言ったら、金

佐伯　そんな力あるわけないじゃん。

―またまたぁ。ところで、大晦日の興行

はメジャーとインディーの境が少なくなったからだと思うんですよ。メインの階

大晦日の話は、正直テレビ局の上の人や『戦極』の上の人しか知らんでしょう

意味合い的にはオレは金網はダメなんですよ。なんでかというと、試合がおもしろくない。

——ホントに元も子もない発言ですね（笑）。

佐伯 だってみんな端っこに詰めるし、ブレイクも短くないし、もう試合が動かない。真ん中で闘ってる試合なんて見たことないからね！

——そうですね（笑）。

佐伯 しかも見にくいでしょ、客から見たら。だからオレはバイオレンス性と雰囲気以外にいいところはないと思ってる。だから、ブレイクを早くして試合をおもしろくしようとするウチからすると考えが逆行するんだけど、まあ1年に一回だったらまた違った意味合いがあるかもしれないからね。

——若干の葛藤がありながらも、選手のためにもちょっとやってみようかな、と。

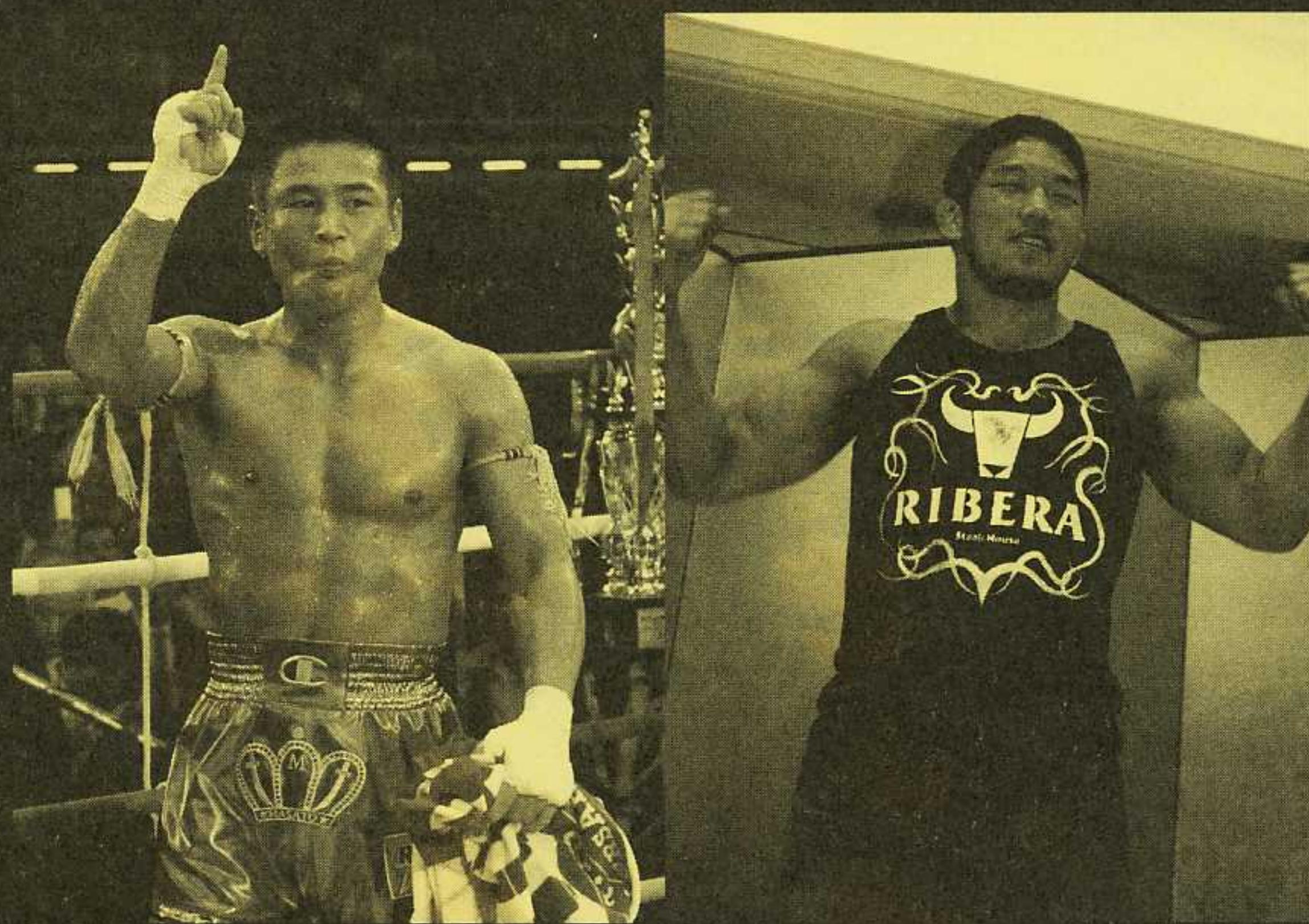
佐伯 そうそう。で、やっぱりイメージはカッコいいじゃない。

——そういうメリット、デメリットのあるケージ大会をDREAMでやることに対してはどう思いますか？

佐伯 うーん、まあ正直に言って大阪で助かったよね。まあ、どこまで言っていいかわからんけど、ルールもヒジありじゃないんだったらどうするの？ と思うところもあるけど、向こうはテレビのこととかもあるからしょうがないわな。

——そこはDREAMもいろいろ葛藤があるんでしょうね。ちなみに、ケージは今後もやるんですか？

佐伯 年に一回ね。ただ逆に言ったら、金網はレンタルしますよ。だから、来年あたりは金網の大会がほかの団体でも増えるかもしれないよね。

——はー、マット界は佐伯さんが動かしてるようなもんですね！

サエキングの言うとおり、魔裟斗と石井はチャンネルを替えながら観ることになりそうだというウワサは多いが、大晦日の情報は一日ごとにひっくり返るのが常。油断は大敵だ！

佐伯 そんな力あるわけないじゃん。

——またまたぁ。ところで、大晦日の興行戦争についてですが、ぶっちゃけ『戦極』の地上波放送というのはどうなりそうですか？

佐伯 そんなの俺が知ってるわけないですよ。

——いやいや、そんなことないんじゃないですか？

佐伯 正直、テレビ局の上の人たちや『戦極』の上の方しか知らんでしょう。オレはTBSとテレ東になる気がしちゃうよね、雰囲気的に。

——谷川さんに話をうかがったかぎりだと、TBSでの放送は完全否定されてました。

佐伯 落ち着くところで落ち着くんじゃない？

——でも、國保さん的にはやっぱりTBSで放送したいんでしょうか？

佐伯 いやー、わからん、オレには。まあ、基本的にはお金に困ってるところじゃないんでボクではわからんしね。まあ、よく聞かれるんだけど、ボクらはメジャー団体がテレビ局とどんな話をしてるかなんて知らないから。ただ、みんな一つ大間違いをしてるということは言っておきたいね。

——大きな間違いといいますと？

佐伯 格闘技が下火だという話をよくされるけどね、逆に言ったらボクらみたいなインディー団体は客が減ってるわけじゃないんですよ。逆に増えてるんだから！（鼻息荒く）。

——そうなんですか！

佐伯 ジムもどんどん増えてきてるし、いい選手もどんどん出てきてるからね。だから、これはなんでかといったら、ボクはメジャーとインディーの境が少なくなったからだと思うんですよ。メインの階級が下がって、大きくて有名な外国人のファイターを呼べなくなってるとなると、これは境はなくなってくるわな。それから、昔いたような強い外国人に日本人はやっぱりコンプレックスを抱くわけだけど、それが階級も下がって、日本人選手が増えたとなると、選手が近すぎる存在になったんだと思うよ。

——佐伯さんにとって、メジャーとインディーの境がなくなるというのはどうなんですか？ 危機感というのもあるんでしょうか？

佐伯 うーん、危機感というよりも、こっちが選手をあっためる期間が短くなってるわなあ。あっためる段階がもうちょっとほしいかなと思うよね。逆に今成（正和）とか（前田）吉朗なんか、後楽園規模に慣れすぎてしまってるから、メジャーでおっきな会場でやると緊張して力出せないことも多いからね。そこは、難しい問題ですね。

——そういった状況も含めて、今年の大晦日って盛り上がりますでしょうか？

佐伯 魔裟斗選手の引退があるから盛り上がると思うよ。あと青木選手vs川尻選手もあるんじゃない？ もうKID選手vs所選手もやるしかないでしょ！ ただ正直、やっぱり石井選手が出るというような爆弾みたいなのはないわな。

——なるほど、なるほど。

佐伯 ま、だから、石井選手観て、魔裟斗選手観てという感じにチャンネル替えるんじゃないかね。ただね、それもそうだけどオレは自分が生きていくだけで精一杯だわっ!!

【09年10月9日／都内・DEEPジムにて収録】

フジテレビショックからDREAM.11まで——!!

日本格闘技界に何が起こっていたのか？

MMAクロニクル
『PRIDEはもう忘れろ！ 新時代格闘技のミカタ』発売!!

世界最高峰の舞台は、
忽然と姿を消した。
あれから格闘技界には、
いろんなことがありすぎた。
あの輝きはもう二度と
戻らない、と人は言う。
それでも今日もどこかで
誰かが殴り合っている。
腕を極め合い、
勝ちどきをあげている。
それを見守る人もいる。
我々には、格闘技を見守り、
熱狂する理由がある。

「残酷だって？ 人生ってのはそもそも残酷なもんなんだよ。
負けはしたけど、俺はマークを尊敬するね」（フィル・バローニ）

人生は残酷だ。格闘技も残酷だ。誰もが残酷の中で闘っている。フジテレビショックから、DREAM.11まで。日本格闘技界はいろいろなことがありすぎた。本書は2006年6月から2009年10月まで、格闘技界で行なわれた試合、事件を通して“新時代格闘技のミカタ”を提唱するものである。ミカタは見方であり、味方だ。やっぱり格闘技はおもしろい！

10月30日（金）全国書店にて発売予定!!

B6変型判 336ページ　定価=1,680円（本体1,600円+税）　橋本宗洋 著／kamipro編集部 編
発行／エンターブレイン　発売／角川グループパブリッシング

本書は『kamipro』、携帯サイト『kamipro.Move』に掲載された橋本宗洋氏の原稿を厳選のうえ、加筆・修正したものです（一部書き下ろしあり）。

eb! enterbrain 株式会社エンターブレイン　〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555（代表）［通信販売のお問い合わせ先］http://www.enterbrain.co.jp/

ジュードー！ ホーハー！

今年の年末は
二人の柔道王が
世間を巻き込む!

12.31『SRC』で実現する
吉田秀彦vs石井慧の柔道金メダリスト対決。
この一戦をいったいどこのテレビ局が放送するのか、
それ以前にそもそも放送されるかどうかも未定だが、
とにかく世間の注目を集めることは間違いなし!
それでは柔道王決戦特集、いざ!!

おるあああ!!

リスト決戦

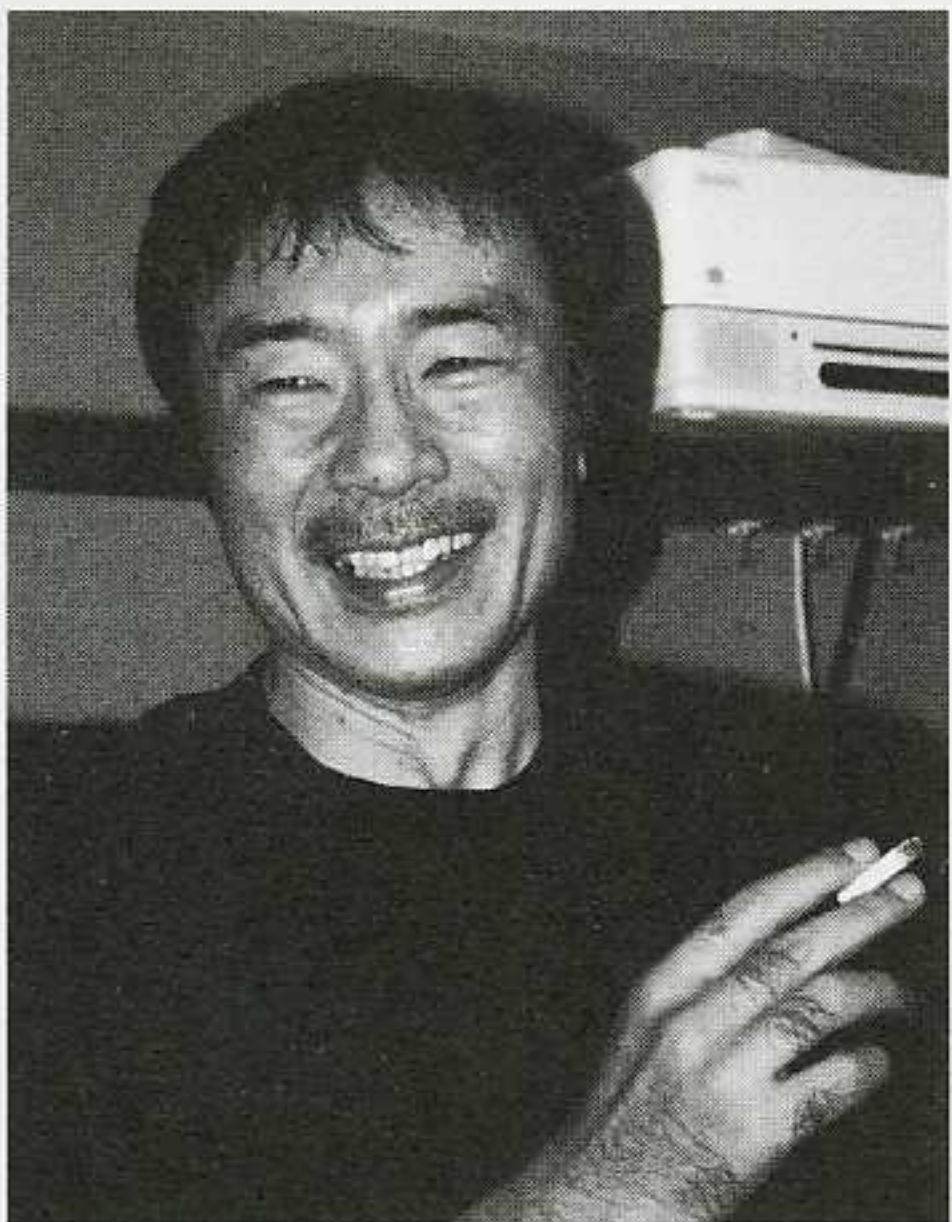
——ザス！　今日は吉田秀彦vs石井慧戦のことをはじめ、いろいろおうかがいし

道を行ってないというか。

小林　あれほど実績のある人が「誰とで

『柔道部物語』作者が語る

柔道金メダリ

プロレス格闘マンガの巨匠が本誌初登場！

漫画家
小林まこと

『柔道部物語』や『1・2の三四郎』など、プロレス・格闘技ファンに
いつの時代も愛される名作を生み出してきた小林まこと。
自身も柔道経験があり、吉田秀彦や小川直也とも親交のある小林氏が
12.31『SRC』の柔道王決戦、さらにはマット界への熱い思いを激語り！
もちろん合言葉は～、ザス、サイ、サ！（『柔道部物語』調）。

聞き手／橋本宗洋　構成／鈴木佑

―ザス！　今日は吉田秀彦vs石井慧戦のことをはじめ、いろいろおうかがいしたいと思いますので、よろしくお願いします。

小林　はい、よろしく。

―さっそくなんですが、先生は吉田選手の試合を、かなり早い段階から観ていたみたいですね。

小林　最初に観たのはテレビなんだけど。高校柔道選手権の関東予選。

―関東予選からチェックしてましたか！

小林　たまたまテレビで観ていて「凄いな、この白帯」って。

―重量級ではないのに、団体戦ではポイントゲッターだったんですよね。

小林　チームにはほかに一番強い重量級の選手がいたんだけど、その選手の出番がほとんどなくて、ほぼ吉田が5人抜きしてたね。

―じゃあ、のちにオリンピックで金メダルを獲得したときは「やっぱり出てきたか」という。

小林　そうだねぇ。その後、3年生になってからのインターハイは生で観てるし。バルセロナの金メダルも生で観てますよ。

―吉田選手がプロになってからの活躍は、どのようにご覧になってますか？

小林　いや、俺はこの人がこんなに男らしいとは思わなかったね。

―男らしい？

小林　うん。今回の石井戦にしてもそうだけど、どんな試合でも受けるじゃない。小川直也との試合だって、本当はやりたくなかっただろうけど受けたしね。

―PRIDEでは、GPにも出てミルコ・クロコップとやったりヴァンダレイ・シウバとやったりしてますからね。楽な道を行ってないというか。

小林　あれほど実績のある人が「誰とでもやるよ」っていう姿勢でいるっていうのは尊敬に値するね。

―そういうところも含めて、柔道時代から一貫して感じる吉田選手の魅力ってどういう部分になりますか？

小林　なんかねぇ、クールなかっこよさがあるよなぁ。かっこいい、あの人は（笑）。「ウワーッ！」ていうのを出さないんだよね。殺し屋ふうのかっこよさがある。感情を爆発させるタイプじゃないんだけどね、仕事人というか。

―心の奥底に秘めたものがありそうな。

小林　バルセロナのときだってね、小川が負けて、日本柔道が厳しい状況の中でさ、きっちり仕事したじゃない。

―まして、直前に古賀稔彦選手のケガがあって、そのときの練習相手が自分だったわけですから、プレッシャーで潰されてもおかしくないですよね。

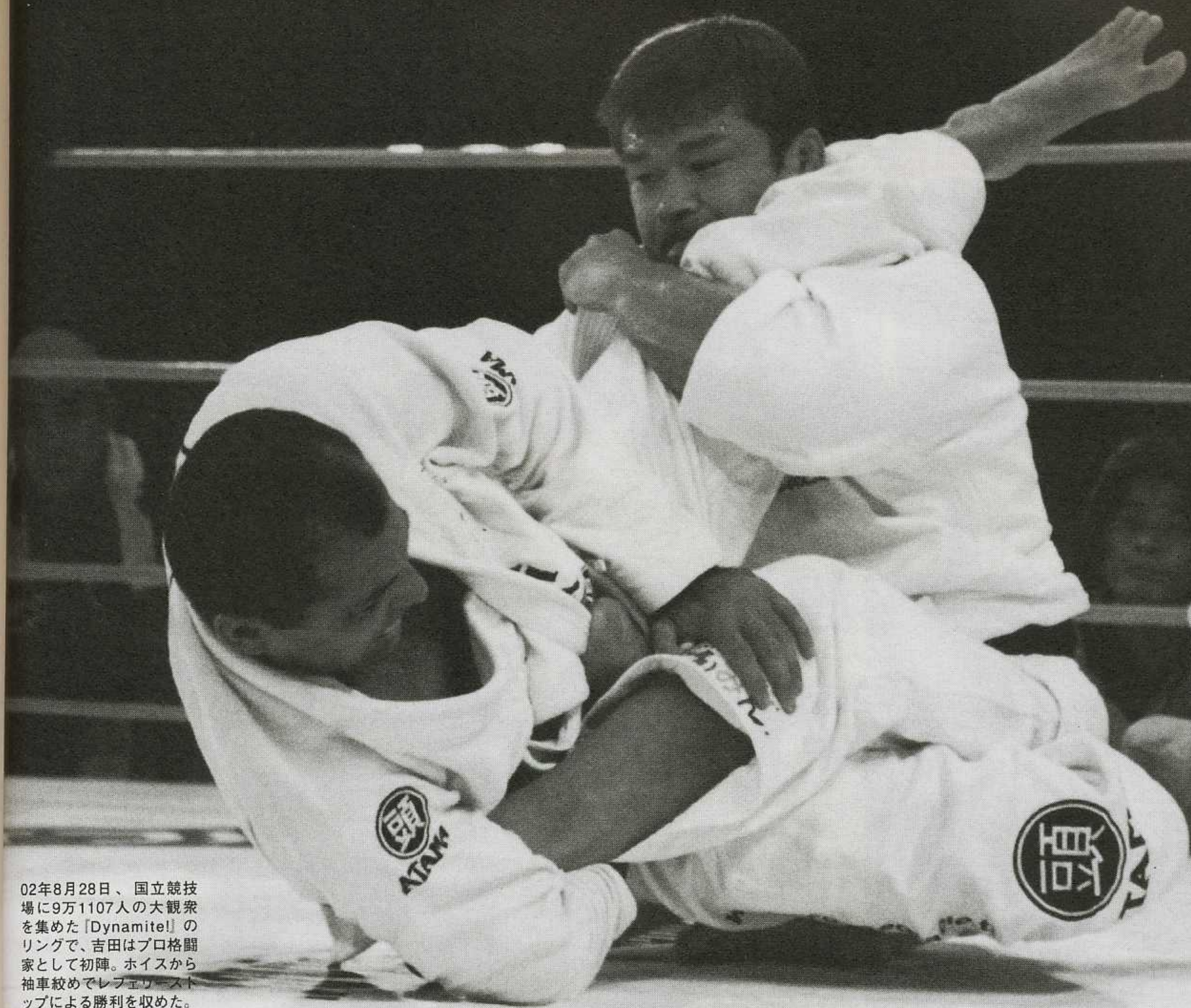
小林　そう。しかもオール一本できれいに決めちゃったもんなぁ。

―そういう吉田選手と、大晦日には石井選手が闘うわけですけど。先生は石井選手をどう見てますか？　日本柔道の中では、かなり異質な選手ですよね。国際化した〝JUDO〟の選手というか。

小林　ああいう選手はおもしろいねぇ。俺はいいと思う。けっこう一本も取るじゃないですか、だって。それで、勝ちにいくときはそれに徹する。あれでいいんじゃないですか。

―石井選手のプロ入りに関してはどう思われましたか？

小林　これはうれしいよね！　もちろん複雑ではあるんだけど。だって、柔道界に

吉田はデビュー戦でホイスに勝ってんだから石井はそれを超えるインパクトを残さないと

02年8月28日、国立競技場に9万1107人の大観衆を集めた『Dynamite!』のリングで、吉田はプロ格闘家として初陣。ホイスから袖車絞めでレフェリーストップによる勝利を収めた。

とってはもの凄い損失じゃない。まだまだ金メダル獲れる現役バリバリだからね。それがいなくなっちゃうわけだから。

——次のロンドン五輪も、確実に金メダル候補だったでしょうしね。

小林　全日本だって連覇できただろうし。初めてでしょ、ここまで現役バリバリの選手がプロに行くのって。そこが気持ちいいなぁ。

——柔道側から見るともったいないんだけど、でもプロ入りは興奮するという。

小林　本当はさ、柔道も続けてほしいんだけどね。それは無理だからさ。全柔連が認めないし、それ以前に両方で勝つのは、いくら素質があっても無理だよね。

——石井選手は、プロではどんな輝き方をすると予想されてますか？

小林　予想はできないなぁ。でも、今回の試合に関しては絶対に勝たなきゃダメでしょ。吉田は大好きだけど、石井が勝たないと新しい時代が来ないっていうかね。

——歴史の分岐点というか。

小林　だって、吉田のデビュー戦は国立競技場で、ホイス・グレイシーとやって勝ってるんだからね。それを超えるインパクトを残さないと。

——そのためにはまず、勝つしかないですよね。発言だったりキャラクターの面ではいかがですか？

小林　それだけの選手だったらつまんないけど、勝ち続けてるかぎり許されると思うよ。

——そういう意味では、今回の試合は大きいですよね。

小林　そうそう。だから本当に勝たなきゃダメなんだよ、今回は。吉田は好きなんだけど、勝たなきゃいけないのは石井だよね。

——マット界全体のことを考えると、そうなると。

小林　うん。それくらいの逸材でしょう、あの人は。格闘技界っていう狭い枠だけじゃなくて、ライバルはイチローとか朝青龍とか、ヨン様とかね（笑）。

『1・2の三四郎2』のクライマックスは三四郎と赤城欣一の一戦。無駄な動きを排除した格闘スタイルの赤城を、三四郎がプロレス技で迎え撃つ姿には鳥肌立った!

——スポーツどころかエンターテインメント界全般でトップを狙える、と。

がありますね。

小林　「すげぇ！」って思っちゃったね。

——小川選手といえば、東京ドーム大会で橋本真也選手に〝仕掛けた〟試合があっ

か？

新日本のほうがインパクトはありました

秋山のことは大好きですよ。あの人、柔道時代から油塗ってたんだって？

——スポーツどころかエンターテインメント界全般でトップを狙える、と。

小林　そのくらいの器だと思うから、期待してますよ。

——そうなると、吉田選手が負けるわけですから、これは切ない試合にもなりそうですよね。

小林　いや、そうでもないんじゃないかな。あれだけの実績を残している選手なんだから、ここで負けても傷つきはしないでしょ。それよりも、石井が負けたときのダメージが大きい。現役の金メダリストだから。吉田は20年前の金メダリスト。そういう意味では石井のほうが柔道を背負ってるんですよ。

——そうか。イメージ的には柔道を捨てたような感じがありますけど、そうじゃないわけですね。

小林　勝負の重さという意味では、石井でしょう。そういうものがないと、ドラマとしておもしろくないしね。

——石井選手以外にも、ここ数年はオリンピック級の柔道家がたくさんプロデビューしてますよね。先日は泉浩選手がデビューしましたし、あとは秋山成勲選手とか。

小林　ああ、秋山は大好きですよ。聞くところによると、あの人、柔道時代から油塗ってたんだって？（笑）。

——洗剤で柔道着を滑らせてたって疑惑がありますね。

小林　「すげぇ！」って思っちゃったね。あそういうところも含めておもしろい。ああいう人は大事にしてほしいですよ。

——先生は小川選手とも交流があるんですよね。僕たちにとっては、なかなか〝素〟を見せない選手という印象もあるんですけど。

小林　凄く優しい、いい奴ですよ。凄く付き合いやすい。言葉は悪いけど、プロレスは無理してるのかもしれないね。

——スポーツ選手って、どこかしら強烈なエゴがあるもんですけどね。

小林　彼は普通ですよ。逆に吉田はね、会った瞬間から格闘家のオーラをムンムン出してたけど。怖さがあるんだよね、闘う人間ならではの。

©小林まこと／講談社

昭和新日をモチーフとした『1・2の三四郎』の名（迷?）シーンと言えばこれ! 師匠・桜五郎に「勝ったら吉原に連れてってやる」と言われ、一気にテンションが上がる三四郎をはじめとする桜軍団の面々。ドン荒川が若手時代の橋本真也を風俗に連れていったエピソードを思わせるナイス場面だ。

柔道金メダリスト決戦

——小川選手といえば、東京ドーム大会で橋本真也選手に〝仕掛けた〟試合があったんですが、そのときになぜか猪木さんが東三四郎のマスクをかぶってたんですよ（笑）。

小林　あれは俺もビックリした（笑）。あとで聞いたら、『ヤングマガジン』編集部に貸してくれって言ってきたらしくて。

——じゃあ、「なんでもいいからマスクで」っていうんじゃなく、三四郎がよかったんですね（笑）。

小林　それはうれしいよね、俺もなぜかはわかんないけど。でも一つ言えるのは「キツかっただろうな」って。あのマスク、息ができないんですよ。

——話は変わるんですが、先生は『1・2の三四郎2』でインディープロレスの世界と総合格闘技を描かれましたよね。『三四郎』の第一作では新日本プロレスをモチーフにした団体が舞台になってましたけど、このへんは時代の変化というか。

小林　まさにそういう状況だったからね。むしろ、旧態依然としたプロレスを描いたらへんだし。猪木がいた頃の新日本と、そのときの新日本はもう別物になっちゃってたんだよね。

——やはり猪木の頃の新日本のほうがインパクトはありましたか？

小林　そうだね。いままでのインパクトという意味では猪木vsアリ以上のものはないと思ってるから。あの盛り上がりは異常だったもんなぁ。あの試合の生中継は土曜日の午後にあったんだけど、俺はまだ高校生で、運動会の予行演習か何かがあったんですよ。でも、男はほぼ全員サボってたね（笑）。

——猪木vsアリのほうが大事だと（笑）。

小林　ウチの美術の先生にいたっては、

かつては『1・2の三四郎2』の登場キャラであるザ・オコノミマンが、ルチャ系団体CMLL JAPANに登場したことも。

99年の1.4事変の首謀者と噂されるアントンは、なぜか当日の会場に三四郎のマスクをかぶって参上。まさか借りモノとは……。

仕事休んで武道館に行ってたからね（笑）。

――そのくらいドキドキする試合だったわけですよね。ちなみに小林先生は最近のプロレスは観ていらっしゃいますか？

小林　最近は観なくなっちゃったね。逆にPRIDEは、首都圏の大会はほぼ全部観に行ってましたけど。

――やっぱり時代性というか。

小林　昔の新日本プロレスって、PRIDEみたいな団体だったんですよ。

――格闘技として観てましたよね。

小林　「魅せる」とかじゃなくて、勝負の緊張感があったから。そういう意味では、猪木の新日本プロレスのあとを継いだのはPRIDEなんだよね。

――そういう意味では、柔道はもちろんですけどプロレスにも幻想があるというか。

小林　それはあるなぁ。柔道ってね、宗教っぽいところがあるんですよ。やってた人間からすると、逃れられないというか、柔道の選手が総合に出るとなったら応援してしまうんだよね。それはプロレスも同じで、会ったこともない他人なのに、なぜか愛着があるんだよね、新日本系のレスラーに対しては。

――昭和の新日本を観てきたら、そうなりますよね。

小林　洗脳というか刷り込みというかね。だって、猪木は「新日本プロレスが世界最強」ってブチ上げてたわけだから、恐れ多くも（笑）。

――「キング・オブ・スポーツ」って標榜してましたからね。

小林　あれで我々は洗脳されちゃったね。ああいうハッタリも必要なんだよね。猪木vsウィリーだってさ、かたや「キング・オブ・スポーツ」で、一方は「地上最強のカラテ」でしょ。

――燃えないわけがないですよね（笑）。

いまの総合格闘技も、源流をたどれば行き着くのはアントニオ猪木。とくに異種格闘技戦シリーズは当時のファンの心をつかんで放さなかった。ちなみに『1・2の三四郎』にはアントンをモチーフにした塚原巧というキャラも登場。

柔道金メダリスト決戦

小林　そういう感覚を受け継いだのがPRIDEでしょう。

――PRIDEで印象に残っている選手はいますか？

小林　単純に強い人が好きだからね。やっぱりヒョードル。あの選手はゾクゾクしたなぁ。ミルコもよかったし。

――強さへの憧れって不変なんでしょうね。

小林　子どものときもね、相撲でいうと北の湖が好きだったんですよ。北の湖ってもの凄く強くて、強すぎて人気がなかったんだけど。

――北の湖がヒール的な横綱で、初代の貴ノ花がアイドル的な人気を誇って、という時代ですよね。

小林　北の湖が負けると盛り上がるって状況でね。でも、俺は子どもながらにそれが嫌で。

――なんで強い者が認められないんだっていう。

小林　それで北の湖が大好きだったんだよね。北の湖はね、引退したときのコメントもしびれたね。客席から「頑張れよ」って言われて、「頑張れよって言われるようじゃおしまいだ」と思って引退したって言うんだよ。

――圧倒的な強さではなくなってしまったと感じたわけですね。

小林　そういうところもかっこいいんだよねぇ。強い者の孤独というかね。そういうところに惹かれるんだよなぁ。だから長嶋より王が好きだったし。

――ヒョードルもそういうタイプなんですよね。あまり感情移入されるタイプではなくて。

小林　それはね、あの目を見ればわかるよ。目がすべてを物語ってるってくらい、

プロレス・格闘技ファンのバイブル!! 小林まこと作品紹介

『1・2の三四郎』
※KCスペシャル／全12集、講談社漫画文庫／全12巻

プロレス漫画の最高傑作という呼び声も高い、小林の初連載作品にして代表作の一つ。連載開始から30年近く経つがいまだに根強い人気を持つ。主人公・東三四郎が高校編ではラグビーと柔道、卒業後はプロレスの世界で成長していく姿を追っている。ちなみに実写映画で三四郎を演じたのは佐竹雅昭。

『1・2の三四郎2』
※ヤンマガKCスペシャル／全6巻、講談社漫画文庫／全6巻

『1・2の三四郎』の続編。プロレス界から引退してファミレスの店長を務めていた三四郎が、周囲に懇願されて渋りつつも弱小団体ドリームチームで復帰。かつての後輩・赤城欣一がエースとして君臨する格闘技スタイルの団体に席捲されそうになっている、日本のプロレス界を立て直していくストーリー。

『格闘探偵団』
※イブニングKC／全5巻

東三四郎率いるドリームチームが、大手興行会社から持ちかけられた八百長試合に大失敗し、格闘界から完全に干されてしまうところから物語はスタート。リングを離れた三四郎が、その持ち前の動物的カン&格闘能力を活かし、私立探偵としてさまざまな事件を解決していく姿を描いている。

『柔道部物語』
※ヤンマガKCスペシャル／全11巻、講談社漫画文庫／全7巻

高校時代に柔道経験のある小林が、その体験を活かして描いた柔道部独特の汗くさい空気感や練習、リアルな試合の描写が話題になった柔道漫画。柔道部伝統のシゴキ（セッキョー）に耐えて成長していく三五十五が、得意の背負い投げを武器に、ライバル西野新二と死闘を演じるシーンは見もの!

本能に訴えるものがあるから格闘技は絶対になくならないですよ

深い目をしてるじゃない。

──石井選手もそういうタイプなのかもしれないですね。しゃべらないんじゃなくて、過剰に語ることで隠してるというか。

小林　ああ、何か隠してそうだよねぇ。そのへんで、奥が深い感じがするんだよね。最近は会場に行ってないんだけど、これからまた勉強しようかなって思ってますよ。そのへんも石井次第かな。

──そういうきっかけになってほしいんですよね、吉田vs石井戦が。「そんな試合やるの?」って、また以前の格闘技ファンに戻ってきてほしいというか。

小林　よく阪神ファンがね、弱くても応援するじゃないですか。「弱くても応援するのが本当のファンだ」って。俺は逆だと思ってて、弱ければ離れていくのが本当のファンじゃないかって。で、強ければまた戻ってくる。

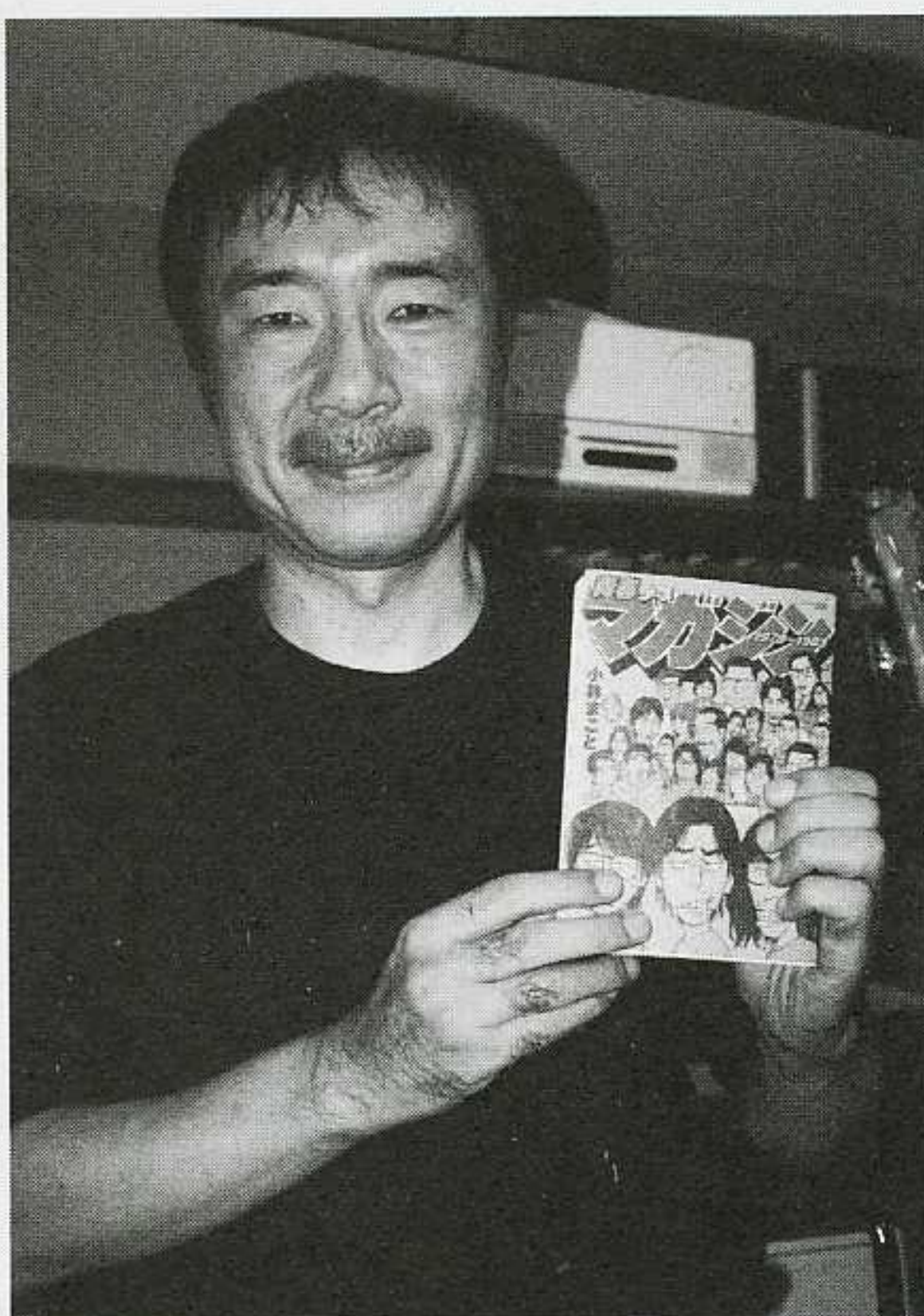
──ダメなときには見放す必要もある、と。

小林　俺は応援してる団体がつまんなくなったら、遠慮なく去ることにしてるから。ダメなときも応援したくなる気持ちはわかるんだけどね。

──厳しさがないと、よけいダメにしちゃう場合もありますからね。最近はTBSでK-1MAXとDREAMっていう大会をやってるんですけど、DREAMの中継はガチガチの勝負論のある試合より、ボブ・サップとか〝顔見せ〟的な試合が重視される傾向があるんですよ。個人的には、これってどうなのかなぁ、と。コアなファンが離れるのもわかるというか。

小林　まあ、いまはなりふりかまわずやるしかないだろうねぇ。本当はね、相撲とか柔道みたいになってほしいんだけど……難しいなぁ。

──競技としての確立ですよね。

小林　でも、あんまりマニアックになっちゃうと、新しいことができなくなっちゃうからね。それはそれでつまんないし。異種格闘技っていうか、アルティメット(UFC)が出てきたときの衝撃とか盛り上がりって、相撲じゃ味わえないじゃないですか。

こばやし・まこと■1958年5月13日、新潟県出身。1978年、『格闘三兄弟』でデビュー。この作品の主要キャラそのままの『1・2の三四郎』を連載開始。第5回講談社漫画賞少年部門を23歳で受賞。その後、『週刊モーニング』に連載した「What's Michael!?」が大ヒット、第10回講談社漫画賞一般部門を受賞。また『ヤングマガジン』で連載した『柔道部物語』は全国の柔道部員のバイブルとなった。

──吉田vs石井戦も、競技的には成立してないはずですしね。ベテランとデビュー戦の選手ですから。でも今回の試合は本当に重要で、PRIDEが活動休止してから、業界が冷え込んでる状況があるんですよ。その中で、今度の大晦日はひさしぶりに話題性が高いんです。『Dynamite!!』では魔裟斗選手の引退試合もありますし。

小林　ああ、ちょうどいいね。世代交代で。しかし、やっぱりPRIDEがなくなってから厳しいんだね。大きいねぇ、テレビって。よく行く床屋のおっさんもね、PRIDEがないのを嘆いてたし。

──その熱を取り戻すきっかけに、石井選手にはなってほしいんですよね。

小林　理想を言えば、バラエティ番組なんかに出ることなく、日本国民全員が知ってるような存在になってほしいね。

──となると、格闘技界もそれだけ大きなジャンルになりますよね。

小林　格闘技はそうなれると思うんだよなぁ。なくならないですよ、格闘技は。いままでもね、いろんな格闘技が盛り上がったり斜陽になったりを繰り返してるけど、なくなりはしないじゃないですか。おもしろいもん、絶対。本能に訴えるものがあるから。

──そうなんですよねぇ。

小林　たぶん、世界中の男性がおもしろいって感じるんじゃないですか。話はそれるけど、スカパー! のヒストリーチャンネルで『ヒューマン・ウェポン』って番組があってね。格闘技のプロ二人が世界中を巡って、その国の格闘技を学んで、最後に試合するわけ。それがね、けっこう燃えるんだ(笑)。

──タイに行ってムエタイやったり。

小林　イスラエルで軍隊の格闘術をやったりね。レポーターの二人も相当強いんだけど、軍隊の教官が「おまえたちがいままで学んできた技術は、ここでは1パーセントも使えない」って言いきるんだよね。これでもうワクワクするじゃない(笑)。

──ドキドキしますねぇ(笑)。男の人がみんな好きになる要素が格闘技にあるってことは、30億人の潜在的ニーズがあるわけですよね。

小林　そうなんですよ。絶対におもしろいんでね。あとはきっかけさえあればね。だから今回の吉田vs石井は、ひさびさに会場に行こうかなと思ってますよ。

──先生みたいな人はたくさんいるでしょうから、今年の大晦日は本当に重要ですよね。というわけで、今日はありがとうございました。サッ!

【09年10月6日／神奈川県・小林先生の仕事場にて収録】

な、な、な、な～んと！
今度は田村戦をアピール!!

石井慧戦に立候補もあえなく落選……。

“ゴールドメダリストハンター”の憂鬱!?

菊田早苗

吉田vs石井戦決定前、石井戦に名乗りを挙げていたのが“ゴールドメダリストハンター”菊田早苗だ（通称・菊田G）。残念ながら石井戦は実現しなかった菊田Gだが、はたして、今年1月4日『戦極の乱』での吉田戦以来の対戦相手はいったい誰になるんでしょうか？

聞き手／阿修羅チョロ　試合写真／乾晋也

——菊田さん、ゴールドメダリスト
ハンターとして石井慧戦に名乗りを

らでもいたほうがいいんですよ！
本来ならもっと盛り上がってもいい

菊田G　あのですね、僕の持論とし
ては練習と本番はまったく別ものと

——はい。
菊田G　石井選手は僕が思っていた

——あ、やっぱり（笑）。
菊田G　まあ、あとは吉田さんもや

吉田vs石井戦で勝ったほうとやりたいかなってのはありますね

——菊田さん、ゴールドメダリストハンターとして石井慧戦に名乗りを挙げていましたけど、対戦相手は吉田さんに決定しちゃいましたね。

菊田G　いいんじゃないですか。そうなると思ってましたよ（苦笑）。

——わかっていながらも、ゴールドメダリストハンターとしてはアピールせざるを得なかった、と？

菊田G　そういうのもありますし、決まったら決まったでしょうがないですからね。それに格闘技ファンだけじゃなく、一般世間までも考えると、話題的にはそれが一番なんでしょう。いまは格闘界の全体を考えても話題が乏しいときですからね。

——それは間違いないですよね。

菊田G　まあでも、僕がメダリストハンターとしてアピールするのは別に悪くなかったと思いますけど。

——落選ショックはそれほどないですか？

菊田G　まあ、だいたいそうなるかなとは思ってましたからね（苦笑）。でもやっぱり、今年のニューイヤーイベントでの吉田戦を僕はつなげたかったんですよ。石井選手がデビューするっていうんだったら自分もやりたいなっていう。せっかく石井選手が『戦極』に来て、格闘技界の逸材であるならば、自分も格闘技界を盛り上げたいっていうのもあるわけですよ。だからまあ、吉田さんだけじゃなくて名乗りを挙げる人間はいくらでもいたほうがいいんですよ！　本来ならもっと盛り上がってもいいくらいで。

——アピールするのはタダですしね。

菊田G　そうそう。まあ、決まったからには、あのカードでいいと思いますし。それに、いまは石井選手もウチで練習してますからね。

——そうみたいですね。

菊田G　それも変な話なんだけど（笑）。ホント、突然来ましたからね。

——基本的にグラバカは来る者は拒まずというスタンスなんですよね。

菊田G　そうそう。去る者も、ちゃんとギリギリまで追う、みたいな（笑）。いまは出稽古で岡見（勇信）くんだったり（中村）K太郎選手とかも来てますし。

——一緒に練習するようになったら試合はしづらいんじゃないですか。

菊田G　そりゃそうですね。だから、石井戦はひとまず小休止ってことで。いまはどちらかというと仲間的な空気ですね。吉田さんも先輩なんで、こうなったら両方頑張ってもらいたいですよ。

——実際、石井さんと肌を合わせてみていかがでした？

菊田G　あのですね、僕の持論としては練習と本番はまったく別ものと思ってて、マスコミとかファンが思ってるほど重要視してないんですよ。やっぱりリングに上がって初めてわかることが多いし、それにまだ一試合もしてないから、期待を膨らませ過ぎてもかわいそうですよ。

——ブログでも同じようなことを書かれていましたね。

『kamipro』以外の専門誌でも石井戦をアピールしていた菊田だったが、発表されたのは吉田戦。その後、グラバカに出稽古に訪れた石井と菊田は一緒に練習をしているそうです。

菊田G　そうそう。だから、もしカットされるんだったら、それに関しては僕のブログを読んでもらいたいんですけど、あのですね……（練習と試合の違いをこれでもかと説明）。

——ありがとうございます。え〜、興味のある方は菊田さんのブログをチェックしてください。

菊田G　あ、カットなんだ（笑）。で、石井選手ですよね？

——はい。

菊田G　石井選手は僕が思っていた以上に普通の重量級ではないかなっていうのはありましたね。

——普通の重量級ではない？

菊田G　軽量級みたいな重量級っていうか。スピードもあるし、身体能力的なモノが凄い。普通の重量級だったら、もっとドシッって感じかなって思うんですけど、ヘタするとバク転とかできちゃうような、そういう軽量級の動きができる重量級なんだろうなって思いますね。あとはやっぱり、好きなんですよね、鍛えることとか、闘うことが。

——練習を見るかぎり、想像以上に「できるな」って感じですか？

菊田G　ですね。まだ1試合もしてないですけど、そう考えたらここまでは100点じゃないですかね。

——デビュー前から100点満点！

菊田G　試合したことがない人のレベルで考えたら上出来でしょうね。

——もうやりたいとは思わない？

菊田G　やりたいと思わないっていうか、もう試合が決まっちゃったし。

——たとえばですけど、吉田さんに勝ったあととか。

菊田G　そのあとね。先の話はわからないですよ。時間が開いたら、そういう気持ちになるかもしれない。

——対戦が決まったら、向こうも練習に来なくなるだろうし。

菊田G　そうですよね。

——じゃあ、吉田vs石井戦が終わってみないことにはわからない、と。

菊田G　それはわからないですし、だけど、勝ったほうとやりたいかなっていうのはありますね。

——あ、やっぱり（笑）。

菊田G　まあ、あとは吉田さんもやりたいと思う相手がそうそう限られてきてると思うので、逆にもう一回っていうのもあり得るのかなぁ⁉

——どうなんでしょうね。

菊田G　何が起こっても不思議じゃない世界だから、ないとは言い切れないですよ。

——でも、一回闘った相手とはやりたくないって言ってましたよね？

菊田G　そうなんですけど。でも、もし吉田さんから「やりたい」みたいな話が出たときに、そのとき自分の気持ちはどうなんだろうっていうのは考えますね。僕も日本人には一回負けてるし。そういう借りって最後には必ず返したいもんなんで。

——あれ、対日本人は近藤（有己）さんに負けただけでしたっけ？

菊田G　そうですよ。だから、〝最後に〟となったら、近藤選手とやりたいかなっていうのはあるかな。

——石井選手だけじゃなく、吉田戦というのもありはありだ、と。

菊田G　いやいや、もちろん僕から考えることはないですよ。自分の中ではもう結果は出てるので。ただやっぱり、『戦極』っていうのは、吉田さんがエースで始まった団体なわけだから、その試合に勝ったあとの次の展開が見えなくはなっちゃたのはありますよね。83キロでやるにしても、同じ階級にチームメイトが二人（三崎和雄、佐々木有生）もいるし。それと、「おもしろい試合をすれば次も……」とか日本では言われがちのような気がするんですけど、決してそんなことはないじゃないですか。

——そういうところはあるかもしれませんね。

菊田G　だからねぇ…………、うーん、ちょっとこれは難しいなぁ。

——いきなり一人で悩まないでください（笑）。

菊田G　どうしましょうかねぇ、次の試合？

——前々から言われてますが、菊田さんって対戦相手にもの凄くこだわりがあるじゃないですか？

菊田G　また、それを言う！（笑）。

——でも、実際そういうところもあるじゃないですか？

菊田G　いや、僕の場合は選ぶとかじゃないんですよ。

——ある意味、相手を選ぶっていうのも大事なことじゃないですか？

菊田G　いや、大事とかじゃなくてですね、まあ要するに日本の格闘技もね、UFCのようなシステムになっていければ楽だと思うんですよ。

——と言いますと？

菊田G　単純に勝った選手が評価されて、何回か負けたら切られるっていうシビアな世界に。

——UFCはそんな感じですよね。まあ、相手も選べないっていいますけども。

菊田G　最初からそういうシステムならいいんですよ。でも、日本はそうじゃないですからね。

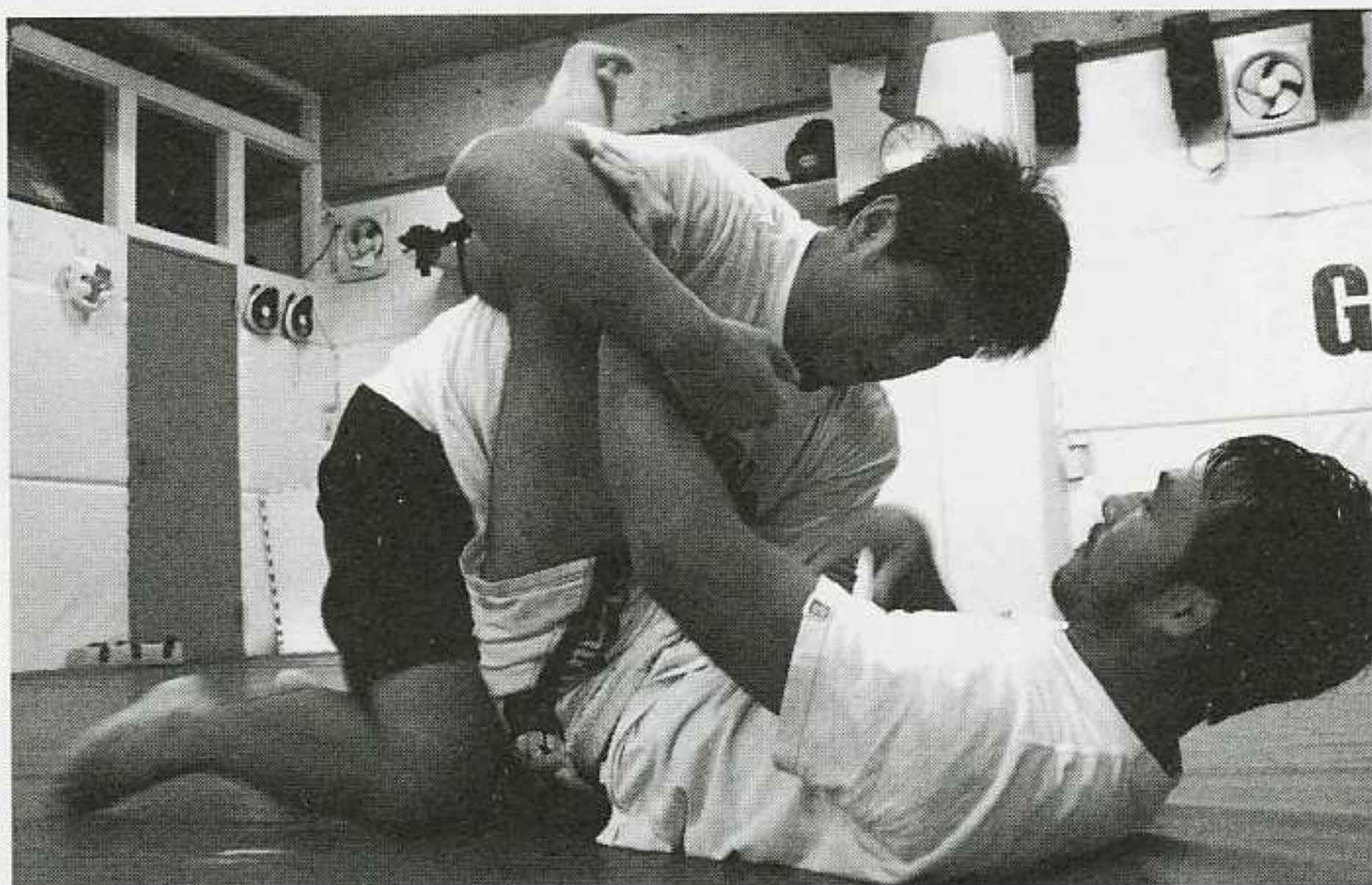
——負けても使われ続ける選手もいますし、菊田さんのように吉田さんに勝っても、なかなか試合が決まらない人もいますからね（笑）。

菊田G　そうそう。どこを目指していけばいいのかたまに迷子になる。だから日本で試合をするということは難しい面もありますよ。向こうの客とかは、この試合が次につながるっていうことをちゃんと理解して見てくれますからね。

——でも、よくガイジン選手が「日本の観客はMMAの見方をよくわかっている」って言いますよね。

菊田G　いやね、だから逆に怖いんですよ。日本の客が一番怖い。

——そうなんですか。

菊田G　だって、UFCもセコンドとかで何回か観てますけど、地味なヒジ攻撃とかでも大喜びしてますからね。それはやっぱり、勝ち負けにモノ凄い興味があるっていうのもあると思うし。ブーイングなんかも含めて楽しんでる。とにかく、楽しめる人種なんですよ。でも、日本の場合はシリーズとして観るんじゃなくて、そのときの一回一回の派手なおもしろさが凄く重要。やっぱり、「勝った！　さて次は」ってなったときに、次への魅力がちょっと薄いと思うんですよ、いまは。

取材当日もグラバカの佐々木有生や岡見勇信らと熱のこもったスパーリングを行なっていた菊田。9月で38歳になった菊田だが、体調的には絶好調とのことで「まだまだ若いもんには負けない」と豪語。とはいえ、今年も残り2ヵ月ちょっと。それまでに決まらなければ09年は0試合となるが……。

“ゴールドメダリストハンター”の憂鬱

正直、自分も、どこを目指していけばいいのか、たまに迷子になる

——でも、『戦極』なんかは「ロード・トゥ・○○」とかやってますし、DREAMでもグランプリなんかは流れを作ろうとはしてますよね。

菊田G　でも、どっちかというと次にどうのとか、勝ち負けどうっていうよりは、このあいだの青木（真也）選手の試合でもそうだけど、そのときの大会でおもしろい試合を見せなきゃいけないじゃないですか。そのうえ、さらに一本で勝つ。まあプロとしてはあたりまえにこなしていきたいことだけど、その要求を適えられる選手って、いまほとんどいないから。だから盛り上がったり盛り下がったりが激しくなる。

——そういうところはあるかもしれないですね。

菊田G　結局、一話完結なんですよね。テレビがあるとくに。一話で視聴率を獲らなきゃいけない。だから、難しいって言ったら難しいですよね。そうじゃなくて、ちゃんとピラミッドがあれば、選手も全然納得すると思うんですよね。でも、そうなると地上派向きではなくなるのかな。難しいなぁ。

——菊田さんはグラバカのボスでもあるので、自分の試合は自分で決めるってかたちになりますよね？

菊田G　そうなんです。主催者があって、そこに主催者のやり方とかいろいろあるわけじゃないですか。その出されたカードに自分が乗るのか乗らないのか。

——乗るか乗らないかという選択肢の中で、菊田さんは乗れないカードが多いんですかね？

菊田G　いや〜、そんなこともないんだけどなぁ（苦笑）。ストーリーを作るのがうまい人はうまいし、それに信頼関係というか。何か難しい話になってきたな。とにかく、ストーリーっていうのが日本の場合はかなり重要な部分がありますね。そのストーリーをそのまま受け入れてやるのか、受け入れないのか。あ〜、要は、ひねくれてるんでしょうね（笑）。

——そんな気はしますねぇ。

菊田G　ドラマとか映画で言ったら、台本観て、「俺はこうしたくないんだけど」みたいな話で（笑）。

——そういう意味では、同年代の田村さんなんかもそういうところはありますよね。桜庭戦も大晦日のたびに対戦の話が出てましたけど、実現したのは去年の大晦日ですからね。

菊田G　でも、田村さんの場合は、「桜庭さんのコンディションがよくなくて、必ず勝てると思ったから受けた」って声もよくあったじゃないですか。でも、僕はそうは思わなくて、二人の中でいろいろとストーリーがあっただろうし。自分のタイミングももちろんあると思うんですけど、やっぱり、どうせやるんだったら自分たちのいままでのストーリーっていうのを安っぽく出したくなかったと思うんですよね。

——まあ、それはあったでしょうね。

菊田G　すべてが整った状態が去年の大晦日だったと思うし。それで自分で脚本作って、自分でオッケーを出して、自分でメインをやったじゃないですか。それは凄いですよ。

……まあ、それができるのは田村さんだからってところもあるでしょうけど、たいしたもんですよね。

——それでもオファーがかかるっていうのは、選手としての魅力があるからってことだと思うんですけど。

菊田G　まあ、そういうことになりますよね。僕が同じようなことをやってたら、声はかかんないですけどね。たぶん（笑）。

——ホントにそう思ってます？

菊田G　まあ、なんとか、いま生きてますけどね（苦笑）。でもね、田村さんの話題が出たから言うわけじゃないですけど、自分がやり残した日本での試合っていうのは、田村さんがどっかでコメントしてたと思うんですけど、「アラフォートーナメント

吉田さんの次は、できれば田村さんとやってみたいですね

をやりたい」って。

──ちょっと前の会見で言ってましたね。

菊田G　アラフォートーナメントっていう言葉はちょっと引っかかりますけど（苦笑）、やっぱり、田村さんとか桜庭さんって実績とかいろんな意味で、確かにベテランですよね。格闘技界に貢献してきた人たちだと思うんで、そういった対決があれば僕も名乗りを挙げたいですね。

──ちなみに、どういうメンバーが出るのが理想なんですか？

菊田G　まあ、いまの時点ではどうだろうなぁ……（しばらく考え込む）。いま現実に考えられるものとして、やっぱり、吉田さんとはやったばかりだし、桜庭さんっていうのはずっと尊敬してきた選手だし、田村さんっていうのは、僕は凄く思い入れもあるし、二十歳の頃にひょんなことから知り合った大先輩ですからね。

──二人ともUインター時代の先輩に当たりますし、いまとなっては同じような立場になりましたしね。二人ともジムを主宰していますし。

菊田G　そうですね。やりたい選手は団体関係なく何人かいるけど、その中でも、とくに田村さんには思いが強い。桜庭さんは尊敬するグラップラーとして、いつかはやってみたいっていうのはありますし。できれば、みんな早いうちに。45歳とかになってからじゃ遅いと思うんで（笑）。

──確かに（笑）。

菊田G　だから、そういう意味では、ある意味、吉田さんとやった試合が、始まりだったのに終わりだったみたいな感じかもしれないですね（苦笑）。

──スタートだと思っていたのに、気づいたらゴールだった、と。

菊田G　そんな感じはありますね。やっぱり、お互い道場の長同士だったし、日本人対決で吉田さんは負けたことがなかったわけだし、始まりだったけど、あそこで若干、次のステップを上がれなかったというか。もちろん、ガンガンやるつもりもあったけど、実際この歳だし、ドンドン最後の勝負をしていきたいなっていうのはあるんだけど、そういう相手っていうのはなかなかいなくて。

──なるほど。ただ、田村さんも桜庭さんも、いまの主戦場はDREAMなので、正直、実現の可能性はそれほど高くはないと思うんですよ。

菊田G　だから、そういうことが実現するんだったら、垣根を取っ払いますよ、もう。これはファンの夢のために。僕の夢のために。

──なんか力強いなぁ。たとえばですけど、田村さんか桜庭さんとの試合が実現したら、どんな試合になると思います？

菊田G　とにかく、おもしろい試合になりますよ！（キッパリ）。

──自信満々ですねぇ。田村さんは菊田さん同様、コンディションは抜群にいいですからね。

菊田G　田村さんは元気ですよね。それだけの練習をしっかりとやってるからでしょうし、自分なんかも、まだまだ若い子と混じって全然やれますからね。

──アラフォーをナメるな、と？

菊田G　全然負けないんだけどなぁ、若者には。……なんか今日はいままでの取材の中で、へんなふうに書かれなかったら、一番いいこと言ってるかもしれない。けっこう思いきって言ったんで。どうですか？

──よ、よろしいかと思います（笑）。

菊田G　もう、いまは1年過ぎるのが早いんでね、やりたいことはドンドン、アピールしていきますよ。

──ほぉ！

菊田G　じつはですね、今度、西調布でやるU－FILEの大会でグラバカとU－FILEの対抗戦があるんですよ。そのときに道場のトップ同士として、大将戦への実現を呼びかけたいと思っています。

──西調布で田村さんに対戦表明!?

菊田G　当然、チョロさんも来てくれますよね？

──もちろん、急な予定が入らなければ行かせてもらいます！

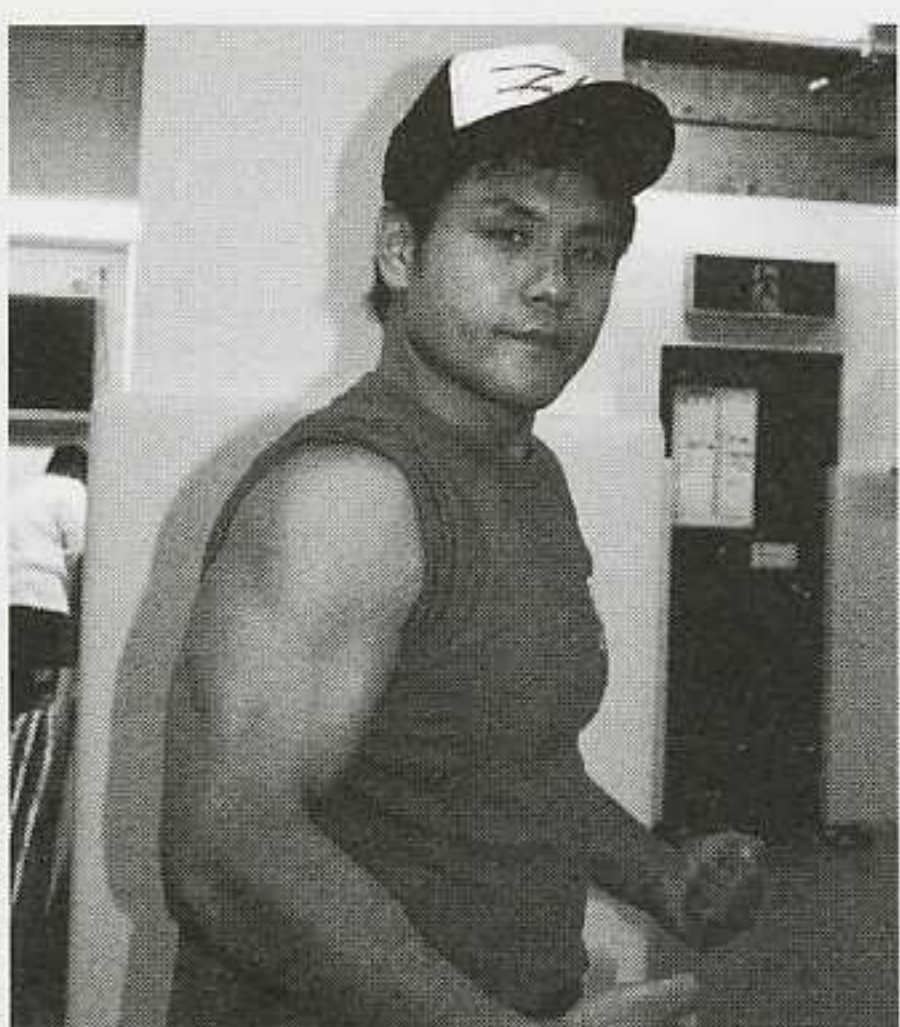
菊田G　ホントですかぁ？（笑）。

──ホントですよ（※10月11日に行なわれた大会で実際に菊田は田村に大将戦の実現をアピール。しかし、急な予定が入ってしまったため取材には行けませんでした。申し訳ないです）。では、菊田vs田村戦が実現するよう柱の影から祈ってます！

菊田G　なんですか、それ！（笑）。まあでも、いままで以上にバンバンやろうと思ってるんで。ホント頑張っていきますよ！

──僕も菊田さんと同い年ですし、アラフォーとして期待してます！

【09年10月2日／都内・グラバカジムにて収録】

いま現在、菊田の最後の試合となっているのが今年1月に行なわれた『戦極の乱』での吉田秀彦戦。"ゴールドメダリストハンター"として瀧本誠に続き吉田も下した菊田だったが、本人いわく「始まりだったのに終わりだったみたいな感じ」とのことで、それ以来、試合は行なっていない。世界中のゴールドメダリストよ、誰か菊田Gに挑戦してみないか？

きくた・さなえ■1971年9月10日、東京都出身。中学、高校、大学は柔道部で活躍。新日本に一度、Uインターには二度入門するも挫折。プロ格闘家となってからは修斗、リングス、PRIDE、パンクラス、アブダビコンバットなど、さまざまな舞台で活躍。現在はグラバカ総帥として『戦極』を主戦場とするゴールドメダリストハンター。176センチ、88キロ。

『戦極』がイベント名を『SRC』に変更！
“伝説の最強力士”の正体に迫る！

雷電とは何か？

SENGOKU RAIDEN CHAMPIONSHIP

日本武道傳骨法創始師範

堀辺正史

大晦日の有明コロシアム大会から、イベントの名称が「SENGOKU RAIDEN CHAMPIONSHIP」略して『SRC』に変更される『戦極』。横文字ながら、そこには伝説の最強力士「雷電」の名が入れられたが、いったい雷電とはどんな力士だったのか。おなじみ骨法の堀辺師範にこの「雷電」の“正体”について語ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ

――先生！このたび『戦極』が名称
変更するのはご存知ですか？

というのは、講談のネタ本でもある
んですよね。講談っていうのは、講

に組んだあと、カンヌキを極めると
腕の関節が折れてしまうからカンヌ

いった理由があるんですか？
堀辺　これについても諸説あるんで

よ。それでケンカやトラブルが絶え
なくて、そういったこともあって幕

——先生！　このたび『戦極』が名称変更するのはご存知ですか？

堀辺　それは知らなかったです。『ごくせん』とかになるんですか？（笑）。

——それは仲間由紀恵のドラマですね（笑）。

堀辺　そうですか（笑）。なんという名前になったんですか？

——大晦日から『SENGOKU RAIDEN CHAMPIONSHIP』、略して『SRC』に変わるんですよ。「世界に通じる名前に」とのことなんですけど「雷電」というのは何者か、そもそも日本人もよくわからないと思うので（笑）、今日は伝説の力士である雷電について先生に語っていただきたいと思います。

堀辺　わかりました。まず雷電というのは、江戸で一番相撲が流行った時代に活躍した力士の一人なんですよね。当時は雷電、谷風、小野川の3力士が人気だったんですけど、その中でも雷電がとくに有名になったのには、ある事情があるんですよ。

——どういった事情ですか？

堀辺　『寛政力士伝』っていう、いろんな力士にまつわるエピソードや、土俵上の勝負について書かれた本があるんですけど、ここで雷電というのは数多くのエピソードが書かれてるんです。ただ、この『寛政力士伝』

雷電は強すぎて相手を壊してしまうため3つの技が禁じ手となっていた

というのは、講談のネタ本でもあるんですよね。講談っていうのは、講釈師が各地で語って、どちらかというと庶民が聴くストーリーになってるんですよ。だから、うんと誇張されたり、事実ではないことも付け加えられてたんですね。

——近代でいうと『空手バカ一代』とか『プロレススーパースター列伝』のような、フィクションが入ったドキュメンタリーというか。

堀辺　そんな感じなんです。そして、とくにこの講談で強調されていたのは、雷電爲右エ門が先ほど挙げた人気3力士の中でも、飛び抜けて一番の巨体で、剛力の持ち主として語られてるんですね。

江戸時代に最強と謳われた力士、雷電為右エ門は幕内通算254勝10敗。勝率はじつに9割6分2厘という、驚異的な戦績を残している。その強さは当時から伝説的でもあったのだ。（勝川春亭画）

——『寛政力士伝』の中で、最も人間離れした力士として語られていた、と。

堀辺　たとえば、雷電は張り手一発で相手を壊してしまうから、雷電だけ張り手が禁止になったとか。四つに組んだあと、カンヌキを極めると腕の関節が折れてしまうからカンヌキも禁止にするとか。相手を突っ張るテッポウも事故につながるから禁止とか。とにかく、その3つが雷電だけ禁止にされたわけです。もちろん、ほかの力士はOKなんですけど。

——それぐらいのハンデがつけられていた、と。でも、それは事実なんですか？

堀辺　これはね、いろんな相撲の研究者が調べてるんですよ。で、この話は講談の本で広まったことで、講談には眉唾が多いから嘘だろうという人と、その講談と同時期に生きた雷電のことを語ってるんだから、まったくの嘘であることはありえない。だから本当のことだという人で意見が割れているんです。どちらにしても、当時の人々にとって、雷電爲右エ門はあらゆる面でズバ抜けた力士というイメージが広まっていたことは確かですよね。そして、もの凄く強い力士だったことは間違いないでしょう。

——イメージとしてはアンドレ・ザ・ジャイアントみたいな感じだったんですかね。

堀辺　そうですね。とにかく飛び抜けた巨体で、強すぎる存在。

——3つの技が禁じられたっていうのも、アメリカマットでアンドレのパイルドライバーが禁止になったっていう伝説に似てますしね（笑）。その強すぎる雷電は、横綱にはなれなかったらしいですけど、それはどういった理由があるんですか？

堀辺　これについても諸説あるんですよ。で、このことを説明するには、当時の相撲とはどういったものだったか、その背景から説明したほうがいいと思います。

——わかりました。お願いします。

堀辺　まず、江戸の相撲が盛んになったのは、11代将軍家斉の時代に行なわれた上覧相撲がきっかけなんですね。

——上覧相撲ですか。

堀辺　そうです。これは寛政3年、西暦1791年の6月21日に第1回目があって。この上覧相撲の「上覧」というのは、〝上様〟に見せるという意味なんですね。将軍をはじめとした高貴な人に見せる相撲、これが寛政年間から始まるわけです。その前はどうだったかというと、相撲の興行というのは、幕府から何度も禁止令が出されてたんですよ。

——相撲興行は禁止されてたんですか？

堀辺　はい。なぜ禁止されていたかというと、当時の相撲は交差点とか広場で行なわれたりしてたんですけど、相撲の興行があると、町衆たちがそれの勝敗で賭け事の勝負をしたりしていたんですよ。それでケンカやトラブルが絶えなくて、そういったこともあって幕府は相撲興行を何度も禁止にしていたんですね。

——なんか初期のバーリ・トゥードやプロレス興行みたいですね。

堀辺　ホントにそんな感じだったんですよ。で、プロレス興行や格闘技の興行をいくら禁止しても、地下にもぐって開催されちゃうのと一緒で、相撲興行もいくら禁止してもどこかで開催されちゃうので、元禄時代の頃から黙認状態で行なわれていたんです。それが11代将軍の前で上覧相撲が行なわれたことによって、幕府公認になり、いまの国技のような道を歩み始めるんですよ。

石井慧vs吉田秀彦の金メダリスト対決が組まれた大晦日の有明コロシアム大会から、“雷電”の名が入った名称に変更される『戦極』。はたして石井は“平成の雷電”となれるか？

あまりにも規格外に強かったため横綱になれなかった雷電はアンドレのような存在だったんです

その人並み外れた巨体と強さから、プロレスラーの中でも別格だった大巨人アンドレ・ザ・ジャイアント。かつてプロレス界の最高峰であったNWA世界ヘビー級王座には縁がなかったが、NWA王者以上の格を持っていたところは、横綱以上の評価を得ている雷電とおおいにダブるところだ。

——なるほど。逆に言えば、上覧相撲が行なわれる前は、どちらかというと野蛮で下衆な感じもあったんですね。なんかいまの国技のイメージと違いますね。

堀辺　まったく違うんです。おもしろいのはね、当時の相撲を書いた『相撲私記』って本があるんですけど、その本によると将軍に見せる上覧相撲のときは、勝負預かりとか引き分けは一切ないんですよ。

——必ず完全決着ですか。

堀辺　そうなんです。でも普段、木戸銭を取ってやってた相撲は上位の取組になると、預かりとか引き分けっていうのが1割ぐらいあって、勝負がつかないことがけっこうあったんです。なぜかというと、上位の力士ほど人気があって、この人気をうまく保つために勝負を操作してたってことですね。

——まさにプロレスの両者リングアウトみたいなことが行なわれていた、と（笑）。

堀辺　でも、将軍の前でそれをやってバレると、それこそ打ち首になるかもしれないし、「だから相撲はダメだ！」ということで、また禁止令が出されるようなことになりかねない。だから将軍の前でやるときは真剣勝負になるわけです。

——将軍の前だけはガチ、と（笑）。

堀辺　シュートに変わるんです（笑）。また藩の公認の相撲興行が認められると、強い力士は藩のお抱えになるわけです。となると、その力士が取る相撲は、藩の名誉がかかるでしょ。だから、お抱えの力士がどこで相撲を取っても、藩士が必ず来て、どういう闘い方をしているかチェックしてくるわけです。で、あんまりいい勝ち方じゃなかったり、情けない勝負をすると藩に報告されてしまうんですね。そうすると録が減ったりするので、自然と真剣勝負というか、一生懸命やるようになるわけです。

——常に〝査定試合〟みたいな感じになるわけですね。

堀辺　みっともない相撲を取り続けると、藩のお抱え取りやめになったりするわけですよ。そうすると「あいつは弱くなった」ってことを天下にさらすようなことになるわけですね。

——マイナー陥落ってことですよね。

堀辺　それが幕藩体制時代の藩によってお墨つきにされるから、かなり権威もあったし。相撲の権威もそれで上がったんですね。その相撲の権威でいうと、横綱というのはその権威の象徴ですよね。横綱になると藩、の武士たちから、侍と同じ扱いを受ける。だから横綱は侍と同じように帯刀が許されたわけです。横綱が土俵入りするときに、化粧まわしをして、刀を持ってくるでしょ？　それは、その当時の名残りなんですね。

——では、雷電がその横綱になれなかったのはどうしてなんですか？

堀辺　これは相撲が上覧相撲としてお上に観られるものになったというのが大きく影響してるんですよ。雷電の相撲は豪快すぎて、怪我人が続出していたんですね。で、そういった相手を破壊してしまうような取組っていうのは、当時の平和な江戸ではちょっと過剰というふうに

考えられていたんです。その破壊的な強さは、あまり好ましくない。強

堀辺　そうなんです。その時代の感覚からすると、テッポウ一つで相手

——なんだか「強すぎるがために、NWA世界ヘビー級チャンピオンに

——でも、当時の相撲は「怪物の残酷ショーではなく、将軍様も観る高

堀辺　だからね、朝青龍の強さを雷電に似てると言ったらほめすぎにな

『戦極』あらため『SRC』には雷電のような男を生み出してほしい

考えられていたんです。その破壊的な強さは、あまり好ましくない。強すぎたがゆえに、横綱として認められなかったということがあったようですね。

——強すぎる過激な相撲が、野蛮なイメージにとられてしまったわけですか。

堀辺　当時、上覧相撲というのは、もともと相撲興行が持っていた野蛮で下衆なイメージを消し去ろうとしていたんですね。だから、まず相撲興行の格式を良くして、いまふうに言うと興行自体をグレードアップさせたわけですね。たとえば土俵入りをやるとか、化粧まわしを着けるとか、呼び出しとか、軍配をどうやって上げるとか。相撲というものに、武士が好む格式、気品というものを求めたんですね。相撲を街で行なわれてる取っ組み合いの類ではないことをハッキリさせる必要があったので、そうやって視覚的に整備していったわけです。

——相撲興行を格式高く変革した、と。

堀辺　そうした結果「将軍様が観るぐらいのものだから」ということで、庶民のあいだでも「金を払ってでも観に行こう」となって、一気に興行としての道が開かれたわけです。

——そういった品格が求められる中で、雷電の強さと荒々しさは、少々そぐわなかったわけですね。

堀辺　そうなんです。その時代の感覚からすると、テッポウ一つで相手の顔が潰れたり、相手の骨が折れたりするのは、あまりにも人々に見せるものとしてどうか、という感じだった。そういったこともあって、横綱になれなかったと言われてるんですね。でも、江戸の庶民というのは、そういう悲劇のヒーローがじつは好きなんですよ（笑）。

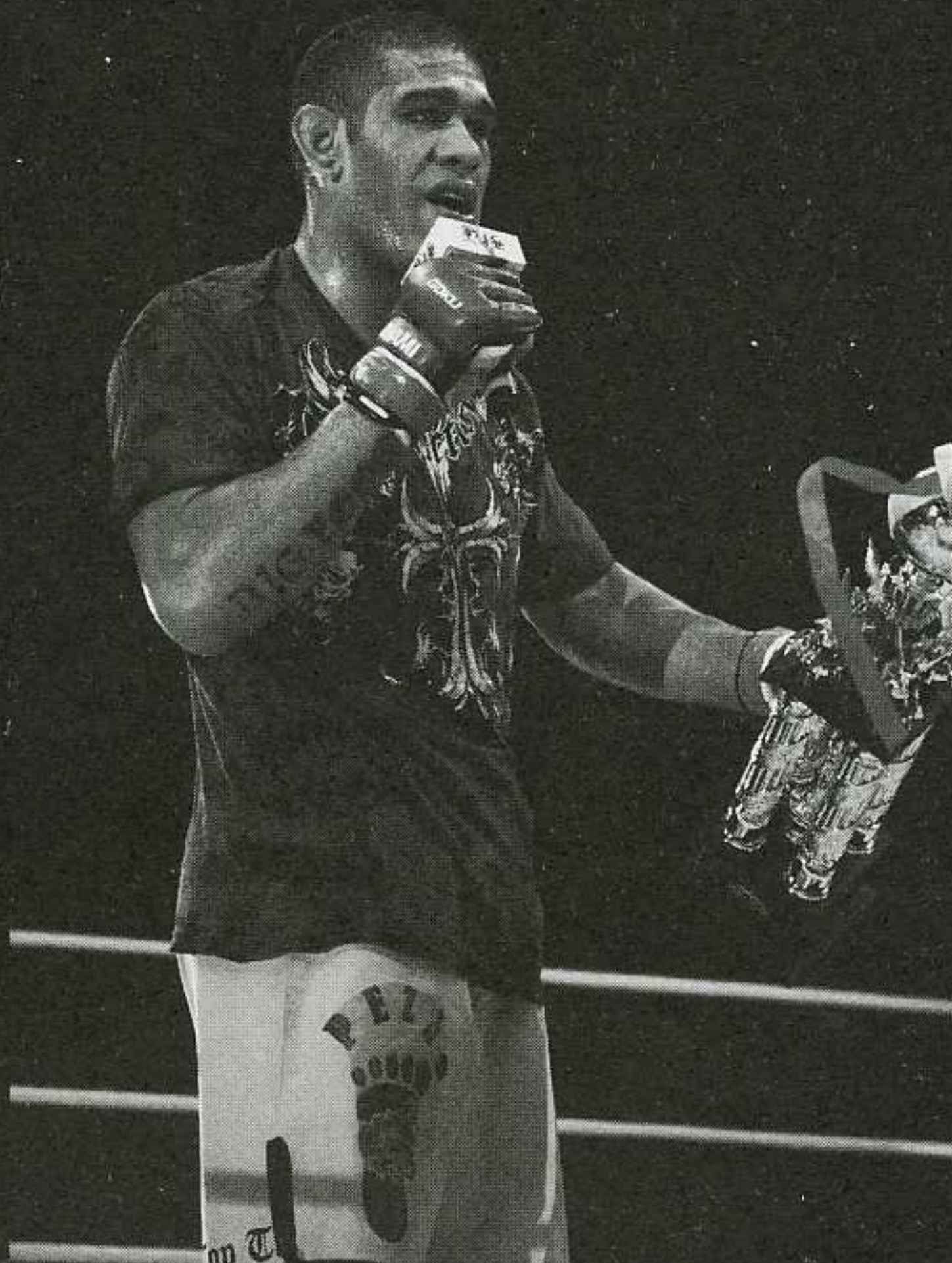
——なるほど（笑）。

堀辺　赤穂浪士が人気があるのと同じですよね。雷電というのは誰よりも強かったのに横綱になれなかった。だからよけいに哀惜の念というか、心奪われる存在になったんでしょうね。

——なんだか「強すぎるがために、NWA世界ヘビー級チャンピオンになれなかった」という伝説があるカール・ゴッチやアンドレ・ザ・ジャイアントみたいですね（笑）。

堀辺　でも、そのことによって、庶民な雷電のほうに肩入れするわけですよ。谷風や小野川っていうのは横綱になったんですけど、横綱免許を受けなかった雷電のほうに庶民の人気は集中した。そして、それが雷電伝説として、のちのちまで語り継がれたわけですね。

——ホント、アンドレ伝説みたいですね。「NWA世界王者よりアンドレのほうが上だ」ってプロレスファンも思ってたし（笑）。

堀辺　ホントにそうなんですよね。雷電は身体も飛び抜けて大きかったし、すべてが規格外。本気でやったら相手は死んじゃうんじゃないか？って思うような力士だったようです。

いま『戦極』に上がっているファイターで、規格外の巨体とパワー、そして強さという雷電のイメージに一番近いのが"ハイパーゴリラ"アントニオ・シウバ。『戦極』あらためSRCはこの男の団体になってしまうのか?

——でも、当時の相撲は「怪物の残酷ショーではなく、将軍様も観る高貴なスポーツですよ」ということを進めていたために、横綱になれなかった、と。

堀辺　そうなんです。型破りで常識からはみ出した存在だったんです。だから『戦極』がイベント名に「雷電」というものをつけるなら、そういう選手を生み出すイベントにならないとダメですよね。

——怪物を生み出すリング（笑）。

堀辺　あらゆるスポーツからはみ出してしまう、怪物的に強い男を誕生させる。あるいはそういう選手を育成することを目指してやるならば、「雷電」という名前を持ってきたことも理解できる。

——でも、実際に『戦極』側もそういうふうに言ってるんですよね。「21世紀の雷電は誰なのか、21世紀の雷電をここから生み出す」という意味合いでこの名前をつけた、と。

堀辺　もし、本当にそういったことに取り組むなら、意味があることですね。そういう雷電的なファイターを誕生させることができれば、それは興行として一つの大きな刺激剤になって、競技を超えて庶民の人気を博すんじゃないですか。

——社会からはハミ出すかもしれないけど、人気は出るでしょうね（笑）。

堀辺　だから朝青龍なんかも、そんな感じなんですよ。いまの横綱審議会が「横綱らしくない」とか言って品格を求めるのは、その上覧相撲に起源があるわけです。

——朝青龍も相撲界の常識からはみ出しまくってますもんね。

堀辺　だからね、朝青龍の強さを雷電に似てると言ったらほめすぎになるかもしれないけども、やっぱり朝青龍は強いし、庶民の注目を誰よりも集めていますよね。そういった意味では、相撲人気におおいに寄与していると言ってもいいと思います。

——石井慧なんかも柔道のときそうでしたよね。いろいろ物議を醸しながら、金メダルまで獲っちゃって。

堀辺　そうなんですね。だから柔道界という枠には収まりきらなかった石井慧が、雷電のように飛び抜けた怪物になるのか。そこは注目していっていいんじゃないですか。イベント名に「雷電」が入るなら、ぜひその名前に背かぬように、スケールの大きいものにしてほしいですね。

——わかりました。今回もありがとうございました！

【09年10月3日／中野区・骨法武術館にて収録】

ほりべ・せいし■1941年、茨城県出身。50年にわたる命懸けの求道の末、喧嘩芸骨法、さらに全局面打撃制ｋｏｐｐｏを創始。最近はヨルダン国王護衛の近衛団にも武道を指導するなど、多方面で活躍中。格闘技・武道評論の第一人者でもある。

第47回

PPVは生で観たかったなと

花くまゆうさく

豆リングの汁

こないだの『戦極』で思い出せるのは、テイクダウンしたのに、相手がその直前にロープつかみしたから注意してスタンド再開という不可解なルール。あれは観ててストレスたまる。それで助かった選手が直後にKO勝ちするから、もやもやするだけで全然スカッとしない。それも、前から確信犯的に場外に逃げるのが巧妙な人だから、なおさらストレスたまる。

そんでTBSの亀田&DREAM放送観たら、鬼塚解説らのひいきすぎる放送席にますますストレスたまってくるし、亀田で視聴率上がったあとに、ハルクトーナメント流すからもう悲しくなってきます。視聴率愛だけで、ジャンルへの愛がまったく感じられない。

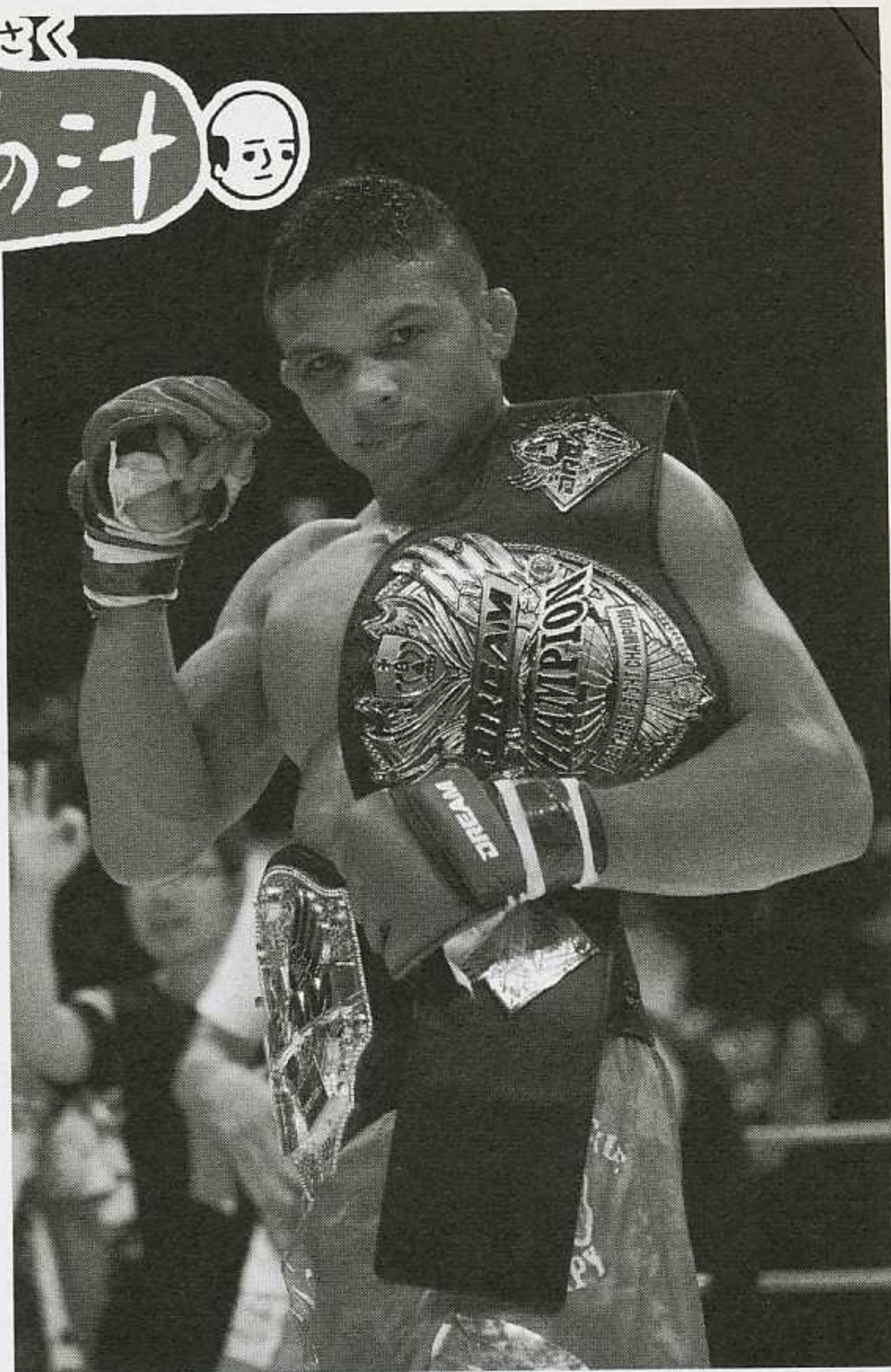
総合格闘技を、DREAMを育てたいなら、あそこはまず、所vs高谷とビビアーノvsウォーレンをじっくり流して総合格闘技をアピールすべきじゃないのか？ 後半の決勝や青木vsハンセンはダイジェストだし、いったいDREAMってなんのためにあるのか？

結果知ったあとにPPV購入という屈辱プレイで、あらためて大会を観たら、結末がわかっていても思わずハンセン応援しちゃったなぁ。あと、宮田のツイスター狙いが意外で新鮮！ そのツイスターをしっかり防御したDJも意外でした。DJと所は勝ってほしかった。ビビアーノ優勝が嬉しい。ウォーレン戦、こっちの願いどおりになり最高でした。

好きです ハンセン

Hanakuma Yusaku
◎アブダビ見どころいっぱい

金ちゃんのどこまでやるの？

●第39回● 田村さんと闘いたい！の巻

10月10日のDEEP後楽園ホール大会で、MAX宮沢選手と対戦して1ラウンドKOで勝つことができました。応援ありがとうございました！

この試合は、もともと対戦予定だった選手が負傷欠場で決まった試合だったんだけど、MAX宮沢選手って和田（良覚）さんとも対戦してるし、滑川（康仁）、伊藤（博之）とも対戦してて、俺も含めて元リングスの選手と何かと縁がある選手みたいなんだよね。俺にとっても和田さんの敵討ちという意味合いがあるしさ（笑）、きっちり勝ててよかったよ。

で、MAX宮沢選手に勝ったあと、リング上で「大晦日に田村（潔司）さんと闘いたい」ってアピールしたんだけどさ、そしたらその翌日に今度は菊田（早苗）が田村さんに対戦アピールしたみたいなんだよね。どのタイミングで言ってるんだって！ 菊田も元Uインターの新弟子なんだからさ、そういうのは先輩にゆずるもんでしょう（笑）。

菊田もまだまだ動けるし強いんだから、もっと若くて活きのいいヤツとやればいいのにね。俺はこれまでずっと若くて強いヤツとやってきた自負があるし、俺自身は本当はそういう選手とガンガンやりたいんだよね。

DREAMだったらパウロ・フィリオとか、ムリーロ・ニンジャ、アンドリュース・ナカハラとかさ。『戦極』だったらサンチアゴだったり、ミドル級のトーナメントに出た強い外国人選手いっぱいいるじゃん。俺はそういう選手と闘いたいし、またそういう選手と対戦するチャンスがもらえるように、いまDEEPで頑張ってるからね。

菊田は『戦極』に出てて、そういう選手とやるチャンスがありそうなんだから、俺からしたらうらやましいよ。わざわざDREAMに出てる田村さんとやらなくてもいいと思うんだけどな。同年代とやりたいなら、俺が菊田とやっても全然いいよ。菊田との試合で大晦日に出られるなら喜んでやるよ（笑）。俺も18年やってきて一度も大晦日には出たことがないからさ、やってみたいんだよね。

俺が田村さんとやりたいっていうのはさ、田村さんと「これがプロだ！」っていう試合をやりたいんだよ。総合格闘技、バーリ・トゥードでもこんなに動きがあるプロの試合ができるんだっていうのを見せたいんだよね。試合はやってみなきゃ、どうなるかわからないけど、田村さんとだったらできると思うからね。

田村さんだって、本来の動きのある試合、ここ何年もやってないでしょ？ 去年のサクとの試合は、意識しすぎたのか固い試合になっちゃったけど、本来同じU系で流派が同じだからさ、噛み合った凄い試合ができると思うんだけどな。

それに去年のサクと田村さんだと、ちょっとコンディションに違いがありすぎたと思うけど、俺はだいぶコンディションも上がってきてるし、田村さんもコンディションいいから、いい試合ができると思うんだけどな。

ただ、勝負となったら、ずっと現役バリバリの若いヤツと闘い続けてきた俺と、年に1～2回しか試合してない田村さんとじゃ、その差は大きく出ると思うけどね。こっちはイバラの道を歩んできてるから。試合を選ばず闘ってきた人間とそうじゃない人間は違うからね。

でも、田村さんはこのアピール嫌がってるかな？ 田村さんも一回ぐらい後輩の願いを聞いてくれてもいいんじゃないかと思うんだけどね。

というわけで田村さん、僕と真剣勝負、よろしくお願いします！

Hiromitsu Kanehara
◎本音炸裂コラムほぼ毎日更新中！
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/

最大の岐路に立たされた英雄

“クロコップ”はミルコ・フィリポビッチに戻ってしまうのか？

9.19『UFC103』。新鋭ジュニオール・ドス・サントスにTKO負けを喫したミルコは試合後、地元クロアチアのメディアに向けて引退をほのめかすようなコメントを残した。96年にK-1に初来日して以来、自らの身体をいじめ抜き、走り続けてきたミルコ。はたして超人とまで言われた男は、人間に戻る日が近づいているのか。格闘家人生最大の岐路に立つ英雄に、いまこそエールを送るべくミルコ特集を組ませていただいた。

構成／堀江ガンツ　撮影／乾晋也

ブラジルの新鋭、ドス・サントスに敗れる!
されど貫き通した“逃げない”選択

ミルコ・クロコップ
汚れなき生き様

**UFC復帰第2戦となる9.19『UFC103』のジュニオール・ドス・サントス戦。
ミルコはノゲイラの愛弟子でもあるこのブラジルの新鋭にTKO負けを喫してしまった。ミルコにとってあまりにも大きなこの敗戦。
その背景には単なる1試合よりはるかに重い意味合いがあったのだ。**

文/橋本宗洋　試合写真/Josh Hedge(UFC)

『UFC103』におけるジュニオール・ドス・サントス戦の敗北は、ミルコ・クロコップにとって二つの意味で重いものだった。

一つは、懸けていたものの重さである。前回のUFC復帰戦で快勝したミルコは、この試合に勝てばアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラとの対戦が濃厚に。そしてノゲイラ戦にも勝てば、ブロック・レスナーの持つヘビー級タイトルへの挑戦が確定的となる。PRIDE時代に劇的な逆転負けを喫したライバルとの対決と、王座挑戦。ドス・サントスに勝てば、ミルコにとってのUFCでのハイライトがスタートするはずだったのだ。

その重さを自分自身でも感じていたからこそ、ミルコはPRIDEのTシャツを着て入場したのだろう。ましてやドス・サントスのセコンドにはノゲイラがついている。UFCデビュー戦では、ミルコは『PRIDEのテーマ』で入場している。そして今回がPRIDEのTシャツ。

今回の試合はデビュー戦と同じくらいの意味のある試合だったということだろう。デビュー戦が〝新たなスタート〟だとするなら、ドス・サントス戦は〝集大成ロードの第一歩〟だった。

しかし、そういう試合で、彼は敗れてしまった。それが、この試合の持つ第二の重さである。単なる負けではなく、決定的な負けだった。

試合が始まると、ドス・サントスは〝ミルコ封じ〟のセオリーを徹底的に遂行した。ミルコの打撃を警戒して下がったり組み技勝負を挑むのではなく、あえて前進して打撃戦を挑んだのである。ケビン・ランデルマン、エメリヤーエンコ・ヒョードル、それにガブリエル・〝ナパオン〟・ゴンザガ。

が、半分は外れているの

たとえば、である。ドス・サントスはU

それにガブリエル・ナパオン・ゴンザガ。

頂点を目指す闘いを絶えず続ける ミルコの姿勢は見事と言うほかない

かつてミルコを下した選手は、みな打撃で勝機を生み出している。ミルコは逃げる相手を仕留めるのは抜群にうまいのだが、真っ向から勝負してこられると相手のペースに呑み込まれてしまう傾向が強いのだ。

ドス・サントスに圧力をかけられ、思わず後退してしまうミルコ。うしろに下がりながらでは、当然のことながら手数は減り、打撃の威力も損なわれる。1ラウンドから、ミルコは劣勢に立たされた。〝伝家の宝刀〟左ハイキックも空振りを繰り返すばかりだ。いや、そもそもミルコの左ハイは、相手を追い詰めたうえで、ここぞという場面で放たれる必殺の一撃だったはずである。そんな技を序盤から、それも劣勢を挽回するために使わざるをえなかったことは、ミルコの苦しさの表われだったのではないか。

必殺技を早々に〝使いきって〟しまったミルコとは対照的に、ドス・サントスの攻撃はラウンドごとに厚みを増していった。前半はパンチ主体。中盤は首相撲からのヒザ蹴りでボディにダメージを与え、3ラウンドに入るとテンカオ（組まずに打つヒザ蹴り）でディフェンスの隙を突く。ドス・サントスはキャリアで上回るミルコに、試合運びでも優ったのである。

ブルース・バッファーが公式にアナウンスしたフィニッシュは「ヴァーバル・サブミッション」だった。つまり口頭による敗北宣言だ。ヒザ蹴りを食らった眼に手を当て、弱々しい表情でレフェリーのほうを向いたことが「ギブアップ」の意思表示となったわけだ。関節技でのタップアウトや失神KOではなく、自ら「これ以上は闘えない」という姿を見せてしまったことは、この敗北の重さをさらに際立たせた。

いま、ミルコは引退が取り沙汰されている。ドス・サントス戦は、そうなってもおかしくないと思えるような闘いだった。DREAMでのアリスター・オーフレイム戦もそうだったのだが、ミルコの姿は驚くほど弱々しかった。「まさか！」という負けではなく、「これがいまのミルコの実力なんだろうな……」と思わされてしまうような闘いぶりだったのである。

そういうミルコの姿を見て「老醜をさらした」「晩節を汚した」と思ったファンもいるかもしれない。どこか、これまでの栄光を損なわないような時点で辞めていれば……と。

ただ、その見方は半分は当たっているが、半分は外れているのではないか。ミルコは確かに、弱々しい姿を見せ、若いファイターに完敗を喫してしまった。それは、PRIDEでのミルコを知っている者からすれば、最も見たくないものだっただろう。だが、ミルコはファイターとして決して間違っていたわけではない。

ミルコには、UFCという世界最高峰の舞台で王者になるという明確な目標があった。そこに挑んでいる真っ最中に「これ以上、キャリアに傷をつけないうちに辞めてしまおう」などとは考えないだろう。と同時に、ミルコは現役でいることにこだわっていたわけでもないはずだ。大事なのは闘うことだけではなく、頂点を目指すことだったのだ。その姿勢については、見事と言うほかない。ミルコほどのネームバリューがあれば、違う選択もありえたのだ。

たとえば、である。ドス・サントスはUFC参戦後2連続KO勝ちを収めている伸び盛りの選手だ。頂点を目指すためにこういう相手と闘うのではなく、あるいはUFCに復帰すらせず、華々しい引退試合を行なったとしても、誰も文句は言わなかっただろう。あるいは、DREAMを主戦場にし続け、何があっても自分の味方をしてくれる日本のファンの前で闘い続けることもできた。もちろんDREAMのヘビー級では〝最強〟というロマンを追うことは難しいが、それさえあきらめれば気持ちよく選手としての晩年を送ることができていただろう。

実際、格闘技の世界には団体を変え、選手としてのランクを下げながらただただリングに上がり続けている選手もいる。闘うことだけが目的としか思えないような選手だ。人気と実力がアンバランスになり、プロモーター側から無理な〝延命措置〟をとられているような選手もいる。そのどちらの道も、ミルコは選ばなかった。あくまでも頂点を目指してUFCという過酷な戦場に戻り、自分より若くて勢いのある選手と闘うことを選んで、そして敗れたのだ。ミルコが歩んだ道は、曲がっても汚れてもいなかった。

UFC登場後、総合格闘技というジャンルが本格的にスタートして15年以上が経った。これからは、一時代を築いた人気選手が（表現は悪いが）続々と引退していくことになる。彼らは何通りもある自分の〝終わり方〟を選ばなくてはいけない。ファンも、それに対して真摯に向き合う必要がある。選手の〝終わり方〟を考える機会は、今後さらに増えていくはずだ。そのときに、ミルコが選んだ道は一つの指針になるはずである。

[09.9.19 UFC103]
アメリカ・ダラス アメリカンエアラインズ・センター
◯ジュニオール・ドス・サントス vs ミルコ・クロコップ×
(3R 2分0秒 TKO)
ミルコのUFC復帰第2戦は、UFC2戦2勝の新鋭ドス・サントス。ミルコは序盤から距離をとりながらハイキックを狙い、左ストレートをヒットさせるが、徐々に追い詰められ3ラウンドにヒザ蹴りで動きが止まりTKO。無言でオクタゴンを降りていった。

浅草キッドの玉ちゃんと語る

“俺たちの”ミルコ・クロコップ 変態座談会

UFCヘビー級の頂点を目指し、再びオクタゴンでの闘いに挑むも、
ブラジルの新鋭ジュニオール・ドス・サントスに敗れてしまったミルコ。
この一敗は単なる敗戦ではなく、ミルコという大河ドラマを観続けた者にとっては、なんとも心に響くものだった。
というわけで長年ミルコを観続けてきた変態が、その生き様を語りまくります!

聞き手／堀江ガンツ（変態ミルコ番） 試合写真／Josh Hedges（UFC）

椎名基樹

1968年4月11日、静岡県出身の41歳。本誌の好評長寿コラム『サムライ三昧』でもおなじみフリーライター、放送作家、構成作家。真剣勝負にあくなきこだわりを持ち、格闘技番組のチェックは欠かさないインドア系変態。

玉袋筋太郎

1967年6月22日、東京都出身の42歳。ご存知、浅草キッドの片割れ。子どもの頃から蔵前に通った変態プロレスエリート。『SRS』のメインパーソナリティまで務めたが、現在はWOWOWを通じて旧PRIDEファイターを追いかける。

——さて、玉ちゃんと椎名さんには
今年6月に“俺たちの五味隆典座談

——いままでミルコの大一番は日本
の会場で観れてたのが、いまやテレ

ぎると、あれだけ手数が出なくなっ
ちゃうっていうのが不思議だよね。

んですけど、なぜかWOWOWの中
継を観てると、あまりそれが感じら

——さて、玉ちゃんと椎名さんには今年6月に〝俺たちの五味隆典座談会〟で集まっていただきましたけど、今日は〝俺たちのミルコ・クロコップ座談会〟というテーマでおおいに語っていきたいと思います！

椎名　でも、ミルコ負けちゃったね。

玉袋　いやあ、ショックだよ。ただね、ミルコの敗戦以外にもショックなことがあったんだよ。

——なんですか？

玉袋　あのね、俺はWOWOWのUFC中継はオンタイムで観ねえんだよ。ブルーレイで録画して、あとでじっくり観るのを楽しみにしてるわけよ。とくにこのあいだは日曜の夕方放送だったんだよね。

——たしか5時40分とか、中途半端な時間にスタートしましたよね。

玉袋　で、日曜のあの時間帯っていうのは、やっぱり『笑点』と『サザエさん』って決まってるわけだから。UFCを録りながら『笑点』と『サザエさん』を観るこの優越感？

椎名　じらしてるんだ（笑）。

玉袋　「俺のブルーレイ回ってるぜ」なんつって『サザエさん』観ながら晩飯食ってたら、バカなセガレがよ、CM中にピッてチャンネル替えちゃって、WOWOWにしてんだよ。で、誰かが負けた瞬間だったんだけど、それがよく見たらミルコなんだよ！

椎名　ダハハハ！　『サザエさん』でほのぼのしてたら、いきなり衝撃映像に変わっちゃって（笑）。

玉袋　セガレが「パパ、ミルコ出てるよ」なんつってよ「バカ野郎！　結果がわかっちまったじゃねえか！」ってな。これが悔しかったな～って話よ。

——いままでミルコの大一番は日本の会場で観れてたのが、いまやテレビで観るしかない状況ゆえに起こった悲劇ですね（笑）。

玉袋　そう。日本でやってくれよってな。そうすりゃこんなハプニングに遭わずにすんだんだから。

椎名　でも、結果を知る前から、この結末は予想できた部分ってない？

玉袋　やっぱり心の準備はしてたよ。サクちゃんの試合を観るときもそうだったけどさ、「勝ってくれるはずだ。でも、そうじゃねえこともありうるんだ」っていうね。

椎名　ミルコが勝ったほうが、これからの展開が楽しいに決まってるんだから、応援してたんだけどね……。

玉袋　年齢っていうのもあんのかな。あれだけ厳しい試合を長年続けてきたんだから、身体もガタがきてるだろうしな。

椎名　あと、今回ノゲイラがドス・サントスのセコンドについてたけど、ノゲイラみたいにアメリカに住んで、ああいう若いヤツと一緒にやらないとダメなのかなって思った。

玉袋　環境の問題もあったのかなあ。

椎名　ミルコは寝技に自信がないから、全然手が出ない感じで。

玉袋　一時のリングス・オランダみたいなね。ミルコがディック・フライやハンス・ナイマンみたいな状態になっちまったのかな。

椎名　いまのUFCでそういう穴があるとキツいなって。ミルコビッチの穴が（笑）。

——ミルコビッチの穴（笑）。

椎名　でも、ミルコぐらい活躍した強い選手が、グラウンドを警戒す

変態は試合の背景にある物語を実況してもらいてえんだよ！

ぎると、あれだけ手数が出なくなっちゃうっていうのが不思議だよね。

——ミルコは試合後、「昔みたいに強気でリスクを恐れずにいけない」って言ってたみたいですね。

玉袋　言ってたか～。確かに試合内容で言えば、俺たちが知ってるミルコじゃねえよ。

——なんか、若い力に飲み込まれていく様はアリスの『チャンピオン』みたいでしたよね。

玉袋　でも、あれだけの大物はもう「ただの男」に帰れないだろ？　国会議員は辞めたんだっけ？

——任期が終わって、UFCチャンピオンを目指すことに専念するってことで、二期目は出馬しなかったんですよ。

椎名　それであの結果はキツいなあ。

玉袋　でもさ、あの〝ヌルヌル〟が、あそこのオクタゴンに入ったらカチカチになってたわけじゃん。やっぱ、UFCのオクタゴンっていうのは、リングと全然違うんだろうな。

椎名　でも、ミルコはもちろん「勝算あり」でUFCに復帰したんだよね？

——そうですね。DREAMでしばらく試合をして、そのあとで盛大に引退試合をすることもできたんでしょうけど、UFC王座奪取を目指してイバラの道を進んだんですよね。

玉袋　だからこそ、PRIDEのTシャツ着てきたんだろうし、〝勝負パンツ〟穿いてきたんだろうな。

椎名　UFC復帰を機にトランクスから〝勝負パンツ〟に戻しましたよね。

——だから、退路を断って、進退を懸けてUFCで大勝負に向かう心意気が、ビンビン伝わってくるはずなんですけど、なぜかWOWOWの中継を観てると、あまりそれが感じられないんですよね。

玉袋　これはね、この前番組で一緒になったとき、千原ジュニアともその話になったんだよ。「UFCは凄いカードで凄い試合をしているわりに、なぜこっちは乗ってけないんだろう？　やっぱりこれは実況の問題なのかね」ってね。

——格闘技の実況は、単にどっちが勝った負けたじゃなくて、この試合はどんな意味があって、どんな思いを抱いて闘ってるのかっていうのを伝えてほしいんですけどね。

椎名　WOWOWの実況は〝点〟なんだよね。こっちは〝線〟で観てるから、いろいろ思い入れもあるんだけど。だからミルコがPRIDEのTシャツを着てきたときも、解説の人が「さっきミルコがPRIDEのTシャツ着てきましたね」ってサラッと流して終わり（笑）。

玉袋　俺たちみたいな変態は、試合の背景にある物語を実況しなきゃしようがねえだろっていう思いがあるわけだからさ。今回のミルコの試合なんてよ、〝格闘実況アナ軍団〟だったら大変だよ。長坂（哲夫）さん呼んでこいっつうの、いま総務にいるから。

椎名　なぜかアナウンス部じゃなくて総務にいる（笑）。

——総務でくすぶってるくらいなら、フリーとしてUFCとかやってほしいですよね。もったいない。

椎名　もしくは副音声でいいから、会場の音だけの放送してほしいですよね。

“俺たちの”ミルコ・クロコップ

変態座談会

ミルコのジムの壁に大きく描かれている「PRIDE」のロゴマーク。グローブを見てもわかるとおり、UFCファイターとなってからも、ミルコの心にはPRIDE王者であったあ誇りがあるのだ。

「副音声で会場の音だけ聴きたい」って本番中に直談判したから！

玉袋　俺はまさにその副音声について、ついこのあいだ直談判したばっかりだから。

椎名　直談判って誰に？

玉袋　いやね、WOWOWにデーブ（・スペクター）と関根麻里ちゃんの番組があるんだけど、その中で「浅草キッドがお薦めするWOWOWの番組」っていうワンコーナーをいただいたんだ。そこで『ジ・アルティメット・ファイター』を紹介したんだけど、俺、そのとき本番中に言ったよ。「俺たち変態は副音声で会場の音だけ聴きたい」って。

――本番中に言いましたか！（笑）。

玉袋　これだけは言わせてもらった。

椎名　変態を代表して（笑）。

玉袋　そのプロデューサーが、じつは柔術やってる人で、気持ちはわかってくれると思うんだけどな。

椎名　それはやってほしいなあ。

玉袋　せっかく5・1サラウンドでやってるんだから、あの会場の熱気がそのまま伝わる音が聴きてえからさ。それがダメなら、余ってるチャンネル帯で、とりあえず『毒蝮のやじうまナイター』みたいなのでもいいよ。

椎名　プロ野球の副音声はおもしろいよね。言いたい放題で（笑）。それにしても、千原ジュニアさんもUFC観てるんですね。

玉袋　ジュニアはよく観てるよ。このあいだも会っていきなり「ミルコ、ダメでしたね」だったからね。

――挨拶代わりに（笑）。

玉袋　挨拶代わりだよ。仕事であんまりクロスすることねえんだけど、『人志松本の○○な話』に出たとき、ジュニアとも松本（人志）さんとも格闘技の話ばっかりしてたから。松本さんなんか、初めて面と向かって口利いた第一声が「○○○、やっとるやろ？」だからさ。

一同　ダハハハハ！

玉袋　これこそ○○な話だよ！

――間違いなくピー音か伏字が必要ですね（笑）。

椎名　のりPだけに（笑）。

――そういう名前を出さない！（笑）。ヤバいんで話を戻しますけど、松本人志さんや千原ジュニアさんが注目するのもわかるくらい、いまのUFCはおもしろいですよね。

玉袋　いい土俵になってきてるんだよ。PRIDEを観てきた日本人としては悔しいんだけどね。

椎名　毎月WOWOWでUFC観るのが超楽しみだもん。いまテレビ番組で超楽しみって思うのってなかなかないのに。

玉袋　俺なんかブルーレイの単語登録で録画してるから、UFCだったらなんでも入っちゃうからね。2回分の再放送録っちゃってるもん。容量足りねえよ！

椎名　俺もいっつもHDDの残量と格闘してますよ（笑）。

玉袋　これからは『ジ・アルティメット・ファイター』も毎週あるからな。これが楽しみなんだよ。

椎名　でも、シーズン9からなんで
すよね。できたらシーズン1からや

――ベルナルド戦なんてありました
っけ？

た部分もありますよね。
玉袋　やっぱあれが最初のチンポ汁

う考えると、藤田戦も含めて、ミルコ
って格闘技界にとんでもなく影響を

も、初参戦は一番最初に走らせてく
れるんだよ。だから俺も「最初の1周

総合の時代もPRIDEの時代も ミルコの試合から始まったんだよ

椎名　でも、シーズン9からなんですよね。できたらシーズン1からやってほしいんだけど。

玉袋　じつは俺もそれが言いたかったんだよ！　シーズン1からやってほしいよな。なんで『24』の18時間目から観なきゃなんねえんだって話だからよ。まあ、番組編成っていろいろ大変なのはわかるんだけどね。

椎名　「シーズン1からやってくれ」って言っといてくださいよ。関根麻里に（笑）。

玉袋　わかった！　言っとく。まあ、関根麻里ちゃんじゃなくて、プロデューサーにだけどな（笑）。

——今日はWOWOWに対して、勝手な要望をいろいろ言っちゃいましたけど、我々は開局当時からの契約視聴者ですからね。ちょっとは言う権利はあるんじゃないか、と（笑）。

玉袋　そうだよ。付き合い長いからな。リングス旗揚げからずっとなんだから。

椎名　いまの中年男子はWOWOW世代だからね。

——というわけでWOWOWさん、気を悪くなさらずに、我々視聴者の意見もご検討いただけたら、と（笑）。では、最後にミルコの美しい思い出を語って終わりにしましょうか。ミルコのベストマッチってなんですかね？

椎名　こないだアンケートで書いたのはヒョードル戦だけど、マイク・ベルナルド戦も最高だね。

——ベルナルド戦なんてありましたっけ？

椎名　K−1時代だけど、あのときのワンツーから左ミドル、左ハイの倒れ方が素晴らしい。もちろんヒョードル戦もいいけど。

玉袋　あれはすげえよ。でも、俺が一番印象に残ってるのは、やっぱり一発目の藤田（和之）戦かな。絶対に藤田が勝つと思ってたのが、ヒザ蹴りでザックリ切られて負けたじゃない。あのときは第1回UFCで（ケン・）シャムロックが負けたときぐらいの衝撃だったよ。

——日本の総合格闘技の盛り上がりは、あのミルコvs藤田戦から始まった部分もありますよね。

玉袋　やっぱあれが最初のチンポ汁だよな。もちろん、その前に髙田vsヒクソン戦、桜庭vsホイス戦っていうのがあったけど、地上波巻き込んであんだけ盛り上がったのは、ミルコvs藤田戦がスタートだった気がするな。ガンツは？

——ボクはノゲイラ戦が内容として最高だと思いますけど、ボブ・サップを一撃で葬った試合も好きですね。

玉袋　あのミルコは怖かったな。怖ミルコだよ。

——あれ以降、サップは格闘技自体が怖くなった感じですからね。

椎名　目を狙ってストレート打った感じしたもんね。

——あの試合を最後にミルコはPRIDEに移籍して、PRIDE黄金期がスタートするわけですから。そう考えると、藤田戦も含めて、ミルコって格闘技界にとんでもなく影響を与えた選手ですよね。

玉袋　凄いんだな、鍵開ける人だな。鍵の110番だよ！

椎名　ホントにそうだよね。UFCだけ開かなかったのが悔しいけど。

玉袋　開かないんだよな、あの鍵。最後の鍵はどこにあるんだろうな。

——この座談会は毎回『あしたのジョー』の話になっちゃうんですけど、ミルコも〝ジョー〟なんですよね。力石徹やホセ・メンドーサには勝てないっていう。

玉袋　『あしたの鍵』だな。でもよ、藤田戦だって総合っていう敵の土俵で闘って、PRIDEに来たときも最初はアウェーだったし、そんな中で、結果を残していくってすげえことだと思うよ。

——敵地だったPRIDEが、途中からミルコのホームに完全になりましたからね。

玉袋　アウェーを自分のものにするってたいしたもんだよ。俺もこないだね、テレビ界のUFC的な、凄い人たちが集まるTBSの『オールスター感謝祭』に初めて出してもらったのよ。TBSで15年間深夜番組やってて初めてだから。

椎名　苦節15年で深夜から『オールスター感謝祭』に進出したんだ（笑）。

玉袋　でね、なんで俺にオファーが来たかというと、赤坂マラソンなんだよ。俺もマラソンやってるから、初めて走ることになってさ。あれってレギュラーはだいたい決まってるから、初めて出る人はハンデがもらえるわけ。どんなに走りやってる人でも、初参戦は一番最初に走らせてくれるんだよ。だから俺も「最初の1周ぐらいはトップでいけるかな」と思ってたんだけど、いざハンデが発表されたら、俺より速い人が最初に走って、俺はずいぶんあとになって「次、そのまんま東さん、玉袋筋太郎さん、サバンナの八木さん」って、そんなメンバーと同じ扱いなんだよ！

椎名　最強メンバーの中に初参戦で入れられちゃって（笑）。

玉袋　やっぱりアウェーに乗り込むっていうのは、こういう逆ハンデを乗り越えていかなきゃいけねえってことなんだよな。そう考えるとミルコも大変だったろうな。俺の場合は、まあ「玉袋」なんて名前のヤツが、ゴールデンタイムのトップを走られても困るのかもしれねえけどよ（笑）。そこは俺も理解してるからさ。ジョバーは大変だよ。

——なんか金原弘光的でもありますよね。

椎名　ああ、金ちゃんだ。PRIDEに来て、いきなりシウバ、ミルコとやらされて（笑）。

——そのあとアリスターとショーグンですからね（笑）。

玉袋　金ちゃんも大変だったろうな。なんか金ちゃんに会いたくなったな。一緒に飲みに行きてえよ。いいコンビじゃねえか、金ちゃんと玉ちゃんでよ。

椎名　ダハハハハ！　素晴らしい名前のコンビ（笑）。

——というわけで、素晴らしいオチがついたところで、お開きにしましょう。ありがとうございました！

【09年10月5日／中野坂上『加賀屋』にて収録】

02年以降の日本の総合格闘技の歴史は、ある意味、ミルコ・クロコップの歴史でもあった。しかし、念願のPRIDEのベルトを腰に巻いたあと、巨大な試練が待っているとは、ミルコはつくづくドラマチックな男である。

あの左ハイよ、もう一度!

祝現役続行記念!? 識者関係者が選ぶ

我が心のミルコメモリー

ミルコ・タイガーとして初来日をはたしてから早13年あまり。多くの試合を通して、われわれに壮大な格闘ストーリーを見せてくれたミルコ。ここでは本誌とゆかりの深い方々に、そんな稀代のストライカーについて緊急アンケート!「WILD BOYS」の旋律を思い浮かべながらお読みください!!

構成／鈴木佑

【質問項目】
①あなたが考えるミルコベストバウト
②あなたが考えるミルコワーストバウト
③あなたが考えるミルコと試合してほしい選手

乾晋也

自称漂流カメラマン。スポーツを追いかけ撮るうちに、いつの間にか総合格闘技を追いかけることに、そしていつの間にか『kamipro』でも仕事をすることに。そしていつの間にか……。え!

①vsエメリヤーエンコ・ヒョードル
（2005年8月28日『PRIDE GRANDPRIX 2005 決勝戦』）

②vsケビン・ランデルマン
（2004年4月25日『PRIDE GRANDPRIX 2004 開幕戦』）

③もう一回ヒョードル!

【総括】①この試合にあわせ二人をそれぞれの母国で取材したこともあり、思い入れのある試合であった。とくにミルコは自宅や別荘までお邪魔して家族とくつろぐ姿を見ていることもあり、負けたあとの哀愁漂う表情はいまでも思い出される。本当に悔しいときは男はああいう顔になるんだろうな。②まさかの失神KO負け！　そのあとに続く『PRIDE武士道』への参戦は、どんなつまらない相手でも、男は黙ってサッポロビール（古!!）。日本の武士道を彷彿させる武者修行のような生き様を見せてくれた。③華やかなK-1に参戦当時は、どこか地味でへんに無愛想で暗いイメージしかなかったミルコも、2001年の藤田和之戦以降のMMA参戦で、名だたるプロレスラーを粉砕し一気にブレイク！　MMAの頂点まで上りつめて行った。最近ではUFCの活躍も芳しくなく寂しい感じもする。ここは、最後に栄光のプロレスラーハンターとしてカート・アングルと試合をして、左ハイ一発のKO劇でも見せてもらいたい。

金沢克彦

1961年12月生まれの「アラフィフ」。元『週刊ゴング』編集長。現在の肩書きはスポーツライターなのだが、テレビでプロレス解説ばかりやっている。通称＝GK。

①vs藤田和之
（2001年8月19日『K-1 ANDY MEMORIAL2001』）

②vsボブ・サップ
（2003年3月30日『K-1 WORLD GP2003 in SAITAMA』）

③ブロック・レスナー

【総括】①このわずか39秒の試合がのちに日本の格闘技界、プロレス界の運命を大きく変えた。ヒクソンvs髙田戦と並ぶ歴史的な一戦といえるだろう。ミルコにとっては総合初チャレンジであり、本来は藤田のかませ犬的立場に置かれていた。なんせ、ミルコ勝利に一番驚いていたのが石井元館長だったのだから、インパクト満点。個人的に、この異種格闘技戦を放送席で解説を務めながら観戦できたことも、いい思い出になっている。あのヒザ蹴り1発でミルコはマット界に風穴を開けたのだ。ただ、純粋に試合内容で見るなら、PRIDEヘビー級暫定王者決定戦（03年11月9日／アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ戦）がベスト。ノゲイラの腕十字に大逆転負けを喫したミルコの「えっ、なんで？信じられないよぉー!!」と言いたげな泣き顔を見たとき、初めてミルコに人間味を感じた。②これがノゲイラ戦とはまったくの逆パターン。素人（？）サップを相手に、お得意の（？）ローブローのアピールで間を取っておいてから、右目を狙った左ストレートをぶち込んでKO勝ち。巨象が崩れ落ちるように倒れ込んだサップは眼か底骨折により病院送り。まさに血も涙もないターミネーターぶり全開で、とても嫌な気分にさせられた。③プロレスハンターvs総合ハンター。ストライカー最強vsプロレスラー最強として、全盛期に見たかったなあ。

金原弘光

1970年10月5日、愛知県出身。Uインターでデビュー後、リングス、PRIDE、DEEPなどさまざまなリングで活躍。本誌にてコラム『金ちゃんのどこまでやるの？』を連載中。

①vsエメリヤーエンコ・アレキサンダー
（2004年8月15日『PRIDE GRANDPRIX 2004 決勝戦』）

②なし

③ブロック・レスナー

【総括】①ミルコのベストマッチはPRIDE時代はいっぱいあるよね。負けたけどヒョードル戦もよかったし、ボブチャンチンとかシウバをハイキック一発で倒した試合もよかったしね。その中で俺が一番凄いなって思ったのは、ヒョードルの弟アレキサンダーを倒した試合なのよ。あれだけデカくて圧力をかけてくる相手に対して、フットワークでうまくさばいて、ハイキック一発で倒したでしょ？　あれはホントに見事だったし、衝撃的だったよ。だから今回、UFCでドス・サントスに負けたけど、アレキサンダー戦のときの闘いができてたら、ミルコが負ける相手じゃないよ。ドス・サントスよりアレキサンダーのほうが、もっとデカいし、速いし、ボクシングだってうまいからね。逆にいえば、その自分よりずっとデカいアレキサンダーをKOしたあの頃のミルコっていうのは、ホントに強かったってことだよね。③ミルコと一番闘ってほしかったのは、やっぱりブロック・レスナーかな。まあ、レスナーはいま一番おもしろいから、誰との試合でも観たいんだけど（笑）。でも、やっぱりPRIDE時代の強いミルコとレスナーの試合が見たいよね。いまは動きにキレがないし、「ここでミドル蹴れるのに！」っていうところで、全然蹴りがでないんだよ。昔のミルコは蹴りを出すタイミングが凄くうまかったんだけどね。俺も試合したことあるけど、蹴りを出すタイミングがうまいなって思ったから。いまは、ミルコの蹴りが待たれちゃってるところもあるんだろうけど、あの動きを取り戻してほしいよね。俺だって39歳で頑張ってるんだから（笑）、ミルコにも頑張ってほしいね。

熊久保英幸

格闘技WEBマガジンGBR編集長。元『ゴング格闘技』。古武術からZSTガールの3サイズまで、業界随

ングから降りずに、ずっとコーナーのところで唇を噛み締めていた表情がいまでもありありと思い浮かびます。聞くところによる

③エメリヤーエンコ・ヒョードル

【総括】①もちろん本心はvsヒョードル。後期

ぶ。K-1ではアーネスト・ホーストに連勝、総合でも『Dynamite!』でノゲイラ

合格闘技ファンは、ミルコにどれだけ感謝してもし足りることはないのだ。

熊久保英幸

格闘技WEBマガジンGBR編集長。元『ゴング格闘技』。古武術からZSTガールの3サイズまで、業界随一の格闘技の知識量を誇る。

①vsジェロム・レ・バンナ
（1996年3月10日『K-1 GRANDPRIX 1996 開幕戦』）

②vsジュニオール・ドス・サントス
（2009年9月19日『UFC103』）

③ノックウィー・デービー

【総括】①衝撃のデビュー戦という意味で強く印象に残っている。ターミネーターのニックネームが付く理由となったカキカキした動き、それでいてノーモーションから繰り出すキレのあるハイキック、そしてその後は影を潜めるイケイケドンドンな闘いっぷり。師匠がK-1初代王者ブランコ・シカティックで、彼のジムの名前がタイガージムだったことからムエタイ式にミルコ・タイガーのリングネームとなった。シカティックが「彼はキックボクサーではなく、最初からK-1ファイターとして育てた」とコメントしたのを聞いて、そういう時代になったのだなと痛感。②ミルコらしさがまるで感じられず、「この選手は終わった……」とまで思わされた。以前UFCで得た課題をまったく克服していなかったのも残念。③95年のK-1GP開幕戦でバンナに勝ってたはずの中量級選手。蹴りと言えばムエタイ。蹴りが得意な選手との試合が見たかった。体重ハンデがあるので、もちろんヒジありルールで。

笹原圭一

DREAMイベントプロデューサー。PRIDEには旗揚げから関わり、PRIDE広報局局長として活躍。また『ハッスル』では初代GMを務め、蝶野正洋を模した「アイ・アム・GM!」セリフとポーズで一世を風靡した。

①vsアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
（2003年11月9日『PRIDE GRANDPRIX 2003 決勝戦』）

②とくに思い浮かびません

③菊野克紀

【総括】①ベストバウトというか、記憶に残っている試合はたくさんあります。とりわけ、ミルコは負けている試合のほうが印象に残ってますね。ノゲイラ戦は最後逆転の腕十字で負けるのですが、負けたあとしばらくリングから降りずに、ずっとコーナーのところで唇を噛み締めていた表情がいまでもありありと思い浮かびます。聞くところによると、ノゲイラが勝った瞬間にプレスルームが大歓声に包まれたらしいのですが（こういうことってほとんどありません）、それぐらいミルコの強さとキャラが際立っていたってことでしょう。あとは、一回目のランデルマン戦（2004年4月25日『PRIDE GRANDPRIX 2004 開幕戦』）とか、ヒース・ヒーリング戦（2003年6月8日『PRIDE・26』）とかも印象に残ってます。なんか『kamipro』が勝手に引退か？みたいな得意のミスリードをしてますけど、引退は選手が決めることなので、賢明なる読者の皆さん、だまされないでください。②UFCでの試合はちゃんと観ていないこともあって、ワーストバウトってあまり思いつかないのが正直なところです。あの曲に乗って入場する姿も楽しめるし、負けたときの表情もいいし、試合は緊張感はあるし、数少ない客を呼べるファイターだと思います。③すいません。勢いで書いてみました。でも、実現したら話題になりそうじゃないですか？

椎名基樹

放送作家、フリーライター。本誌にて『サムライ三昧』を連載。柔術白帯（要するに柔術着を買っただけ）。

①vsマイク・ベルナルド
（1999年10月3日『K-1 GRANDPRIX 1999 開幕戦』）

②vsガブリエル・〝ナパオン〟・ゴンザガ
（2007年4月21日『UFC・70』）

③エメリヤーエンコ・ヒョードル

【総括】①もちろん本心はvsヒョードル。後期PRIDEのピークの試合。闘いの気運が結実し、MMA史上もっとも会場に期待と緊張が張り詰めた試合だろう。しかし、パンチから左ハイの華麗なKOシーンが頭にこびりつくvsベルナルドを「あのコンビ凄かったよね」という共感を求めたくて選んだ。②vsゴンザガはワーストバウトというわけではないが、ミルコの落日を捻れた足とともに告知した試合。ミルコにとっての最悪という意味で。③正直ないな。ミルコほど闘うべき相手とやり尽くした選手もいないかと思う。シウバともやってんだから。一戦目の興奮がよみがえるならという意味でヒョードル。ミルコは最盛期にUFCに移籍した。でも通用しなかった。それは結局彼が寝技に自信が持てなかったからだと思える。よりスポーツライクなUFCでは、その心配が「頭を引っ込めれば尻が出る」的な心理的な窮地に、ミルコを如実に追い込んでいたように見えた。もっとも、クロアチアに住んで「チーム・クロコップ」で練習してどうして著しく進歩する、いまのMMAに対応できるだろう。ただ、いまミルコに勝っている選手は、後出しじゃんけんとも言える。左ハイを警戒して闘える。もし対戦相手が、左ハイの脅威に無知であったなら、あの魔法のような一撃が見られたかもしれない。ミルコはMMAに蹴りの可能性を知らしめ、常識を覆し、奥を深めた。今後なかなかこういうユニークな選手は現われないだろう。

高崎計三

（有）ソリタリオ代表。今頃になって「ケロロ軍曹」にはまってしまった困り者。だって、何気なく子供と見たらメチャクチャおもしろかったんだもん。ケロプラも（自分用に）買ってしまいそうで怖い……。

①vsボブ・サップ
（2003年3月30日『K-1 WORLD GP 2003 in SAITAMA』）

②vsジョシュ・バーネット
（2005年10月23日『PRIDE・30』）

③ヒクソン・グレイシー

【総括】①「目がッ、目がーーーッ!!!」。原田久仁信先生あたりの劇画だったらそんなセリフがドーンと入りそうな感じで目を押さえて悶絶していたサップの姿が、いまも目に浮かぶ。K-1ではアーネスト・ホーストに連勝、総合でも『Dynamite!』でノゲイラとド迫力ファイトを繰り広げるなど人気絶頂だったサップを一気にショボーンと終了させてしまった〝カテェ〟左ストレートこそが、ミルコの強さの象徴だった。あのあとのサップの変わりようって、あきらかにあのパンチがトラウマになってる感じだもんなあ。②ワーストバウトは、二度目のジョシュ戦。これが、なぜかまったく記憶に残ってない。印象にあるという点ではすぐ終わっちゃった初対決のほうが、よっぽど覚えてるというのが不思議。レビューを読むとジョシュの圧力に苦戦しつつも後半に盛り返して判定勝ち、みたいなことが書いてあるんだが、オレがミルコに求めてたものはそういうのじゃなかったから、記憶から消されてるんだろうか。というわけで、ワーストというよりは「モースト・インパクトなしバウト」ということで。③対戦してほしかったのはヒクソン。いまのファンにはピンと来ないかもしれないが、昔は「ヒクソンって、デカいストライカー・タイプとやったらどうなるんだろう？」と言われてたもんだったんですよ。ミルコの勝利もヒクソンの勝利も、どっちも見てみたかった。ヒクソンさんももう試合しないと明言したそうで、まあ交じり合わない格闘ロードでしたな。

高橋ターヤン

『映画秘宝』所属ライター。毎回開催場所が変わる流浪の文化系格闘技トークイベント『格闘技秘宝館』主宰。ほかに某世界的企業にてSE仕事もしてます。

①vsエメリヤーエンコ・ヒョードル
（2005年8月28日『PRIDE GRANDPRIX 2005 決勝戦』）

②チェ・ホンマン
（2008年12月31日『Dynamite!!』）

③ジェロム・レ・バンナ（MMAマッチで）

【総括】嬉しくなるときも、爽快な気分になるときも、もどかしくなるときも、悲しくなるときもあったが、いまとなって考えてみれば、ミルコに関してはすべて良い思い出だ。ミルコによって多くの者が総合格闘技の魅力に取り憑かれ、日本で総合格闘技界があれほどまで盛り上がったのは間違いなくミルコのおかげ。いまのミルコに罵声を浴びせるバカや、したり顔でミルコの劣化を解説するマヌケには本当に死んでほしい。僕たち日本の総合格闘技ファンは、ミルコにどれだけ感謝してもし足りることはないのだ。

ターザン山本!

老人ボケか、極貧ボケか、インポボケのせいでプロフィールを忘れてしまった。オレはどこから来たのか、オレは何をしてきたのか、オレは何者なのか。知っている人がいたら教えてほしい。

①vs藤田和之
（2001年8月19日『K-1 ANDY MEMORIAL 2001』）

②vs髙田延彦
（2001年11月3日『PRIDE・17』）

③K-1 GP王者たち

【総括】ミルコ・クロコップは普通の人だったのに、総合格闘技で史上最大の〝宝くじ〟の1等賞を当てたラッキーボーイである。

田中太陽

フリーライター。〝観戦記の鬼〟として一部の麻雀ファンのあいだで根強い人気を誇る。すっかり定着した秋山成勲の〝魔王〟の名付け親。

①vsアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
（2003年11月9日『PRIDE GRANDPRIX 2003 決勝戦』）

②vs髙田延彦
（2001年11月3日『PRIDE・17』）

③ブロック・レスナー

【総括】ベストバウトはやはりノゲイラ戦で決まりだろう。この試合でミルコの見せた強さは圧倒的であり、猛攻を凌ぎ切ったノゲイラの逆転勝利もまた見事だった。尋常ではない無敵感を漂わせていた当時のミルコが、MMA初黒星を喫した試合としても印象深い。次点は打撃戦を制し、得意の〝見えない左ハイキック〟をもっとも美しく決めてみせたイゴール・ボブチャンチン戦あたりか。出色の煽り映像を完全にブチ壊すほどの圧勝となったミノワマン（当時・美濃輪育久）戦も捨てがたい。②ワーストバウトにはMMA転向初期の高田戦を。ミルコがもっとも精彩を欠き、観客に不満を抱かせた試合といえばこれだろう。ミルコのキャリアには凡戦や不覚負けが意外にも多く、ワーストバウトの選出には事欠かなかったりするのだが、内容の悪さではこの試合が特出している。③試合してほしかった選手はダントツでブロッ

ク・レスナーだ。脅威的なレスリングタックル耐性を持ち、全盛時には〝プロレス・キラー〟と謳われたミルコだが、いまやUFCのトップ選手であるレスナーに対してもその優位性を発揮できたのだろうか？　いちプロレスファンとしては「プロレスラーにミルコを倒してほしい」という十年来の悲願もあり、ぜひとも実現、そしてレスナーに勝利してほしかった一戦だ。強いて他候補を挙げるなら、同じくレスリング出身のトップ選手であるランディー・クートゥアーだろうか。それにしてもなぜ、ミルコはあんなにもレスリング選手に強かったのか。技術論もクソもなく、パワーと反射神経のみでタックル攻撃をスパスパと切ってゆくその様は、彼だけが使える魔法のようだった。個人的にはハイキックKO勝利よりも、あの驚異的なテイクダウン防御こそがミルコの代名詞にふさわしいのではないかと思うのである。

谷川貞治

FEG代表。『格闘技通信』二代目編集長を経て、『ファイティングTVサムライ!』の立ち上げに参加。03年にK-1イベントプロデューサーに就任。

①vs藤田和之
（2001年8月19日『K-1 ANDY MEMORIAL 2001』）

②vsエメリヤーエンコ・ヒョードル
（2005年8月28日『PRIDE GRANDPRIX 2005 決勝戦』）

③とくになし

【総括】①一試合しか観たことがないのでべ

③K-1ルールでバダ・ハリ

【総括】①ミルコをMMAファイターにしたのは、このボクです。それなのにPRIDEに行っちゃって、それからPRIDEとケンカになって大変だったなぁ。②理由は単純に勝ってほしかったから。裏切られたけど、やっぱりミルコには思い入れがあります。早くK-1に戻っておいで。まだまだ輝くのに……。

中川画伯

犬&姪っ子に夢中。フリーのイラストレーター。31歳。

①vsボブ・サップ
（2003年3月30日『K-1 WORLD GP 2003 in SAITAMA』）

②vsアリスター・オーフレイム
（2008年9月23日『DREAM・6』）

③ダニエル・ギダ

【総括】①「目にパンチ!」って、説得力があってゾクゾクしました。②「ローブロー当たってないぞ! 逃げるなー!」って会場で観ててイライラしました。③K-1ルールで。なんかいろいろな人と対戦してるからとくにないっちゅうか、最後にもう1試合だったらミノタウロ戦が見たいです。ハイキックでKOしてほしいです。

橋本宗洋

『kamipro』携帯サイトのコラムなどを凝縮した単行本『PRIDEはもう忘れろ! 新時代格闘技のミカタ』がエンターブレインより10月30日発売。よろしくお願いします。

①vs藤田和之
（2001年8月19日『K-1 ANDY MEMORIAL 2001』）

②ガブリエル・ナパオン・ゴンザーガ戦
（2007年4月21日『UFC・70』）

③歴代UFC王者

【総括】①勝っても負けても劇的な試合が多かったミルコ。中でも、その衝撃度を考えるとベストバウトは藤田戦しか考えられない。藤田のタックルにジャストのタイミングでヒザ蹴りが叩き込まれた瞬間、ミルコの運命が変わった。そしてそのことは、格闘技界の流れすら大きく変えた。②ワーストバウトはUFC2戦目、ハイキックでKO負けしたナパオ

いまだにマンモス禁断症状です。あんなにいい思いさえしなければ、いまのDREAMも

ン戦。圧力をかけられて後退してペースを奪われるという悪い癖が出た試合だった。ただ、これがワーストなのは「本人にとってはそうだろうな」という意味。見ているこっちが感じた驚きやドラマ性、つまりミルコらしさという意味では、ベスト10に入れてもいい。③闘ってほしかったのは、やはりランディ・クートゥアーやブロック・レスナーといったUFC王者。つまりUFCのタイトルマッチに挑むミルコが見たかった。その頂に届きそうで届かず、しかし挑み続ける姿勢だけは失わなかったのがミルコという男の真骨頂だろう。PRIDE時代の好敵手ヒョードルに対してもそうだが、何かに挑む姿がこれほど魅力的な選手はなかなかいないと思う。

原タコヤキ君

『kamipro.com』の人気ポッドキャスト『mimipro』のカリスマ司会者。ギターと自転車と加圧トレーニングをこよなく愛する38歳。

①vsアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
（2003年11月9日『PRIDE GRANDPRIX 2003 決勝戦』）

②vs桜庭和志
（2002年8月28日『Dynamite!』）

③永田裕志

【総括】①左ハイキックでのKO勝ちはもちろんスッキリするんだけど、ミルコは負けっぷりがまたいいんですよね。②ワーストというのとは違うけど、とても残念な結末だったなぁ。でも体重差を考えると、「どんなカードやねん」と言いたくなる。有名な選手と有名な選手の対戦がそのままドリームカードとなり得た時代。③一回目のミルコvs永田とは違い、再戦が組まれたなら、意外と永田さんが勝っちゃうのでは？　なんかいまのミルコは誰にも勝てる気がしない。そして「ミルコ、頑張れ!」って盛り上がる気分にもなれないのであります。

花くまゆうさく

マンガ家。『kamipro』にて『豆リングの汁』を連載中。柔術は黒帯の腕前。

①vsドス・カラスJr
（2003年10月5日『PRIDE武士道―其の壱―』）

②③とくになし

【総括】①は、ドス・カラスJrの美しすぎるK

表情、恐ろしいばかりの打撃を叩き込む姿、そして最終的には逆転負けを喫したものの、

O負け！　ミルコで思い出すのはいつもこれ。②思い出せない。③とくに思い浮かばないが、全盛期の実力のままいまのUFCに出てればなぁとは思う。

堀辺正史

日本武道傳骨法創始師範。鋭い分析力、ユーモア溢れる解説で格闘技の醍醐味をお届けする〝青春の大発見者〟。

①藤田和之戦以降、全試合

②なし

③エメリヤーエンコ・ヒョードル

【総括】ミルコのベストバウトを1試合選べと言われてもハッキリ言って難しい。なぜかというと、PRIDEチャンピオンを目指して闘ってきた、すべての試合をひっくるめて〝ミルコの闘い〟なんですよ。PRIDEにおける彼の試合というのは、すべてが最強を目指す課程の試合なんですね。いわばミルコというのは、誰よりも天下獲りに燃えて、命懸けの闘いを続けながら、寸前のところで天下を獲ることができなかった、悲劇的な武将であるともいえると思います。でも、彼は天下を獲るためにすべての試合を最高のモチベーションで闘ってきたんですよ。だから、彼のその闘う姿勢すべてが素晴らしかったので、一つだけ選ぶベストバウトというものはありません。彼のチャンピオンに向けて闘い続けた日々、勝った試合も負けた試合も、すべてがベストバウトだったと思います。願わくば、彼が心から望んだ打倒ヒョードル、ヒョードルの再戦がもう一度実現してほしかったですね。

松林貴

ミルコが出場するUFCの大会取材に行くと、かならずミルコが敗れるという不吉なジンクス保有者。先日、武蔵ラストマッチを観戦中に、「そういえば、ミルコのK-1デビューって武蔵登場の半年後くらいでほぼ同時期だったよなあ……」と、ソウルの地で感慨にふけった本誌調教師。

①vs藤田和之
（2001年8月19日『K-1 ANDY MEMORIAL 2001』）

②vsマイケル・マクドナルド
（2001年6月16日『K-1 WORLD GP in メルボルン』）

③01年から03年頃のアーネスト・ホースト

消され、ミルコに勝った選手は（UFC以降に勝った選手はそうでもないかもしれないけ

【総括】①小生のなかでは、ミルコはPRIDEファイターでもMMAファイターでもなく、いまでも「MMAで最も成功したK-1ファイター」というのが確固たるイメージ。試合自体も純K-1ファイターとしてMMAの舞台に挑んでいった時代のほうが興味深いというか、「立ち技のスキルで総合の試合を制する」というシーンに興奮させられました。という意味でも、タックルしてくる藤田を闘牛士のようにかわし、猛牛に剣を突き刺すようなヒザ一閃で勝ったあの試合は衝撃的だった。レネ・ローゼが勝ち、ノルキヤが負けて1勝1敗となっていたところで「K-1軍の大将として猪木軍との対抗戦を締めた」というシチュエーションも含めてベスト。この試合の印象が強烈すぎて、この日のジャパンGP決勝戦だったニコラス・ペタスvs武蔵戦は残念ながら、まったく記憶に残っていません。②『PRIDE GP 2004』の1回戦でランデルマンに失神KO負けしたとき、「あ、これはいつか見た光景だ……」と感じたのが01年にメルボルンで開催された、世界地区予選1回戦のこの試合。99年、00年と2年続けて敗れたホーストとの決戦が期待されてたのに……、1ラウンド1分半弱でKO負け。誰もが楽勝と思うような試合を落としちゃうのも、ミルコが〝危うさも含めて魅力〟と小生が感じてしまうポイントなのかも。③K-1の試合は全部で24戦しかやってなくて、敗戦の数は「7」。で、そのうちホーストには3戦全敗。それもすべてGPの試合で。K-1的には「ホーストを倒してGP王者に」と期待されていた時代もあったよなあ。4タイムスチャンピオンを阻止する意味でも「この時代のホーストと闘って倒してほしかったなあ」というのが〝K-1ラブ〟な小生の切なる願いだったのだが……。いまとなっては、武蔵にもう一試合頑張ってもらって、ミルコと両者ファイナルマッチでもいいです……もちろんK-1のリングで。

MIKU

第2代DEEP女子ライト級王者。現在、『kamipro Move』で日刊ブログ「MIKUの格闘ブロガール!!」を連載中。

①とくになし

②vsアリスター・オーフレイム
（2008年9月23日『DREAM・6』）

見事なハイキックで金ちゃんをKOした姿は圧巻だった。受け身の達人と言われている

③とくになし

【総括】①一試合しか観たことがないのでベストバウトといえるものはありません。②この試合しか観たことがありません。③いままでに誰と試合していて、誰と試合していないのか知らないのでわかりません。周りが言うミルコの全盛期を知らず、最近のDREAMでの試合が初めて観た試合でした。試合前に周りのみんなの高評価をかなり聞いていたので、実際の試合で弱すぎてあまりのギャップに驚いた感じです。

八木賢太郎

フリーライター。ハッスル事情通の肩書きを持ち、『kamipro.com』のポッドキャスト『mimipro』で絶賛活動中。

①vsキンターマン
（2007年12月31日『大みそかハッスル祭り2007』）

②vsアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
（2003年11月9日『PRIDE GRANDPRIX 2003 決勝戦』）

③なし。もしくは、ヨシヒコ。

【総括】①ベストバウトは、通常の試合とは違うんですが、07年のハッスル大みそか興行に「スペシャルウェポン」として登場した一戦。このときのミルコは、〝お遊び〟で登場したはずなのに、キンターマンこと金村をハイキックでマジにKO。あとで聞いた話によると、ダウンしたキンちゃんはリング上でイビキをかいていてリアルに危険な状態だったとか（!）。ミルコにしてみれば「そこまでやるつもりはなかったのに」ということなんだろうけど、傍から見ると、なんともシャレのわからない感じで、それでいてダウンしたキンちゃんを心配そうに見つめていたりして、ミルコのそういう東欧人っぽいところが大好きです。②普通に考えたら、どう考えてもこれがベストバウトでしょ。ノゲイラがミルコの腕を極めた、あの瞬間。そして、敗れたミルコの切ない表情（世界一、負けると絵になる男）。いままでに、格闘技の試合であんなに興奮した瞬間はなかったかもしれない。ただ、あれほど凄い試合（それはこの試合だけじゃなく桜庭やヒョードルやいろんな選手の試合も含めてだけど）を見せられたおかげで、自分の中でPRIDEがなくてはならない存在になってしまって、PRIDE消滅以降は、いまだにマンモス禁断症状です。あんなにいい思いさえしなければ、いまのDREAMも『戦極ライデン』もUFCも、もっと素直に楽しめてるのになぁ……という意味での逆説的な無理やりワーストバウトってことで、ノリピーに5000点！③あれだけ多くの選手と闘っても、連戦ものともせず、武士道や『ハッスル』にまで登場してくれたミルコに、これ以上、闘ってほしい選手なんて思いつきません。あえて挙げるなら、DDTの歴史的名選手・ヨシヒコかなぁ？　真面目なミルコには怒られるだろうけど。

【本誌編集部】

ジャン斉藤

本誌編集長。〝雀鬼〟こと桜井章一の内弟子を経て、『kamipro』編集部へ。永久電機などアントン関連事業の調査や破綻系興行の観戦がライフワーク。

①vsヒース・ヒーリング
（2003年6月8日『PRIDE・26』）

②なし

③ブロック・レスナー

【総括】ミルコの活躍によってPRIDEはREBORNに成功。あそこまで巨大化し、格闘技界はよりおもしろくなっていた。あのままミルコがK－1に居続けたときのつまらなさを想像すると、あの電撃移籍はマット界の運命を大きく変える英断だったと思う。ワーストバウト、よくよく考えてみるとミルコにはあんまり〝捨て試合〟ってないんですね。全部意味があった。いや、観る側が意味づけしたくなる男だった。陳腐な言い方ですが、ドラマがあったのだ。

堀江ガンツ

本誌編集部。ちっちゃな頃から、変態的プロレスファン&UWF信者を経て、『kamipro』編集部へ。『変態座談会』主催者としても活躍中。

①vsアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
（2003年11月9日『PRIDE GRANDPRIX 2003 決勝戦』）

②なし

③アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ

【総括】①MMA初挑戦となる藤田和之戦以降、ミルコの試合は常に刺激的だったが、その中でも最高の名勝負といえば、やはりドームでのノゲイラ戦。入場時の気合い満点の表情、恐ろしいばかりの打撃を叩き込む姿、そして最終的には逆転負けを喫したものの、試合後の悔し涙も含めて、そのすべてがミルコの魅力に溢れていた。③先日、ミルコが敗れたジュニオール・ドス・サントスはノゲイラの弟子。そしてミルコがドス・サントスに勝っていれば、レスナーへの挑戦権を懸けてノゲイラ戦が実現するはずだった。そんなミルコにとって、リベンジマッチであり、悲願のUFC王座奪取への大一番が実現しなかったことが、じつに悔やまれる。

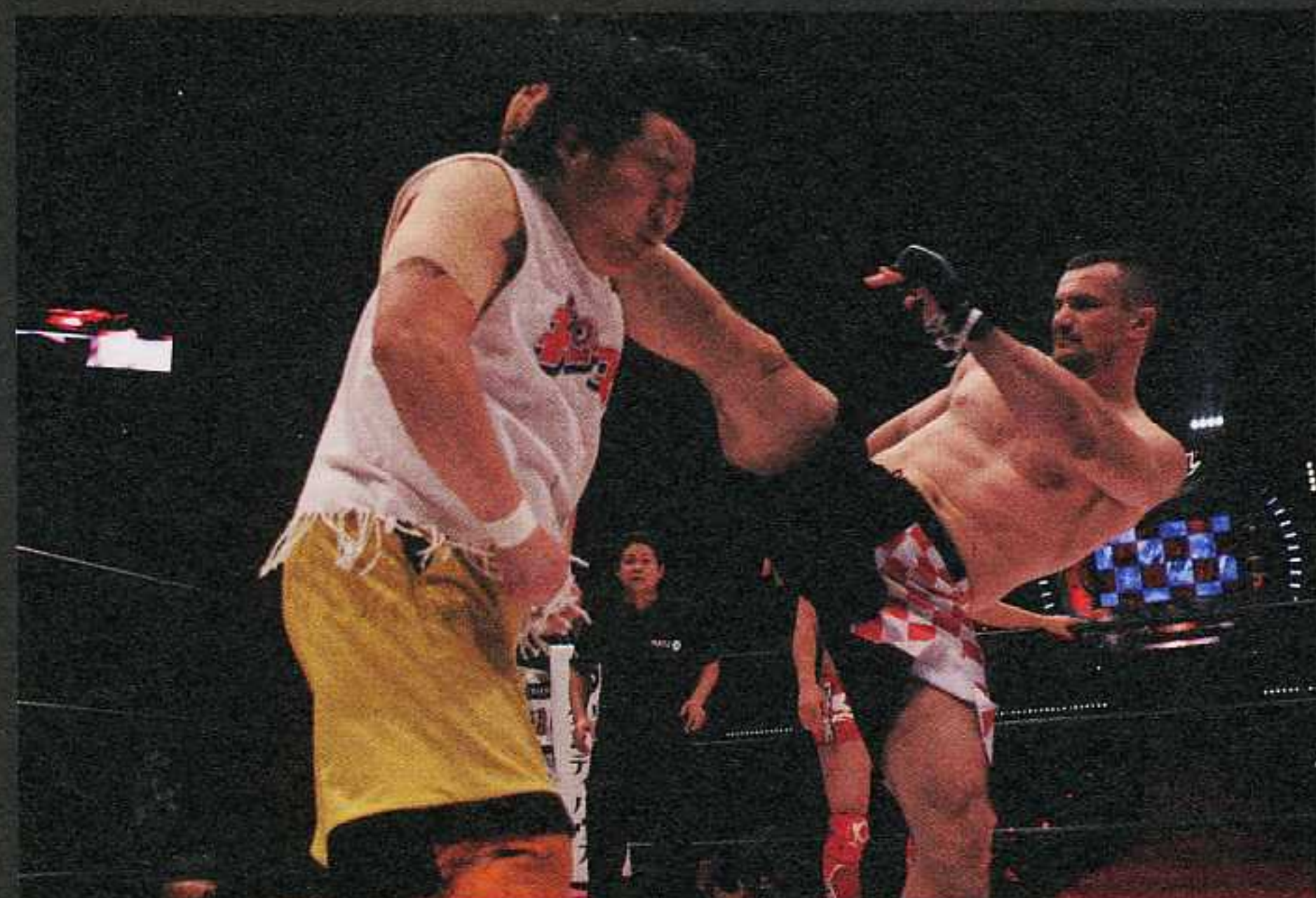
坂井ノブ

『kamipro.com』と『kamipro・Move』をおもに担当。ポッドキャスト番組『mimipro』番頭さんを担当。

①vsアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
（2003年11月9日『PRIDE GRANDPRIX 2003 決勝戦』）

②vsアリスター・オーフレイム
（2008年9月23日『DREAM・6』）

③とくになし

【総括】ミルコに負けた選手は例外なく光を消され、ミルコに勝った選手は（UFC以降はそうでもないかもしれないけど）軒並み輝いている。ギリギリまで追い詰めながら、最後に逆転負けを喫したノゲイラ戦は、ここ10年間の総合格闘技の中でも最高にカタルシスがあった試合だったと思う。負けが込み出してからのミルコは相手も自分も光らせることができなくなっているようで非常に残念。

阿修羅チョロ

本誌編集部。37歳にして、入れ歯作製のため使い物にならない歯を抜きまくりのフガフガ野郎。同い年の菊田さんに負けじとイレバカの設立を目指してます。ふがふが。

①vs山本宣久
（2004年2月15日『PRIDE武士道―其の弐―』）

②vs水野竜也戦
（2008年3月15日『DREAM・1』）

③高阪剛

【総括】なんだかんだ言って、これまでK－1&MMAルールで14人の日本人と対戦し、負けなしのミルコ。いま現在の日本人はミルコでも勝てそうな日本人はパッと思いつかないので、ミルコの日本ラストマッチは、いまだバリバリに練習しているというTKが相手というのはいかがでしょう？

松下ミワ

本誌編集部。元・読者ページ担当。一部ではいまも〝読者ペイジ〟ジャクソンを陰で操っているともっぱらの噂。

①vs金村キンタロー
（2007年12月31日『大みそかハッスル祭り』）

②とくになし

③青木真也

【総括】①07年大晦日、『やれんのか！』やらヒョードルやら青木真也やらでバンバン盛り上がっていたときに、ミルコも大晦日に出ると聞いて興奮。しかも、『ハッスル祭り』の〝スペシャルウェポン〟としてはクオリティが高すぎる見事なハイキックで金ちゃんをKOした姿は圧巻だった。受け身の達人と言われている金ちゃんがマジで失神してたと聞いて、ミルコ幻想が膨れ上がった一戦。同時に、そのハイキックをノーガードで受けた金ちゃんの幻想も高まった試合だった。相手の幻想まで高めてしまうなんて、凄い！③青木選手みたいな、若くて勢いのある選手とのスペシャルマッチが見たい。

鈴木佑

本誌編集部。黄昏の雑誌『KAKUTOUGI GRAPHIC UPPER』を経て、『kamipro』入り。その出自がターザン門下生であることはかたくなに否定。

①vsドス・カラスJr
（2003年10月5日『PRIDE武士道』）

②vs水野竜也
（2008年3・15『DREAM・1』）

③ブロック・レスナー

【総括】①ミルコのハイキックで崩れ落ちたドス・カラスJr。遠のく意識の中で発した「俺の頭はどこへ行った……？」というどこか文学的な匂いすら感じさせるセリフは、ミルコのハイの凄まじさをあらためて満天下に知らしめたものとしてけだし名言！　しかし、MMAルールで闘ったのもミルコくらいなもの。ほかに『ハッスル』では金村キンタローをやはりハイで瀕死の状態に追い込んだりと、じつはミルコはジョシュと並んで妙に振り幅の広いファイターだったりする。②対戦相手公募で決定した一戦の相手は、なんと当時プロキャリアわずか1年半の水野竜也。なんともミルコの無駄遣いというか、〝顔見せ〟もはなはだしいというか。しかし、当時のミルコはUFCで連敗中ということもあり、調整という意味でこのマッチメイクも致し方なしか。ちなみにミルコの相手に一部のマスコミは永田さん待望論を唱えたが、とうのブルージャスティス本人は「当時、脳の血流障害で欠場してたこの俺にいったい何を求めるんだって思いましたよ！」と、ご立腹だったとか。③かつて〝プロレスラーキラー〟と呼ばれたミルコと、プロレスとMMAの両方でトップを獲ったレスナーの対決。これからでも遅くない、自分の力で実現させてよ！感動させてよ！（シッ○ー調）。

コップ語録

悲しいことだが、いまのK−1は俺が命を削るような鍛錬をしてまで出ていく権威がなくなってしまった

【03年7月1日】サップ、ほぼサップ、モンターニャにTOA……。サップ人気爆発により、いわゆる〝K−1モンスター路線〟真っただ中での発言。このインタビューで、ミルコはK−1を離れ、PRIDEに主戦場を移すことを宣言した。

（TOAvs中西学戦を観て）なんだ、あれは？ 素人にあんなことをさせてもし死んでしまったらK−1という舞台そのものを汚すことになるじゃないか!

【03年7月1日】新日本プロレスの中西学が、なぜかK−1ルールに初挑戦し、“マオリ族最強の男”（という触れ込みの）TOAと対戦。中西は超大味な殴り合いでKO負けを喫したあげく、ミルコに「素人」の烙印を押され、生命の心配をされる始末。

自分がK−1に戻るとしたらそれはK−1が原点に戻ってから

【03年7月1日】近い将来、K−1ルールの試合での引退試合を希望しているとも言われるミルコ。はたして実現するのか。いまのK−1はモンスター路線からは完全に脱却したが……。

フェイントを使い死角からハイキックを打つそのプロセスにかけて俺にかなう者はいない

【03年8月11日】ミルコの代名詞にして、最強のフィニッシュ技である左ハイキック。この頃は、次から次へと大物ファイターがこの左ハイの餌食となり、文字どおりの必殺技だった。

すべてはヒョードルに勝つための調整試合だ!

【03年9月8日】03年10月『PRIDE武士道−其の壱−』でドス・カラスJr.と対戦したミルコだったが、このときはなかなか対戦相手が決まらなかった。しかし、ミルコは意に介さず、「誰が相手でも同じ。すべてはヒョードルに勝つための調整試合だ!」と発言。ヒョードルの首だけを狙う、この頃のミルコは本当にどんな相手でも蹴散らす勢いだった。

ヒョードルは打撃のセンスと感性に優れている。だからスタンド勝負であっても彼のことは甘く見ていない。

【03年9月8日】いよいよヒョードル戦が現実味を帯びてきた中での発言。実際に対戦が実現するのはこの2年後となるのだが、この当時からミルコはヒョードルの打撃を高く評価していたのだ。しかし2年後、ヒョードルの打撃はミルコの予想以上の進化を遂げ、ミルコは敗れてしまうのだ。

タイソンが本当に来るなら相手は俺しかいないだろう。サップ戦を観たい人間なんているのか?

【03年9月8日】PRIDEがヒョードル、ミルコ、ノゲイラのヘビー級3強や、シウバ、ランペイジ、桜庭、吉田らのミドル級戦線に沸く中、K−1は起死回生の策として、マイク・タイソン参戦をぶち上げる。実際、K−1ラスベガス大会では、サップとタイソンによる舌戦も繰り広げられたが、これについてミルコは「サップ戦を観たい人間なんているのか?」とごもっともな発言で冷水をぶっかけ、返す刀で「タイソンが本当に来るなら相手は俺しかいない」と、ちゃっかり対戦表明。

ノゲイラが何をやってくるかすべて想像がつく。彼を初めてKOするのは俺だ!

【03年10月15日】03年11月9日、いよいよヒョードルの持つPRIDEヘビー級王座に挑戦するはずだったが、ヒョードルの負傷欠場により、ノゲイラとの暫定王者決定戦に急きょ変更。ミルコはすぐに気持ちを切り替え、暫定王座奪取に自信満々。この言葉どおり、ノゲイラのテイクダウンを許さず、嵐のような打撃を叩き込んでいったが、最後は大逆転の一本負け。PRIDE史上に残る名勝負であったとともに、悔し涙にくれるミルコ人気がさらに高まるきっかけとなった一戦となった。なお、ノゲイラが実際に初めてKO負けを喫するのは、この5年半後のことだ。

金も地位も名誉も手に入れた。あと俺にないのはベルトだけだ!

【04年7月31日】K—1、PRIDEのトップファイターとして多額のファイトマネーを稼ぎ、母国ではその人気から国会議員にもなるなど、まさにすべてを手に入れたかに思えたミルコ。それだけに、なかなか手が届かなかった世界最強のベルトを渇望したのだろう。

シルビア? 身体が大きくて総合の選手のわりには打撃ができるというだけだろ。ノルキヤと何が違うんだ?

【03年10月15日】この当時、「ヒョードルを倒したらUFC王座を奪いにいく」と公言していたミルコ。「UFCヘビー級にヒョードル以上のファイターがいるはずがない」と断言し、当時のチャンピオンであるティム・シルビアを"ノルキヤ扱い"していた。この頃はまだUFCが『TUF』でブレイクする前だったので、PRIDEとはレベルと規模で大きく差があったのだ。

ヒョードルvs永田戦は寸分狂いなく予想どおりだった

【04年1月14日】ミルコvs高山戦消滅により、二転三転四転五転した末に『イノキ・ボンバイエ2003』で実現したヒョードルvs永田さん。ミルコの宿命のライバル同士(?)である二人の一戦は、わずか1分でヒョードルの完勝。この結果をミルコは「寸分狂いなく予想どおりだった」と断言。まあ、多くの人にとって予想どおりではあっただろうが。

(04年2月に小泉首相との会談が実現して)クロアチアと格闘技を世界にアピールするそれこそが俺の役割だと思っている

【04年2月22日】現職の国会議員となったミルコは、クロアチアの首相からの親書を持って、小泉首相(当時)の元へ訪問。ミルコはファイターであると同時に、祖国を世界にアピールする大使としての役割も担っていたのだ。

俺がノゲイラに負けたことで社会民主党も負けて政権を追われたとまで言われたよ(笑)

【04年2月22日】じつは、ミルコが選挙に出馬したのはノゲイラ戦の直後。ミルコは比例代表で見事に当選をはたすが、所属する社会民主党は野党に敗れ政権を追われてしまったのだ。ミルコのクロアチアでの絶大な人気は選挙にも影響をおよぼす、これはおおげさな話ではないのだ。

俺がなぜヒョードルを倒したいのか。それはPRIDEのベルト=世界最強の証だからだ

【05年7月10日】念願だったヒョードルとの対戦前の発言。ミルコはヒョードルに敗れたものの、この1年後にPRIDE無差別級GPに優勝し、ついにPRIDEのベルトを腰に巻くことに成功するが、やはりヒョードルが出場していないGPでの優勝は、真の意味で世界最強の証ではなかったか。

俺も32歳を迎え、ヴァンダレイ相手にまた後手後手に回るふがいない試合をしたらグローブを置こうと決めていたんだ

【06年9月10日】自ら"最終章"に入っていることを自覚していたミルコ。このときから「無様な試合をしたら引退」を覚悟していたが、PRIDEのベルトを腰に巻いたことで、かねてから公言していた次の目標、UFC王座奪取に向けて歩き出すことになる。

サブタイトルが"STARTING OVER"だなんて俺のためのタイトルじゃないか

【05年9月1日】05年10月大会からPRIDEにサブタイトルがつくこととなった。その第1回目のサブタイトルは「STARTING OVER(再出発)」。2年半追いかけ続けたヒョードルに敗れた直後のミルコには確かにピッタリのタイトルだった。

"REBORN以後"のPRIDEはミルコの歴史だ!

ミルコ・クロコッ

鮮烈な闘いぶりではなく、刺激的な言葉も持っていたミルコ・クロコップ。世界最強の証であるPRIDEヘビー級王座奪取、そして打倒ヒョードルへと向かう中で発せられたそれらの言葉は、まさにミルコロードであると同時にPRIDEの歴史であった。

構成／堀江ガンツ

俺だってゲンを担ぐことはあるさ

【06年9月10日】ミルコはPRIDE無差別級GP準決勝のシウバ戦で、PRIDE参戦当初に連戦連勝を重ねていた頃に着ていたクロアチアのテロ特殊部隊のTシャツを着て入場。また決勝のジョシュ戦では、かつてジョシュを二度倒したときと同じTシャツを着用していた。やはり勝負師はゲンを担ぐものなのだろう。こうしたTシャツへのこだわりを知ると、あらためて先日のドス・サントス戦でPRIDEのTシャツを着て入場してきたことの意味が感じられるはずだ。

PRIDEファイターたちはPRIDEで闘うことを誇りに思っている。しかし、それはPRIDEが世界最強のリングであるという前提があってはじめて、そのリングで命懸けで闘うモチベーションになるわけだ

【06年10月22日】トップファイターにとって、団体への愛着以上に、そこが世界最高レベルかどうかが重要なことなのだろう。そしてこの2カ月後、ミルコはUFC参戦を決意する。

俺とヒョードルの再戦は間違いなくMMA史上最大の闘いになるからすべての舞台が整ったときにやりたい

【06年10月22日】UFCに参戦する際の一番の心残りとして挙げたのが、やはり打倒ヒョードルを達成せずにPRIDEを離れること。しかし、この当時はヒョードルも『ボードッグ』に参戦するなど、PRIDEとの関係は流動的だあり、このこともミルコのUFC参戦の後押しとなった。

オクタゴンではなくサッカーフィールドで闘っているような錯覚さえ覚えた

【07年2月4日】UFCデビュー戦で、広いオクタゴンの中でエディ・サンチェズに逃げ回られ、なかなか仕留められなかったミルコ。これまでリングでは、コーナーに追い詰めて打撃で仕留めていたが、それができずに〝追いかけっこ〟となってしまった。オクタゴンの広さに苦しめられたミルコの本音がこの発言となったのだろう。

ゴンザガが強かったんじゃない。相手とUFCでの闘いを甘く見ていた俺自身が悪かっただけだ

【07年8月2日】UFC2戦目でゴンザガにまさかのKO負けを喫してしまったミルコ。オクタゴンを広く使われ、グラウンドのヒジに苦しめられるという、〝UFCの洗礼〟を受けた。

(PRIDEのテーマで入場したことについて)
PRIDEで闘っていたときと同じ精神状態にシフトアップ、ギアチェンジするための大切なツールがあの曲だった

【07年2月4日】UFCデビュー戦でPRIDEのテーマ曲に乗って入場したきたミルコ。この曲を聴くとミルコのテンションが上がるのは本当で、ミルコは練習でも試合と同じテンションになるために、大音量でPRIDEのテーマを流しながら練習しているのだ。

彼が動かなくなって正直焦ったしマイクで挨拶するスピーチの内容も飛んでしまったよ

【08年1月1日】07年大晦日の『ハッスル・マニア2007』でのハッスルウエポンマッチで、ミルコは〝ウェポン〟としてまさかのハッスル初登場をはたす。しかし、金村キンタローをハイキックで倒すと、金村はそのまま失神。〝セル〟なんかじゃないアクシデントにさすがのミルコもあわてたらしい。

俺はプロだからもちろん金を稼ぐことは大事だけどそれによって心が太ってしまったら、元も子もない

【07年8月2日】UFCで本領を発揮できない理由を、大金を手にして「心が太ってしまったから」と分析するミルコ。ハングリー精神を取り戻すために、オランダのイワン・ヒポリットに弟子入りのようなかたちで、集中特訓を受けることを決意する。

あんな無様な姿をさらしたあと、笑顔で手を振りながら選挙活動なんてできないだろう?国会議員は歳をとってからでもできる。でもファイターはいましかないんだ

【08年1月1日】国会議員の二期目出馬を取りやめたミルコ。その理由は「ゴンザガに負けて、いまは国会議員よりリベンジだ」と思ったためだという。こうして二足のわらじ状態からファイターに専念したミルコだったが……。

復活できなかったら、もう俺のファイト人生はそこで終わりだ。万が一そうなるとしても、それは長年俺を支えてくれた日本のファンの前でやりたかった

【08年2月13日】DREAM参戦時、その理由をこのように語ったミルコ。このあとUFC王座奪取を目指し、再びUFCに参戦したミルコだったが、もう一度日本のリングに上がることはあるのか。

20年ぶりのプロレス復帰でマッドネスな魅力大爆発!!

柴田勝頼と語る!
“プロレスラー”船木誠勝
変態座談会

8.30全日本プロレスの両国国技館大会でプロレス復帰し、その懐かしくも新鮮な闘いぶりでプロレス者の魂を呼び起こした船木誠勝。そんな船木のプロレス復帰をおおいに語り合おうと、船木をデビュー当時から観続けた毎度おなじみ変態メンバーが集結。さらに今回は、船木の愛弟子にして、“変態魂最後の継承者”と我々が勝手に呼ぶ柴田勝頼も緊急参戦！ “プロレスラー”船木誠勝のマッドネスな魅力を語りつくします！

構成／堀江ガンツ

タコ　では「祝・船木誠勝プロレス復帰」ということで、皆さんにおおいに語ってもらおうと思ってるんですけども。今日はいつもの変態メンバーに加えて、ビッグなゲストが来ております！

ガンツ　これを機に変態に引きずり込んでしまおう、と。

井上　変態得意の両リン狙いで（笑）。

タコ　というわけでご紹介します。柴田勝頼選手です！

一同　パチパチパチ（拍手）。

柴田　よろしくお願いします。

井上　サッ、サインください!!

タコ　まず、柴田選手にとって船木さんは師匠ですか？

柴田　いろんな意味で幅広く師匠ですね。

タコ　では、今日は愛弟子である柴田選手と、さらに船木選手の引退を一度は思いとどまらせた男、堀江ガンツ！

ガンツ　まだそのネタ出しますか（笑）。

柴田　えっ!?　どういうことですか？

井上　船木さんがバス・ルッテンに負けたあと、マイクで引退を表明しようとしたときにファンの「船木やめるな！」っていう叫びを聞いて引退を思いとどまったことがあったじゃないですか。

柴田　ありましたけど……。

ガンツ　そのとき叫んだファンがボクです（笑）。

柴田　えぇ〜〜〜！　マジっすか!!

ガンツ　マジです。「明日また生きるぞ！」と言わせた男です（笑）。

柴田　凄いですねえ！　変態じゃないですか！

井上　ド変態でしょ？（笑）。船木さんのマネして、日常生活でもバンダナを巻いてたらしいですから。

ガンツ　髪も伸ばしてました（笑）。

柴田　そうだったんですか！　いや〜、知りませんでした。

タコ　そんなド変態のガンツさんがいまして、最後に船木選手とメル友の井上さん。

井上　そんなそんな。しがないただのプロレス者です。

タコ　では、プロレスファンの井上さんということで（笑）。

井上　単なるファン代表でお願いします（笑）。

タコ　というわけで、こんな豪華メンバーでいろいろ語っていこうと思いますけど、柴田選手は両国の船木さんのプロレス復帰戦はご覧になりました？

柴田　僕は控室でずっと一緒にいました。リングチェックからずっと一緒でしたね。

井上　復帰戦までの練習も一緒にされてたんですよね？

柴田　練習しましたね。船木さんは全日本プロレスの道場でスクワットから何から一からやってたんです。で、全日本プロレスが巡業に出てるあいだに、僕は基本的にラフター7で練習してるんですけど、そこに来て「ちょっとプロレスの練習したいから」って言われて、付き合うじゃないですか。そしたら、「5本ずつ投げるから」って、ボディスラムとかフライングメイヤーとか、計30本ぐらい投げられてるんですよ。僕が投げられる練習になっちゃって。

井上崇宏
いろんなお仕事を展開中のペールワンズ総帥。山本小鉄のモノマネ第一人者としても知られる。船木誠勝とはメル友だったはずだが復帰戦は観ていない38歳。

柴田勝頼
新日本プロレスで80年代的なケンカ格闘プロレスを展開。その後、総合格闘技進出にあたり船木誠勝の愛弟子となる。現在はDREAMで活躍する29歳の変態新鋭。

原タコヤキ君
小さい版型の頃の『紙のプロレス』編集者。現在は音楽プロデューサー兼ポッドキャスト『mimipro』のカリスマ司会者。この11月に結婚式を控える39歳。

堀江ガンツ
本誌編集部所属、変態座談会主宰者。小ちゃい頃から変態的プロレスファン＆UWF信者として鳴らし、恥ずかしいエピソードには事欠かない変態カリスマの36歳。

船木さんとプロレスの練習をやってバンプ恐怖症になりましたね（柴田）

井上　柴田さんのほうが稽古つけられてるみたいになって（笑）。

柴田　「あれ？　ちょっと待てよ。これ俺の練習？」みたいな。しかも受け身とると身体が痛いんですよ。「あれ？　俺、受け身ヘタになったのかな？」と思ったんですけど、よく考えたら普通の床にアマレスのマットしか敷いてないんですよ。だから身体がすげえ痛くて。で、最後ダブルアームスープレックスで投げられたんですよ、締めで。腰痛めました。

井上　危ないなあ。

柴田　受け身とったの僕ですからね。

ガンツ　そこで柴田さんが悶絶してるのを見たからか、このシリーズで船木さん、ダブルアームをフィニッシュで使ってますからね。

柴田　ホントですか？　腰痛めたかいがありました（笑）。

井上　本来、ダブルアームはフィニッシュになりうる殺人技ですからね。

柴田　プロレス技の凄さをあらためて感じました。自分の場合、場外で食らってるようなもんだったんですけど（笑）。

ガンツ　殺人ダブルアームと呼びましょう（笑）。

タコ　あと練習でロープワークなんかもしてたんですか？

柴田　いや、ラフター7のリングもロープは一応あるんですけど、プロレスのロープみたいにちゃんと張ってなくて、ダルンダルンなんですよ。だからロープに振られる練習では、ロープの反動があるかのように返ってきたり。

ガンツ　プロレスごっこみたいですね。教室の壁だけど、反動で返ってきたりして（笑）。

柴田　それで船木さんはロープに振ってのドロップキックのタイミングをとる練習してましたね。実際は蹴らずに、僕だけ受け身とって。

タコ　柴田さんのほうが勘が戻ったんじゃないですか？（笑）。

柴田　いや、鈍りましたね。固いリングで受け身とり続けてたんで、ちょっと受け身に恐怖心が出てきて。

井上　バンプ恐怖症（笑）。

柴田　完全にバンプ恐怖症ですね（笑）。

タコ　今回、プロレスの練習を一緒にやって、船木さんは楽しそうにやってました？

柴田　楽しそうでしたね！　実際、復帰したあと僕は両国、後楽園、横浜文体と3つ行ったんですけど、控室でも凄くいきいきしてるんですよ。こんなにいきいきしてるのひさしぶりに見たな、やりたいことやってるんだなって思いましたね。

ガンツ　確かにUWF、藤原組、パンクラス時代より、いきいきしてる感じがありますよね。

柴田　凄くプロレスに対して前向きなんですよ。あの船木さんが全日本プロレスの合宿所で、スクワットからやってるんですよ。若手と同じことやってるんで、凄いと思いましたね。

タコ　コンディションも若手ばりに良さそうですもんね。

柴田　コンディションは際立っていい

ですね。

タコ　いい身体してるし、肌つやもいい

柴田　お互い何をやってくるかわかん

ないわけじゃないですか。船木さんが何

叫んでました。

井上　いい見方してますね〜。

マットをめくって凶器を探すところに船木さんの魅力が凝縮されてた（井上）

ですね。

タコ いい身体してるし、肌つやもいいし。

柴田 肌つやといえば、控室で横綱（曙）が「ハワイアンより黒いですね」って言ってたのが凄くおもしろかったです。

ガンツ 日焼けにも前向きに取り組んだんでしょうね（笑）。

タコ 復帰戦のときって、船木さんは試合前とか緊張してました？

柴田 緊張してたと思いますね。20年ぶりのプロレスで、しかも鈴木さんとやるわけじゃないですか。だから、何があるかわからなかったんで、僕も一応、練習着にレスリングシューズでスタンバイしてたんですよ。

井上 えっ、ちょっと待ってください！ そんな危険性もはらんでたわけですか？

柴田 お互い何をやってくるかわかんないわけじゃないですか。船木さんが何かやってしまうかもしれないし。だから、僕はピリピリしながら、リングサイドにいましたね。

タコ 凄いなあ。

ガンツ でも、試合が始まったらみんなプロでしたね。

柴田 そうですね。リングに4人が揃ったら、全日本プロレスだけど〝新日本プロレス〟なんですよ。そこにウワッときましたし、試合前日に僕はニコニコ動画で、パンクラスでやった船木vs鈴木戦を観てたんで、グラウンドで腕十字返してヒザ十字にいったとき、ちょっと涙が出てきましたね。

タコ 変態だ！

柴田 気持ちの中で「ウォーッ！」って叫んでました。

井上 いい見方してますね〜。

柴田 それで試合後、夜中に「ひさびさにいいプロレスを観ました」って、井上さんにメールしたんですよ。

タコ この感動を共有しようとして。

柴田 ところが井上さんは観てなかったんですよ！ どこ行ってたんでしたっけ？

井上 遅めの夏休みをとって「いま石垣島に上陸中」ってメールを返したら、それっきり返信がなくて（笑）。

柴田 「えーっ！ なんで観てないんだ！」って思って。

井上 あのあと2泊残ってたんですけど、ドキドキで心から旅行を楽しめなかったから。「柴田勝頼を怒らせてしまった！」って。

8.30両国の復帰戦では、連結イスでの攻撃、さらに顔面へのストンピングなど、マッドネスな闘いぶりをおおいに見せつけた船木。この予測不能な動きだけでも観る価値はある。

マットをめくって凶器を探すところに船木さんの魅力が凝縮されてた（井上）

柴田 「井上さんも絶対に楽しみにしてただろう、どっかで観てただろう」って思ってたら、石垣島ですよ！

井上 だから東京に戻るなり、あわてて映像で観ましたからね。

タコ どういうご感想でした？

井上 一番印象的だったのは、リング下でマットめくって凶器を探すシーンですね。あそこに船木さんの魅力が凝縮されてるというか「またバグッた！」みたいな。「あいかわらず予測不能だ」とか思って。あとで武藤さんにその話をしたら、武藤さんも「何やってんのかと思った」って（笑）。

タコ 天才も困らせる行動（笑）。

ガンツ もはやシークとかシンの域ですよね。

柴田 僕はイス攻撃にビビりましたね。

ガンツ 通常のパイプイスじゃない連結イスを無理矢理、蝶野さんに投げつけたやつですよね（笑）。

柴田 両国のイスって凄く危険なんですよ。『レッスル1』で秋山（準）さんと試合したとき、僕の蹴りで秋山さんの頭が割れちゃって、怒って両国のイスで殴られたんですよ。あれがもの凄く痛くて、両国はパイプイスじゃないから危ないんですよ。

井上 すいません、柴田さん。「パイプイスじゃないんで痛い」っていうのもけっこう危険な発言ですけど（笑）。

柴田 あ！ ……僕、ちょっとそのへん麻痺してますね（笑）。

タコ まあ、より強烈なイス攻撃ということで（笑）。

ガンツ だからさっき柴田選手が「何かあるかもしれない」って警戒してた話をされてましたけど、船木さんがいきすぎちゃう可能性もあったわけですよね（笑）。

柴田 ありましたね。でも、へんな話、鈴木さんに対してはもっと仕掛けてほしかったですね。

タコ そんなに船木さんと鈴木さんの関係はよくないんですか？

柴田 僕、二人が一緒にしゃべってるの見たことないですからね。

タコ 船木さんは柴田選手とごはん食べてるときとか「ホンマ鈴木だけはムカつく」みたいなことを言ったりするんですか？（笑）。

柴田 僕が船木さんと練習し始めた頃、その前までは新日本で鈴木さんと絡みがあったんで、そういう話を僕がしたんですよ。そしたら「鈴木とは今後一切会うこともないだろう」ぐらいのことを言ってたんですよ。よっぽど何かあったんだろうなって感じでしたね。

ガンツ そういえば今年の春、パンクラス15周年の特集号を作ったとき、船木×鈴木対談を企画したんですよ。そのとき、鈴木さんのほうはOKだったんですけど、船木さんはNGでしたからね。

タコ そうなんや〜。じゃあ、船木さんのほうが鈴木さんのことをよく思ってないってこと？

ガンツ ただ、船木さんがプロレス復帰を発表したあとは、鈴木さんが「船木だけは許さない」って、リアルに言ってたってある選手に聞きましたけどね。

タコ そんな関係やったらリング内でも緊張感は当然あるし、柴田さんが言う

ように、何が起こるかわからんってとこがあったんでしょうね。
ガンツ　だから、僕らが大好きな新日本vsＵＷＦみたいな雰囲気があったんでしょうね。
柴田　ああ、確かにそういう感じはありますね。
ガンツ　いつ相手が仕掛けてくるかわからないって心構えの中で闘ってるという。
タコ　試合後の船木さんはどんな感じでした？
柴田　最後にトペで足を引っかけて、頭から落ちて記憶がないらしいですよ。でも、あのトペ失敗も等身大な感じがしてよかったですけどね。
井上　リアルな感じがしましたよね。
柴田　凄いリアルなプロレスだったんですよ。へんな言い方ですけど。人間的なんですよ、凄く。
井上　そこが新鮮だったし、俺らの世代からすると、「プロレスってこうだったよな」っていう。
柴田　そうなんです。とくに新しいことや、危険なことはやってないんですけど、プロレス本来の魅力が感じられたんですよね。
ガンツ　だからホントに80年代のプロレスラーを冷凍保存して、20年ぶりに解凍して出てきた感じなんですよね。
井上　コンディションのよさも感覚も、あの当時の新日本の若手だよね。
柴田　横浜のときのトップロープからのドロップキックとか見ました？
ガンツ　見ました見ました。
柴田　凄くきれいでしたよね。
ガンツ　あれは〝青春のエスペランサ〟時代の高田伸彦のそれですよね。打点が高くて速くて横飛びっていう。正面飛びの〝三沢式〟じゃない新日式のミサイルキック。
柴田　そうなんですよ！
タコ　よくそこまで保存されてたな。
ガンツ　だから船木さんの試合観て、80年代の新日本なんで、なんか猪木さんのプロレスに近い気がしたんですよね。猪木さんのプロレスってこんな感じだったなって。危うさとかも含めて。
タコ　どっかにイレギュラー感があるよね。
ガンツ　アントニオ猪木もトペしたら、豪快に失敗しそうじゃないですか（笑）。
井上　トペ失敗といえばさ、船木さんがまだ10代の頃、『サマーナイトフィーバー・イン・国技館』で小林邦昭とやって、あのときもトペ失敗してなかった？
ガンツ　いや、トペ失敗は小林戦じゃなくて、年末の『イヤーエンド・イン・国技館』での山田恵一戦だと思います。
井上　あ、そうだそうだ！　骨法対決だ。
柴田　そんなことまで覚えてるんですか（笑）。凄いなあ。
井上　その記憶があるから、このあいだ

その高さ、スピード、フォームともに満点である船木誠勝のミサイルキック。かつて第二次UWFでボブ・バックランドに放ち反則負けになったことがあったが、これからは船木の代名詞となるか。

冷凍保存された80年代のレスラーが解凍されてよみがえりましたね（ガンツ）

のトペ失敗について、みんな「緊張したんだろう」とか「勘が鈍った」とか言ってるけど、俺は「違う！　船木にトペは向いてない！」って思ったんですよ。
柴田　たぶん、引っかかった原因としては、勢いがよすぎるんですよ。
井上　で、トペ失敗の本人の弁は「リングが行かせてくれなかった」って言ってるんだよね。そのへんの解釈がもう抜群でしょ？
柴田　抜群ですね。
井上　リングが「もうおまえは外に行くな」、「ずっとこのリングにいろ」って言ってるんだと思うっていう。そのへんの言い回しも含めて、「船木が帰ってきた！」って感じで。
柴田　そういえば後楽園の試合のあとにコメント出してたんですけど、凄く長いんですよ。
ガンツ　いつまで経ってもしゃべってるんですよね（笑）。
柴田　コメント終わったら、2試合ぐらい終わってましたから（笑）。
井上　稔戦ですよね。その試合の模様を『週プロ』で見たんですけど、バックドロップで勝ったあと、船木さんがリング上で稔に何かささやきかけてるわけですよ。そのあとバシーンって、張って。あれ見て「まだやってる！」って思って、うれしくなりましたね。
ガンツ　この２００９年に〝謎かけ〟をやってますか（笑）。
井上　で、あのささやきを、試合後マスコミから「何を話していたんですか？」って聞かれたら、「『共闘しないか？』って言ったんだけど、断られたから張った」って（笑）。
ガンツ　稔にしたら、そんなことをいきなり言われても困りますよね（笑）。
タコ　流れを無視して（笑）。

柴田　田中さんも「一緒にやろう」って言われて、絶対うれしいはずですよ。むしろ行きたいはずだと思うんですけど……。

ガンツ　突然リング上で言われても、自分の意思だけじゃ決められませんって話ですよね。いまはブードゥー・マーダーズで頑張ってるのに（笑）。

井上　だからメチャクチャなんですよね。

柴田　それが凄くリアルでおもしろいんですよ。リアルなのに、ファンタジーなんですよね。

井上　で、ここが肝なんですけど、「やってる本人、大まじめ」なんですよね。奇をてらってるわけではないっていう。ごくごく素直な気持ちからの行動なわけですよね。「共闘しよう」っていう。

ガンツ　だから船木さんのプロレスって、「この意味はなんなのか？」っていう、『週刊ファイト』が必要になってくるんですよ（笑）。

井上　そうそうそう！　だからマイクなしのレスラー間の掛け合いっていうのもひさしくなかったよね？

タコ　そうやね。いまは「リングで起こったことは、全部わかりやすく伝えましょう」っていうのが、よくも悪くもいまのプロレスだから、あまり謎がないけど。リング上で囁いて、顔を張るって観客からしたら謎だらけやもんな（笑）。

井上　昔、UWFのリング上で試合後、前田さんが船木さんにささやきかけてるのと同じことだからね。

ガンツ　昔のUWFはそういうこと多かったですよね。伝えたいことは、リング上で観客に聞こえないように、それでいてささやいてることはよくわかるように伝えるという（笑）。

タコ　いまのプロレスはリング上私語禁止やから。

井上　私語厳禁でしょ？　船木さんはそうじゃないんだよ。

柴田　だから、船木さんをできるかぎり自由にやらせてほしいですよね。

井上　ホントそうだと思うよ。

ガンツ　武藤敬司はそれがわかってる感じがするじゃないですか。

柴田　そうなんですよ！　そうなんですよ！

井上　だから今回何が凄いって、武藤敬司の株が凄い上がってるよね。

柴田　僕も「武藤さん凄い」と思いましたね。

ガンツ　あの懐の深さは馬場・猪木級ですよ。

井上　だから船木誠勝から、試合のフォームやバグるところに猪木さんが見えて、武藤敬司からもマッチメイクのセンスや、いろんな部分を許容しているところに、猪木さんが見えるんですよね。

タコ　若手とタッグを組んだときの猪木さんやったね。

ガンツ　船木さんには、その〝猪木化〟がさらに進んで、〝キラーイノキ〟になるところが見たいですね。

タコ　キラーフナキは凄そうやな（笑）。

ガンツ　船木の流血戦とかデスマッチとか凄く見たいですよ。凶器だって、上田馬之助ばりに包丁を持ち出す可能性すらありそうだし（笑）。

井上　維新力戦だ（笑）。

タコ　そういう危険な香りはあるよなあ。柴田さんは、今後の船木さんはどうなっていくと思いますか？

柴田　わかんないですね。でも、凄く楽しみです。僕、ホントにひさしぶりにプロレス観たんですよ。いまのプロレスというものに、ほとんど興味もなくなっちゃって。だけど、船木さんのプロレスを観たら、ただ動いてるだけでワクワクしちゃったんですよね。何をするんだろうって思って。それっていまのプロレスにはない部分なんで、プロレスラーが船木さんから学ぶものって凄くあると思います。みんなが忘れてしまったものを船木さんは持ってるんで。

井上　いまのプロレスって、完全に「強いか、弱いか」じゃなくて「うまいか、ヘタか」になってますよね。それはそれでアリなんだけど、その中で、昔の新日本プロレスをやってる船木さんがフッと出てきて、どう流れが変わるか楽しみですよね。船木誠勝のプロレスに憧れる若いレスラーだってこれから絶対に出てくるだろうし。

タコ　憧れたはいいけど、何を真似したらいいのかっていうところもありますけどね（笑）。

柴田　真似できないですね。

井上　その〝真似できない〟っていうのも猪木さんですよね。

タコ　だから、こういうプロレスを観てしまうと、やっぱりいいなって思うんやけど、船木さんみたいなプロレスラーが次々出てくるかって言ったら難しいもんね。

柴田　船木さんみたいなレスラーは最初で最後じゃないですかね。時代の流れなんかも最初で最後だと思うんですよ。プロレスからスタートして、総合格闘技が生まれて、またプロレスに帰ってくるっていうのは。

タコ　でも船木選手みたいな魅力ある人間を作ろうとして、最初の2年間プロレスをやらせて、そのあとに5年間総合やらせて、またプロレスに復帰させたら、ああなるかっていったらならないですよね。

柴田　ならないですね。

タコ　船木さんの個人的な資質と時代背景、それらか数奇なプロレス人生があいまった結果なんでしょうね。

柴田　いま、プロレスをやってることが不思議ですから。

井上　そういう中で、船木さんが見せたような僕らの好きなプロレスを唯一期待できるとしたら……やっぱり柴田さんなんですよ。

ガンツ　プロレスのリングで船木vs柴田戦っていうのもメチャクチャおもしろそうですよね。

柴田　ビッグマウスのときはそれを目標にやってましたから。船木さんとできるんだと思って頑張ってたんですけどね。

船木のプロレス本格復帰となる先シリーズの開幕戦で、かつての藤原組の新弟子である稔と対戦。バックドロップで勝利したあと、リング上で何やらささやきかけ、そのあとで顔面をおもいきり張るという謎の行動に出た。マッドネス！

〝私語厳禁〟であるいまのプロレスで船木さんだけ〝謎かけ〟をやってる（タコ）

ガンツ　柴田さん、船木さんともし対戦するとしたら総合でやるよりもプロレスでやるほうが怖くないですか?

柴田　ああ！　そうですね。プロレスのほうが、船木さんの可能性が無限に広がるんで。それこそ場外でダブルアームされるかもしれないし。

ガンツ　総合のほうがまだ対策の立てようがありますよね。

柴田　そうですね。総合ならルール内のことしか起きないですけど、プロレスの船木さんは対策が立てられないですね。しかも、いまの船木さんはプロレスでもレガース着けないで、生ズネですからね。蹴られた選手は相当痛いと思いますよ。

タコ　だから船木さんの試合は、誰とやってもイレギュラーが起こりそうで、誰とやっても興味深いですよね。

柴田　そうですね。このあいだ後楽園に観に行ったとき、GK金沢さんが「夢のカードってまだ残ってたんだね」って言ってたんですよ。船木さんvs誰かって、それが誰でもおもしろいじゃないですか。

タコ　武藤、蝶野、ライガーといったかつての同期との試合もおもしろいし、あれだけコンディションがいいから、いまの現役バリバリの選手とやってもおもしろそうやしね。

ガンツ　だから、たとえばKENTAとか丸藤（正道）なんかとやったら、メチャクチャおもしろいですね！

柴田　それはおもしろいと思いますよ。あとは永田vs船木戦っていうのも観たいですね、どういうことになるのか。

船木さんに刺激を受けて僕がプロレスをやるかどうかは言いたくないですね（柴田）

タコ　でも、船木さんからすると、永田さんはかなり後輩なんだけど、プロレスのキャリアでは先輩という、非常に微妙な距離感ですよね（笑）。

柴田　でも歳は同じぐらいなんですよね。

井上　ホントだ、ほとんど同い年だ。

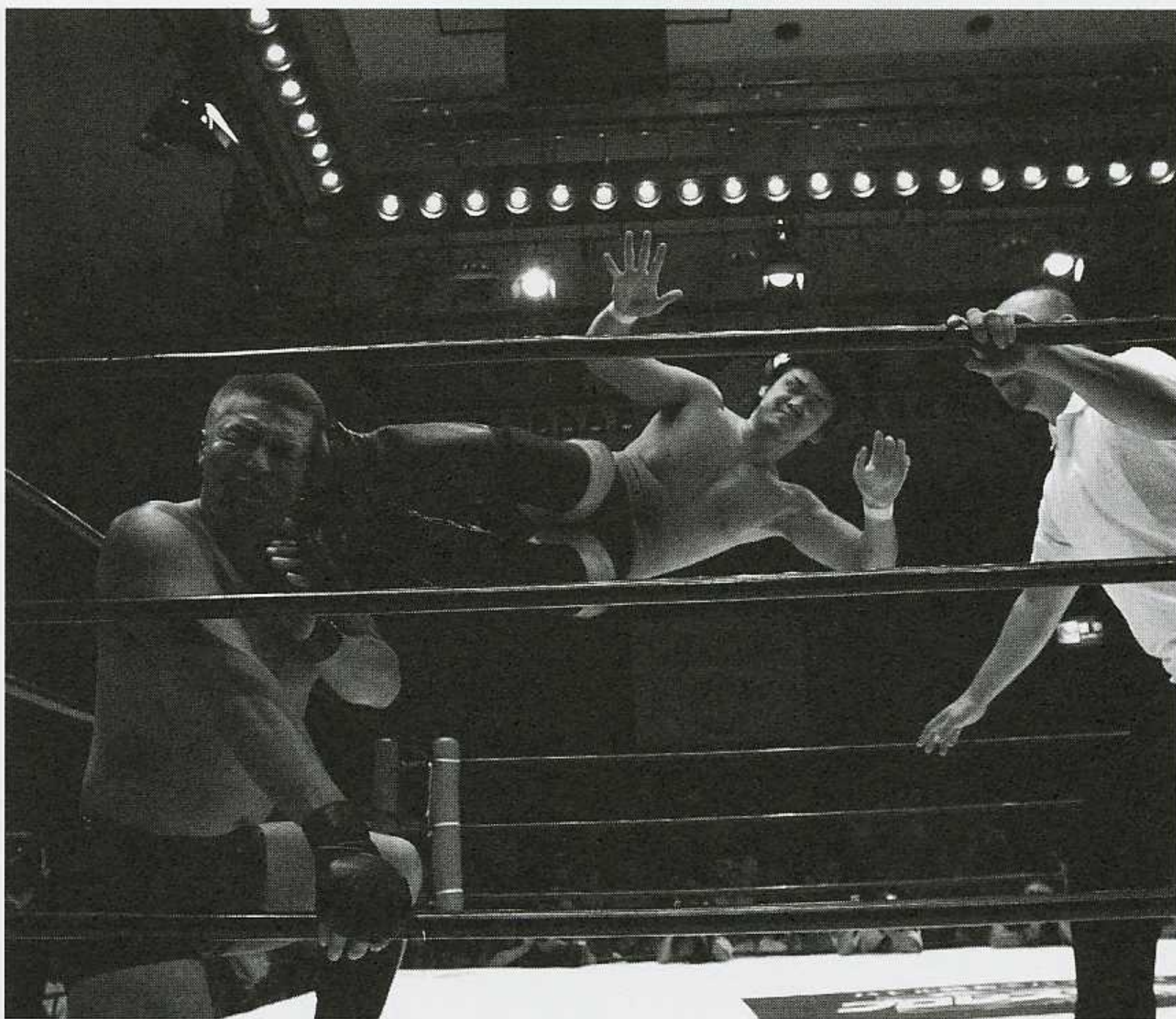
ガンツ　確か永田さんのほうが一つ上ですよ。

タコ　そうなんや。15歳でデビューしたゆえのことなんですけど、興味深いですよね。

ガンツ　大卒でプロレス入りするのと、感性も違うでしょうしね。

柴田　若いときの感覚で寮に入るのと、ある程度大人になってから入るのは、全然違うと思いますね。失礼な言い方かもしれないですけど、凄く純粋な感覚のまま入ってきてると思います。

ガンツ　ちょっと前まで中学生だった少年が、プロレス界というシャバじゃない世界に放り込まれて、山本小鉄さんに社会人教育まで受けるわけですからね。

井上　「人生はプロレスだ」と。

05年から06年にかけて、ビッグマウスのリングでケンカ格闘プロレスを展開していた柴田。はたして"師匠"船木とプロレスのリングで対戦することはあるのだろうか？　ぜひ期待したいが……。

柴田　船木さんのプロレスはそれが見えるんですよ。プロレスを通じて人生が見える。でも、ほかの人は見えないんですよ。なんか作られたキャラクターみたいで。船木さんはそのままじゃないですか。

ガンツ　あんな複雑なキャラクターは、作ろうと思っても作れないでしょうね（笑）。

井上　で、いま柴田さんはバリバリ総合をやられてますけど、船木さんの復帰戦を観て、またプロレスをやってみようという気持ちは一切ないですか？

柴田　それはちょっと……秘密にしたいですね。なんとも言いたくないですね。

井上　ああ〜、その答えがもう船木っぽい！（笑）。

タコ　ほんまや、師匠っぽい。

柴田　そこは言いたくないですね。

井上　こういう答えが返ってくるだけで、なんかうれしい！

ガンツ　90年代頭ぐらいの『週プロ』な感じですよね（笑）。

井上　うん、「それは×××で」。

ガンツ　シッシーがやるインタビューみたいな感じで（笑）。

井上　柴田さんっていま29歳ですよね？

柴田　はい、今年30歳です。

井上　その歳で、我々30代後半の"変態世代"と同じマインドっていうのが不思議なんですよ。やっぱり変態は連鎖してるってことなんですかね。

柴田　きっと変態の末裔っていうか、僕のルーツをたどると変態なんでしょうね（笑）。

井上　変態直系なんだ（笑）。

タコ　20代以下なんて、プロレスラーもプロレスファンも、変態が絶滅の危機にある中で、現役選手で僕らの"スパイ"が紛れ込んでると思うと、素晴らしく貴重な存在ですよね。

ガンツ　なんか船木プロレス復帰をきっかけに、我々変態が愛したプロレスが戻ってくるかもしれないですね。

柴田　船木さんが起爆剤になることって、あると思います。

井上　ガンツくんも『kami-pro』辞めて、俺と一緒に『週プロ』のバイトからやり直さない？　それで徹夜で夢の活字プロレスを語り合ったりしようよ（笑）。

ガンツ　やっぱり『週プロ』自体を、一編集長直系の変態雑誌にしないと、活字プロレスは復活しませんかね？

井上　クラスマガジンの中でそういう危険なムーブメントを起こしていくのが、遠回りだけど近道というか。絶対に入れてくんないだろうけど、『週プロ』の編集長に「あと5年待て」とか言われたりして（笑）。

ガンツ　リング上は船木さんや柴田選手に変えていってもらって、我々はプロレス雑誌を変えていく、と（笑）。

井上　いますっごいくだらない妄想なのに、ちょっと身体が熱くなった（笑）。

柴田　でも、船木さんのプロレスを観たら、プロレスはまた変わるんじゃないかって思いますよね。

ガンツ　変態ルネッサンス、80年代プロレスルネッサンスですよぉぉ！

井上　その「ルネッサンス」って言葉自体が、昔の『週プロ』みたい（笑）。

タコ　では、変態が住みやすいプロレス界になることを願ってお開きにしましょう。柴田選手、ありがとうございました！

【09年10月8日／都内『kami-pro』編集部にて収録】

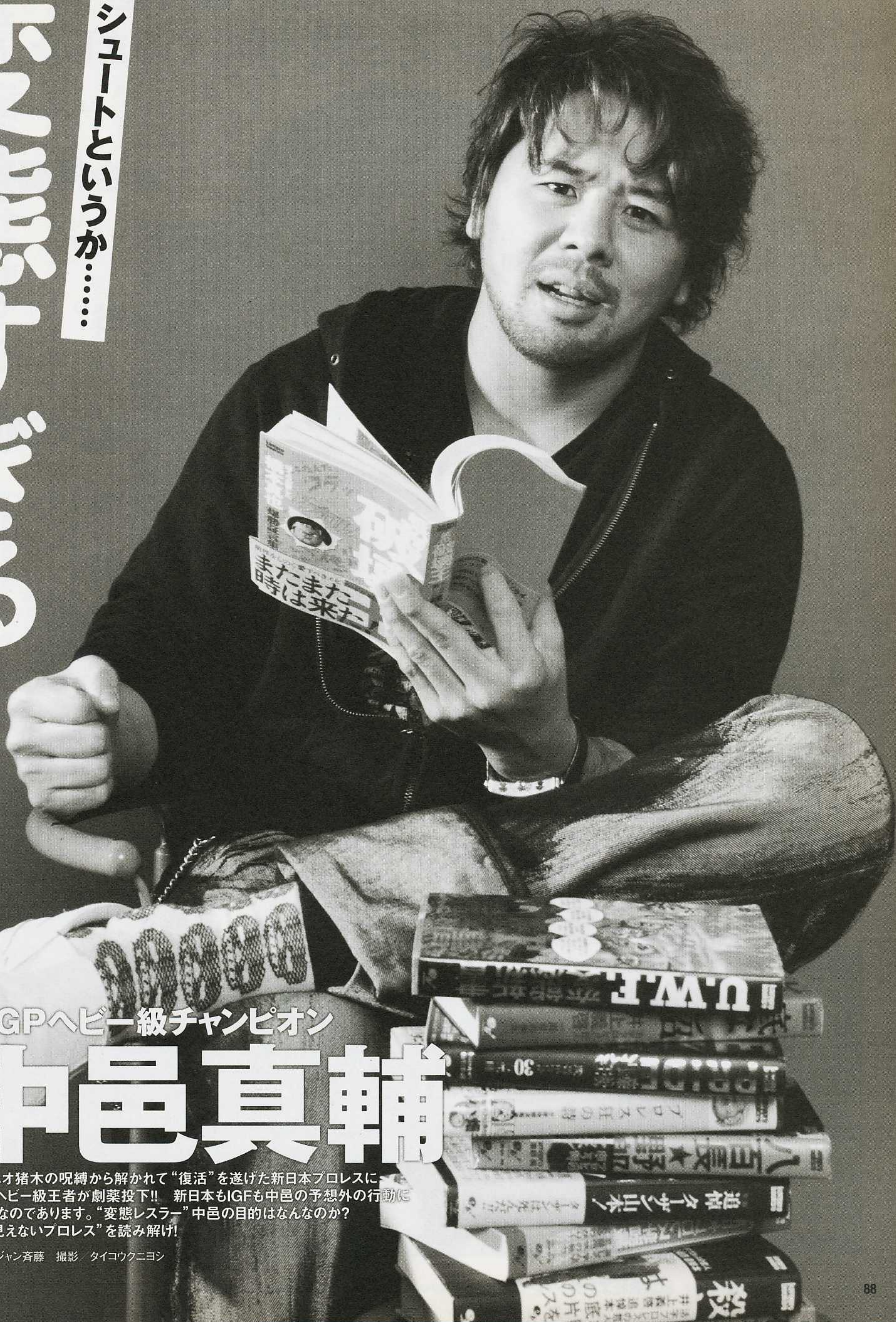
シュートというか……

変態すぎる

IWGPヘビー級チャンピオン

中邑真輔

アントニオ猪木の呪縛から解かれて“復活”を遂げた新日本プロレスに、IWGPヘビー級王者が劇薬投下!! 新日本もIGFも中邑の予想外の行動に大混乱なのであります。“変態レスラー”中邑の目的はなんなのか? “先の見えないプロレス”を読み解け!

聞き手／ジャン斉藤　撮影／タイコウクニヨシ

〝打倒・猪木〟の裏側!!

中邑真輔といえば、現IWGPヘビー級チャンピオンであり、棚橋弘至と並んで新日本プロレスを支えるトップレスラーである。が、あんなカッコよさげなイメージは嘘っぱちだ!(たぶん)。

『kamipro』的には、中邑は〝プロレスのド変態〟でしかないのである。変態的ファンがプロレスラーになった。それが中邑真輔なのだ。先日、NHK FMラジオで10時間以上にわたって放送された『プロレス・格闘技テーマ曲』三昧でも、マネージャー・若松が奇天烈なラップを繰り返す「ストロングマシンWe are No.1!」をリクエスト。IWGPの防衛戦前に何をやってるんだという話である。

さて、そんな中邑が突如「打倒・アントニオ猪木」をブチ上げた。猪木が所有する初代IWGPのベルトの奪還を宣言。これに対して猪木が主宰するIGFサイドも応戦。小川直也、ジョシュ・バーネットらがリングでの対戦を要望するが、どうも空気がへんなのだ。

もともと新日本はIGFや猪木さんとの関係がよろしくない。今回の中邑の宣言も〝なかった〟ことにして進めようとするムードがある。よくプロレスでありがちな対抗戦の雰囲気ではない。見切り発車、つまり着地点が見出せないまま中邑が走りだしてるんじゃないか。この先の見えない行為の裏に潜む野望は何か? 教えて変態!!

マスコミにはそれぞれスタンスがありますからね。好きに解釈してください

——今回の中邑さんの行動は、これまでのプロレス界には起きたどの出来事にも当てはまらないものだと感じたのでお話をうかがいに来ました!

中邑 そうですかね?(笑)。

——なんかあまり心当たりはないんですね。

中邑 まあ、あの発言以降、まだしっかりとした取材をしてないんで、ちゃんと明確なことを言えてないんですよ。だから意味をはき違えるというか、勘違いしてるというか、ボクに対戦をふっかけてくるヤツはいっぱいいますけどね。ただ、ボクは言ってることに一貫性は保ってるつもりですけど。

——あの〜、いきなりもの凄くつまらないことを聞いていいですか?

中邑 はい。

——中邑さんはIGFもしくは猪木さんとのあいだにラインがあったうえで何かやろうとしてるんじゃないかって思ってるファンは多いんですよね。

中邑 まったくないですね!

中邑のアピールに即座に反応したIGFサイドは、11.3JCBホールへの来場を呼びかける。「中邑、IGFに参戦!」と思いきや、中邑はあっさりと拒否。いったい何がどうなってるんだ?

——ないんですか。一部で流れている「中邑が猪木さんに電話をした」という情報も、じつは〝猪木さんの誤解〟だったみたいですし、そうなるとますますおもしろいなあ。

中邑 だから昨日もコメントで出しました。「IGFの11・3JCBホール大会には行かないよ」って。

——IGF側は来場をリクエストしてますね。

中邑 ボクは最初からIGFって言葉は出してなくて、一貫してアントニオ猪木の名前しか出してないんです。自分が闘いたい相手にメッセージを届けたいっていうか、いろんなこじつけから強引に「中邑がIGFに挑戦」とかって言ってますけど、何を言ってるんだ、と。

——あのマイクアピールは社内からも社外からも、もの凄く反響があったと思うんですよね。

中邑 はい。ありましたね。

——新日本的には一切なかったことにしたい意思を感じますし。そこで中邑さんがやろうとしてること、やりたいことが伝わってる感触はあるんですか?

中邑 まず、ボクは〝アントニオ猪木〟の名前を出したわけじゃないですか。まあ旧IWGPのベルトっていうのはアントニオ猪木と向き合えばついてくるみたいな話で、あくまできっかけ、導入にすぎないですよね。だからIWGPのベルトに輝きを取り戻すイコール、プロレスに輝きを取り戻すって意味なんですよね。その光を自分は取り戻したいっていうだけなんですけども。……フフフ!

——な、何がおかしいんですか?(汗)。

中邑 いや、言葉を選びながらしゃべらないと。まあ、あとはマスコミがどう伝えるか、どう解釈するかになるんですけど。

——ボクがニュースを読んでまず思ったのは、中邑さんはべつに猪木さんじゃなくてもよかったんじゃないかなって。

中邑 猪木さんじゃないとダメでしょ。

——いや、最初から猪木さんが目標なんじゃなくて、いまおっしゃられた「プロレスに輝きを取り戻すため」に必要なのが猪木さんなんだろうな、と。最初から猪木さんと闘いたいとか、IGFと何かやりたいとか、旧IWGPのベルトがほしいとかじゃなくて、中邑さんがやりたいプロレスを実現するためには、猪木さんの名前を出すのが一番てっとり早いんじゃないかなって。違いますか?

中邑 ……フッフッフッ。

——あ、また笑われた。

中邑 まあ、マスコミにはそれぞれスタンスがありますからね(笑)。好きに解釈してくださいよ。でも、こういうアプローチはなかったですね。

——なんだがバカにされてる気がするなあ。でも、猪木さんじゃなかった

ら……。

中邑　『kamipro』さんの考えに乗っかるなら、猪木さんじゃないとたぶん成立しないでしょ。

——仮に新日本プロレスとIGFが正面から向き合ったうえでのこういう行動だったとしても成立しないと思ったんです。失礼な話かもしれないですけど、それいう関係性の出来事だったら、こうやって取材にも来てないと思うんです(笑)。

中邑　さすが『kamipro』(笑)。

——で、いまこういう時代になぜ中邑さんがこういうわかりづらいことをわざわざやってるのかっていうことに凄く興味あるんです。それはいまの新日本プロレスに不満があるのか、それともプロレス界に不満があるのか。

中邑　まあ両方でしょうね。プロレスって現時点でどこを見回してもホント頑張ってるし、まっとうにプロレスをしている団体もありますし、もの凄くレベルアップしてると思います。その中で我々レスラーはなんのためにプロレスやってんだ、と。そこはハッキリ言わしてもらいますけど、確実に金じゃない。

——お金じゃないですか。

中邑　自分はなんなのか、何者なのかっていうところを確認、もしくは証明するためにみんなリングの上で闘ってると思うんですよ。だからその中で世間に届けさせる、プロレスを認めさせるっていうのは、自分がずっと掲げてきた目標だったわけなんですけども。やっぱり渦だったり爆発だったり、一つのエネルギーを発さなきゃいけない。それが今回の行動に結びついたと思いますね。

——ただ、この2009年のプロレス界において、自分の行動を理解してもらえるのかなっていう不安はありませんか?

中邑　でも、そういうものを見せていかなければ、そして知らなければ理解しようとも思わないし。みんなホントに命をかけてやってるわけじゃないですか。いろんな批判にさらされながらも自分の信じる道を、自分自身の人生をこのリングで表現しようとしてるわけじゃないですか。だってプロレスラーになろうと思った時点で、「普通がいい」とか「平穏無

中邑のアピールにアントンはあまりピンときてない様子。IGFサイドの関係者も「これで中邑の件はオシマイ」と終戦ムード。ここから何か動くかとは永久電機ばりに考えづらいが……。

自分は何者なのか。その確認、証明のためにリングの上で闘っているんです

事に暮らしたいな」っていう部分はどっかに置いてこなきゃいけない部分は確実にあるじゃないですか。

——そうですね。

中邑　でもやっぱり、ちょっと有名になった、ちょっとお金が入ってきた、ちょっと何かしら余裕ができたっていうところで安定を求めちゃったら、そこで何もかもが失なわれると思うんですよね。実際、自分もそういう時期もありましたし、いまの中邑真輔にたどり着くまでにいろんな遠回り、間違った道を進んだりしてきました。でもやっぱり本気でっていうか、まあいつも本気で考えてるつもりだったんですけども、自分の感じるところではそうなったわけです。

——でも、プロレスは一人ではできないものですよね。今回の行動って……。

中邑　(さえぎって)だからこのいまのバランスがすばらしいじゃないですか!　この空気感だったりこの不安感。これからどうなってしまうのかわからないですけど、このおもしろさは、プロレスにしか出せないと思うんですよね。

——確かに中邑さんのやりたいことを受けとめる作業って、ファンにとっては考えがいがあることですね。

中邑　昔から歴史的にプロレスを観てる人もいれば、最近観始めましたっていう人もいますし。そういう人は逆に真っ白なわけでしょ。そういう人には落とし込みやすいとは思いますけどね。で、歴史的に長くプロレスを観てても「こういうプロレスがいい」「ああいうプロレスがいい」は人それぞれ。ボクのやってることも届く人には届くでしょうし。「そういうプロレスはダメだ」っていう人がいれば、そういう主張をしてもらってボクはけっこうだと思いますね。

——社内的には、IGFとの関係が微妙なだけに「中邑はいったい何を考えてるんだ」って言われかねないと思うんですけど。

中邑　まだ現時点では皆さん様子見でしょうね。

——様子見ですか。

中邑　はい。本気で心配してくれる人もいますし、くすぶってるというか、同調したい人間もいるでしょうけども。ボクがアントニオ猪木の名前を言ったのは、プロレスを知ってる人は別として、タクシーの運ちゃんとかに「お兄ちゃん身体デカいね。プロレスラー?」「そうですよ」「どっち?　猪木?　馬場?」っていまだに言われるんですよ。いまだにですよ?

——プロレスはいまだにそんなイメージでしかない、と。

中邑　猪木さんが新日本の株を手放しました、新日本は新生・新日本として新しくやってます。その事実を自分もちゃんと受け止めてますし、異存はないですし、そこから立ち上が

変態すぎる
打倒猪木の裏側!?

ってきた部分もあるんですけど、まずは猪木さんのイメージから乗り越えてかなきゃいけないだろうっていう部分ですね。だからIGFがどうのこうのとか、そういうレベルじゃないんです。

――じゃあ中邑さんとしては明日とか明後日とか、1ヵ月後とか、そういう短いスパンで答えが出ることをやってるわけじゃないということですか？

中邑　ではないですね。そういう次元の行動じゃないです。

――IGFという名前は出してないとおっしゃってましたけど、IGF側でも中邑さんが思ってるような覚悟とか、それに見合うようなアクションを起こす選手が現われれば……。

中邑　まあ、それはそれで別掲として扱うでしょうけど。

――しかし難しい作業ですねぇ……。中邑さんはいまの自分の立場に不満ですか？

中邑　不満とか満足っていうこと自体を考えたことがないですよね。観てる人、やってる人間、周りにはいろんなものがあるんですけども、やっぱり影響を与えなきゃいけないんですよね、グサッと刺さるような。だって、そうでしょ。芸術だってそうじゃないですか。普通にきれいな絵を描いてても「あ、キレイだね」で終わりますよ。たとえばそれが「なんだこれ!?　ムカつくな」でいいわけじゃな

グサッと突き刺さるような影響をプロレスで与えなきゃいけない

いですか。

――なるほど。簡単に言うと、引っかかるっていうことですね。

中邑　そうです。「凄く感動して涙が出た」っていうんでもいいです。「凄いムカつく、この絵を外してくれないか」って相手にアクションを起こさせるとか、そういうものをボクはプロレスで出したいですよね。で、プロレスってそういう力を凄く持ってると思うんですよ。そういう何かしら心に引っかかった部分、プロレスを観に来る人もそうなんでしょうけども、そこでもっと刺しつけるようなものをほしいんです。

――いまのプロレスはきれいすぎますか？

中邑　何かを吐き出そうとしてないってことですよね。口では不満を言ってても、そういうものは毛穴からにじみ出るものですから。「おまえ不満だって言ってるけど現状に満足してんだろ」っていうのが見えなくもない。

――たとえば2000年頃、小川さんと長州さんが絡んだ一連の流れのときも、何かを吐き出していたと思うんですね。あのときの新日本っていわゆるリングを使った政治闘争だったわけじゃないですか。

中邑　あの頃まだプロレスファンでしたよ。なんかイレギュラーが起こってる感じが興味をそそりましたよね。何かタブーを見せつけられてる感じ。心にグサグサッって刺さるものはありました。

――ただ、お金を払ってるお客さんに見せるものかって言われると、まあそれは別でしたけど（笑）。

中邑　まあでもそれがストロングスタイルの一つのかたちだったのかもしれない。やっぱりね、プロレスほど難しいものはないじゃないですか。プロレスという枠組みの中で歯を食いしばって自分というものを出さなきゃいけない。一般的な格闘技にはない複雑な魅力だと思いますけどね。

――今回の中邑さんも、リング外で歯を食いしばってる感じはしますね。

中邑　プロレスっていうのをボクの中で都合よく感じとれば、リングの上でバチバチやってるだけがプロレスではないっていうことですよね。人生がプロレスなんで。

――中邑さんのやってることって、もしかしたら答えが出ないかもしれないですよね。「いったい何がやりたかったんだ!?」とも言われかねない。

中邑　叩かれる可能性はあるでしょうね。実際いろんなところからも挟まれてますし（苦笑）。非常に難しい決断だったとは思いますよ。難しい決断でしたけど、誰かの支持があるかないかとかはまったく気にはしないですね。それは単なる自分への足かせでしかないと思うんですよ。

――足かせですか。

中邑　「支持があるからやりますか」とか「支持がないからあきらめますか」とか、プロレスラーでいる以上は自分の決定事項に対して他人のモノサシを使ってしまったら自分がどんどんちっちゃくなっていくだけだと思うんです。そのまま平面化されてしまうと思うんですね。ボクは自分自身がプロレスファンだったわけですけど、ホントに観たいのは何かって考えると、やっぱり〝人間vs人間〟なわけじゃないですか。そこには複雑な感情があるわけで。そういうものはなんかのきっかけで生まれ変わると思うんですけどね。

――2000年頃の新日本って、〝人間vs人間〟の攻防がちょっといきすぎちゃって、グチャグチャになっちゃって。

中邑　その汚いものが全部削ぎ落とされて、いまに至る……って、オレ、汚いことしようとしてるつもりじゃないですからね（笑）。

――ハハハハ。今後の展開を期待してます！

【09年10月8日／新日本プロレス事務所にて収録】

なかむら・しんすけ■1980年2月24日、京都府出身。2002年、新日本プロレスに入団。プロレスと並行してMMAのリングでも活躍。本誌変態座談会にも登場したことがある。

博士のライバル（?）が11.3 IGFでプロデビュー!

水道橋博士が語る

「宮戸さんが太鼓判を押すぐらいだから期待できるでしょう!」

「“最強”を目指します!」

15歳のゲノム戦士

定アキラと

U.W.F.スネークピットジャパン

蛇の穴

宮戸優光率いるU.W.F.スネークピットジャパンから15歳の少年のプロレスデビューが決定! 11.3 IGF・JCBホール大会で、船木誠勝、中嶋勝彦に続き、3人目の15歳デビューをはたすのが今回紹介する定アキラだ。ん?、隣にいるのは浅草キッドの水道橋博士じゃありませんか!? いったい、二人はどういう関係なの? 宮戸GM同席のもと“蛇の穴”で博士を直撃!!

聞き手&撮影／阿修羅チョロ

高円寺に住んだのもスネークピットありきだから

――ページを開いて水道橋博士と、今度IGFでデビューする定アキラ選手の2ショットを見て「どういう関係なの？」と思った人も多いでしょうから、まず博士のほうから二人の関係を説明していただけますか？

博士 一応、ジムの同期入門だね（笑）。アキラくんのことは9年前、6歳の頃から知ってるんだよ。当時、俺が高円寺に越してきて、スネークピットに入門して、その頃「俺はジムで一番弱い」って話をよく日記で書いてたんだけど、実際、弱かったから、ほかの大人を避けてアキラくんを指名して、よくスパーリングもどきのプロレスごっこをやってたの。

――オモチャとかをプレゼントして手なずけようとしてたみたいですけど（笑）。

博士 そう。マーシー（田代まさし）みたいに、いつのまにかプレゼントを隠し持って渡してたんだよね（笑）。

――マーシーの小道具ばりに（笑）。そもそも、博士がスネークピットに通おうと思ったのは、どういうきっかけだったんですか？

博士 俺は運動部の経験がなかったから、自主的に運動部をやろうとしてたのね。もっと言うなら、高円寺に住んだのもスネークピットありきだから。

――えっ、スネークピットありきで高円寺にオウチを建てたんですか？

博士 そう。あとは、ビル・ロビンソンっていう存在もあったよね。やっぱり、ビル・ロビンソンっていえば、俺の少年時代の憧れのヒーローだったし、その人に接してもらえるっていうことにロマンを感じたから。

――で、実際に入門してみたら、自分より弱いのが当時6歳とかのアキラくんだけだった、と（笑）。

博士 そうなの。アキラくんのお父さんは熱心なプロレスファンなんだけど、お父さんとは、わりとよく話してたから。あれ、お父さんは何してるんだっけ？

アキラ ミュージシャンです。

博士 あ、そうだ。だから、勤め人じゃなくて、ちょっと変わってるんだよ。

――お父さんつながりだと思うんですけど、アキラくんは音楽関係の高校に通っていて、バンドもやってた時期があるんですよね？

9月15日にIGF事務所で行なわれた会見で11.3『GENOME10』でのデビュー戦が発表されたアキラくん。アントンから「『これで15歳かよ!?』って思われるようなところを見せてほしい」とエールを送られたアキラくん。やれんのか？

アキラ はい。高校の卒業の資格が取れる音楽関係の学校に行ってます。

博士 楽器は何かやってんの？

アキラ ドラムをやってました。

博士 じゃあ、〝嵐を呼ぶ男〟だな（笑）。お父さんは何の楽器をやっていたの？

アキラ 父はキーボードです。

宮戸 家には音楽用の部屋があるんでしょ？

アキラ はい。あります。

博士 でも自分が音楽家だったら、息子に音楽とか教えそうなもんだけど、プロレスラーにさせちゃうっていうのが普通じゃないよね（笑）。

――確かに（笑）。当時の博士のブログを見るとキーロックをかけたアキラくんを持ち上げたりしてるんですよね。

博士 だって、当時、俺より弱いのはアキラくんと、大学出のウラナリの井上（学）くんしかいないと思ってたからね。

――その、井上選手はいまやパンクラスのチャンピオンですからね。

博士 井上くんも最初はガリガリで弱そうに見えたもんなぁ。いまは全然やらないけど、前は井上くんともスパーリングとかよくやってたよ。

――ゆくゆくは大会とかに出てみようっていうのはあったんですか？

博士 それはないね。でも最初は凄いまじめだった。一日2回行ったり。クラスもちゃんと出てたし。まあ、その頃は仕事が忙しくなかったからなぁ。

――9年前とかだと、まだいまほど忙しくはなかったんでしょうね。ちょうどいま現在、長男のタケシくんがキックミットをバシバシ蹴ってますけど、お子さん二人もジムに通ってるんですよね。

博士 そうだね。タケシは1歳のときから来てるからね。

――1歳から！　娘のフミちゃんも会員なんですよね？

博士 そう。大江（慎）さんの娘さんと仲良しだから日曜日に遊びに来てる感じだけどね。もうすぐウチの末っ子のアキラも1歳になるしね。

――じゃあ、アキラくんも入門することになるわけですか？

博士 もちろん。生まれたときから日常にジムがある暮らしっていいんだよ。老若男女、あらゆる年齢の人がいて、学校にはない縦社会を経験するし、自分より強いヤツもゴロゴロしてるわけ。己を知るよね。それに礼儀を学ぶし、人生は常にずっと取っ組み合って闘っていくものなんだって自然とわかるからね。

――タケシくんと同じぐらいの年齢から知っているアキラくんがデビューすると聞いてどう思いました？

博士 いや、俺、最近は全然知らなかったから、「アキラくんはジムで宮戸さんから相当しごかれてる」って噂は聞いてたけど。スネークピットのレスリングのプロ練は何度か見たことはあるんだけど、「きついなぁ」って思ってた。でも「アキラくんの練習はあんなもんじゃない」って言われて。ヒンズースクワット3000回とかさ、昔のプロレス道場っていうか、要は宮戸教室なんだよね。

――アキラくんは去年の暮れぐらいからデビューを目指してプロ練に参加しているみたいですからね。

博士 その後、ちびっこレスリングの大

ロビンソン先生のように強くてカッコいいプロレスラーになりたい!

定アキラ

今度IGFでデビューする定アキラです。デビュー戦では僕の歳でも「プロレスラーは強いんだ」ってことをみんなにわからせるような試合をして、「自分もああいう選手になりたい」って、同世代の人から思われるようなプロレスラーになりたいと思ってます。同じ高校生だったら誰にも負けない自信があるし、それだけの練習をやってきたと自分でも思ってるんで。

よく、脚が太いっていろんな人から言われるんですけど、スクワットは毎日最低500回、多いときは3000回ぐらいやってるので、こんな脚になったんだと思います（笑）。でもスクワットは基本的に準備運動なので、それが終わってから立ち技から寝技まで宮戸さんにしっかり教えてもらってます。技術的にはまだまだですけど、気持ちでは絶対に誰にも負けません。

自分にとって憧れのプロレスラーは、やっぱりビル・ロビンソン先生です。小学校から中学まで教わっていましたし、父と一緒に猪木さんとロビンソン先生の試合をビデオで観たりして、強くてカッコいいなと思ったので、将来的にはロビンソン先生みたいなプロレスラーになりたいと思っています。

中学時代はちょっと悪かった時期もあったんですけど、プロデビューが決まってからは、チャラチャラした普通の高校生とは違うという自覚を持って一生懸命練習してますし、宮戸さんやロビンソン先生に恥をかかせないような試合をしようと思っているので、応援よろしくお願いします！

じょう・あきら■本名・定晃。1993年11月24日、東京都出身。小学1年生でスネークピットに入門。一時期、道を踏み外すも、中学3年からプロ練習に加わり、11.3『GENOME10』にてプロデビューが決定している高校1年生。176cm、90kg。

中学を退学させられるなんて いまどきなかなかいないよ（笑）

会とかで優勝したりしてたけど、しばらく、ジムにはブランクがあるんだよね。

アキラ　は、はい。

宮戸　これは記事にしてほしくないけど、中学時代、アキラはワルやっちゃったんですよ（苦笑）。

——それでジムに来なくなった時期があったみたいですね。

宮戸　そうなんですよ。ここだけの話、中学は退学になっちゃったの。

博士　中学を退学なんて、義務教育でしょ。いまどきなかなかいないよ（笑）。

——それは相当なワルですね（笑）。

宮戸　それでも、卒業証書はくれたんですよ。その代わり「もう学校は来なくていい」って言われて。それで遊ばせるわけにもいかないっていうんで、お父さんが「お願いできますか？」って言ってきて、去年の暮れぐらいから、またジムに来るようになったの。

——戸塚ヨットスクールじゃないですけど、スネークピットで宮戸さんに鍛え直してもらえ、みたいな（笑）。

博士　宮戸さん、その話ある程度は出していいんじゃないですか？　逆に幻想が高まりますよ。

——プロレスラーとしては、非常にいいエピソードですよね（笑）。

宮戸　そうですかね。

博士　でも、どんなことしたら中学退学になるの？

アキラ　物を壊したり、学校に持っていっちゃいけないモノを持っていったりしてたら、そうなっていました（苦笑）。

博士　なんだろう、学校に持っていっちゃいけないモノって（笑）。ケンカは強かったの？

アキラ　あまりしなかったです。ケンカしたら、かならずケガさせちゃうんで。

博士　それも凄いな（笑）。

——悪さをしていた時代にもプロレスラーになりたいっていう思いはどっかにあったわけですか？

アキラ　はい。それはありました。

宮戸　だから、そのときに聞いたんですよ。「いまでもまだプロレスラーになる気はあるのかい？」って。そしたら「あります！」って言って。「本気でやる気あるか？」って言ったら「ある」と。「だったら、こっちも本気で練習させていいんだな？」って聞いたら「大丈夫です」って。

——プロ練に参加し始めた頃は、まだ70キロぐらいだったんですよね。

宮戸　73キロぐらいだったかな。それで条件として「90キロにならないとデビューさせないよ」って言って、いまはとりあえず90キロは超えましたからね。

博士　でもホント、宮戸さんのプロ練っていうのは、正直、普通の人のまともな神経なら正視に耐えないぐらい厳しいからね。

——Uインター時代のような練習をさせたりしてるんですか？

宮戸　まったく一緒ですよ。

——Uインターと同じメニューをやらせてるわけですか！

宮戸　でも、そういう練習はアキラにしかやってないですから。井上も鈴木（秀樹・IGFでデビュー済み）もそこまではやらせてないですから。

博士　俺は井上くんのプロ練を見て、ハンパじゃないって思ってたから。だから、よっぽどなんだろうね（笑）。

——正直、逃げたくなったときもあったんじゃないですか？　宮戸さんを前にして言いづらいでしょうけど。

アキラ　一回ぐらいはありますけど、そこで逃げたらデビューできなくなってしまうので、あきらめずに頑張りました。

宮戸　学校が退学になったからもったっていうのもあると思いますよ。

博士　学校に行きながらだったら続かなかったかもしれないですね。

宮戸　学校がダメだったから、こっちで頑張らないと、「こっちもダメか」ってなっちゃうから。結局、お父さんも「お願いします！」になっちゃってるから、家に帰っても逃げ場がないわけですよ（笑）。

——宮戸さんがGMを務めているっていうのもあるんでしょうけど、猪木さん率いるIGFでデビューするって聞いたときはどう思いました？

博士　凄くうれしいですよ。ジムの風景っていうのは、何年もかけて、荒地を開拓して、畑を耕しているのを、じっと横から眺めているようなところがあるから。それが実り、収穫があるのを見られるっていうのは喜ばしいし、誇らしいよね。ジム生にとっては、俺たちの代表だしね。しかも、それが10年前から知ってる子どもだからね（笑）。

——それは感慨深いでしょうね。

博士　ましてや、自分の子どもも6歳でしょ同じジムにいるわけだし、歳月っていうのを感じるよね。井上くんがパンクラスのチャンピオンになったときも誇らしかったけどね。

——15歳でデビューという驚きはありました？

博士　「15歳でデビューできるのか」とは思ったけど、身体を見てみたら「これならできる」って（笑）。

——太ももとか凄いことになってますからね（笑）。先ほどアキラくんにはUインターと同じ練習をさせていると言ってましたけど、いまもUインターがあったとして、アキラくんはデビューできたと思います？

宮戸　できたでしょうね。

——へぇ〜、それは凄い！

宮戸　あの時代のUインターでは90〜100キロクラスの強い選手がゴロゴロいる中で揉まれながら練習できたっていう恵まれた部分はあったと思いますけど、総合的に同じ以上のことをやってますから。

——Uインターと同じ以上！

宮戸　いまの環境の中ではあのときと同じようなメニューをこなした選手っていうのは近年のこの業界ではあまりいないでしょうね。対戦する選手は何歳の子になるかはわからないですけど、高校3年生が相手になっても、ただの高1だと思って相手にしたら、15歳といえどもプロレスラー。恐ろしさを知ることになるでしょうね。

博士　そこまで言いますか！

宮戸　15歳でもプロレスラーになるわけだから、一線をクリアしたという部分で僕も認めたからこそデビューさせるわけですから。

博士　でも、若い頃から英才教育するとか親のエゴみたいな言い方をするけど、英

パンクラスバンタム級王者にして、ジムの先輩が見た定アキラ

井上 学

アキラは若いっていうのもあると思うんですけど、成長の早さを凄く感じますね。昔はスパーリングしても簡単に（一本を）取れてたんですけど、プロと一緒に練習するようになってからは、なかなか取れなくなってきてますから。デビューが決まったって聞いたときも、そんなに驚きはなかったです。宮戸さんと一緒に厳しい練習をしてるのをずっと間近で見てましたし。どちらかというと、宮戸さんがデビューすることにOKを出したことが凄いなって思いましたね（笑）。

僕はスネークピットには博士よりあとに入ったんですけど、見学に来たときに、たまたま博士がスパーリングをやってて「うわっ、凄い」って思ったんですよ。ここに入るまで、ほとんどスポーツもやってなかったし、博士の漫才を観に行ったり、ブログとかも普通に読んでるファンだったので（笑）。入門してからは博士ともお話しさせていただくようになって、自分の入場曲とかも選んでもらったり、いろいろとお世話になっていて。今回、同じページに出れるってことで、本が発売されたら実家に送ろうかなって思ってます。

選手としては、しばらくケガで欠場してたんですけど、10月25日にディファ有明で大石真丈戦が決まってるんで、修斗の元チャンピオンにしっかり勝って、上の舞台でも闘ってみたいっていう目標はありますね。アキラに負けないように自分も頑張ります！

いのうえ・まなぶ■1978年11月1日、愛知県出身。上智大学外国語学部在学中にスネークピットに入門。05年パンクラス・ネオブラッドトーナメント・フェザー級優勝、08年12月に川原誠也を下し、パンクラス初代バンタム級王者に輝く。167cm、62kg。

才教育をしてないプロのスポーツ選手のほうがいまは少ないわけだから。

——亀田兄弟にしろ横峯親子にしろ、プロで活躍している選手は英才教育を受けてる人がほとんどですからね。

博士　最初のきっかけっていうのは間違いなく親が持ってるからね。それに、プロになるための練習を耐え抜くのは親の意思じゃなく、その後の子どもの意思だと思うし。

——自分の意思じゃないと続かないでしょうし。

博士　絶対続かない。でも、アキラくんのお父さんは、もともとプロレスに凄いロマンを持ってる人だから。やっぱり、いまの時代、普通なら子どもをプロレスラーにしようなんて思わないじゃん。

——普通は思わないですよね。

博士　そういう意味では、思い入れと理念があるから、スネークピットを選んで入ったんだろうし。

宮戸　お父さんは10年ほど前かな？　初めてアキラを連れてきたときに「じつは僕、宮戸さんのプロレスに対する考え方、好きなんですよ」とおっしゃってたんですよ。

——それこそ、世代的に猪木さんやロビンソン先生のやっていたプロレスが好きだったんでしょうね。

宮戸　当然そうでしょう。だから、このあいだアキラの記者会見のとき両親も来られてたんですけど、お父さんは「まさか、アキラに猪木さんに会わせてもらえるとは思わなかった」って言ってましたもん（笑）。

博士　まさに猪木ゲノムだよね（笑）。

——ホントそうですよね（笑）。

博士　それって突然好きになったわけじゃないからね。お父さんの影響で会場に行ったり、テレビで観るようになって好きになったわけだから。

——いくらお父さんが「息子をプロレスラーにする」って思っても、本人が好きにならなければ絶対無理ですからね。

博士　とくにプロレスだからね。お父さんも、憧れでリングを見上げた頃のファンじゃなく、現状のマット界の冬も知っているし、リング外の過酷さを含めて、もう酸いも甘いもわかってるでしょ。だからプロレスを観てきたことによって得た人生観で、時代の流れの中で、失なわれたプロレスの魅力みたいなものを子どもに託してみようっていうのは、いまどき、凄い覚悟があるよね。俺なら、かなり親として迷いますよ。

——その結果、デビューの場が猪木さん率いるIGFっていうのも……。

9年前にともに闘った同期のライバルとして期待してるよ！

博士　「行けばわかるさ！」なのかな（笑）。

——では、最後にアキラくんに激励のメッセージをお願いします！

博士　やっぱり、プロレスラーになるってことは、今後、長～い大河ドラマを背負っていくことだからね。いまはその序章の中にいるんだろうけど、一度プロレスラーになると、生涯、人生の力比べをさらして、観客からの視線に追われることだから。それが、どんだけ大変なことかっていうのは、もう40代後半の俺には凄くよくわかるんだよね。

——序章ってことでいうと、博士はアキラくんの、ホントの序章から見てるわけですからね（笑）。

博士　そうだよねぇ……（しみじみと）。プロレスラーって、ほかのスポーツみたいにピークの一瞬を見せるわけじゃなくて、浮き沈みも含めて、人生の縮図を見せていくものだから。もちろん、ベテランの描く人生の黄昏にも興趣ももちろんあるけど、アキラくんは、その若さの特権で、否応なく、輝かしい青春を見せつけてくれるわけだからね。

アキラ　頑張ります！

博士　俺らの年代からしてみればUWFのときめきっていうのが青春だったからね。選手がみんな若くて、いままでの日本のプロレス界になかった部分を過去の記憶をたどりながら、未来を開拓していったフロンティアだった。未来を切り開く船にファンも一緒に乗り込むような気持ちがあったわけじゃない？

——ありましたね。

博士　若い世代は、自分と同世代の人間に託するってところがあるし、自分を重ねていくわけじゃない？　そのときに「どうってことねぇですよ！」って背負っていける人になってほしい。アキラくん、俺は同門で9年前にともに闘った同期のライバルとして期待してるんで（笑）、デビュー戦、ゼヒ頑張ってよ！

アキラ　はい、頑張ります！

【09年10月11日／都内・UWFスネークピットジャパンにて収録】

厳しいながらもアットホームな雰囲気が売りのスネークピット。博士の前にいるのがタケシくんとフミちゃんだ。
【お問い合わせ】U.W.F.スネークピットジャパンTEL.03-3337-1889 http://www.uwf-snakepit.com/

椎名基樹のサムライ三昧

第42回

『青木の「もう泣きません」宣言』

もともと兄弟で起業した一つの企業であったものの、ケンカ別れして別の二つのスポーツブランドとなったアディダスとプーマが、60年間も口もきかない宿敵であったにもかかわらず、和解し従業員同士の親善サッカーを楽しんだというニュースをぼんやり見ていて、迷案が浮かんだ。プーマの空飛ぶ猫の胴に三本線を入れたマークのTシャツでも作って、三木谷（浩史）社長のネット市場あたりで売れば、楽してお金儲けができるのではないだろうか。「こりゃ、まさに濡れ手に粟、いや濡れ手に砂金のボロ儲けだぞお、ウシャシャシャシャ」などと興奮していたのだが、でもそのマークどこかで見たことがあるような気がする。

よくよく考えてみれば、それは初期修斗（シューティングと言うべきか）の、シンボールマークであった。現在のうねった龍が『S』の字を描くマークに変わる前の、空飛ぶ虎のオールドスクール・シューティングのマーク（モチーフが虎から龍に変わったとき「修斗は虎じゃなきゃダメだろう、ウルティモ・ドラゴンが作ったわけじゃねーんだからよお」と非常な違和感があった）。

だいたい筆者はつい最近『タイガーアーツ』社から、件の虎マークが紫色で描かれた、スーパータイガージムTシャツを、通信販売で購入し、よそ行き用のおしゃれ着として重宝していたのをすっかり忘れていた。

浅はかな考えで、ただでさえ少ない持ち金を、浪費する愚行を食い止めてくれた修斗に、そして佐山聡創始者に感謝し、さらに自分の考えのずっと先を行く佐山聡という男の頭脳に、あらためて感服した次第である。その夜は、いつもより敬意を込めてより深く「打てという〝打〟ではなく、投げろという〝投〟ではなく、極めろという〝極〟ではない」という修斗の理念の意味を考えながら床に就き、まどろみの中でやっとその意味がわかったのであるが、朝起きるとまたさっぱり意味がわからなくなっているのであった。修行とは出直しの連続なり。

さて、今月格闘技界で最も衝撃的なニュースといえば、ヴァンダレイ・シウバの整形であろう。長州力がピアスを施したときも衝撃が走ったが、ヴァンダレイの衝撃はそれを大きく上回る。雑誌で見た「どうだい？」とばかりに微笑む、術後のヴァンダレイは、ブルース・ウィリスのそっくりさんの日本人、プチ・ブルース氏にそっくり。彼も同じく整形でその顔を作り上げたと記憶する。いったい、何を考えてそんな顔にしたかは想像も及ばないが、『UFC103』でのミルコの敗戦同様、PRIDEで活躍した選手の落日を、妙なかたち（顔）によって知らしめられたのであった。アーメン。

『DREAM・11』をひさしぶりに会場観戦した。横浜アリーナは6～7分席が埋まっており、かなりの数の観客はいるものの、PRIDEのときの熱気には遠く及ばない。それでも観客は皆熱心にリングを見つめているように感じた。

目玉のフェザー級GPは、高谷軍団とかいう人たちのあまりの汚いヤジに辟易とし、所英男を応援（左ハイでパーリングを倒した頃の高谷は好きだったけどなあ）。残念な結果であった。どうしてダウンを奪ったときにパウンドでなく三角絞めなど狙うんだあ。しかし、クートゥアーからダウンを奪って、アナコンダチョークにいったノゲイラを彷彿とさせ、それが彼のスタイルなのだから仕方ない。

ヨアキム・ハンセンを破って悲願のライト級王者に輝いた青木真也。試合後「つまらない試合ですみません」と言っていたが、そんなことはない。3度目の対決で手の内を知られながら、一本取ってしまうのだから感嘆する。シャオリン戦をムエタイスタイルで闘って判定勝ち、笹原氏に凡戦を批判されて「素人はこれだから」と憤っていた青木であったが、自分の下から極めるスタイルはもう知れ渡っていて、新たな「手の内」を獲得する必要に駆られていたに違いない。現にハンセンとの2戦目はフットチョークを完全に読まれていた。

青木は永田戦でも証明してみせたティクダウンの強さを活かした、上からの寝技に持ち込むスタイルを、このハンセン戦に向けて磨いていたのではないか。

それにしても青木の「もう泣きません宣言」にはずっこけた。何を言うかと思えば……。上田将勝の「こう見えても燃えています」にもずっこけたが、今後格闘技界は、ラッシャー木村イズム溢れる、ずっこけマイクアピールブームが席巻するかもしれない。それはともかく青木のもう泣かない宣言、大いに歓迎だ。……でも、また泣く気がする。たまには、泣いてもいいけど、泣くのはうれし涙だけね。DREAMは今後、金網を導入し、5分3R制を採用するという話もある。これまた大いに歓迎。ついでにいまだもって意味不明のイエローカードもなくしてほしいものだ。

最後にテレビ観戦した修斗で観たKRAZY BEEの矢地祐介の動きには驚いた。朴光哲が天才と評しているという解説者の弁に期待したのだが、本当に天才的な動きでうっとりとしてしまった。特に蹴りが鋭く、左ハイのダブルを繰り出したり、最後は右ハイから左ストレートという凄まじいコンビで仕留めた。まだデビューしたばかりで、強豪との対戦はないが、才能は疑いようがない。しかもまだ19歳だという。日沖発と同じく修斗のライト級（-65キロ）でありながら身長176センチ。いかにも今時の選手だ。

しかし、こういう若い選手は、若いときは軽い体重で闘っても、年齢とともにその階級に留まろうとせず、身体を大きくして、ボクシング選手、例えばパッキャオやメイウェザーのように、できるだけ上の階級で闘ってほしい。いくらなんでも気が早い話であるが、現在の小さく小さくしていく風潮を少し憂いて。そのためにはMMAのさまざまな環境が整うことが必要なのでしょうが……。

残り時間わずか4秒でヨアキムをタップさせ、見事ライト級王座を奪取した青木。試合後は「俺は決めました。もう絶対泣かない！」と泣き顔でアピールすると「トップはUFCじゃない、DREAMだ！」と勝利の雄叫び。次の試合後は青木の涙が見れるかも注目！　ぱいーん。

沈黙を破り数年ぶりに
表舞台に登場！

女帝の告白

「プロレスのことを語るのはこれが最後かも」

ブル中野

『1976年のアントニオ猪木』著者の柳澤健氏による好評連載『1993年の女子プロレス』。今回登場するのは“ブル様”ことブル中野だ。97年に現役を引退しプロゴルファーを目指してからは、ダイエット本の出版や専門誌等に何度か登場したのみで、ここ数年は、マスコミはもちろん、一部の関係者としか連絡を取っていなかったというブル様が、今回、沈黙を破り表舞台にひさびさに登場! たっぷりと“プロレス”を語ってくれました!

聞き手／柳澤健　構成／阿修羅チョロ　試合写真／平工幸雄

ブル中野こそは、女子プロレス史上最も偉大なレスラーであると筆者は考えています。

「1993年の女子プロレス」を連載するにあたって、ブル中野にはどうしても話を聞かなくてはならない、でもそれは難しいだろう、と思っていました。プロレスラーを引退した以上、自分はもう〝ブル中野〟ではない。自分は中野恵子として、ブル中野に勝ちたい。ブル中野は、そのような考え方をする人だからです。

ヒザの故障によって現役を引退したブル中野は、体重を3カ月で50キロ落とし、アメリカでプロゴルファーを目指しました。常識的に考えば無謀な挑戦です。しかし、ブル様の頭に〝常識〟はありません。ブル様はあくまでも行動の人なのです。

結果として、プロゴルファー中野恵子が誕生することはありませんでした。彼女は長く暮らしたフロリダ州オーランドでの生活をまもなく終え、日本で新しい生活を始めることになるはずです。

今年7月、全日本女子プロレス元会長の松永高司氏の葬儀にブル中野が姿を見せたことは、女子プロレスの関係者にとっては驚きでした。新しいステージに進もうとする中野恵子は、ほとんどのプロレス関係者との接触を断っていたからです。

ブル中野がメールの交換をしていた数少ない人物の中に、全女時代の後輩、伊藤薫さんがいます。

私の取材依頼は、結果として伊藤さんに窓口になっていただいて、ブル中野のもとに届きました。

伊藤さんによれば、ブル中野のもとにはこれまでにも数多くの取材依頼があったそうです。その中には非常に好条件のものもあったにもかかわらず、すべてをお断していた。だから今回、中野さんが取材を受けたのは、とても意外だった、とのこと。

おそらく、私たちはとても幸運だったのでしょう。

伊藤薫さんにも同席していただいて、池袋のホテルで行なったブル中野インタビューは、2時間以上に及びました。

初めて見たプロレスはアントニオ猪木の試合であったこと、なんと中学1年生のときに全女のオーディションに合格していたこと、女子プロレスで好きだったのはデビル雅美であったこと、極悪同盟に入って髪の毛を半分剃ったとき付き合っていた彼氏と別れたこと、17歳にして「先輩に女子プロレスを任せておいてはいけない、私が変えなくちゃ」と思っていたこと、ダンプ松本のこと、北斗たちと一緒に巡業から脱走したこと、ヒールから見たクラッシュギャルズのこと……。

興味深い話はいくらでもあるのですが、ページの都合上、誌面では「女子プロレスはなぜ、どのように変質したのか？」というテーマに沿ってまとめてあります。

ブル中野こそ、女子プロレスの歴史を変えたレスラーだからです。

キャバレーのお色気ショーからスタートした女子プロレスは〝闘う宝塚〟として完成しました。クラッシュギャルズと極悪同盟の、ベビーフェイスとヒールの古典的関係を滅亡させたのは、ブル中野とアジャ・コングの二人でした。

40年にも及ぶ女子プロレスの歴史の分岐点は90年代初頭の、ブル中野とアジャ・コングの金網デスマッチにあった、と筆者は考えています。

これまで、さまざまなプロレスラーの取材をしてきましたが、まさか、あのブル様に会えるなんて！　待ち合わせ場所に現われたブル様は100キロ以上あった現役時代の面影はなく、素敵な熟女といった感じでしたYO!!

ブル中野という偉大なるレスラー個人についてさらに深くお知りになりたい方は、大変恐縮ですが、携帯サイト『カミプロ・ムーブ』「1993年の女子プロレス外伝」をご覧いただければと思います。

（柳澤健）

――今回のインタビューは「1993年の女子プロレス」、つまり、いわゆる団体対抗戦に至るまでの状況を中心にお聞きしたいと思っています。ただ、団体対抗戦以前に、ブル様には、世代交代の波が押し寄せているわけで、「普通はここで引退でしょう」というタイミングが何度もあったと思うんです。

ブル　普通だったら何回もやめてますよね（笑）。

――下から上がってくる若いヒールもいるわけですし。肩叩きしてきた人も山ほどいたと思うんですけど？

ブル　肩、痛かったですよ（笑）。

――アハハハハ！　そのように肩叩きされてしまったブル様が、どのようにしてアジャ・コングとバイソン木村のジャングルジャックに行ってしまった流れを引き戻そうとしたのか。その点に非常に興味があります。ジャングルジャックがユニバーサルプロレスに参戦したことによって、全女の会場には、これまで少なかった男性ファンが、目に見えて増えてきたわけですよね。男性ファンはもちろんジャングルジャックを応援したでしょう。

ブル　そうですね。でも、お客さんが来て自分の試合を観てもらえば「あれ？（ほかの選手とは違うぞ）」と思わせる自信があったんで。アジャやバイソンたちに人気があっても、一時的に男性のお客さんを連れて来てるだけと思ってましたから。来た客は全部こっちがもらおう、と。

――さすが！　「いい試合を見せて、男の客は私がもらっていくよ」と思っていた、ということですね。

ブル　はい。その頃の私は、アジャの身体を使ってお客さんと話をしていたし、闘っていたと思うんです。

――アジャの身体を使って、客と話をする！　凄いですねぇ。90年8月には、後楽園ホールでブル中野＆グリズリー岩本vsアジャ＆バイソンのジャングルジャックという試合がありました。アジャ様は「凄い試合だった」と振り返っていましたが、追われる立場のブル様から見て、上り調子のジャングルジャックと闘ったあのタッグマッチはどういう試合だったんでしょうか？

ブル　あの試合はお客さんにウケたんですね。「私はアジャとはまったく違う道で行くから、そっちもその道で行けよ」と、そういう思いが伝えられた試合だったんじゃないですか。

――自分が思ったことはできた？

ブル　あの試合で初めてリングの中で泣いたんですよ。本気で。ビデオに

現役引退後の98年にブックマン社から発売された『ブル中野のダイエット日記〜19号サイズの私が9号サイズに〜』。なんとブル様は50キロの減量に成功!

アジャの身体を使って観客と話をしたり、闘っていた時期もあります

ブル様のブレイクのきっかけとなったのがダンプ松本率いる極悪同盟への加入だ。会社の意向でヒールにさせられショックを受けた時期もあったというブル様だが、頭を剃り上げヒールに徹してから頭角を現わし、クラッシュとの抗争でトップレスラーの地位を確立。当時のダンプとの関係など興味深いエピソードは『kamipro Move』「1993年の女子プロレス外伝」にて!!

ブル中野

映っちゃってるんですけど（苦笑）。

――どういう感情がこみ上げてきたんですか？

ブル　全部でしたね。寂しいとか悔しいとか。「アジャはホントに別の道を行くんだな……。これが一番いいんだよな」と。でも「まだ負けるわけにはいかないよ」という思いも当然ありましたし。

――あの試合ではグリズリーがバイソンにフォールされて、ジャングルジャックがブル様とグリズリーをペアとして超えていく、という図式でした。「悔しいけど、私は負けないよ」という思いだったんでしょうか？

ブル　そういう感じはまったくなかったですね。グリズリーやバイソンはまったく関係なく、アジャとの対立をこれからやっていくんだな、と。「いままでのことはなしね」という。

――「いままでのこと」というのは、精神的な繋がりということでしょうか？

ブル　すべてですね。極悪同盟からやってきたこととか、すべてをなしにしてここからホントに憎み合っていくんだな……っていう。

――アジャ様はブル様と闘うとき「最初の頃は怖いし、痛いし、ホントに殺してやろうと思っていた」とおっしゃっていました。でも、時が経つにつれて、だんだん変わっていった、と。あれほど危険で激しい試合をしているのに、凄く痛いことをやり続けながら、「あなたを超えたいんです！」とアジャ様は訴え、「まだそういうわけにはいかない。そんなことされちゃ、私は困るんだよ！」とブル様は返していた、と。「お互いが言葉ではなく、技で会話をしていた」と言っていました。ブル様も同じでしたか？

ブル　そうでしたね。最初はやっぱり、お互いに凄い思いや葛藤があったと思うんです。そこまで行き着いちゃうと、今度は相手の気持ちがわかってきちゃうんです。だって、毎日痛いじゃないですか。

――そりゃあ、痛いでしょう！（笑）。

ブル　「きっとあっちも痛えんだろうな……」って（笑）。試合をしててわかるんですよ。

――アハハハハ！

ブル　そのうち、「あ、こいつ調子悪いんじゃないか？」とか心配したり。それぐらいわかっちゃうんですよ。ほとんど毎日試合をしていたので。

――毎日のようにアジャ様とぶつかっていたんですか!?

ブル　金網の前なんて、一ヵ月ぐらい毎日試合が組まれてましたね。

――そんなにやってたんですか！

ブル　お互いに大きかったので、扱い方がまだわからないんですよね。それまではベビーフェイスの細いコたちを相手にしてたから。今度は同じぐらいの体型をどう相手にしていいか全然わからなくて。でも、会社もそれをわかっていたんで毎日当てていたんだと思います。

――大型の女子選手同士が対戦するためのトレーニングみたいな感じですか？

ブル　そんな感じだったと思います。

――なるほど！　ヒール同士が闘うことがなかったわけですものね。その後、大一番の金網デスマッチとなるわけですが、アジャ様と心の交流ができるようになったのは金網マッチの後なんですか。それとも、それ以前からなんですか？

ブル　どうだろう？　2回目の金網で決定的になっていったんですかね。

――個人的には、2度目の金網マッチを経て、ブル様は突き抜けてしまって「この人は神様になってしまった」と思ったんですよ。

ブル　ありがとうございます（微笑）。

――40年以上ある女子プロレスの歴史上、最高の瞬間はあの金網からのギロチンだと僕は思っています。『週プロ』の表紙にもなりましたし。

ブル　次の週はくどめ（工藤めぐみ）が両ヒジつけて目をつぶった表紙でしたけど（笑）。

――アハハハハ！（※実際、くどめが表紙になったのは翌年）。金網のときの話を聞かせてください。ブル様が金網の上に立ったときのことを、アジャ様に聞いたんですよ。「どんな気持ちで下にいたんですか？」と。

ブル　はい。なんて言ってました？

――「この人は普段どおり、あの高いところからでも、普通に落ちてくるんだろうな」と思っていたそうです。

ブル　あ、そうなんですか。

――「凄えな！　やっぱりこの人には勝てねえよ」とも言っていました。

ブル　そうですか（微笑）。

――僕はそれを聞いて、ゾクゾクしたんですね。次の質問はもうおわかりだと思います。金網の最上段に上がってどうだったんですか。練習なんかしたことないわけですよね？

ブル　ないです（笑）。金網自体が組めなかったんで、試合でやったのが初めてですね。

――自伝の『金網の青春』を読み返し

てみると、試合の前に「『そうだ！私、金網から飛び降りればいいんだ』、『あそこからギロチンをやればいい』と思って、その日はグッスリ寝た」って凄く簡単に書いてあって。僕からしてみたら、どうしてそれでグッスリ寝られるんだろう、と（苦笑）。僕には理解できないです。おかしいです！

ブル　あそこから飛び降りてギロチンをしたら、お客さんは絶対に納得するだろうな、と。

——そりゃしますよ！

ブル　「あ、これで私は借りが返せる」と思ったんです。前の金網のとき、「金返せ！」って言われたんで。

——一戦目は、ユニバーサルつながりで、外道（※当時・ブルドッグKT）さんがレフェリーをすることになり、アジャ様に有利なレフェリングをして、不透明決着になったんですよね。

ブル　そうです。「金返せ！」と言われたことが頭にあったんで、お客さんにどうやってでも「参った！」って言わせなかったら私の負けだな、と。それで「あ、金網からギロチンやればいいんだ」って思いついて。これだったら「もういいよ」とお客さんが納得してくれる答えが見つかったなって。「よかった……。もうこれで寝られる」と思ったんですね。

——それまでは寝られない日もあったんですか？

ブル　ありましたね。試合の前まではアジャの写真を家のあっちこっちに貼ってたんですよ。トイレの中にも貼ったし。

——え〜、そんなことをしてたんですか（笑）。

ブル　もう、ずっとアジャのことしか考えてなかったですね。「好きなんじゃないか？」「付き合ってるんじゃないか？」って思うぐらい（笑）。

——アハハハハ！

ブル　それぐらい金網の試合のことをずっと考えてましたね。「どうするか？　何するか？」って。

——それくらい最初の金網マッチの「金返せ！」コールが許せなかった、と？

ブル　それがすべてですね。お客さんに対してホントに申し訳ないな、と。初めての経験だったんですね。どんな会場でも「お客さんに満足してもらう」と思って試合をしていたのが「金返せ！」コールが起こったときはどうしていいかわからなくて……。

——「飛び降りるのが怖い……」とか、そういうものが吹き飛ぶくらいの屈辱だったんですね。

ブル　そうですね。とにかくもう、絶対にお客さんを納得させて「参った！」って言わせなかったら、「私はもう辞めるしかないな……」と思ってましたから。

——そこまで思い詰めてましたか。

ブル　金網から飛び降りたとき、「背骨が突き抜けて死ぬかもしれないけど、まあいいや」って感じで。だから、下のアジャがどうかとか考えてなかったです。……いま考えたら申し訳ないですけど（笑）。

——そのときはそれどころではなかった、と。実際に金網の上に立って、飛び降りる直前、合掌ポーズを決めていましたけど、そのあとに、一瞬、よろけて落ちそうになりましたよね。

伊藤薫　あのとき、私は反対側でアジャ様のセコンドに付いていたんですけど、「うわっ、絶対に落ちる！」と思いましたね。

——あの場面、ビデオとかで何度観ても「うわっ……！」って思いますよ。ご自身は「やべぇ」とかって感じだったんですか？

デビュー前はブル様のファンクラブの会長を務めていたこともある北斗晶。その後、プロレス入りした北斗はブル様とリング上では激しい闘いを繰り広げるも、リングを降りると大の親友関係にあったという。まさに"最狂"タッグ！

ブル中野

ブル　これ言っちゃっていいんですかね？

——えっ、どういうことですか？

ブル　いや、全部計算なんですよ。

——え〜〜っ、ウソ!?

伊藤　中野さん、そこは言わないほうがいいんじゃないですか（笑）。

——いや、全然大丈夫ですよ！　そこが凄いんですから！

ブル　ただ、拝んだのは計算じゃなかったですよ。

——「ちょっと後ろにグラッってやれば、客が沸くかな？」と考えてやったんですか？

ブル　ですね。金網の上に立ったら、グラッっていうのはやってみようかなって思ってましたね。

——ス、スゲェ……。

ブル　ただ、実際に「さあ、やろう！」ってなったとき、実際に凄く高かったんですよ。

——そりゃ高いですよ！

ブル　もちろん度胸はあったけど、「これで死ぬんだろうな」と思っていたし。「自分は突き抜けるんだな」と思ったとき、一瞬、自分の気持ちを引き締めるためにあのポーズが出ちゃったんだと思います。

——手を合わせながら、何を考えていたんですか？

ブル　「はい、これから飛び降ります！」みたいな（笑）。

——アハハハハ！「神様、お願いします！」とお願いしたんじゃなかったんですか？

ブル　お願いではなかったです。ここで何か一個やらないと飛べなかったんですね。

——じゃあ、神様も仏様も関係ない？

ブル　はい。あれでブル様に（微笑）。

——うまい！（笑）。「神様、仏様」ではなくて、あれで「ブル様」になって飛び降りるよ、と。凄いなあ。それで、ギロチンで落ちました。下にいるアジャ様は、下手したら死ぬかもしれないですよね。当たりどころとか悪かったら。

ブル　お尻が顔に当たったらね。でも、そのときはアジャもうまく動いてくれたんじゃないですかね（笑）。

——いや〜、動いたらかえって危ないでしょう？

伊藤　そこは信用してると思います。動くほうが危ないんで（苦笑）。

——僕、一度だけ何かの取材のとき、誰もいなかったので、「ちょっと上がってみよう」と思って、トップロープに上がってみたんですけど、びっくりしました。「みなみ鈴香はこの高さからダイビングセントーンをやるんだ。凄い」って思いましたもん。それが金網の上からですからねぇ。

ブル　あれ（セントーン）は怖いよね。背中だし。

——いや、そういう問題じゃなくて（笑）。実際にギロチンで落ちた直後は、リングに跳ねかえってそのまま

金網の青春
ブル中野

ジャケも最高な女子プロ本の名著として知られるブル中野の『金網の青春』（フジテレビ出版）。秘蔵写真満載の書き下ろし自伝。ズバリ言って必読ですよ！

立っちゃいましたけど、あのときはアジャ様を殺さずに済んだ……と思ったんですか。そうでもなかった？
ブル そうでもなかったですね（笑）。
――アハハハハ！
ブル "フワーッ"って飛んだ瞬間、私の中ではすべてが終わっていて。お客さんがこうなるだろうなということも全部わかっていて。もうその次を考えてましたね。この試合が終わったあとのこととかもあったんで。
――とにかく「金網をすぐ出よう」とか思ったんですか？

金網の上でグラっとよろけたのはじつは全部計算だったんです

ブル いまでもビデオを観ると思うんですけど……「なんでチンタラ降りてるんだろう?」って。あそこから"バタンッ！"でもいいから、すぐにエスケープしたほうがカッコよかったかなと思ってますけどね。
――じゃあ、金網の上でも「神様、お願い」という感じではなく、ギロチンで飛んだすぐあとに金網をよじ上って、また降りるときも、「お客さんからどう見えるか?」ということを必死に考えていたんですね……。凄い！ 凄いです。凄過ぎる！
ブル ありがとうございます（笑）。
――あの試合は、アジャ様から自分のほうに流れを押し戻すとかじゃなく、とにかくお客さんを納得させることだけしか考えていなかったと？
ブル そうですね。しかも、金網でアジャとの対戦だったので、試合でも魅せることを考えてました。
――凄い試合でした。心から納得しました。その日の夜とかは、大丈夫だったんですか？
ブル たしか、次の日も試合だったんですよ。金網のあとは全然平気でしたね。
――全然平気でしたか！
ブル 自分の中ではあの試合に精神を一点集中させていたので。試合後、金網のリングの中でマイクアピールで抗争があったんですよね。北斗（晶）や山田（敏代）とかが出てきたりして。
――ありましたね。
ブル 「これで終わり」と思っていたのが、「ここからまた新しいことが始まるんだぞ」というアピールがあって。私とアジャとの流れに乗ってこようとしたのがベビーフェイスたちですよね。あそこで初めてベビーフェイスが「悪役と絡まないといけない」と自覚したんじゃないですか。いままでは悪役がベビーをいじめていじめてスターになっていくという時代から、逆に自分から来なかったらここに入れない、と。私たちのほうが（選手としての商品価値が）高まったんだから、そこに自分たちから入ってこなかったら、もう自分たちは何もないんだと気づいたんだと思います。逆にあそこでベビーフェイスの時代が終わったんですかね。
――まったくそのとおりだと思います。それ以降は基本的に獄門党の時代ですからね。あと、凄く思うのが、中野さんのマイクアピールって、いつも非常に心に響くんですよね。
ブル 噛んじゃうんですけどね（苦笑）。
伊藤 試合が終わったあとは観ないほうがいいですね（笑）。中野さんは試合前と試合後とでは、とても同じ人とは思えないんで。
――どう違うんですか？
伊藤 いや、もう全然違いますよ。
ブル 情けない（苦笑）。
――試合後は「ブル様」から「中野さん」に戻ってしまう？
ブル いつも「まったく、もう……詐欺師！」「ウソつき！」ってファンの子に言われてましたね。（笑）。
――「リング上と全然違うじゃないか!?」と（笑）
ブル お客さんの前に出るとブル中野になっちゃうんでしょうね。会場に入ったときからだんだん変わっていくんですよ。
――そうでしたか。結局、ブル様は赤いベルト（WWWA世界シングル王座）を3年ぐらい巻いていたんですよね？
ブル 2年と11ヵ月ですかね。
――アジャ様との緊張関係がお互いを高め合っていく関係に変わっていき、そこに井上京子さんが入ってきて、ブル様はどこか超然とした、仏様のような存在になっていきました。そういうタイミングでアジャ様に赤いベルトが移動したと思うんですが、ブル様にとって92年11月、アジャ様に赤いベルトを獲られたことは、どういう意味を持っていたんですか？
ブル 「獲られるまでは絶対に頑張ってなくちゃいけないな」と思っていま

もやは伝説となっている90年11月14日、横浜文化体育館でのブル様vsアジャの金網デスマッチ。この試合のフィニッシュは金網のてっぺんからのダイビングギロチン。どうにかしてでも映像を観るべきだと思います！

92年11月26日、川崎市体育館で行なわれたアジャとの一騎討ちに敗れ、WWWA世界シングル王座を明け渡したブル様。かつての師匠にして宿敵のブル様からのベルト奪取に試合後のアジャは感極まってリング上で涙。

ブル中野

したね。「ずっと絶対的な存在にいなくちゃいけない」というか。私に勝ったら絶対的な自信を持ってほしいし。私自身、ダンプ（松本）さん超えができなかったんで……。

――ダンプさんは超える前にやめてしまったわけですからね。

ブル 勝ち逃げされたと思ってるんで（苦笑）。そういう思いをしてるんで、余計に「私を倒せるんだったらホントの一番になってね」という意識はありましたね。

――これは京子さんに聞いたことなんですけど、試合後、リング上に倒れているブル様のところに「中野さん！」とみんなが駆け寄って来る。その時ブル様は、「アダモちゃん……終わったよ」と呟きながら、汗も涙も全部出てしまっていた、とおっしゃっていました。「中野さんの言葉は凄く重くて、いまでもズシンと響いている」と。「とにかく『赤いベルトが重い』『全女を引っ張ってきたから』とか、そういった重圧が凄くあったんでしょうね」という言葉を京子さんから聞いたとき、「ああ、いい話だなあ」と思いました。その「終わったよ……」というブル様の思いを直接聞かせていただれば。

ブル 「自分が終わったよ」ではまったくなく、やっとアジャとの抗争を最後までやり尽くしたって感じでしたね。

――完遂できたという満足感があったわけですね。

ブル そうですね。あのときの私は強かったんで、強いままの私にアジャが勝ってたんだ、と。これでホントに赤いベルトが渡せるというか。あのときのマイクは、ホントに作りではなかったんです。

――なるほど。ブル様の言葉が響くのは、内部の人間関係と外部の人間関係とが一致している、全女の特殊な団体の在り方によるところが大きいんでしょうね。

ブル 私はウソで言っているマイクアピールはなかったですから。全部、ホントの言葉だったんで。言葉は足りないんですけど、伝わってるんだろうなって。

――ビンビン伝わってきましたよ。その後、赤いベルトをアジャ・コングが巻くことになり、間もなく対抗戦の時代に入ります。アジャ様にとっては団体対抗戦の時代というのはあまり嬉しいものではなかったと思います。なぜかと言うと、対抗戦そのものに価値が出てしまって、必然的に赤いベルトの価値が相対的に低下してしまったからです。

ブル それはあるでしょうね。

――実際にアジャ様は「私は団体対抗戦があまり好きではなかったし、『V-TOP WOMAN』もなぜこんなことをやるのか？ と思っていた」とおっしゃっていました。団体対抗戦の時代は、全女及び女子プロレスが東京ドームのよう大会場でやれるようになった点ではよかったと思いますが、ブル様からご覧になって、団体対抗戦の時代というのはどのような意味を持っていたんでしょう？

ブル アジャがベルトを巻いて対抗戦重視の流れになったとき、「私がいる場所はここではないな」と思ったんですね。たまたまいいタイミングで海外遠征のオファーも来てたんで。別に私がいなくても対抗戦は進んでいくという感じもありましたし。

――対抗戦の中で「私が何かをする」という意識はあまりなかった？

ブル なかったですね。

95年9月2日の日本武道館大会では後輩の井上京子と対戦したブル様。この試合で京子は得意のナイアガラドライバー3連発で初の師匠越え。敗れたブル様は「負けて悔いなし！ 京子は最高のレスラーだ!!」と京子を優しく抱き寄せた。

――それはどうしてですか？

ブル 私は「赤いベルトを賭けた試合で負けたあとは、引退しなくちゃいけない」という流れを違うかたちにするために、これから何をしなきゃいけないのかを考えよう、そのためには、ほかのところに目を向けていかなくちゃいけないと思ったんですね。先駆けになろうと。

――やっぱりブル様は偉人ですね……。最初にブル様がアメリカに行ったのはいつでしたっけ？ 東京ドーム大会は94年の11月にあったわけですが。

ブル 東京ドームのときには、もうアメリカに行っていましたね。

――そうか、ドーム前の8月にはWWFのリングでメドゥーサ（アランドラ・ブレイズ）と対戦してましたものね。どうでしたか、WWFのリングというのは？

ブル いろいろと大変だったけど、楽しかったですよ。

――WWFに上がるということは女子プロレス的には凄いことだと思うんですけど、当時のWWFでは、女子プロレスは男子プロレスの添え物でしかないという感じは正直ありましたよね？

ブル それは実感しました。

――日本では、常に男子以上の凄い試合を見せ、高い評価を得ていた女子プロレスが、アメリカでは添え物としてしか見られない。そこにはギャップがあったでしょう。

ブル アメリカに行ったときは、ダンプさんが引退したときと同じような気持ちになったんですね。悪役とベビーフェイスとがハッキリとわかれていて、悪役には凄くブーイングが飛ぶ。最初の頃は「絶対にこれを変えてやろう」という意識がありました。でも、そのうちに「向こうのお客さんからすると、変えられたくないんじゃないかな？」と思うようになった。

――国民性の違いですね。

ブル そうです。「この人たちは日本の文化的考えじゃないんだな」と凄く感じて。「じゃあ、楽しませてあげることを考えたほうがいいんだ」という気持ちに切り替わっていったんです。カセットテープの時代にCDを持っていって「聴いてくれ」って言われても、CDプレーヤーがないよ、みたいな感じで（笑）。プロレスのレベル的にも、日本のものを受け入れる目がなかったんです。

――ということは、アメリカでのブル様は、古典的なヒール像を演じていたわけですか？

ブル はい。まったくレベルを下げて。だから、身体的には凄く楽なんですよ。それでいてメチャクチャお客さんも湧くし。ところが日本でやっているような試合をすると、シーンとしちゃうんですね。

――日本でやっている試合の片鱗を見せると、お客さんは理解できない？

ブル 「俺たちは試合を楽しんでいるのに、どうして真剣にやっているの？」って感じで。ビール飲みながら観ているような雰囲気なんで、もっとわかりやすくて楽しいものを望んでいるというか。「憎まれ役に徹してくれよ！」と。

――なるほど。

ブル 「お客さんはそれが楽しいんだ」と感じるようになってから、そう

いうふうに変わっていきましたね。「こういうプロもあるんだな」って。
――新鮮と言えば新鮮だったと。
ブル　そうですね。
――その後、日本に戻って、北朝鮮の「平和の祭典」にも参加しますよね。あのとき参加したリック・フレアーやホーク・ウォリアーたちが「女子プロレスに衝撃を受けた」という話を、斎藤文彦さんが書いていました。
ブル　ホントですか？
――フレアーは豊田の大ファンになってしまって離れなかったとか、ホークは「オレはブルとミクスト・タッグチームを組みたい」と言っていたそうです。
ブル　へぇ～っ……、それは嬉しいですね（微笑）。
――そういう評価があったから、また96年からアメリカに行ったのかなと思ったんですけど、そうじゃなかったんですか？
ブル　それは関係なかったですね。
――そうでしたか。その後、96年2月の和歌山大会を最後に全女を離れるわけですが。
ブル　その頃はもうアメリカに行くことばかり考えていましたね。WWFとの契約が終わって、WCWに行くことが決まってたんですよ。

最後の試合はWCWでのキューティー＆尾崎とのタッグマッチでしたね

93年からはWWF（現WWE）で活躍したブル様。その後、94年に日本マットに復帰すると神取忍と女子初のチェーンデスマッチで対決し、勝利を収めているブル様。神取といえば北斗との抗争が有名だが、本人的にはブル様とのチェーンデスマッチが深く脳裏に焼き付いているという。

――WCWでも活躍されましたもんね。
ブル　WCWで女子の新しいベルトを作ることになっていて、「そこでベルトを獲ったら私は引退しよう」と思ってたんです。それを獲れば、全日本タッグ以外のベルトを全部制覇したことになるんで。
――女子プロ関連のベルトを完全制覇したら納得して辞められる、と。
ブル　そうですね。そうなれば、自分の次の（世代の）子たちも（アメリカに）行けるんじゃないかな、と思ってたんですけどね。
――そういう道も作ってあげよう、と。WCWのリングはWWFに比べていかがでした？
ブル　もうまったく違いましたね。WCWでは日本人対決だったんですよ。私が北斗とペアを組んで、キューティー（鈴木）と尾崎（魔弓）が相手で。まあ、そういう意味では楽は楽でしたけど。
――日本からの直輸入カードだったんですね。すみません、存じ上げなくて。
ブル　まったく同じカードで1日3試合とかやってたんですよ。テレビ撮りだったと思うんですけど、スタジオみたいな会場で。それを何日間かやった最後の試合でヒザをやっちゃって。そこからですよね。全部が全部うまくいくわけではないんだな、と思ったのは。
――引退のきっかけとなったのは左ヒザの靭帯断裂と聞いていますが、それは、WCWでのキューティー＆尾崎組との試合でやったものだったんですね。全然知りませんでした。
ブル　そうなんです。向こうに合わせて、ちょっとアピール多めの試合だったんですけどね。
――日本であれだけ激しい試合をしていた中野さんが、気心が知れた選手との試合でケガをしたというのは、やっぱり試合スケジュールがキツかったということも原因だったんでしょうか？
ブル　いや、そのときは北斗との相打ちだったんですよ。北斗がトップロープから場外に飛んだとき、キューティーと尾崎がそれを避けて、自分のヒザに落ちちゃって。
――それがプロレスラー生命を左右するケガになってしまったと。
ブル　そうですね。それでもその試合は最後までやったんですけど、「これはダメだな」と思いましたね。で、そのあとに咲ちゃん（長谷川咲恵）の引退ロードのシングルマッチが入っていて、そのときに「あ、もう動けないな」と思いました。日本のプロレスはやっぱり激しいし、コーナーからのギロチンもできないんですよ。脚を曲げられなくて。「これじゃお客さんに申し訳ないな」と思って、それで（リングを降りることを）考えましたね。
――そういうことでしたか……。その後、しばらくしてプロゴルファーを目指すことになりますよね。
ブル　そうですね。咲ちゃんとの試合後、もう（プロレスは）できないなと思って、その後、自分の中で半年ぐらいウダウダしている時期があったんですよ。「もしプロレスがなかったら、自分には何があるんだろう？」って考えたんですけど、何もなかったんですね（苦笑）。
――そりゃそうでしょう。それまでの人生をプロレスに捧げてきたわけですから。
ブル　いままでプロレスのことばっかり考えていたのが、いきなり自分の中から何もなくなっちゃったときにホントに何もなくなって。で、実家に帰ったんですよ。やっと家族と一緒に住むようになったとき、「15年間頑張ってきたんだから、ずっと家にいていいんだよ。とにかくゆっくり休みなさい」と言われて。そのときはヒザも悪いし腰も悪くて起きられないんですよ。階段も昇れないぐらいで。
――そんなに酷かったんですね。
ブル　普通に生活することもできない感じで。でも、いままで15年間ずっと頑張ってきたことを親に同情されているというか、「休んでていいんだよ」って言われたら休めなくなっちゃったんですよ。「何かしなくちゃいけない」と。「早く自慢の娘にならなくちゃいけない」と思って。で、何かしようと思ったときに、何もやりたいことはないけど、ゴルフだったらやってみたいと思って。
――経験はあったんですか？
ブル　以前にちょっとやったことがあったんです。次にやる仕事は「元プロレスラー」という肩書きを使うんじ

ブル中野

やなくて、ゼロから自分が努力や苦労して手に職じゃないですけど、そういう仕事を必ずしよう、と。次は一生できる仕事をしよう、と。それがたまたまゴルフだと思ったんですかね。誤って決めちゃったと思うんですけど（苦笑）。

──ゴルフも難しいですからね。

ブル　そう思った次の日から、3ヵ月で50キロダイエットしたんですよ。

──3ヵ月で50キロ！　ダイエット本も出されていましたけど、本を出すと決まっていて体重を落としたんですか？

ブル　違います。本はまったく関係なく。この世界からブル中野という存在をまったくなくさなくちゃいけないと。そうじゃないと恥ずかしくてできないと思ったんですね。ゼロからやるときにブル中野としてやってきたことは絶対にできないなって。

──引退したからには本名の〝中野恵子〟でいく、と。

ブル　そういう意識は凄くありましたね。

──この間、井上京子さんにインタビューしたときに、ブル様の体重が100キロを越えて、最高115キロになったことがあったそうなんです。ある日、ブル様が『今日ね、（ステロイドを）ちょっと打ってきたんだ。普通じゃなかなか太れないよ、アダモちゃん』って中野さんが言うんですよ」って言ってました（笑）。

ブル　アハハハハ！

──ステロイドか何かをやられていたんですか。

ブル　そうですね（笑）。

──京子さんから、そういうことも含めて「ブル様はホントにプロレスラーなんですよ」と聞いて、僕も「凄いなぁ」「プロだなあ」としみじみ思いました。

ブル　そのときは三桁になりたかったんですよ。いくら頑張っても92キロまでしか太れなくて。どうしても0・1トンになりたかったんです。

──なるほど……。ちなみにそれはいつ頃ですか？

ブル　アジャとやり始めた頃でしたね。

──クスリの力を借りてでも三桁になりたかったわけですね。身体への影響とかは考えなかったんですか？

ブル　「打ったびに寿命が縮まりますよ」ってお医者さんに言われましたけど、全然関係なかったですね。

──男子レスラーではよく耳にしますけど、女子プロでは初めてじゃないですかね。

ブル　そうかもしれないですね（苦笑）。

──個人的に印象深いのは、ドーム後の94年にやった神取（忍）さんとの女子初のチェーンデスマッチです。神取さんは自分の本の中で「自分がプロレスラーとして一番認めているのはブル中野で、チェーンデスマッチは忘れられない。中野選手とやったチェーンデスマッチは、男子の試合を含めても最高のものだったと思う。北斗との試合ばかりが評価されて、中野選手とのデスマッチが北斗の試合よりも下に見られるのは納得がいかない」と書いていました。

写真ではわかりづらいかもしれないが、こちらはブル様をはじめ全女から4選手が参戦した95年4月の北朝鮮「平和の祭典」での一枚。この遠征で健介と北斗が出会ったのは有名な話だが、ブル様にとっても非常に思い出深い大会だったという。

ブル　それはありがたいですね。

──神取さんとの試合はいかがでした？　全女とスタイルが違うからやりにくかったですか。

ブル　やっぱりプロでしたよね。何をやっても絵になるというか。器用さはなかったと思うんですけど、元柔道という自分の持ち味、自分の魅力をわかっていて。プロレス的な立ち回りはできないけど、できているんですよ。

──できないけど、できている？

ブル　器用にできていないようで、じつは一番絵になるというか。どんな試合でも、あの人は絵になっていたと思うんですね。

──なるほど。ちなみに、「絵になる」というのはムービーで考えているんですか？　それとも静止画像で考えてるんですか？

ブル　どっちもなんですけど、一瞬でもいいから、そこにいるお客さん、レフェリー、選手、セコンド、その人たち全員の目を惹きつけられる魅力があるというか。それができる人だったと思います。

──それだけ魅力のあるレスラーというと、ほかには北斗さんや京子さん、あと長与千種さんでしょうか？

ブル　そうですね。北斗なんかも絵になりますよね。

──北斗さんといえば、以前ブル様は「北斗は赤いベルトを巻ける人間ではなかった」とおっしゃっていました。そこの部分を具体的に聞かせていただきたいのですが。

ブル　北斗はいい意味で自分のことしか考えてなかったですよね。（彼女の視野は）プロレス界とか女子プロレス全体とか、そういう範囲ではなかった、と。とにかく「自分が出るためにはどうすればいいか？」ということがすべてでしたね。

──なるほど。よくわかります。

ブル　だから、北斗としても「いつ、どうなるかわからない……」という不安があったんじゃないかと思いますね。

──要するに「団体を任せてしまっては不安だ」という気持ちがみんなの中にも、北斗さん自身にもあった、ということでしょうか？

ブル　会社にもあったし、選手にもあったし。でも、もしそれを北斗に求めたら、たぶん、彼女の魅力がなくなっちゃうと思うんですね。

──エゴイストとしての魅力、みたいな。

ブル　そうですね。すべて自分のために、おいしいところは全部自分で持っていくという感じだったので。彼女に対抗してそのポジションを取れる人がいたかって言ったら、それはいなかったと思いますし。

──でも実際、団体対抗戦時代のいいところをすべて持っていったのって北斗さんじゃないですか？

ブル　そうですね。

──周りの選手は不満だったと思います？

全女は最高でしたね。あんなにおもしろいものはなかったです！

ブル　当然あったと思いますよ。その意識がなかったら（プロとして）ダメですよね。でも、北斗はホントにうまく取りますよね。

──とんでもなく頭がいい方だと思います。

ブル　それもそうだし、凄く捨て身でしたよね。「一瞬でも輝ければいい」とか「次に繋がらなくても、おいしいところを全部持っていければいい」という感じで、この輝きをずっと続けようという感じではなかったですね。神取との抗争でも、長く続けようと思えばできたのに、自分がパッと上がればそこで終わり。神取さえも斬る。「次は誰」「次は誰」と。それぐらい捨て身だったというか。逆に言うと、だから、あそこまでできたんだと思います。

──なるほど。もしブル様にお会いできたら、これだけは必ず聞きたいと思っていたことがあるんですよ。

ブル　えっ、なんですか？　変なことじゃないですよね（微笑）。

──いえいえ、大丈夫だと思います（笑）。女子プロレスを変えてしまったのは、ブル様とアジャ様のお二人ですが、もしあのまま「ベビーフェイスvsヒール」の古典的関係、クラッシュvs極悪同盟のような図式がいまも続いていたら、つまり、もしブル中野の革命がなかったとすれば、現在の女子プロレスは、もう少し大きなかたちで存続できたのではないかなと思うのですが、その点についてはどうでしょう？

ブル　もし、あのベビーフェイスvsヒールという形式でやっていたとしたら、（女子プロレスは）とっくになかったと思います。

──もう、とっくの昔になくなっていた、と。

ブル　もう会社は運営できなかったでしょうね。私とアジャがきっかけで悪役同士の試合になって……いま、女子プロレスはこういうかたち（小さな会場でしか興行できない）になりましたけど、もっと早くこうなっていたでしょうね。いま、もしベビーvsヒールをやれば、また違うかたちができるかもしれませんけど、（あの時代にそれを続けていても）ここまでは来れなかったと思いますね。

──なるほど。先日、三沢（光晴）さんが亡くなりました。三沢さんは、ある種、馬場さん的なプロレスを否定した上で、命を削るような試合を始めた。その結果、最終的にああいう悲しい結果になってしまったところもあると思うんです。私は女子プロレスの世界も似ていると思うんです。

ブル　そういう面も確かにあるでしょうね。

──（ライオネス）飛鳥さんは、ブル様とアジャ様の試合を観て、「こんなことをやっちゃっていいの？」と思ったそうです。「自分たちもジャガーさんから『あんたたち、いつか人を殺すよ』と言われたけれど、ブルたちは、さらに危ないプロレスをしている」と。それに「プロレスが雑になってきている」ともおっしゃっていました。飛鳥さんにそう感じさせてしまうところはあると思いますか？

ブル　そうですね。最近、実家に帰ってきて昔のビデオをたくさん観たんです。そのとき、ドリル仲前とみなみ鈴香の試合で「この人たち、ホントにうまいな。こんなにうまかったんだ」って、あらためて感じました。で、私たちの試合を観たら、「うわっ、なんじゃこりゃ!?」って感じで（苦笑）。

──自分はうまくなかったってことですか？

ブル　ホント、雑なんですよ。でも、あれがあの時代のプロレスだったんです。どんなに綺麗で、トモさん（飛鳥）が言っている雑じゃないプロレスをやったとしても、お客さんは少なかったですよ。きっと。

──ということは、プロレスは、自分たちが求めるやスタイルをやるわけではなく、お客さんが求めているものを見せるものだと？

ブル　と思います。でも、私たちレスラーはお客さんの一歩も二歩も上に行ってなくちゃいけないと思うんですけど。

──お客さんのニーズに合わせつつも、その上を行かなければならないわけですね。

ブル　と思います。だからといって、いまの時代のプロレスに私たちがやったような雑なプロレスをやればいいわけでもないですし。それは、（レスラーを）やっている最中に、（選手が）考えなくちゃいけない。トモさんは自分たちの時代と比べて、そういう発言をされたと思うんですけど、でも、私たちがやっていたプロレスが、いまに至るまでずっと続いているわけじゃないですよね？

──そうですね。

ブル　いまのお客さんがああいうスタイルを求めているわけじゃないでしょうし、その部分は、やっている選手たちの課題だと思いますね。

──非常に重みのある言葉だと思います。では最後に、ブル様にとって全女はどんな会社でしたか？

ブル　「最高！」じゃないですか（笑）。あんな会社、作ろうと思っても、二度と作れないだろうし。

──松永（高司）会長が亡くなったとき、そんなことが頭に浮かんだりしましたか？

ブル　そうですね。「日本の女子プロレスが本当に終わったんだな……」って感じでしたね。「すべてのものが消えちゃったな」と。でも、レスラーとしてまだやっている人もいるし、そういう人たちが、これからどう表現していくか、なんじゃないですか。

──全女は終わってしまったけど、ブル様にとっては最高の思い出だったんですね？

ブル　最高でしたね。あんなにおもしろいものはなかったですよ！（微笑）。

──羨ましいような、羨ましくないような（笑）。

ブル　その中で、たとえ一試合でも、自分で納得する試合というか、みんなの心にずっと留めておいてくれるような試合ができたっていうのが凄く幸せですね。「そういう試合を何試合できたかな？」「できた人もいるのかな？」って。私はそれができたって自信を持って言えるんで。

──それは幸せなことですね。

ブル　そうですね。そう考えると、プロレスラーとして、やりたいことは全部やってきたかな。

──これからはどうするつもりなんですか？

ブル　中野恵子としてブル中野に勝ちたいです。いつになるかはわからないですけど、そのために、やりたいことだけできればいいな、と。そんな感じです（微笑）。

──今日は貴重なお話を聞かせていただいて本当にありがとうございました！

【09年9月29日／都内某所にて収録】

ぶる・なかの■本名・中野恵子。1968年1月8日、埼玉県出身。1983年9月23日、戸田市スポーツセンターでの柳下まさみ＆小松美加とのハンディキャップマッチでデビュー。その後は極悪同盟、獄門党とヒールとして一時代を築く。90年1月にWWWA世界王座を奪取し、約3年間、王者として全女を支える。96年のヒザの故障が原因で現役を引退。以後はプロゴルファーを目指し、海外に永住。

掟ポルシェの萌え萌え女々苑DX

イラスト◎ゴローちゃん

第40回
三田英津子
（NEO女子プロレス）
の巻

みた・えつこ■1969年5月28日、東京都出身。87年に全女に入門。同年8月5日、後楽園大会での下田美馬戦でデビュー。その後、伸び悩むも、北斗晶とラス・カチョーラス・オリエンタレスを結成し、頭角を現わす。11.1NEO後楽園大会を最後に現役引退。173cm、75kg。
ブログアドレス→http://blog.livedoor.jp/etsu_neo/

おきて・ぽるしぇ■1968年5月3日、北海道出身。ロマンポルシェ。のボーカルをはじめ、役者、文筆家、DJ、俳優など幅広いジャンルで活躍中。11月4日には田代まさしとのユニット「マーシー☆ポルシェ」として『監獄ポップ』をリリース。ライブやその他の情報は掟ポルシェブログをチェック！
→http://porsche.exblog.jp/

健康にいい羅漢果の実を砂糖漬にしてラーメンの上に載せたらバカ売れ間違いなし!? そんな失敗前提外食産業戦士・掟ポルシェの『萌え萌え女々苑』拡大版、今月のゲストは11月1日NEO後楽園大会をもって引退する三田英津子様! プロレス界屈指の破壊力を持つ必殺技・デスバレーボムの開発者としても名を残す三田さんの、これが最後のラスト・カチョーラス・オリエンタビューっす!

掟　プロレスラー生活23年目で引退を決意したのは、思うところがあったんですか？

三田　この業界に入門した頃は、25歳定年があったんですけど、そうこうしているうちに定年がなくなり。でも、自分が25のときはまだ何も残せてない状態で。

掟　辞める理由どころか、まだプロレスラーとしての存在理由を示せてなかったと。

三田　25歳以降もラスカチョ（ーラス・オリエンタレス。下田美馬とのユニット名）で年齢を忘れて突っ走って、引退とか感じることなく暴れ回ってたんです。で、気づいたら「うわっ、私、こんな歳なんだ」って（笑）。

掟　立ち止まって振り返ってみたらとんでもない距離を突っ走ってたと。

三田　新人のときから雑草のような感じで、いつリタイアしてもおかしくなかったと思うし。会社から肩を叩かれるのか、自分から会社に言うのかっていう感じで。

掟　「そろそろ、『しじゅうから』の店長にならないか？」って（笑）。

三田　アハハハハハ！　そうそう（笑）。そういう状況に追いやられていた部分があるんですよね、私も美馬も。だから、ラスカチョをやる前に何度か引退の危機が訪れ、ラスカチョを解散したときに一区切りなのかなって思ったけれども、やっぱり自分で辞めれない何かがあってズルズル来て。区切りとして、20周年を迎えたときに、「もうそろそろ私もいいんじゃないかな」って思う気持ちもあったんですよ。で、周りを綺麗に整えるじゃないですけど、自分なりに最後は綺麗に砂利道でもなく、草を刈って、しっかり最後の日を迎えようって思ったときに、井上京子ご懐妊っていう話があって。

掟　辞められない状況になった、と。

三田　NEOに入った以上は1年間、京子がいないあいだ、上として守っていかなきゃいけない。戻ってくるまでに自分もいろんな道しるべを作って、京子が復帰戦をやったあとで私も身を引こうと。そしたら今度は京子が戻る前に元気美佐恵が引退するってことになって。「ちょっと、あんた、京子がいないのにそれはないだろう」って思ったんですけど、でも発表してしまった以上はしょうがないし。そうこうしてるうちに、今度は松尾（永遠）が辞めることになっちゃって（苦笑）。

掟　辞めるタイミングを何度も逃してしまったわけですね。

三田　そんな感じですね（笑）。

掟　端から見てると、まだまだやれそうだなって感じるんですよ。

三田　あ～、そうですねぇ。できないことはないと思いますね。

掟　次の仕事のこととかを考えてるんですか？

三田　何も考えてないです。40から花嫁修業でもしようかな（笑）。

掟　周りを見て、ようやく自分が抜けても大丈夫な状況になったと？

三田　それと自分に未練がなくなったんです。「何を残した？」って言われると、「どうしよう」ってなりますけど、満足感は凄いあるんですよね。

掟　実際タッグ屋として、ラスカチョは平成を代表するタッグチームだと思うんですよ。女子プロレス界にきっちり名前を残して、惜しまれつつやめることができるのって理想の引退ですよね。

三田　ありがとうございます。

掟　そして三田さんといえば、やはりデスバレーボムですよね。あの破壊力のある技を開発したことだけでも凄いことだと思いますよ。

三田　ねっ、凄いですよねぇ。

掟　高岩（竜一）さんがデスバレーを使い始めたとき、どう思いました？

三田　当時、高岩さんが雑誌で、あれは私の技を見てやり出したんじゃなくて、べつのところから取ったみたいなコメントをされてたんですよ。「じゃあ、同時だったのかな？」って思ったりしたんですけど、やっぱり最終的に〝デスバレーボム〟っていう名前が付けられてて。

掟　そうでしたよね。

三田　たまたま、高岩さんが参戦されている団体を観戦しに行ったんですよ。で、高岩さんがデスバレーを使ったときに観客の一人の方が「それは三田の技だぞ、高岩！」って言ってくれて（笑）。

掟　俺もそう思ってましたよ（笑）。

三田　「いまの誰？　ありがとう」みたいな（笑）。いろんな方が使っていたときは「どうして？　私の技なのに。だったら、〝三田なんとか〟とか〝英津子なんとか〟って技の名前にすればよかった」って思ったんですけど、たぶんそうしたら、いまみたいに浸透はしなかったと思うんですよ。

掟　『俺が田上』的な（笑）。名前がいいですよね、デスバレーボムって。破壊力に満ちてて。

三田　先輩をはじめ、いろんな選手が使ってくれて「皆さん使っていた

だいて、ありがとう」って思うんですけど、「でも、私が一番よ」っていうので、私の技には“元祖デスバレーボム”って付けてるんです（笑）。

掟　元祖ほかほか亭みたいな感じで（笑）。23年やってきて、ベストバウトってどの試合だと思いますか？

三田　う～ん、私はプロレスって、あまり得意じゃなくて……。

掟　23年も不得意なことをやってたんですか!?（笑）。

三田　ホントに得意じゃないので、よくベストバウトとか聞かれても、なんて答えていいのかわかんないですよ（笑）。とても不器用で。だから北斗選手は大変だったんじゃないかなって（笑）。

掟　もともとラスカチョは北斗さんと三田さんのコンビ名ですもんね。後楽園ホールの試合が終わったときに、師匠である北斗さんにリング上で「心のプロレスができてない」と説教されたこともありましたね。

三田　ありましたねぇ……（しみじみと）。でも、それがあったから、いまの私たちがあるのかなって。全部いいふうに取ってますけど（笑）。北斗さんのことが大好きで、私には本当にかけがえのない人なんですけど、一回、一瞬だけ大ッ嫌いになったのが、そのリング上で怒られたときです（笑）。さすがに、「もうやだ」って……って思いました。

掟　お客さんが見てる前で怒られるのはキツいですよ。でもそれだけ好きな人の言うことだから、受け入れることもできますよね。

11月1日、私の最後のデスバレーボムを観に来てください！

三田　私は北斗さんをファン的な視線で見てたので、アメ玉一個もらえれば、超ハッピーみたいな（笑）。北斗さんの付き人をずっとさせていただいていたんですけど、北斗さんを見ていられることが何よりも嬉しかったんですよ。

掟　三田さんのことが大好きでたまらない、いまの真琴さんみたいなものですね（笑）。北斗さんと組んでからは試合スタイルからコスチュームからガラリと変わりましたよね。

三田　北斗さんと一緒に金髪にしてメイクして、サングラスをかけて。だから、みんなからは「どうしたの!?」みたいな。

©NEO

二転三転ありながら11.1NEO後楽園大会で行なわれる三田英津子ラストシングルの相手は真琴に決定。当日、三田はラスカチョ・ファイナルとして下田美馬とのタッグで井上京子＆高橋奈苗戦の2試合を敢行。大会詳細はコチラから→http://neopro.ne07.jp/

掟　お嬢様だった三田さんは、学生時代を含め、明らかに悪い人に見えるファッションをしたことはないわけですよね？

三田　なかったですね。ちょうど父が他界したあとで、一人っ子なので実家に戻ったんですよ。ウチの周りが親戚が多い区画なので、道を歩くとエライことになって（笑）。そのときは、お母さんがかわいそうだったかなぁって。

掟　悪役は本気で悪い人がやってると思ってた人もまだまだいた時代ですし。

三田　「英津子は金髪にして帰ってきた。どうなのよ？」みたいな（笑）。「お母さん大丈夫かな？　お父さん、いなくなっちゃったし」って。古い家系だから、プロレスは野蛮っていうのがどっかにあったと思うし。でも、ラスカチョは北斗さんの弟子なんだというのを親戚の人たちが知るようになると、見る目も変わってきたりとか。

掟　いまご家庭の話が出ましたけど、三田さんといえば世田谷のお嬢様っていうイメージが強かったんですよ。

三田　全然お嬢様じゃないです。女だから「お嬢様」と呼ばれてただけで。

掟　洗濯一つまともにできなかったと聞きましたよ（笑）。

三田　いまだに料理はできないですけど（笑）。だから、これから花嫁修業するっていうね。

掟　全女に入って、自分の家庭環境は人とは違うなって思いました？

三田　いや、私は思わなかったんですけど、よくマリー・アントワネットって言われてました。そのマリー・アントワネットっていうのがわからなかったんですけど。

掟　「パンがなければお菓子を食べればいいじゃない」ってことですよね。笑っちゃうほど優雅だっていう。

三田　そうそうそう。私は思わなかったんですけど、京子とかにはそういうふうに言われてましたね。

掟　引退後は花嫁修業をするってことでしたけど、老人介護の資格も取ってるんですよね？

三田　だって、それしかやることないから（笑）。

掟　それしかやることないって（笑）。なんで老人介護をやろうと思ったんですか？

三田　ウチの両親が高齢になったこともあるんですけど、父とおじいちゃんが障害者だったんですよ。父は障害を持っていたからこそ、テレビでプロレスを見て元気づけられたりしていて。その影響で私も観るようになって「やりたくなっちゃったのはあなたのせいだよ」ぐらいの感じで（笑）。なので、そういう方々のお世話ができるお仕事に就きたいなって。ホントはボランティアでもよかったんですけど、父いわく、ボランティアだとお金を払ってないから用事を頼むのも遠慮しちゃうって言うんですよ。

掟　それはあるでしょうね。

三田　じゃあ、職としてやったほうがいいって思って。でも、障害者介護の資格はけっこう大変で、プロレスやりながらだと無理そうだったんで、老人介護にしました。ほかの方より力もあるし、できるかなって思って通信と週一の授業みたいなのを受けて。高校中退なので、何も資格を取ってないと、辞めたあとに大変かなって思って取ったんです。

掟　その話はまったく知りませんでした。では、引退後は花嫁修業と老人介護のほうで頑張ってください！

三田　頑張ります！　11月1日、後楽園で私の最後のデスバレーボムを観に来ていただければと思います！

この日の取材は世田谷のお嬢様、三田選手のお住まいからも、ほど近い自由ヶ丘で行なったのですが、『kami-pro Move』の「萌え萌え女々苑Move」では閑静な住宅街で三田選手に質問攻めする掟さんの動画を公開中です。こちらもチェックして11月1日の引退試合にゴー！

「前号の女子格特集は正直、納得がいかない！斉藤編集長の見解を聞かせてください」

ヴァルキリーの長尾メモ8氏が菓子折持参で抗議の来社

『kamipro』No.139にて16ページに渡ってお送りした女子格特集。この特集の内容に対し、ヴァルキリー関係者の長尾メモ8氏から抗議の声が寄せられた。長尾氏によるとヴァルキリーのルールに対する事実誤認があるとのこと。長尾氏は「その件を含め、編集長と話がしたい」と『kamipro』編集部に菓子折持参で抗議の来社。はたして、その結末は!?

構成／阿修羅チョロ

メモ8　今日は、わざわざ西荻窪で一番有名でおいしいお菓子屋さんの菓子折を斉藤編集長のために持参して抗議に来ました！（笑）。

——すみません！　本来なら、ウチのほうが菓子折を持ってお詫びしなきゃいけないのに（笑）。

チョロ　担当の僕から今回の抗議に至った経緯を説明すると、前号の女子格企画内で「基本的にヴァルキリーもジュエルスもパウンドなしである」と間違った表記をしたのが原因なんですけど、そこは本当に申し訳ないと思ってます（頭を下げる）。

メモ8　そこに関しては、もうお話にならないよね。しかも、『kamipro』では一番、女子格を取材してきたチョロさんがそのレベルの認識ってことでしょ。

——正直、それ以外の人間はもっと認識していないと思います（笑）。

メモ8　しょうがねぇなあ（苦笑）。まあ、そのことはそんなに重要じゃなくて、ほかにも言いたいことはあるんですよ。

——なんですか？

メモ8　一番に言いたいのは、佐伯（繁）さんと熊久保（英幸）さんの対談で、聞き手の斉藤編集長が「女子格の関係者同士は仲が悪い」と言ってるわけですよ。

——仲が悪いんじゃないですか？

メモ8　いや、関係者は全然仲は悪くないですよ。マスコミ関係者のほうがプロモーション側の人間より憎み合ってると思いますよ。

——あ、そうなんですか。ボク、目が凄く悪いから現場に出ても誰が誰だかわからないから交流すらないんですけど。

メモ8　俺が高島（学）の悪口とかブログに書くと、いろんな関係者から「よくぞ書いてくれました！」とか、そんなのばっかりだし。

——へえ～。

メモ8　むしろ、マスコミ同士のほうが仲が悪いです。まあそれは簡単な話で、マスコミ間というのは、よその雑誌と仲良くしなくてもいいわけじゃないですか。でも、プロモーションの場合って仲悪いままだと世界が狭くなっちゃうんで話をしなくちゃいけないんですよ。だから、仲が悪くなりようがないんです。

——それは『戦極』とDREAMとか男子の世界も一緒ですよね。

メモ8　そういうことですよね。でも、『kamipro』でも『戦極』とDREAMは仲が悪いって、あまり表だっては書かないでしょ。

——もの凄く書いている気がしますし（笑）、べつに女子格だけ仲が悪いとは言ってるつもりはないですけど。

メモ8　言ってるじゃないですか!?

——そんなに問題でしたら、全然謝りますけど、なぜメモ8さんがそこまでムキになって否定するのかがよくわからないというか（笑）。

メモ8　だって、こういうことをやられると女子格のイメージ自体が落ちるわけですよ。

——はぁ～、そういうものですか。

メモ8　そりゃそうですよ。それに、前回の特集みたいに女子格をエロ目線で見てるマスコミとか関係者って、じつは少ないんじゃないかなぁ。

——メモ8さん的には「女子格はエロ目線で見ちゃいかん！」っていうのがあるんでしょうか。

メモ8　いや、エロ路線が悪いって言ってんじゃないわけ。

——要は「女子格関係者は仲が悪い」とは書くな、と。

メモ8　そう。仲はいいですから！

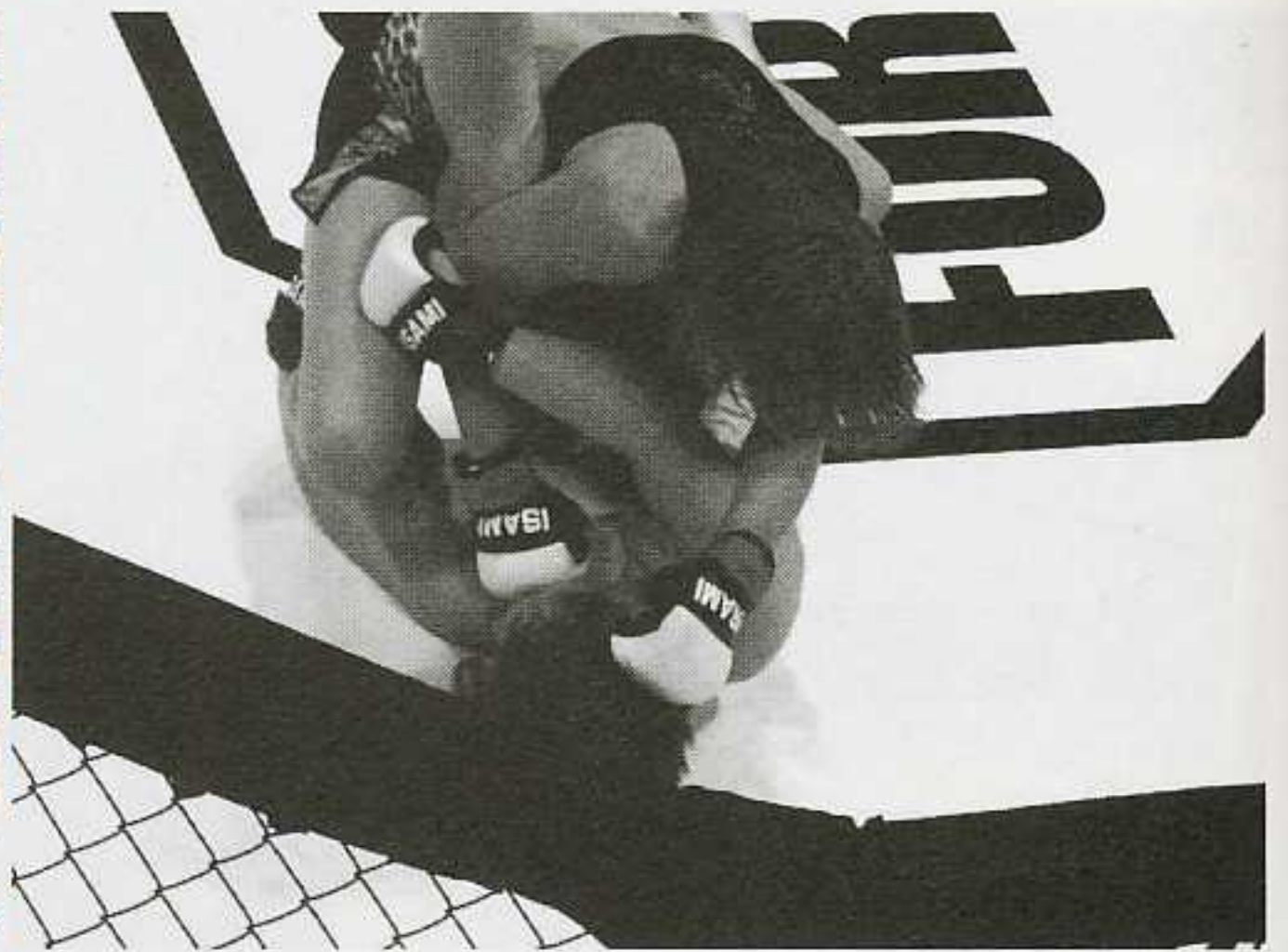
——わかりました(笑)。胸に刻みます。

メモ8　それ以外で言うと、一番大きな問題は、ヴァルキリーとジュエルスの差別化がまったくなされないまま、結果としてはジュエルス側の選手だけが出てるわけ。

——え～、そうでしたっけ？　べつにウチとしては、ヴァルキリーを貶めようとか、ジュエルスを持ち上げようという気は一切ないんですけどね。誤解を恐れずに言うと、自分の中ではジュエルスもヴァルキリーもそんなに違いはなくて、女子格という

こちらが長尾氏から「ルールに関して事実誤認がある」と指摘された佐伯さんと熊久保さんの対談企画。この企画内でヴァルキリーとジュエルスの説明として「基本的にどちらの団体もパウンドなしである」と表記してしまったが、ヴァルキリールールは基本的にパウンドというのが正解でした。関係者および読者の皆さま、大変申し訳ありませんでした（担当・阿修羅チョロ）。

ヴァルキリーは単純に言うと実力主義の競技路線です

ヴァルキリーのエースは辻結花。辻は09・4・25ディファ有明大会でケイト・マルティネスと初代フェザー級王座を賭け対戦し、一本勝ちで初代女王に君臨。次期挑戦者はV一（うぃーはじめ）に決定済みだ。

日本で唯一定期開催している女子の金網MMAイベントがヴァルキリー。写真を見ればわかるとおり、ヴァルキリーはケージフォースの金網を使用し、基本はパウンドありでの闘いとなる。う〜ん、バイオレンス！

ものを取り上げるにあたって、たまたま佐伯さんと熊久保さんにエッチな視点から話をしてもらったらおもしろそうだなと思って話を聞いただけで。そういうテーマで編集してるから、ジュエルスとヴァルキリーという団体名もほとんど出してないんですよ、わざと。

メモ８　エッチ路線は好きにやってもらっていいわけですよ。ただ、ジュエルスのついでに扱うぐらいだったら不公平でもなんでもいいから、こっちには触らないでっていう。

――では、ジュエルスとの違いを簡単に説明していただけませんか？

メモ８　もともとGCMのやっている男子のケージフォースっていうのはUFC準拠の金網をやりましょう、と。それの女子版がヴァルキリーなんです。だから、単純に言っちゃえば実力主義。

――ヴァルキリーは実力主義。

メモ８　たとえば、こっちは最初に階級とルールを発表するところから始めてるんで。いわゆる競技路線ですよ。なおかつ、いままで金網でパウンドありっていうのは女子格ではなかったわけ。一回だけ「Kグレイス」という大会がありましたけどね。

チョロ　ジーナ・カラーノを参戦予定選手として発表した大会ですね。結局、出ませんでしたけど（笑）。

メモ８　ウチは基本的に金網でパウンドあり。言い方はへんだけど競技的にハードコアなわけですよ。もしくはグローバルスタンダード。ジーナがやってる試合は金網でパウンドありなんですよ。それと同じです。

――よくわかりました。

メモ８　そういうコンセプトでスタートした大会です。結果としてエッチな目で見られるのはいいんですよ。ただ、前回の特集のようにヴァルキリーが下であるかのようなニュアンスが出ると嫌なんですよ。だったら「扱わないで」って感じで。無視してくれたほうがいい。

――う〜ん、べつにヴァルキリーが下であるかのような扱いはしたつもりはないんですけどねぇ。

メモ８　さっきも言ったけど、人選からしてそうじゃないですか！　ジュエルスのスーパーバイザーの佐伯さんの対談で、トビラの写真もジュエルスのトップの石岡沙織選手と杉山しずか選手ですよね。ほかにもRENA選手とか志田光選手とか、みんなジュエルスに出てる選手ですよ。それで、「ジュエルスって意識はありませんでした」って言われても、それは専門誌の記者として無知としか言いようがない。

――佐伯さんがジュエルスに関わっているのは知ってましたけど……。

でも、たとえば、「実力主義のヴァルキリーよりも、かわいいコ路線のジュエルスだ」みたいな論調でやっているんなら申し訳ないと思うんですけど、そうではないですからね。

メモ８　だからそこまでハッキリしているならべつにいいんですよ。ところがそうじゃないと言いながら、実際に出てるのはジュエルスの選手ばっかりなわけですから、同業他社としては、「ふざけんな！」にはなるわけだよね。

――まあ、それはあるでしょうけど。

メモ８　『kamipro』のスタンスは自分なりにわかってるつもりだし、「同じだけ扱ってよ」って言う気は全然ないです。が、かえって、こういうやり方のほうが陰湿だということに、いいかげん気づけよって話でね。まあ、今日の最大の目的は、何かあったときに斉藤編集長にメールでもして、「こういう企画はどうですか？」っていうことをやれるルートを作りたいと思って挨拶がてら来たわけです。

――あ、そういう目的でしたか。でも自分、けっこう返信とかしないんですけど、大丈夫ですか？（笑）。

メモ８　ひっでぇヤツだなぁ（笑）。誌面や携帯サイトの印象から、「こういう人なんだろうな」っていうのをだいたい想像してたけど、実際にお会いしたら、まったく目が笑わないねえ（笑）。

――目が笑ってない……。えぇ〜、ホントですか。

メモ８　ホント笑ってないですよ。

――それはショックだ……。そんなこと言われたことないのに。

メモ８　まあでも、今度、女子格の企画の話がありましたら、ヴァルキリーもゼヒお願いします！

――（聞かずに）うわ〜、俺……目が笑ってないんだ……。

メモ８　菓子折持ってきても、企画はスルーかよ！（怒）。

【09年10月6日／都内・『kamipro』編集部にて収録】

というわけでヴァルキリー＆ケージフォースにも注目しましょう！

『VALKYRIE 03』

東京・ディファ有明
10月24日（土）開始13:00

主要対戦カード

茂木康子 vs 瀧本美咲
大室奈緒子 vs 関友紀子
ジェット・イズミ vs 藤野恵実
SACHI vs 村浪真穂
♂ha@THE♀ vs スギロック

お問い合わせ

GCMコミュニケーション
TEL.03-3556-6201 http://valkyrie.livedoor.biz/

『CAGE FORCE』

東京・ディファ有明
10月24日（土）開始18:00

主要対戦カード

永田克彦 vs 星野大介
寺田功 vs 徹肌イ郎
森川修次 vs 濱田淳史
宮川博孝 vs 金内裕哉
大勝☆ケン vs 荒牧拓

お問い合わせ

GCMコミュニケーション
TEL.03-3556-6201 http://www.g-c-m.net

GCM久保豊喜社長と仲睦まじげに腕を組む長尾メモ8氏。ここ最近はヴァルキリーだけではなく、ケージフォースの会見の司会進行を務めたりもしている。長尾氏に興味を持たれた方はブログをチェック！　http://d.hatena.ne.jp/memo8/

おいおい、東京03が誰かに怒られたって本当かい？ ま、東京03はどうでもいいんだが、オレはマネージャーのオオタケってヤツが心配だ。アイツの楽器の腕前といったらプロ級だからな！ 今度オレとセッションしないかい？ そしたらオレも『ゴットタン』に出られるからよお。クックックック。え？ うるさい？ そんな元も子もない言い方すると、さすがのオレも傷つくぜ！ じゃあ、とっとと始めるか！

139号へのお便り紹介

所英男と日村勇紀の対談がおもしろかった。所選手は日村さんの話術に乗せられている感じがします。ぜひ、モチベーションを高めてもらい、所選手も勢いで優勝してもらいたいです!!
【福島県・紺野春樹さん・会社員・29歳】

D OH～！ ビデオ・トコロはグレイトな試合をしたと聞いたぜい！ 優勝できなかったけど、ミスター・ヒムラというヤツのおかげかい？ なんなら次は、オレが対談の相手をしてもいいぜい！ え？ それだと1回戦負け!? そりゃないぜ……。

全日の浜亮太というレスラーはまったく知りませんでしたが、インタビューを読んで興味が湧いてきました！ 体型からしてとてもキュートです。あと、曙さんらの「ポリフェノールで血をサラサラに」と赤ワインを4本飲む話は、ほとんどアル中患者の体験話みたいで怖いです。
【福島県・毒柴さん・株屋（実積ゼロ）・38歳】

D オレもリョウタ・ハマのフォトを見てビックリしたぜい！ ユーはアケボノさんとリョウタが一緒に写ってるフォトを見たかい？ なんと、アケボノさんがスレンダーに見えるんだぜ。こりゃミラクルだ。しかしリョウタ、あまりファットな人間は命が危ないってウワサだから気をつけろよな！ クックックック。

FEG代表谷川さんのインタビューで気になったのですが、K-1WGPに引退をかけて敗れた武蔵選手のことをマジメに考えているのでしょうか？ 佐竹選手の後任としてK-1の功労者なのに。
【兵庫県・春名義行さん・会社員・43歳】

D ユーたちは、ダナがチャックに「引退しろ！」と言うのは愛情だといって、サダハルンバがムサシに「望んでない」と言うのはヒドいって感じるってわけかい？ それはちょっとサダハルンバがかわいそうってヤツだぜ。……ま、それが妥当な感想だけどな。

「真壁刀義の人気がとにかく凄いらしい」の記事がおもしろかった。真壁選手はいい話をいっぱい持っているんだなと感心した。サービス精神にも長けていると思ったので好感度がグンと上がった。
【茨城県・石川明弘さん・無職・34歳】

D 今回のユーたちのレターを見ると、トウギ・マカベというボーイは間違いなく人気者みたいだな。しかしよお、かつてアイヘンシュウチョウってオッサンがガチンコでも強いって言ってたのは、ひょっとしてこのマカベかい？

ZSTの金ちゃんと戦極グリーンの対談がおもしろかった。戦極グリーンはとんちんかんなことを言いながらも、若干勉強しているところが見えてかわいいなと思った。金ちゃんは、途中から完全にツッコミ役に徹しているのが偉いと思いました。
【神奈川県・斉藤ユウヤさん・中学2年生・14歳】

D グリーンってヤツはなかなか評判がいいらしいじゃないか。え？ じつはミス・ユニバース・ジャパンのファイナリスト!? そ、そんなミラクルガールだったのか！ 『kami-pro』さんよお、そういうときはぜひオレも呼んでくれよぉ。

サスケのページで、サスケがアルバイトしている写真に爆笑した！ あそこまで本格的にバカになれるところが凄い。しかも、マスクの上からならキャップはかぶらなくても大丈夫なのでは？（笑）。
【埼玉県・電車で撮影さん・会社員・35歳】

D サスケってヤツは『レスラー』というムービーに感化されすぎだ。しかし、精肉店のボスはサスケの履歴書、ちゃんと見たのかい？ 覆面で店頭に立つだなんて、こんなNGはないぜ！

『女子格闘家にカワイイ子が増えているらしい!?』がよかった。とくにクマク

139号 おもしろかった記事 RANKING

NO.1 真壁刀義
NO.2 所英男×日村勇紀
NO.3 エメリヤーエンコ・ヒョードル
NO.4 亀田興毅
NO.5 女子格特集

今回のランキングはトウギ・マカベがトップかい？ 読者はいったい何が好きで読んでいるのか、さっぱりだぜ。だってよお、2位がトコロ×ヒムラだろ、3位はわかるとして5位には女子格だろ？ まったく、自由気ままってのはこのことだぜ。ちなみに、オレの1位はもちろんジーナだ！ ジーナ、ジャパンに来てくれ！ オレがソングをプレゼントするからよお。

おいおい、
最近レターが減ってるぞ！
ボーイズ＆ガールズ、
気合いを入れろ!!
え？ オレのせいだって？

香川県・ハワイアングレイシーさん／タツヤはあいかわらずの人気だな。最近、キクノってボーイに挑発されてるらしいから気をつけろよ！

Kawajiri

大阪府・剣洋人さん／ヒロトはまた凄いイラストを描いてきたな……。30年後のヨコタってとこかい？

ファンキーでクレイジーなアイツが
読者のメッセージを
Check it out!!

"読者ペイジ" ジャクソン

マンボとサエキングのトークがくだらなくてサイコーだった。クマクマンボには女子格系座談会には必ずレギュラー出演してほしいと思う。本人もその気がないことないでしょ？
【福井県・リラックマさん・自営業・40歳】

D ユーはクマクマンボのファンになっちまったのかい？　ふふん、そんなユーに素敵なクマクマンボ情報を教えるとすると……クマクマンボは若い頃、役者を目指していたらしいぜ！　クックックック。

亀田兄のインタビューがおもしろかったです。まだ22歳なのにしっかりしてるなと思います。でも、こういうインタビューを読んでいると、何がヒールで何がベビーなのか、ちょっとわからなくなりますねえ。結局マスコミが作り上げただけのイメージってことでしょうか？
【東京都・大塚ちさとさん・歯科衛生士・42歳】

D カメダというボーイはシンスケ・シマダと仲良しだって、ユーは知ってたかい？　TBSの『オールスター感謝祭』で言ってたぜ！　……え？　『感謝祭』とシンスケ・シマダの名前は出しちゃダメだって？　OH、何があったんだい!?

横田選手×郷野選手の対談がおもしろかった。「ハゲ」という文字が異様にたくさん出てくるので、否応なく横田選手の頭部に目線がいってしまった。郷野選手はまだ大丈夫だと思います。
【千葉県・桜木よしおさん・学生・21歳】

D ヨコタが危ないのはわかるけどよお、ゴーノが自己申告するのは確かに早すぎるよな！　……え？　オレ？　あんまり写真をジロジロ見ないでくれよお。

RIKIのインタビューで思い出しましたが、長州と高山のリーゼン党の映像を見て、正直驚きました。まさかあの長州が………。私どもの時代からは想像もつかないほどの変わりようです。
【北海道・橘すすむさん・会社員・51歳】

D ジャパンにはリーゼン党って党があるのかい？　こりゃ、ジャパンの未来も安泰じゃねえなぁ。しかし、チョーシューってヤツはじつにいい動きをしていたじゃないか。オレのバンドのバックダンサーってのも……やっぱナシだな！

小見川選手とマッハ選手の対談がおもしろかったというか、二人ともかなりやんちゃだったんだなと思います。柔道時代の写真がありましたけど、二人とも若すぎて、よく見ないと本人だとはわかりませんね。それと、小見川選手は最近顔がネコに似てきてると思います。
【埼玉県・ブラックキャットさん・33歳】

D やんちゃというと、オレも相当やんちゃだった時代があるんだぜ！　え？　興味ない？　そんなこと言うと、ユーの家まで行くぜ！（怒）。

船木のプロレス復帰は凄くよかった。一人だけプロレスラーらしからぬ身体で、見事な鍛え具合だった。船木は格闘技よりもプロレスのほうが断然輝くと思う！
【栃木県・マッドネス最強さん・会社員・37歳】

D フナキってヤツはプロレスでもマッドネスだったらしいな。しかし、フナキはもうアクター活動はしないのかい？　オレは意外と好きだったなあ、『Dr.コトー』の漁師ってヤツ。傑作だぜ！

桜田直樹のインタビューがよかった。電車の中で読んでいて、〝スナカケ〟の部分で吹き出してしまった。
【山口県・松江功さん・自衛官・31歳】

D 他人のニックネームというのはホントに笑えるよな。そういう意味では最近復活したってウワサのアリヨシがつけた〝元気の押し売り〟はニックネームとしては絶品だ！　あと〝昼メガネ〟もライクだぜ！　アリヨシってヤツ、せっかくだからオレにもニックネームつけてくれよお。え？　だから素人って言われるんですよ!?

エメリヤーエンコ・ヒョードルのインタビューがよかった。UFC座談会であったように、ヒョードルなんかはもう10年ぐらいずっとトップでやってるファイターだから、本当に誰よりも凄いと思う。いろんなヘビー級ファイターが出てきても、まったくヒョードルが負ける絵が浮かばないよ！
【埼玉県・たまアリ絶好調さん・会社員・30歳】

D あいかわらず、アラサーからアラフォーの連中はヒョードルとか最強を語るのが好きだなあ。ちなみに、オレも同世代だ。だがよ、オレはもっぱらヒオキハツだぜ！　クックックック。
意外だったろ？

目撃情報が止まらない！

★高円寺のとある銭湯でパンクラス世界バンタム級チャンピオンの井上学選手を目撃しました。身体つきからみてあきらかに井上選手なのですが、お互い真っ裸の状態で声をかけるのもどうかと思い、ちょっと話しかけるのは躊躇してしまいました。しかし、よく目撃しているボクからすると、井上選手には本当に頑張ってほしいと思ってます。【東京都・阿修羅チョロさん】

★先日、友人の結婚式に行ったら、なんとジャージを着たミノワマン選手がボクの目の前を横切っていったのでビックリしました。なんでこんなところにミノワマンが？と思い、ホテルのエントランスの表示をよくよく見てみると、なんとそこはDREAMの前日会見の会場だったようで、たぶんDREAMに出る人は全員いたんだと思います。あまりの偶然に大興奮でした！【東京都・経理部さん】

格闘技愛あふれる玉稿を チェケラッチョ！

ユーたちのもの好きさには、まったくあきれるぜい。なぜかって？ 前号でここに載せた小説の続きが読みたいってヤツがいるんだからよお。しょうがないから続きを載せてやるぜ。投稿してくれたマコト、よかったな！ 次も読みたいヤツがいたら次号に載せるから、どんどんレターを送ってくれよ。

『世紀末の格闘技』

三人が歩いている道路の先を、背の高い男が横切っていった。年齢は、三十代後半。髪は長くぼさぼさで、あごには無精ひげが生えている。身長が百八十センチ以上あるうえに、ジャージに下駄という、個性的なファッションで、妙に目立つ人だった。

「こんな時間に、あんな格好で、何している人なのかな？」

「何かいかにも無職って感じだね。たぶん、リストラにあったのよ」

二人がそんなことを言っている間、千歳はなぜか黙ったまま、真っ赤な顔をしてうつむいていた。そして、そのまま曲がり角で、二人に手を振って別れた。

千歳の家は中学校のすぐ近くにある古いマンションだ。学校から、歩いて5分もかからないところにある。

家に帰ると、父親がベランダの洗濯物を取り込んでいた。

「ただいま」

と、千歳は言った。

父親が振り返って言う。

「おかえり」

千歳の父親、東稜介は下校の途中で見かけた、ジャージに下駄を履いた、あの背の高い男だった。

東千歳は、十四才。中学二年生の女の子。髪は、ショートカット。クラスで一番背が高い。しかし、部活は何もやっていない。運動が苦手というわけではないが、好きでもない。勉強の方も普通で、身長以外これといった特徴のない女の子。

千歳の父親、東稜介は、身長が百八十二センチもある。ただでさえ目立つのに、常にジャージに下駄というファッションで、さらに悪目立ちをしている。

稜介は、千歳から見ても、よくわからないヘンな人だ。千歳が知る限り、稜介は仕事に就いたことがない。洗濯をしたり、食事を作ったりと家事をする、いわゆる専業主夫だ。

【熊本県・埔岡真さん】

※おっと、残念だが今回はここまでだな。いったい、このファミリーがどうなるのか、ユーたちも気になるだろ？　次回もドント・ミス・イットだぜ！　クックックック。

おハガキ募集!!

おハガキ、どんどん送ってくれよ!
ケータイからでもOKだぜ!!
どんな意見、感想、苦情、抗議、
お悩み、ダメだしでも、ぜーんぜんキャッチするから安心しろって!　待ってるぜ!

こんな情報も24時間どんとこい!
ってヤツだ。

- 譲ってほしいもの
- タレコミ情報
- 選手に対するコメント、試合の感想
- その他、オールOKだ!!

以上、すべてのお便り・
イラストのあて先&メールアドレスは
radical@kamipro.com
〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6
パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス kamipro編集部
「エイド成功」係まで。

携帯サイト『kamipro Move』からの投稿もできるぜ。

kamipro books

驚ガク！ 衝ゲキ!! kamipro booksシリーズ！
死闘インタビューの歴史的目撃者になれ!!

魔王 秋山成勲 二つの祖国を持つ男

秋山成勲なのか
チュ・ソンフンなのか——。

2006年12月31日大晦日『Dynamite!!』秋山成勲vs桜庭和志戦で発生したクリーム塗布事件。この一件以降、秋山は日本では悪質な反則選手、片や韓国では悲劇の元・在日韓国人と、評価が真っ二つに分かれた。本書籍は秋山成勲が、柔道界での挫折ののち、総合格闘技家としてデビューして"魔王"と呼ばれる怪物に至るまでを検証するノンフィクションである。

B6変型判　264ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

PRIDE機密ファイル 封印された30の計画

ついにその秘密のベールを解禁!!
PRIDE幻の超極秘プロジェクト!!

★高田vsヒクソンの前座に前田日明登場!?★長州力、橋本真也、船木誠勝の参戦計画★ホイスvsケアー消滅の計画★PRIDEが小錦獲得に動いた!?★"皇帝"ヒョードルを二度破った男 ほか

その消滅から早2年——世界最高峰のリングに封印された30の計画を発掘！　さらに青木真也、三崎和雄ら6大インタビューも同時収録！

B6変型判　292ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

新日本プロレス学習帳

"業界の盟主"の魅力を
凝縮したインタビュー12連発！

★鈴木みのる&獣神サンダー・ライガー★小林邦昭★平田淳嗣★金本浩二★山本小鉄★新倉史祐★田中秀和★中西学★天山広吉&金原弘光★マサ斎藤★永田裕志★中邑真輔

『kamipro』に掲載された新日育ちのレスラー&関係者のインタビューが一冊に！ これを読めば老舗団体の過去・現在・未来がまるわかり！

B6変型判　320ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

八百長★野郎

ミスター高橋本から7年……
"呪いなき"時代のプロレス再入門書!!

★マッスル坂井★大槻ケンヂ★菊地成孔★森達也★杉作J太郎★ミスター高橋★菊池孝★高木三四郎★ハチミツ二郎★鶴見亜門★プロレス業界初"台本"全文掲載！

カミングアウト当事者から元ファンの知識人まで総動員してプロレスを再考！ "プロレスの向こう側、『マッスル』"の世界に迫る！

B6変型判　296ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

生前追悼 ターザン山本！

え、ターザンが死んだ!?
90年代プロレスを徹底検証！

★浅草キッド★いしかわじゅん★堀辺正史★更級四郎★松本晴夫★杉山頴男★谷川貞治★山口日昇★金沢克彦★市瀬英俊★小島和宏★菊地成孔★Oka-Chang★原タコヤキ君★椎名基樹 ほか

『週刊プロレス』編集長として辣腕を振るった山本さんの人生を通して、90年代プロレスブーム、はたまたプロレスという生き様を振り返る！

B6変型判　304ページ
定価=1,470円（本体1,400円+税）

プロレス狂の詩 夕焼地獄流離篇

プロレス狂がシビれる
凄玉たちのインタビュー集！

★ジェラルド・ゴルドー★後藤達俊★小畑千代★ザ・グレート・サスケ×韮澤潤一郎★中島らも★大槻ケンヂ★シーザー武士★ダニー・ホッジ★高山善廣×金原弘光★真樹日佐夫×三池崇史

メインストリームからはみ出さずにはいられなかったファイターや、リング内外の裏表を凝視してきた関係者へのインタビューがテンコ盛り！

B6変型判　304ページ
定価=1,890円（本体1,800円+税）

U.W.F.変態新書

ダメな大人たちへ捧げる
"変態"とUWFの晩餐！

★UWF★前田日明★船木誠勝★高田延彦★桜庭和志★ターザン山本！★キン肉マン★PRIDE★プロレス★変態とは何か？（菊地成孔スペシャルインタビュー）★変態解説

プロレス界の一大潮流となったUWF。そのUWFに人生を学び、人生を狂わされた変態的プロレスファンたちが、UWF神話を語り倒す！

B6変型判 296ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

吉田豪のセメント!! スーパースター列伝 パート1

吉田豪インタビュー11連発!!
インタビュー本の最濃傑作！

★ストロング小林★阿修羅原★康芳夫★倉持隆夫★サムソン・クツワダ★猪木快守★イーデス・ハンソン★田中健一★小川宏★鶴見五郎★田代まさし

プロインタビュアーの吉田豪が、『紙のプロレスRADICAL』誌上で聞き手を務めたロングインタビューの一部を完全徹底再録!!

B6変型判　344ページ
定価=1,890円（本体1,800円+税）

底なし沼 活字プロレスの哲人 井上義啓 一周忌追善本

井上義啓とは底が丸見えの
底なし沼である——!!

★『週刊ファイト』&『SRS・DX』激筆再録★『猪木は死ぬか』、『不在証明あるいは猪木へのレクイエム』★新間寿★夢枕獏★ターザン山本&吉田豪★『kamipro』ラスト喫茶店トーク ほか

"活字プロレスの父"井上義啓氏の一周忌追悼本!!　氏を偲ぶインタビューや、人生最後の旅模様を振り返るエピソードも収録！

B6変型判　312ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

紙の破壊王 ぼくらが愛した橋本真也 爆勝証言集

破壊王の三回忌追善本!!
泣けて笑えるエピソード満載!!

★破壊王ファミリー★天山広吉★西村修★山田千景（獣神サンダー・ライガー夫人）★馳浩★藤波辰爾★田中秀和★ケビン・ランデルマン★三浦大輔（横浜ベイスターズ投手）★折鶴兄弟　ほか

破壊王の原点である新日関係者が語ったエピソードが盛りだくさん！ みのもけんじ書き下ろし『紙のプロレス・スターウォーズ』も収録！

B6変型判　304ページ
定価=1,890円（本体1,800円+税）

eb! enterbrain 株式会社エンターブレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555（代表）［通信販売のお問い合わせ先］http://www.enterbrain.co.jp/

WE ♥ JAPANESE MMA?

DREAM.11は何を見せたかったのか？

今年2回目のゴールデンタイム中継となった『DREAM.11』。
亀田大毅のボクシング世界戦の数字を受け継ぐかたちで視聴率的には合格点といえるものだったが、
TBSの編集、カード編成にはファンや関係者から不満の声が上がっている。
今大会のテーマは「WE ♥ JAPANESE MMA」。我々はJAPANESE MMAを本当に愛せるのか？

DREAMフェザー級GPは、PRI
DEも含めた過去のどんなGPに比

異変が起こったのは2回戦だ。高谷が
前田を逆転KOに下し、大きなインパクト

悪い意味での『HERO'S』だった。
一方で、いい意味での『HERO'S』を

ようと思っていた」という所の心情と、そ
れがもたらしたエモーショナルなファイ

所英男が魅せた THIS IS JAPANESE MMA!!

文／橋本宗洋　撮影／乾晋也

DREAMフェザー級GPは、PRIDEも含めた過去のどんなGPに比べても異色のものだった。こう言ってはなんだが、終わってみてもなおイメージがまとまらないのだ。一言で「こういうGPだった」と言い表わすのが難しい。

まず事前の期待感からして、意見が真っ二つに分かれていたのではないだろうか。今成正和、前田吉朗、高谷裕之といった日本人選手に柔術の強豪ビビアーノ・フェルナンデス、元WEC王者チェイス・ビービといったメンバー構成は、格闘技ファンにとってはたまらないもの。とくに日本人選手には70キロ（73キロ）級で苦しい闘いを続けてきた選手が多かったから、「ついに彼らのための舞台ができた」という喜びも大きかった。ただ、一般的に見れば彼らはまだまだ無名。「誰それ？」と思う人も少なくなかったはずで、だからフェザー級GPのメンバーは、試合内容によって、この闘いで名を上げる必要があった。

ところが、開幕戦は判定決着の連発になってしまう。組み合わせの問題もあるが、やはり大きかったのは初戦だということだ。〝メジャーイベント〟初参戦の選手も多く、今成、前田は『PRIDE武士道』で勝ち星を挙げることができていなかった。内容がよければ評価されるとはいっても、やはり選手にとって白星と黒星の違いは凄まじく大きい。

それに、試合内容がよかったとして、本当に「1回戦負け」の選手が評価されるのか。ましてや選手のレベルが高いわけだから、〝勝敗を超えた試合〟を一人で演出できるわけもない。結果、開幕戦は6試合中判定が4、出血TKOが1、きれいなフィニッシュとなったのは高谷のKO勝ちのみとなってしまった。完全な期待外れである。

異変が起こったのは2回戦だ。高谷が前田を逆転KOに下し、大きなインパクトを残す。さらに衝撃的だったのは、この大会から復帰した山本〝KID〟徳郁の敗北だ。ムエタイ式の構えから打撃戦を挑んだKIDだが、相手のジョー・ウォーレンもおもいきり打ち返す。さらにウォーレンはKIDを何度となくテイクダウンし、レスリング世界選手権優勝の実力を見せつける。ここでKIDはすぐに立つのではなく、練習してきた柔術のテクニックで下から仕掛けることを選択。だが、そのことでウォーレンのパウンドを浴び、ダメージを重ねてしまった。結果はウォーレンの判定勝ち。ダントツの優勝候補が、初戦で敗れる大波乱である。

ウォーレンは1回戦でビービ、2回戦でKIDと元王者を立て続けに下したことになる。しかも彼はこのGPがMMAデビュー。おそろしい新人の登場だったが、なぜか〝センセーション〟と呼ぶまでには至らなかった。誰もが〝ウォーレンが勝った〟ことよりも〝KIDが負けた〟ことばかりに目が行ってしまったのだ。優勝候補の負けが、ニュースターの誕生とイコールにならなかったのである。

人気選手が勝たなければ〝失敗〟とみなされてしまう。これは、以前にも味わったことのある雰囲気だ。そう、『HERO'S』である。ウォーレンが〝トーナメント男〟としてクローズアップされなかったのは、悪い意味での『HERO'S』だった。

KID不在の中、大団円を迎えたフェザー級GP。大晦日に所vsKID戦実現がウワサされているが、ビビアーノや高谷のマッチメイク次第でフェザー級の今後が占われるんじゃないか。

一方で、いい意味での『HERO'S』を体現した選手もいた。所英男である。DREAMで山本篤戦、中村大介戦と連敗を喫していた所は、1回戦でDJ taikiと対戦するも、打撃で主導権を握られ判定負けを喫してしまう。どんなリングであれ、誰が相手であれ、選手にとって3連敗は重い。この試合だけが名古屋大会で行なわれたこともあって、所の負けは妙に際立ってしまった。完全に追い詰められた所だが、次の出番は思いがけない早さでやってくる。

DJが負傷したため、繰り上がりでの2回戦出場が決まったのだ。トーナメントのシステム上、当然のことなのだが、人気選手の復活はいかにも『HERO'S』的。所自身、HERO'Sミドル級トーナメントでファン投票による復活と、そこでのさらなる敗北を味わったことがある。救済措置が、選手を必要以上に追い込んでしまうこともあるのだ。

というより、人気者を重用するという主催者のスタンスは、実力を何よりも重視する選手にとっては重荷だろう。

悪い意味での『HERO'S』になりかねなかった所の復活。だが、その状況を所自身が好転させてみせた。エイブル・カラムと激闘の末、一本勝ち。常に動きまわって〝極め〟を狙う、いかにも所らしい闘い方を取り戻しての勝利だけに価値は大きかった。3連敗を喫し「今回も負けたら辞めようと思っていた」という所の心情と、それがもたらしたエモーショナルなファイト。それは〝ハイレベルな闘い〟と〝万人の心をつかむ闘い〟、さらに〝人気選手の活躍〟という3つの要素がチグハグになっていたフェザー級GPをまとめあげる役割をもはたしたと言えるだろう。

さらに所は、準決勝でも高谷と目まぐるしく攻守が入れ替わるシーソーゲームを展開する。高谷の圧力をジャブとミドルで押し返し、1R終盤にはパンチの連打でKO寸前に追い込んでみせたのだ。そこから三角絞めを仕掛け、それを脱出されたことで今度はパウンド連打で大ダメージを負ってしまう所。結局、2Rにトドメを刺されてしまったのだが、彼がトーナメントに〝感情〟を注入したことは間違いない。

最終的に優勝をはたしたのは、戦前から下馬評の高かったビビアーノである。4試合中3試合でKO勝利を収めた高谷もたたえられるべきだろう。ただ、（あくまで個人的には、と前置きしつつ）最も記憶に残ったのは所だ。

この大会のテーマとして掲げられた『WE♥JAPANESE MMA』。ボブ・サップや桜庭和志vsルビン〝Mr.ハリウッド〟ウィリアムズまで『JAPANESE MMA』に含まれてはたまらないと思うが、少なくとも所が見せたのは日本ならではのMMAだった。トーナメントのシステム、つまり実力以外の要素に翻弄され、しかしそれを乗り越えた姿。意識してやるのではなく、完全に身体に染みついているアグレッシブでリスキーな闘いぶり。所がGPにいなくても、〝誰が一番強いか〟というテーマは変わらなかったのかもしれない。だが、所がいなければここまで心が揺さぶられるGPにはならなかった。

喧嘩番長ブチ切れ5秒前!?

大晦日にビビアーノを殺らねえと気が済まねえ。

DREAMフェザー級GP準優勝

高谷裕之

フェザー級GPを百戦錬磨の凶拳で突き進んだ伝説の喧嘩師。
しかし、頂点まであと一歩のところでその栄光は手からこぼれ落ちてしまった。
あの判定は納得いかねえ――自分に落とし前をつけるために、
喧嘩番長がビビアーノに宣戦布告! 大晦日に血の雨が降る!?

聞き手/鈴木佑 試合写真/乾晋也

所戦はあとから映像を見て「こんなにやられてたの？」ってちょっと驚いた

――高谷さん、フェザー級GPお疲れさまでした！

高谷　どうもです（ニッコリ）。あ、なんか食べてもいいですか？

――え？　あ、どうぞどうぞ、お好きなものを。

高谷　えーと、じゃあ、この本日の特製カレーとミックスジュースで。

――大会からまだ二日しか経ってないですけど、けっこう体重も戻ったんじゃないですか？

高谷　そうですね、もう70以上あるから、10キロくらい戻ったのかな。

――凄いリバウンドですね～。前に山田（武士）トレーナーが「高谷には太る才能がある」ってブログに書いてましたけど（笑）。減量は大変だったりするんですか？

高谷　いや、そんなには。今回は2ヵ月かけて13キロ落としたんですけど、毎日肉食ってましたよ。肉を食うと痩せるんですよ。

――え、肉で痩せるんですか？

高谷　要は霜降りとか脂肪がついてるような高い肉を選ばなきゃいいんですよ。それにたんぱく質って身体からなくなるのも早いんで。俺、試合まで一日も欠かさずステーキ食べてましたから。毎食「牛牛鳥鳥、牛鳥鳥」みたいな感じで。

――CMで「肉肉野菜、肉野菜」ってのは聞いたことありますけど（笑）。やっぱり肉を食べるとテンションも違いますか？

高谷　めちゃくちゃ闘争心が湧くんですよ。だから、炭水化物の摂取が少なくてもそれで動けるっていうか。で、炭水化物を抑えればそのぶん脂肪が燃焼するから一石二鳥だし。だから常に肉は食うべきなんです。

――は～、文字どおりの肉食系なんですね。

高谷　はい、理にかなった肉食系です（ニヤリ）。

――さて、フェザー級GPを振り返りたいんですが、ケガの状況は？

高谷　大きいケガはないですね。顔と手と足がちょっと腫れてるくらいで。でも、試合後は全然寝られなかったですね。毎回寝られないんですけど、いつも以上に寝る気もしなくて。

――それはやっぱりビビアーノ（・フェルナンデス）に決勝で負けた悔しさで？

高谷　もう、なんともいえない複雑な気持ちですよね。「完全に負けた」っていうふうに感じないから、悔しさよりも「なんでだろう？」みたいな。でも、周りが俺以上に悔しがってくれてたのは嬉しかったですね。最終的に「高谷が勝った」ってことにみんなしてましたけど（笑）。

――結果はスプリット判定でしたね。

高谷　判定で最初に「ビビアーノ」って言われたときは、「あれ、おもしろいこと言う人がいるな」って思ったんですよ。

――おもしろいこと（笑）。

高谷　で、最終的にもう一人も「ビビアーノ」ってなって……。2ラウンドのラスト1分はこっちがダウン寸前まで追い詰めたってイメージだったから、完全に「勝った！」って気持ちになってたんですよ。いや、ホント判定を聞く前に泣かなくてよかったです。

――それは試合終了の時点でこみあげるものが？

高谷　コーナーに帰ったらセコンドの田村（彰敏）くんとかが泣く寸前だったんで、それ見たらこっちもちょっと。でも、もしあそこで俺が泣いてたら、判定のときに「……えっ⁉」みたいになって、危うく恥かくところでした（笑）。

――準決勝の所英男戦ですが、あの試合の煽りVがまた素晴らしかったですね～。サムライTVのキャスターの三田佐代子さんは、「あれだけでPPV代を払う価値がある」ってコラムに書いてましたよ（笑）。

高谷　俺、まだちゃんと見てないんですよね。撮影のときにけっこう親父のことを聞かれたこともあって、入場でそういうのを見ると「昔は迷惑かけたなぁ」とか感慨深くなっちゃいそうだから、「集中、集中！」と思って。

――試合は所さんにグラウンドに持ち込ませず、高谷さんがどんどんプレッシャーをかけていく展開でした。でも、逆に所さんのパンチでグラつかされたときはあせりました？

高谷　俺、試合中はあんなにやられてるって感覚なかったんですよ。あとで映像見て「こんなにやられてたの？」って思ったくらいで。

――あ、そうだったんですか？　ダメージは？

高谷　べつに意識が飛んだわけでもないし、フックでヒザから落ちて三角（絞め）を仕掛けられたときも普通に反応できたんで、まったく問題なかったです。でも、テレビで見たらけっこうやられてて（笑）。楽勝だったと思ってたんでちょっと驚きました。

――ある種、逆転勝ちといってもおかしくはない内容というか。

高谷　本人としては「これは体力温存できたな」くらいの感覚で決勝に臨めたんですけどね。ちょっとヒジが痛いくらいで。まぁ、展開的には予想どおりでしたよ。絶対にテイクダウンされない自信もあったし、最終的に俺が詰めたら所くんも前に出て、パンチを振り回してくるしかないだろうなって。でも、まさか当たるとは思わなかったけど。

――1ラウンド終了のゴングを、TKO勝利を告げるものと聞き間違えてガッツポーズをとってましたね。

高谷　はい。あれは恥ずかしかった（笑）。

――で、2ラウンドは開始早々に一気にたたみかけて。

高谷　1ラウンドのパウンドで所くんが完全に目が飛んで横向いちゃったのがわかってたんで、最後は落ち着いて仕留めにいけましたね。

――試合後には所さんとけっこう長く話してましたよね？

高谷　「同年代だから、引退するとか言わ

試合直後には勝利を確信して笑顔でガッツポーズを決めた高谷だったが、判定を告げられると一転してうつむくばかり。閉会式の挨拶では「今日は応援ありがとうございました。まだちょっと何も言うことないです」と、納得いかない表情を見せた。

HIROYUKI TAKAYA

ないでまだ頑張ろうよ」って。所くんは最近の戦績こそよくなかったけど、なんだかんだで俺は認めてましたから。彼は試合前にグダグダ言っても、リングに上がれば開き直ってくるタイプだし、そこが彼の強さなんだと思うし。

――同年代ということでいうと、だんだん年齢を重ねるとフィジカル面が落ちてきて、キャリアで培ったインサイドワークで闘う方法にシフトチェンジする選手が多いと思いますが、高谷さんはどうですか？

高谷　俺、作戦とかよりも本能で闘うタイプなんで（笑）。でも、年取るとフィジカルが落ちるっていうのは妄想ですよ（キッパリ）。単純にそういう選手は金が稼げるようになったりして、練習以外のことに時間を割くようになって、結果フィジカルが落ちてしまうだけだと思います。

――要は言い訳だ、と。

高谷　だって、ボディビルダーとかは40歳ぐらいが全盛期だっていいますから。筋肉の全盛期が40なんだから、全然30すぎたって体力的に落ちた感じはしないし、今回も相当パワーつけて上がりましたしね。

――試合後のブログには「トレーニングをすぐにでも再開したい」って書いてましたね。

高谷　せっかく試合前にキツい練習して強くなっても、そのあとにバーッて休んだら元に戻っちゃうんですよ。だから試合当日にピークを持っていくっていう考えよりも、常日頃の積み重ねが重要っていうか。

――ピークとかでなく、常に力をキープしていく、と。

高谷　はい。トレーナーの五十嵐さんに聞いたんですけど、いまの外国人選手の多くは、基本的にピーキング（運動選手が大会へ向けてコンディションを最高の状態にもっていくよう調整すること）っていう概念がないらしいんですよ。ウェートリフティングで世界記録を出した選手は、前日のアップの時点でその世界記録を出してたって話も聞きましたし。だから、試合でいつも以上の力を発揮するなんていうのは夢物語なんですよ。

――夢物語（笑）。

高谷　俺、旅行とかで練習できないときでも、必ず筋トレだけはしますから。今回、なんで俺がテイクダウンをディフェンスできたかっていうと、ウェートをやってたのは相当大きいですよ。

――パワーをつけた上での技術やスピードっていう？

高谷　それが世界ではあたりまえですからね。日本人だけですよ、ウェートあんまやらないの。それはマズイですよ。これは世に説きたいですね（笑）。

――なるほど。

[09.10.6『DREAM.11』DREAMフェザー級GP決勝戦]
神奈川・横浜アリーナ

○ビビアーノ・フェルナンデスvs 高谷裕之×

(2R終了 判定2-1)

高谷はビビアーノの寝技地獄に引き込まれないようにスタンド勝負に固執。これにビビアーノも応戦、目まぐるしい打撃の攻防を演じる。残り時間1分で両者が最後の打ち合いを壮絶に演じる中、試合終了のゴング。判定2-1でビビアーノが僅差の勝利を収めた。

あんな判定を出されたらDREAMを背負っていくなんて気持ちになれない

高谷　だから草食系男子とかダメですよ。極端な話、俺が所くんに勝てたのは、俺のほうが肉食って筋トレしてたからですよ。

――とにかく「筋トレをしろ！」と。で、決勝のビビアーノ戦ですが、戦前に高谷さんは「ビビアーノとやってもおもしろい試合にはなりにくい」って言っていましたけど、蓋を開けてみれば場内も大熱狂で。

高谷　意外とビビアーノが打ち合いにきましたからね。単発だったけど、おもいっきりパンチを振ってきて。まぁ、べつにあせりはしなかったですよ。それにタックル対策としてレスリングの練習も多めにしてたんで。

――それは2回戦の前田吉朗戦でけっこうテイクダウンされた部分が教訓になって？

高谷　そうですね。あの試合後、周りのほとんどが「最後は凄い一発だったね！」みたいな感じでほめてくれてたんですけど、セコンドの岡見（勇信）だけが「ダメです、あんなにひっくり返されてたんじゃ話にならないです」ってダメ出ししてきたんですよ（笑）。

――話にならない（笑）。

高谷　で、「トレーナー紹介するんで、もっとレスリングをやらないと」って。俺、岡見はけっこう信用してるんですよ。「ああされたらどうすればいい？」とか練習のときに聞いたりすると、必ず「そうきたら、こうやらないと」みたいに答えを持ってて。あいつ、バカっぽい顔に見えていろいろ知ってるから（笑）。

――顔はともかく頼もしい存在だ、と（笑）。あと、今回は高谷さんのよき兄貴分でもある山田トレーナーがセコンドにつけなかったですね。

高谷　まぁ、チーム黒船は活動停止になっちゃいましたけど、山田さんにボクシングだけ習うぶんにはJBC（日本ボクシングコミッション）から何も言われないんで、とくに問題なかったです。総合の練習は川尻くんとか元黒船のメンバーと別のジムに集まってスパーをやって。

――とりたてて支障はなかった、と？

高谷　100パーセントなかったって言ったら嘘になるけど、「あの人がいなかったから負けた」って、かったるいじゃないですか？　俺もそんなこと全然思ってないし。

――高谷さんと山田さんといえば、ブログでの物騒な言葉のやりとりが一部ファンのあいだでは「喧嘩してるんじゃないか？」っていうことで物議を醸してましたけど（詳しくは山田トレーナーのブログを各自調査！）。

高谷　ああ、周りの選手にも聞かれましたからね（笑）。

――山田さんのブログのコメント欄に高谷さんが書き込んでる文面をよく読むと「な～んだ、仲いいじゃん」って思うんですけど、ファンの中にはあれでも理解できない人もいるみたいで。

高谷　あ、あのコメント、俺が書いたってわかりました？

――〝ロマンチスト〟って名前で書き込んでますよね？　山田さんが前に「意外と高

谷って「ロマンチストなんだよ」って言ってたんで（笑）。

高谷 まぁ、あのやりとりは言葉遊びみたいな感じなんですけどね。山田さんが言うには「笑いのわからない奴が騒いでるだけだ」って（笑）。

――コミュニケーション手段だ、と（笑）。さて、今回は結果的には準優勝ですが、フェザー級の日本人ではトップの成績を収めました。そういう意味では高谷さんもDREAMを背負っていかないとっていう意識はありますか？

高谷 ……最後にああいう判定を出された俺が、そういう気持ちになると思います？（ギロっと睨んで）。

――な、なるほど……。

高谷 DREAMに愛着がないわけじゃないし、あの判定が意図的じゃないにしろ、いまの状態で「背負っていく気になりました」とかのんきに言う気にはなれない。それは当然ですよ（キッパリ）。

――……（汗）。

高谷 ……あ、この本日のシフォンケーキってヤツ頼んでもいいですか？

――へ？ あ、どうぞどうぞ！

高谷 （店員に）すみません、このケーキとミックスジュースをおかわりで。

――……え～と、まぁ、とりあえずは「ビビアーノと再戦をさせろ」っていう感じですかね？

高谷 そうですね。まぁ、組んでくれるでしょう。ファンでも判定に納得いってない人はたくさんいるだろうし、誰にも文句は言わせないですよ。

――今後としては大晦日に『Dynamite!!』があります。以前は「大晦日にはそんなに興味がない」と言ってましたが、もし再戦が組まれるとしたら？

高谷 そこで再戦が組まれるならやりたいですね。

――再戦でなければ、やっぱりお祭り的な大会にはべつに興味はない？

高谷 俺、慧舟會で練習してたじゃないですか？ けっこう慧舟會って、宇野（薫）さんとかもそういう感じなんですよね。それに今年は練習で夏を台なしにしたのに、さらに年末までっていうのはちょっと（笑）。まぁ、プロだからそんなこと言ってられないですけどね。

――長丁場のトーナメントを終えて、いま一番何がしたいですか？

高谷 やっぱりバイクに乗ってさすらいたいですよ。ストレス解消っていうか、バイクにまたがって自分一人になるのが好きな時間なんで。

――高谷さんのバイク好きは有名ですよね。そのバイクの良さを人に伝えるとすると？

高谷 いや、それはべつに人に伝わらなくていいです。バイクに乗ってくれとは言わない。ただ「筋トレだけはしてくれ」って説きたいです（笑）。

――なるほど（笑）。高谷さんはファイトマネーが入るたびにバイクに投資するって話も聞いたんですけど、もし今回優勝してたら賞金で新車を買う予定とかあったんじゃないですか？

高谷 ありましたよ。ていうか、先に買っちゃったんですよ。

――先に買っちゃいましたか！（笑）。

高谷 そうです、試合の2週間前に。やっぱり試合前って食欲だったり性欲だったり、いろいろ我慢するじゃないですか？ まぁ、性欲はそんなに我慢しないですけど（笑）。

――なんてったって肉食系ですもんね（笑）。

高谷 で、そういうのを我慢してると物欲に走るんですよ。だから「これは景気づけに試合前に一台買っちまうか！」ってなって、オーストラリアのKTMっていうバイクをちょっと。

――それでテンションを上げてって感じですか？

高谷 そうです。相当上がりましたよ。練習して、バイク引き取りに行って、また練習してみたいな（笑）。

――ちなみに一人で走ってるときは何を考えてます？

高谷 いろんなことを考えますよね。なんか瞑想してる感じっていうか。たまにエロいこととか邪念も入りますけど（笑）。まぁ、とりあえずいまは早く走りに行って、今回の決勝のモヤモヤを忘れないと。……いや、やっぱり再戦組まれないと収まりつかねえな（ボソっと）。

――とにかく身近な目標としてはビビアーノと組んでくれ、と。

高谷 『kamipro』でも実現するように煽ってくださいよ。絶対おもしろい試合してベルト獲ってみせるんで（ニヤリ）。

【09年10月8日／都内・表参道のオシャレなカフェにて収録】

HIROYUKI TAKAYA

たかや・ひろゆき■1977年6月10日、千葉県出身。01年アルティメットボクシングでプロデビュー。03年修斗新人王トーナメントで優勝し、その後『HERO'S』、『CAGE FORCE』、WECなどで活躍。今年開催されたDREAMフェザー級トーナメントでは準優勝の成績を収めた。167cm、63kg。

［09.10.6『DREAM.11』DREAMフェザー級リザーブマッチ］
神奈川・横浜アリーナ
○宮田和幸 vs DJ.taiki×
（2R終了 判定3-0）
打撃で活路を見出したいtaikiだったが、宮田はタックルでことごとくテイクダウン。終始有利なポジションをキープした宮田が、堅実にフルマークの判定勝利を収めた。

［09.10.6『DREAM.11』DREAMフェザー級GP準決勝戦］
神奈川・横浜アリーナ
○高谷裕之 vs 所 英男×
（2R 0分32秒 KO）
スタンドでは不利と見られた所だったが、逆にパンチの連打で高谷を立て続けにグラつかせる。これで火がついたのか、高谷は所に強烈なパウンドを浴びせて豪快なTKO勝利!

［09.10.6『DREAM.11』DREAMフェザー級GP準決勝戦］
神奈川・横浜アリーナ
○ビビアーノ・フェルナンデス vs ジョー・ウォーレン×
（1R 0分42秒 腕ひしぎ逆十字固め）
開始早々にビビアーノはウォーレンのタックルにテイクダウンされるも、下から腕ひしぎ逆十字を極めて秒殺。ほぼノーダメージで決勝戦に駒を進めた。

ビビアーノの
引き出し

青木真也の
コントロール

高谷裕之の
“目力”

“世界のTK”

髙阪剛の
10.6 DREAM.11 Point in Check!!

青木真也のライト級王座奪取。ビビアーノ・フェルナンデスのフェザー級GP優勝。
そして高谷裕之、所英男の頑張りと、さまざまなドラマがあった『DREAM.11』。
その闘いのポイントをおなじみプロフェッショナル解説者のTKにわかりやすく解説してもらいました!

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／乾晋也

——さて、髙阪さん。今日もすっかり恒例となった10・6『DREAM・11』のプロフェッショナル解説をお願いします！

髙阪　はい。よろしくお願いします。

——今回はフェザー級GPの準決勝と決勝。それからヨアキムvs青木真也のライト級タイトルマッチと、内容の濃い試合が展開されましたね。

髙阪　そうですね。いい試合が多かったと思います。

——ただ、何か物足りないと思ったんですよ。

髙阪　そうですか？

——それはなんだろうって考えてたら、今回は煽りVで鎧兜や忍者姿をした髙阪さんが登場してなかったんですよ！（笑）。

髙阪　あれはね、神出鬼没だから（笑）。どこで出てくるかわからない、そういうもんだから。

——では、次回に期待しておきます（笑）。それはさておき、まずはフェザー級GPからうかがいます。ビビアーノ優勝で幕を閉じましたけど、いかがでしたか？

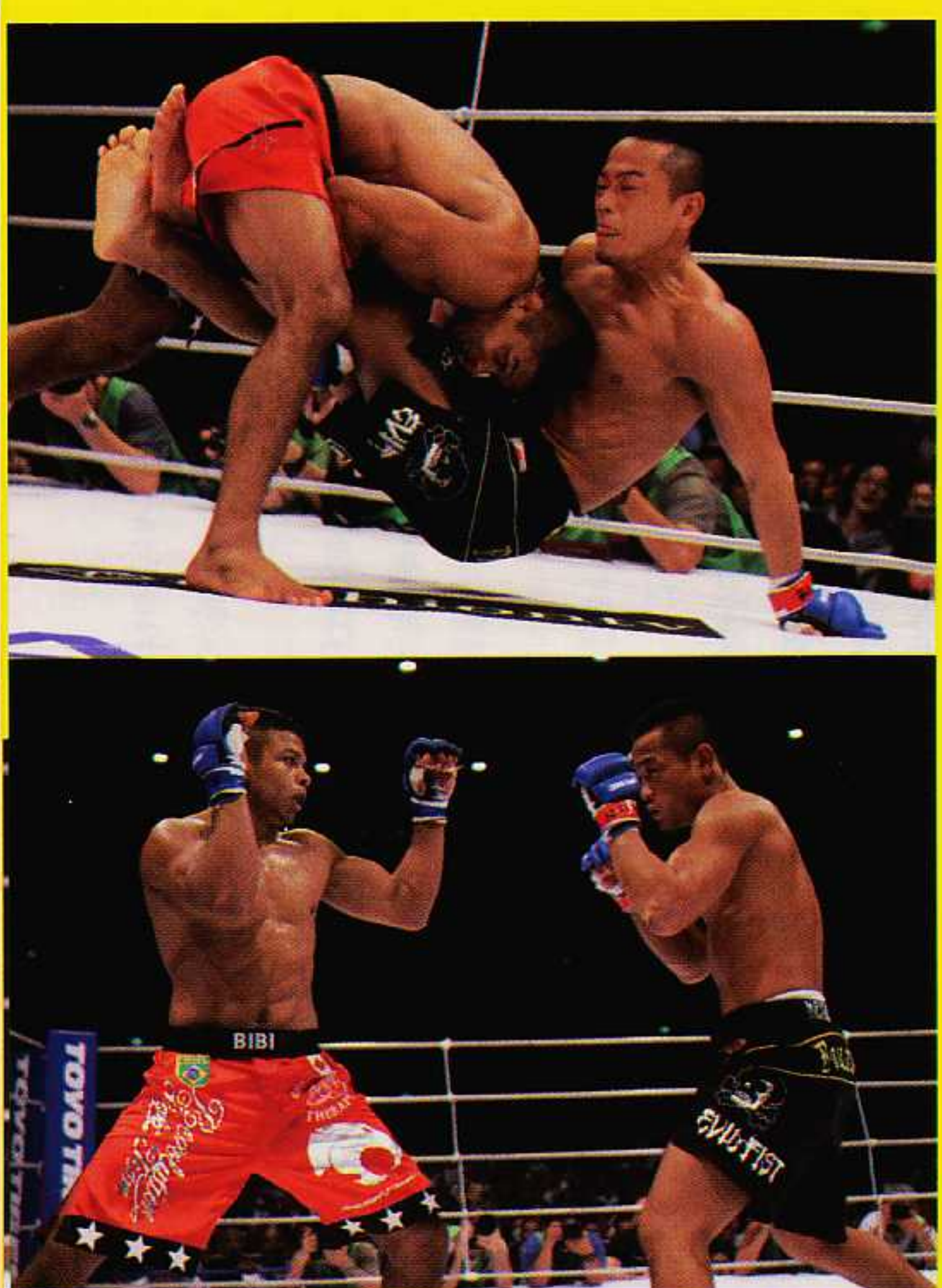
髙阪　いやあ、強くなりましたよね、ビビアーノ。自分が勝つために必要なところを出せるように、相手に仕向けるというか。これは格闘技の原点的なところなんですけど、相手の技と動きがあるから、自分の技が効いてくるっていう部分をあらためて考えさせられましたね。

——相手の動きに対応し、また相手の動きを支配するというような感じですか。

髙阪　たとえば、ジョー・ウォーレンに下から十字を取ったのも、テイクダウンを取られながら十字を狙ってたと思うんですよね。十字だけを狙ってたわけじゃないだろうけど、相手の動きや攻撃の隙に自分の技を差し込むことができてるんですよ。決勝の高谷戦なんかも、最初にテイクダウン取ってましたけど、あれなんかビビアーノ得意のパターンで、パンチを出しておいて、相手が打ち返してきたところで、カウンターでタックルに入る。そういう動きを自分から作ってやってるところが、うまいなと思いましたね。

——ウォーレンが何をしてくるか、高谷が何をしてくるか、しっかり研究したうえで、それに対する自分を作り上げてきた感じですか？

髙阪　そうですね。ただ、試合ってまず予測どおりにはいかないので、ビビアーノには、相手がどうきたらどう返すとか、そういうオプションがたくさんあって、いろんな相手に対応できる自分を作り上げてると思うんですよ。

ビビアーノにはいろんな攻撃に咄嗟に反応できる引き出しがある

決勝の高谷戦では前半、カウンターのタックルを何度も決めていたビビアーノ。試合後半になりなかなか倒せなくなったあとも、高谷に決定打を打たせず、判定で逃げ切り見事に優勝を飾った。

——なるほど。〝ヤマを張る〟んじゃなしに、いろんな局面に対応できる準備ができている、と。

髙阪　そして、それを咄嗟の判断で身体が反応して動いてくれてるっていうところが、成長したなって思えたんですよね。

——決勝なんかも、後半はなかなかテイクダウンが奪えなくなった中でも、きちんと対応して、高谷選手に完全にはペースを握らせませんでしたからね。

髙阪　あのあたりのくだりで言うと、高谷はよくやったと思うんですよね。タックルを全部切って、2ラウンドは完全に高谷の試合でしたよね。ただ、ビビアーノはそういう状態の中でも、最低限アドバンテージを取られない試合のやり方をしてるんですよ。たとえばダウン取られたり、打撃でめった打ちにされるとか、そういう状態にはさせなかった。相手の得意な局面の中でもなんとか試合を作り上げるビビアーノの幅の広さ、引き出しの多さが出たんだと思いますね。ハッキリ言って普通の相手だったら、あれ最後のところでKOされてますよ。

——高谷選手のパンチはかなり入ってましたからね。

髙阪　ああやって打たれて、一瞬グラッときたり効いている中で、身体がどう動いてくれるかっていうのは、ホントに選手の技量なんですよね。

——その幅の広さがあるのは、やはり寝技という自分のスペシャリティーを持ってるっていうのも大きいですかね？

髙阪　そうですね。結局、ビビアーノはそこにしっかりした柱があるから、その周りに肉づけをしていくだけでいいので。だからこそ、こんな急速に成長したんだと思うんですよね。

——惜しくも準優勝の高谷選手はどうでした？

髙阪　高谷は基本的に拳一つで倒すオフェンスの技術と、テイクダウンを取られないディフェンスの技術、その二つしか使ってないんですよ。でもその二つが特化してるので、あそこまで勝ち上がれるし、お客さんにも伝わりやすいんだろうと思うんですけどね。で、何よりも気持ちですよね。「勝つ」っていう勝負に対する執念が揺るがないので。それをとくに強く感じたのは、所戦のときなんですけど。

——ダウンを奪われながら逆転しましたよね。

髙阪　それもそうなんですけど、試合を通して高谷は所を精神的に追い込んでいってたんですよ。

——実際の攻撃ではなく、精神的に追い込んでましたか。

髙阪　高谷は前半からスタンドで圧力をかけて、コーナーに追い込んでいって、そうすると所は回りだしますよね。その回りだす瞬間はガードが甘くなるので、たとえばフックやローキックを入れるのって有効なんで、普通の選手だったら手を出したくなるんですけど、そこを高谷はスルーしてたんですよ。

——それは、追うことだけに集中してるってことですか？

髙阪　というか、たとえばライオンが獲物を狙うとき、睨んでるだけで相手が動けなくなる。その状態を作っていってたんだと思うんですよ。圧力だけで相手のスタミナを奪い、相手の動きを鈍くさせる。こういう試合のやり方をされると、相手は凄く嫌なんですよね。暗黙のうちに上下関係をハッキリさせられるというか、食う高谷、食われる所、みたいな関係を作られてしまうんですよ。

——知らぬうちに。

髙阪　そうなんですよ。先輩後輩みたいな、従わなきゃいけない関係性みたいなのがリング上でできてしまうという。でも、おもしろかったのは、所はそうやって追い込まれたときに力を発揮するんで、追い込まれながら出したパンチで高谷からダウンを奪ってるんですよね。だから、細かい技術うんぬんじゃなくて、精神的な部分や、格闘技の深層心理的なところがうかがえた試合でしたね。

――でも、あれをもう一度逆転する高谷選手もさすがですね。
高阪　あれは結局、最初から頭を押さえてるからなんですね。だからドカンとやられたところで「てめえ、なかなかやるじゃねえか。じゃあこっちも本気出すか」みたいな感じでいけるんですよ。そういうかたちになってましたからね。
――逆に所選手の精神状態からすると、「よし、イケる！」っていうよりも、「またいつ返されるか」って気持ちがずっと残っている。
高阪　そうなってしまうんですね。ああいう出だしのプレッシャーのかけ方で試合が始まると。
――目に見える技術というよりも、そういう部分の勝負が大きかった、と。
高阪　そうですね。とくに高谷の試合は全部そうなんですけど、今回はそれがもの凄かった。もう目から光線が出てるんやないかっていうぐらい目力があったんで。
――そんな相手と試合したくないですね（笑）。
高阪　だから、ホント若い選手とかに、ちゃんと観てほしい試合ですよ。手を出さなくても、相手を追い込む方法はあるんだっていうね。
――一番いい頃のミルコとかヴァンダレイなんかもそういう感じありましたもんね。
高阪　そうですね。普段の練習だったらしっかりガード固めてるのに、目力にやられてガードが下がっちゃったり、いつもの動きができなくなるって、格闘技ではよくあることですからね。
――あと、フェザー級ではもう一人。

高谷はライオンが獲物を狙うように睨みつけるだけで所を追い込んでいた

10.6 DREAM.11
Point in Check!!

見てみ、所英男にプレッシャーをかけていく高谷の目力！　高谷はこうして野獣のオーラを漂わせながら、どんどん所を精神的に追い込んでいったのだという。

あっというまに敗れてはしまいましたけど、ジョー・ウォーレンも末恐ろしい存在なんじゃないですか？
高阪　あのね、じつを言うと自分は、ひょっとしたらウォーレンが優勝するんじゃないかなって思ってたんですよ。底が見えないから。
――ポテンシャルだけで、ここまで上がってきた感がありますもんね。
高阪　ビビアーノのときもそうですけど、テイクダウンを奪ってインサイドガードの中で手を前に出すなんていうのは、いまの総合じゃ考えられないんですよ。しかも相手はビビアーノっていう柔術の黒帯ですからね。ちょっと総合知ってる選手なら、手を前に出してきた時点で「こいつ俺に十字取らせておいて、逆になんかやるつもりなんじゃないの？」って思うんじゃないかな。
――罠じゃないか、と（笑）。
高阪　まあ、ビビアーノはそんなのおかまいなしに十字取ったので、それはビビアーノの強さですけど。とにかく、ウォーレンはいまのMMAのスタンダードじゃない部分があまりにも多すぎるんですよね。テイクダウンにしても、これだけMMAの打撃レベルが上がってるこの時代に、顔を前に出しながら突っ込んでくるなんて、普通考えられないですよ。それでも、パンチをもらいながらも必ずテイクダウンを奪えるってところが、ちょっと底が見えないですね。
――ホント、レスラーとしての資質とポテンシャルだけで向かってきて、それがあのレベルで通用していると いう。
高阪　で、どうもロンドンオリンピックを狙ってるらしいんですよ。もしかしたらウォーレンにしてみたら、総合の試合に出てるっていうのはオリンピックに出るための練習というか、身体がなまらないようにするための自主トレの一環なんじゃないかって（笑）。もし、そうだったら素敵だな。それで準決勝まで進んだなら、とんでもなくすげえヤツだなって思うんですけどね。
――今回、フェザー級GPはビビアーノが優勝しましたけど、まだまだ群雄割拠という感じになりそうですよね？
高阪　そうですよね。DREAMのフェザー級は体重がWECでいうところのバンタム級61・2キロからも、フェザー級65・8キロからも出てこれる体重設定なんで、いろんなヤツが狙ってくると思うんですけどね。そういうのを考えると、今後も楽しみにはなってくるし、いまDREAMに上がってるフェザー級の選手だけでシャッフルしても相当いいマッチメイクできますから。
――では、続いてライト級のタイトルマッチについてお願いします。
高阪　この試合はホントに、青木がよくやったと思いますよ。青木が積極的にテイクダウンを奪いにいってるじゃないですか。それに対してヨアキムが、そのテイクダウンの動きに絡めて自分から何かをするっていうことを一切やってない。これはヨアキムが青木の術中にハマりたくなかったからだと思うんですよ。
――ここでヘタに動いたら、青木の思うつぼだ、と。
高阪　たとえば、テイクダウン取られてもまだ動きがある中で、そのまますり抜けて立つとか、一瞬亀になって相手を振り落とすとか、そういうこともヨアキムはできるんですけど、それをまったくやらなかった。ということは、青木の世界にハマりたくなかったんでしょうね。
――それだけ青木選手の寝技を警戒していたというか。
高阪　そうですね、だからああいう固い試合というか、動きが少ない試合になってしまったと思うんですね。
――なるほど。
高阪　対する青木はテイクダウン取って寝技で仕留めるっていう、そこに照準を絞ってたと思うんですよ。そこは青木の一番強いところでもあるので、その一番強いところで勝負

ビビアーノにあっというまに腕十字を極められ「ギブアップしてない」とアピールするウォーレン。総合のセオリーが身についていない状態でここまで勝ち上がってきたポテンシャルは末恐ろしい。

するという意思の表われだったと思うんですね。ヨアキムがカウンターのパンチを狙ってるのをわかってて、迷いなく深く踏み込んでるんで、あれは完全に狙ってるタックルですよね。だから、完璧に倒してポジション奪ってそこから展開することを頭に入れて試合をやっていたんだと思うんですよ。

──じゃあ青木選手もヨアキムもそれをやりきった感じなんですかね。

高阪　青木はやりきったと思います。でも、ヨアキムは自分のやりたいことができなかったんだと思うんですよ。青木の技をやらせないようにするだけで、そこから自分が勝つにはどうしたらいいかっていうのを、見つけ出す前に試合が終わってしまったっていうような感じでしたね。

──そして、青木選手の関節技をあれだけ警戒していたのに、最後は腕を取られてしまいましたしね。

高阪　最後、青木はマウントを奪いましたけど、ヨアキムはマウントを取られながらも、そこからすり抜けるのが凄くうまいんですよね。相手の足の付け根を両手で押して、ヒザを青木の股のあいだからスッと上げていく。そうするとマウントだったのに今度はバタフライガードの状態になって、そこから相手を蹴って立ち上がるっていう動きがヨアキムは得意なんですけど、それがまったくできなかった。

──あれはヨアキムが動かなかったんですか。それとも青木がさせなかったんですか？

高阪　ここは青木がさせなかったんでしょうね。試合が終わってからヨアキムが「アオキが重く感じた」って言ってたでしょ？　その「重く感じた」っていうのは、青木の押さえ込みの強さだと思うんですよね。同じライト級で青木が重くなってるわけがないから。

──そりゃそうですよね。子泣きジジイじゃあるまいし（笑）。

高阪　だからその押さえ込みの強さ、コントロールのときの体重のかけ方とか、そのへんのことを言ってるんだと思うんですよね。

──では、最後の極めばかりに目がいきがちですけど、その前のマウントの押さえ込みが重要だったわけですね。

高阪　あと特筆すべきは、いわゆる猪木vsアリの状態のときのコントロールですよね。ヨアキムは下になってから、下から蹴り上げたり足関を狙いながらポジションを狙うとか、そういうことを凄く器用にやるんですよ。それが一度、金的に入ってしまったのが残念ですけど、青木はそれ以外は、両足をつかんでうしろでんぐり返しの状態にしてましたよね。

──潰してましたよね。

高阪　足がうるさい相手にはああするのが凄く有効なんですよ。だから青木は自分が勝つために必要な場面作りに徹してたんですよね。だって実際ね、腕十字ってなかなか極まらないんですよ。青木はフロントチョークを入れて、ヨアキムが嫌がってもがいて起き上がってくるタイミングで入ったんですけど、よくあそこでギャンブルにいきましたね。試合の時間が残り少なかったからっていうのもあると思うんですけど、あれを失敗したら青木が前回負けたときの状態になってましたから。打撃を入れられてしまう状態に。そうなりかねない技をあえて仕掛けたということは、あそこで勝負をかけたんだと思います。

──マウントで乗っかってれば、判定勝ちなわけですからね。

高阪　そういうことですよね。だけどパウンドもあまり使ってなかったんで、青木としては極めにいくっていうことを強く意識して試合してたんだろうなって感じました。

──なるほど。押さえ込みの時間が長い試合でしたけど、あれは判定狙いではなく、極めるチャンスを作るために、やってたことなんですね。

高阪　そうだと思いますよ。

──そしてDREAMライト級で日本人チャンピオンが誕生しました。

高阪　DREAMで日本人のチャンピオンが生まれるのって初めてですよね？　しかも、あれだけキツいメンバーが揃ったライト級ですからね。たいしたもんですよ。

──青木選手はチャンピオンになりましたけど、試合後にBJペンの名前を出して、まだ上がいるぞっていうことを頭に入れて闘ってますよね。

高阪　そうですよね。いやあ、確かにBJと試合やらせたいなあ。これは観たいですよ！

──観たいですよね。

高阪　ガンツの力でどうにかならんもんかね。ダナに「どないでっか？」みたいな。

──いや、ダナのインタビューするときとかに「どないでっか？」「いい選手いますよ」ぐらいは言えますけど「知ってるよ」って言われて終わりだと思います（笑）。

高阪　まあ、そうだろうな。

──じゃあ、言わないでくださいよ（笑）。それにしても、ライト級は充実してますよね。次の10・25『DREAM・12』では菊野選手の大一番もありますしね。どうですか、菊野vsアルバレス戦は？

高阪　まあ、普通にやったら勝てますよ。

──アルバレス相手に普通にやったら勝てますか！

高阪　でも、その普通がやれなくなるのが試合だから、普通に闘えるようにするだけですよね。そうすれば間違いなく勝ちますよ。

──それは楽しみですねえ！　高阪さんは当日どうするんですか？

高阪　もちろん大阪に行きますよ。

──でも、同じ日のお昼にUFCの収録がWOWOWであるんじゃないですか？

高阪　そうなんですよね。これが大阪じゃなかったら、ハシゴできるんですけど、DREAMが大阪なんで、UFCの解説は今回お休みですよ。

──ついにお休みですか。

高阪　これで皆勤賞もらえなくなりました。

──でも、DREAMは解説者というより、菊野選手のセコンドですからね。

高阪　そうなんですよ。解説もやりますけど、克紀に勝たせるために行くわけですからね。

──陣営のトップが辰巳のWOWOWスタジオでUFCにうつつを抜かしてる場合じゃないですよね（笑）。では、菊野選手の勝利を期待してますよ。

高阪　はい、期待してください。

──ありがとうございました！

【09年10月7日／電話取材にて収録】

青木は勝つために必要な場面作りに徹したからこそ一本勝ちできた

ヨアキムを完全に押さえ込んだ青木のマウント。さらにフロントチョークを餌にして、腕十字に切り替えての一本勝ち。見事な寝技アリ地獄を見せてくれた。

日本を知るならアメリカを見ろ!!

「アメリカ・イズ・ナンバー1」なアメリカにおいていまだに日本の総合格闘技事情が大きく取り扱われている——!!

先日行われた『DREAM・11』の地上波放送が物議をかもしている。青木真也とヨアキム・ハンセンのライト級タイトルマッチと、ビビアーノ・フェルナンデスと高谷裕之のフェザー級グランプリ決勝戦は編集によってズタズタに切り裂かれ、その攻防の妙味や、耐えに耐えてラストに待っているカタルシスは、放送を観た視聴者にはビタ1ミリたりとも伝わらなかったであろう。少なくとも日本の放送メディアは、総合格闘技のおもしろさや素晴らしさを視聴者に伝えようという工夫はまったくされていないと思われるし（そんな中で孤軍奮闘をしている高阪剛氏には本当に頭が下がる思いだ）、そもそも総合格闘技をスポーツとして認識すらしていないのではないだろうか。

そんな日本の放送メディアの中で、格闘技界の情報を俯瞰的に収集し、それを発信しようとしているのは、CSのFightingTVサムライが放送している『格闘ジャングル2』だけなのは、いかにもさびしい話だ。しかしその『格闘ジャングル2』でさえ、基本的に日本で起こっていること、日本人が関わっていることのみという、非常に限定された範囲の中での報道であり、全世界的に巻き起こっている総合格闘技のダイナミックな動きというものを感じる番組には至っていないのが現実だ。

しかし総合格闘技が空前のブームを巻き起こしているアメリカでは、特定の国やイベントに依らない、真の意味でのMMAニュース番組がいくつも立ち上がっている。今回はそんな海外のMMAニュース番組を取り上げたいと思う。

現在、アメリカで放送されている主なMMAニュース番組は3つ。HDNetで放送されている『インサイドMMA』、FOXスポーツで放送されている『FOXファイト・ゲーム』、そしてESPNで放送されている『MMAライブ』だ（ほかにiBNの『HEAT』やラジオ番組なども存在している）。

どの番組も、UFCやストライク・フォースといった国内メジャーイベントだけでなく、『DREAM』、『戦極』といった日本のイベントも積極的に取り上げているのが特徴。他局で放送されているイベントの映像もふんだんに流されるし、CM時間にはUFCのPPV放送や他局で放送されるMMAイベントのCMがバンバン流れている。

こうした垣根のなさの根底にある

のは、すでにアメリカではMMAがアスレチック・コミッションに認可

MA選手の食事のレシピの紹介など、MMAというスポーツの理解度を高

TBSでは伝えてくれない

アメリカ発 JAPANESE MMA事情

※このコラムは携帯サイト『kamipro.Move』で連載中の「This week MMA」に掲載されたものです。

のは、すでにアメリカではMMAがアスレチック・コミッションに認可された、非常に公共性が高い正式なスポーツであるという認識が強くある点だろう。この点において、イベントがそれを放送する局の所有物と化してしまっている日本とは雲泥の差があると言える。

各番組の特徴としては、『インサイドMMA』は、格闘家や識者をゲストに、アナウンサーのケニー・ライスと解説者のバス・ルッテンが悪ふざけをしながらトークを行なう、トークバラエティ形式の番組。バラエティ豊かなゲストと、堅苦しくない雰囲気の中で弾むトークが魅力の番組だ。『FOXファイト・ゲーム』はFOXニュースデジタルのプロデューサーであるマイク・ストラカがホストを務めるMMAニュース番組。選手よりもイベンターやアナリストをゲストに迎えてMMA時事問題をトークすることの多い番組なのだが、インタビュアーのストラカがゲストの100倍しゃべるのが難点。

そして個人的に一押しなのがスポーツ専門チャンネルであるESPNの『MMAライブ』。こちらは純然たるスポーツニュース番組の形式をとっており、アナウンサーのジョン・アニック、MMAアナリストのフランクリン・マクニールと、ケニー・フロリアン、ミゲール・トレース、ステファン・ボナーといった現役選手のコメンテーターを中心に、MMA時事問題を取り上げたり、試合のレビューを行なう番組だ。

ただ試合に関する情報だけでなく、MMA選手のテクニック講座や、MMA選手の食事のレシピの紹介など、MMAというスポーツの理解度を高めるための番組構成に徹しており、その辺りも非常に好感が持てる。

そんな『MMAライブ』では、他の番組より日本のMMA事情が大きくフィーチャーされている。と言ってもすべてが大きく取り扱われているわけではなく(『戦極』や修斗の話題も少なくないが扱いは小さめ)、青木真也や川尻達也といった世界レベルの選手の話題や、カンセコのMMA挑戦や「またまたボブ・サップが登場」といったハルクな話題が中心となっているのだが、とくに青木の話題は定期的に扱われており、出演者が「BJペンに対抗できる数少ないライト級ファイター」「デミアン・マイアと並ぶサブミッションアーティスト」と語るなど尋常ではないほど大きくフィーチャーされている。

本来「アメリカ・イズ・ナンバー1」なアメリカにおいて、いまだに日本の総合格闘技事情が大きく扱われているという状態は、非常に喜ばしいことであると思える。それに反してアメリカで起こっていることをないことにしているような日本の姿勢は、やはり美しい状態とは言い難いのではないだろうか。

ちなみに今回紹介した番組は、すべてiTuneStoreに登録済みであり、ポッドキャストで視聴が可能だ。初心者は基本的な情報を日本のMMAニュースブログで収集した後に観ると、英語がわからなくても理解度は上がるはず。ぜひチャレンジしてみてほしい。

(高橋ターヤン)

――松林さんは『UFC103』を観
戦&取材しに、はるばるテキサス州

ガンツ　ちゃんとミルコの物語とし
て見られましたよね。ミルコって最

ど、それでも相手のドス・サントスは
倒れなかったもんなぁ。あれは相手

ガンツ　ミルコはじつは右利きなん
ですよね。その利き足である右を軸

座談会出席者

我々は一生ボブ・サップを観続けなければならないのか？

TBSよ “大衆”をナメんな！

座談会

10.6『DREAM.11』が青木のタイトルマッチや
フェザー級GPで盛り上がった一方、
地上波での放送にはまたもや賛否両論の声。
いったい、対象としている“大衆”とはなんなのか、
格闘技の本質とはなんなのか!?
今回の地上波放送を機に、もう一度考えてみた。

聞き手／ジャン斉藤　試合写真／乾晋也

ミルコの拠りどころはPRIDEのチャンピオンだったということ

――松林さんは『UFC103』を観戦&取材しに、はるばるテキサス州ダラスまで行ってきたらしいですね。

松林 いやあ、「これは絶対に見逃しちゃいけない!」と思ってさ。だってさぁ、いまのUFCは毎回の大会が〝世界最高峰の闘い〟なのに、今回はさらにあの試合カードだよ。

――そのわりには「さいたまコミュニティアリーナは遠いから、編集部で『戦極』のPPVを観ようよ」と誘ってきたり。あきらかにダラスのほうが遠いですよ(笑)。

松林 遠いという圧倒的な物理的事実を超えてでも見逃せない興行ということ。

ガンツ いまや死語ですけど、〝密航〟というヤツですね(笑)。

松林 実際、読者の皆さんも行けるなら、観に行ったほうがいいですよ。盛り上がりが真っ盛りのこの時期に。

――また簡単に言いますね(笑)。

松林 じつはダラスでUFCが開催されるのって初めてなんだよね。だから会場の熱気はいつものUFC会場と同じなんだけど、ラスベガスの観客とは違って、ちょっと初モノを観るような雰囲気はあったんだよね。

ガンツ でも、会場ではちゃんと「クロコップ!」コールが起こってましたよね。

松林 ミルコが劣勢になったときのあの歓声は凄かった! それに今回のミルコはすべて含めて素晴らしかったよね。

ガンツ ちゃんとミルコの物語として見られましたよね。ミルコって最強を目指して闘ってきたけど、ヒョードルに敗れてその夢がかなわず、そして再び頂点を目指したうえでの負けじゃないですか。人間ドラマとしてはハッピーエンドじゃないけども、スポーツマンの人生としてはあきらかに正しいし、あれも〝男の仕事〟ですよね。しかも今回、ミルコがPRIDEのTシャツを着てきたのも秘めたる思いがあってよかったなって。

松林 あれってどういう意味なの?

ガンツ 要は、ミルコの本当の拠りどころはやっぱり自分がPRIDEのチャンピオンだったんだということなんですよ。俺はPRIDE無差別級GPの王者なんだ、あの頃の自分に戻るんだっていう意味だったと思います。

松林 そこが拠りどころだったんだ……。

ガンツ ただ、しっかり身体も作って万全の状態でオクタゴンに上がったものの、やっぱり昔みたいに身体が動かなくて、自分が歳を取ったことを実感したというか。

松林 1ラウンド目に得意の左カウンターがしっかりと入ってたんだけど、それでも相手のドス・サントスは倒れなかったもんなぁ。あれは相手が頑丈すぎるんだけど(笑)。

ガンツ だから、ミルコはしっかり闘ったんだけど、若さという名のパワーに負けたんですよね。だって、ミルコが得意としてる左のショートストレートがしっかり入ってもなお倒れないんだから。あのショートストレートは全盛期のサップを文字どおり葬り、ヒョードルをもぐらつかせたミルコの懐刀なんだけど、それがまともに入ってもダメなんだから。

松林 オレも「そのシチュエーションも含めていい試合だなぁ」と思ったんだけど、一発目のハイキックを出した瞬間に、正直「これはもうダメだな」と感じたよね。俺から見ても昔のハイキックじゃないんだよ。ヒザを手術して、タメと回転が昔とぜんぜん違う蹴りになっちゃったんだろうなあ……。

もう一度最強にたどり着きたいと、UFCで男の勝負に挑んだミルコ。しかし、ドス・サントスの前に無念のKO負け……。敗れはしたが、これがロマンというものだ。

ガンツ ミルコはじつは右利きなんですよね。その利き足である右を軸足にすることで回転力をつけて左ハイを強くするという武器を作った。同じく右利きである松井秀喜が左バッターなのと同じような理由で。

松林 それに加えて、ミルコのハイキックをもらう人ってみんなミドルだと思ってガードを下げるから、凄く強烈に入っちゃうんだよね。

ガンツ ただ、そのミルコはもうミドルとローが打てなくなってるですよ。それはヒザのケガや、あとはオクタゴンで倒されたら怖いという恐怖心もあるんでしょうね。つまり、「寝たらおしまいだ」のミルコに戻っちゃったというか。PRIDE時代のミルコはガードポジションがうまいからブレイクでしのげてたけど、UFCの場合はあそこからヒジが出てきちゃうから。ゴンザガにはそれでやられたんだよ。つまり絶対に倒れたくない、でもミドルを蹴ったら倒されるかもしれない、じゃあハイキックしかない、でもそれは読まれてる、という。

松林 それでも最強を目指して闘ってたんだからジ〜ンとくるよなぁ。

ガンツ そういう男が最後に勝負をかけたドラマを目の前で観てるんですけど、なぜかそれとは関係ない実況が延々と行なわれてるWOWOW中継。もう、俺を泣かせてくれよ!っていうね。

――TK以外の実況解説がどこを切ってもトンチンカンだから、まったく試合に集中できなかった(笑)。

ガンツ ま、そういう話はミルコ座談会でしっかりやってるから省きましょう。ただこれだけは言っておきたいんだけど、我々はWOWOW開局当時からの加入者だから、少しは言う権利はありますからね!

松林 リングス旗揚げ時代からずっと加入してるからね(笑)。

ガンツ そうですよ。WOWOWはまだまだ期待できると思うんだけど、TBSのDREAM中継はかなりの重症。『DREAM・11』の編集はどこにメスを入れたらいいかもわからないよ!

松林 オレはまだ映像を観てないんだけど、地上波はそこまで重症患者だったんだ。

――簡単に言うと、ライト級やフェザー級のチャンピオンシップがダイジェスト扱いなのに、あいかわらずボブ・サップがメイン級で重宝されてたんですね。

ガンツ あの編集はあきらかに格闘技ファンの視聴者に向けては作られてませんよね。でも、それ以外の層に「世間の皆さん、格闘技はおもしろいですよ!」と伝えてるわけでもない。いったい誰のために放送してるのか

座談会出席者

松林 貴
うまいものとおもしろいものがある場所には、ぶらりと現われる本誌・編集次長。写真はリングス・ロシアを訪れたときの一枚。すでにへべれけ状態だ。

堀江ガンツ
本誌・編集部員。変態座談会主宰者であり、その変態道は海を渡ってUFCにまで通じている。写真はミノワマンばりにねぶた祭を満喫しているときのショット。

わからないですよ！

——『DREAM・11』って決してつまらない大会ではなかったけど、なんだかとてつもない敗北感がありますよね。笹原GMもインタビューしたらなんか元気なかったし。『DREAM・9』終了後には「天下統一！」宣言していたあの笹原信長が（笑）。

ガンツ　だから、もう大会内容、視聴率うんぬんの問題じゃないんですよ。「つまらない！」というムードが漂ってるというかさ。ただ単に視聴率だけがほしいなら「格闘技なんかやらないで違う番組にすればいいじゃん！」と思うよね。

——テレビ側からすると、大衆を狙ってるということになるんでしょうけど。

ガンツ　大衆を狙うのはぜんぜんいいですよ。だって大衆を振り向かせるのは本当にたいへんだし、成功したらビッグビジネスになるわけだから。でも、いまのTBSが見せてるものって「大衆が観たいもの」じゃなくて「大衆が少しわかりそうもの、知ってそうなもの」だもん。「わかるもの」「知ってるもの」じゃなくて「～そうなもの」（笑）。

——なんかTBSには〝高視聴率＝おもしろい、世間に届いてる〟みたいなムードがありますよね。今回、所くんよりサップのほうが視聴率は高かったから、TBSは「やっぱりサップは世間に届いてるよね」とか言いだしかねない（笑）。

松林　あえて「サップ的」と言わせてもらうけど、あいかわらずTBSは「サップ的なものが観たいんでしょ」って感じなの？

——でしょうねぇ。世の中にアンチ亀田のムードが蔓延してるときですら、TBSは亀田押しでしたから。結果的に亀田三兄弟と内藤大助がモンスター化したから、結果オーライなんですけど。

ガンツ　それに大衆ってバカじゃないから、出されたものがおもしろいものかどうかはわかるよ。だからここ数年、『Dynamite!!』とかDREAMの中継で浸透したことって、「格闘技っておもしろい」ってこと以上に「なんか八百長くさい」ということですもんね。

——え～、断っておきますが、DREAMは決して八百長ではありません（笑）。

ガンツ　ミノワマンだって、ホンマンとやるなんて、本来なら命懸けだよ。ちょっと体重のかけ方違うだけで、大けがする危険性だってあるんだから。でも、あの空間だと全然そんなふうに思えないんだよな。ホント闘ってる選手がかわいそうだよ、コンチクショウッ!!

——え～、そして堀江ガンツは酔っぱらってるわけでもありません（笑）。

松林　悲しいかな、俺は地上波で観た人に翌日会社でいきなり「ミノワマンvsチェ・ホンマンって八百長でしょ？」って言われたもんなぁ。わざわざ否定するのもバカらしいんだけど、ズバリ言ってそれが大衆の感想、大衆の答えです（笑）。

——魔裟斗ですら、うさんくさいものとして見られてますからね。「またへんな判定で勝ったね！」とか。魔裟斗は本当に凄いことをやってるのに、〝テレビ格闘技〟から派生する八百長的なイメージが強すぎるんでしょうね。

松林　個人的には、魔裟斗に関してはK―1側から積極的にプレゼンテーションしている感じはしないし、逆に大衆から魔裟斗に寄っていった気がするんだけどさ。ところがボブ・サップ的なものは「これ、おもしろいでしょ？」って出されてる感じがする。それがハマらないというか。

桜庭が現在ハマっているというエヴァンゲリオンの兵器・A.T.フィールドのマスクをかぶり、特別待遇の煽りVで登場した桜庭和志。しかし、こういった登場はヴァンダレイ戦など桜庭がギリギリの試合をしたときにこそ響くもの、ですよね?

まだTBSは「サップ的なものが観たいんでしょ？」って感じなの？

ガンツ　要は「これ、おいしいぞ！」って出してくれるんならまだいいんですけど、「おまえら、これがうまいんだろ？」って感じだから、視聴者はバカにされてる気がするんですよ。「ちゃんとおいしいもの出せよ！」って。

——だから「TBSが想定してる大衆って何？」って話ですね。

ガンツ　そもそもさ、いままでK―1や総合格闘技の一般人気が出た理由って、単純に「凄い」「強い」「おもしろい」って一般の視聴者でも思ったからっていう部分が凄く大きいでしょ？　そしてその凄さが多くの人に伝わって波及したわけでしょ。でも、いまって放送してる人間も提供してる人間も観てる人間も、みんながこれじゃダメだと思ってる中で「大衆はボブ・サップが観たいんです」と言われても、そんな大衆どこにいるんだよって思うよね。

——昔、あるプロレス団体が夕方の特番をやろうとしたときに、テレビ側は「氷川きよしを出してくれ」と言ってきたらしいんですよ。

松林　それは中高年の女性層も取り込もうってことなのか？（笑）。

——たぶんそうなんですよね。いまの格闘技番組もそういう狙いはあるんですけど、目的自体がムチャだからおかしなことがたくさん起きる（笑）。でも氷川きよしを出すんだったら、氷川きよしの番組を作ればいいじゃないですか。まずは前提として格闘技を見せるということが抜け落ちてしまってるんでしょうね。

ガンツ　前提を飛び越えて「大衆を振り向かせる」という話をしてるんだったら意味ないよ。いままで格闘技は凄いものだというのを見せてきたのに、それを台なしにしている。寝技の試合はわかりづらいからっていう理由でダイジェストにすれば、「寝技っておもしろくないでしょ」って宣伝してるだけなんだよ。

——間違った格闘技の啓蒙活動だ（笑）。

ガンツ　サップだけじゃないよ。あんなことやってたら今回の桜庭と川尻の試合だって八百長だと思われてるよ！（キッパリ）。

——読者の皆さん、断っておきますけど、あの試合も八百長じゃないです（笑）。

松林　でも悲しいかな、俺はミノワマンvsチェ・ホンマンのことを聞いてきた人に、「桜庭の試合もそうでしょ？」って言われたからなぁ。それがあの中継を観た大衆の答えだから、ホントに悲しいなぁ。

——でも、八百長にも一流から三流まであるじゃないですか。

松林　一流の八百長はある意味で真剣勝負より凄かったりするからね。

——今回は三流どころか十流の域ですからね（笑）。どうせだったら「一

流の八百長でダマしてくれ!」って話なんですけど。ホント、桜庭と川尻という日本が誇る選手にあんな試合をさせないでくれって! 桜庭と川尻は悪くないのに、あからさまに噛ませ犬を用意されると、それだけでその選手のイメージって落ちちゃうからね。

――そもそも今回の桜庭の出場って、あきらかにテレビ局側の要請でしょ。それなのにダイジェストってどういうわけなんだ、おい!(笑)。

ガンツ テレビに振り回されてほしくないよ!

――でも、ボクは桜庭に関しては、こういう試合は〝あり〟ですけどね。ミルコはミルコの生き方はあるし、桜庭には桜庭の生き方はある。菊田早苗もアレはアレでバカ負けの域に入った(笑)。実際、「40歳のMMA」ってそれだけで興味深くないですか? そこはイベンターの見せ方次第じゃないかな、と。

ガンツ だったらちゃんといまのサクに見合う選手とやるべきだよね。そこでどう闘うかというのは凄く美しいし、観たいでしょ。で、桜庭の試合前の煽りVに出てきた各界のベテラン選手たちはみんなそれやってるよ。

――金本知憲なんて阪神タイガースの4番ですね。

松林 武豊だって去年もリーディングジョッキーだし、今年だって今日現在で全国リーディング2位。ちゃんと第一線で闘ってるからなぁ。

ガンツ でも、バッターボックスに立つ金本に対して、ホームラン打ってもらいたいからって、野球が本職じゃないサッカー選手にピッチャーやらせたりしないでしょ? そんなことしたら、金本がホームラン打っても喜べないじゃない。桜庭にやらせてることはそれと同じですよ。せめて相手は総合格闘家にしてくれって。マヌーフと再戦してくれとか、若くて獰猛なヤツとやってくれと言ってるわけじゃないけど、総合格闘家じゃない選手を連れてきてやらせるって、それは勝負でもなんでもないですよ。それがフリークショーだと思われる理由でしょう。

――言ってしまえば、無意味な〝顔見せ〟でしかなかった、と。ボクは〝顔見せ〟もありなんですよ。その次に何か巨大なドラマがあるならの話ですけど。そこを主催者がどう設定するかで観客の見方もだいぶ違いますし。

松林 じゃあ、大晦日の青木戦を見据えた今回の川尻達也のマッチメイクはどうなの?

――え～、正直、厳しかったと思います。せめて青木から川尻に対戦を呼びかけないと、なんか川尻が王者に見えちゃいますよね。

ガンツ そこはちゃんと〝プロレス〟をやってほしいよね。観客の心をつかむのって難しいんだよ。あのWWEでさえファンの真理を読み間違えるんだから。

――でもまあ、青木真也vsヨアキム・ハンセン戦は、ボクは「放送すらされない」という予想コラムを書いていたくらいですから。

ガンツ でも「放送すらされない」と思ったのは、いまの格闘技番組がそういう風潮だからでしょう? 青木の試合なんて、野球だったら、9回途中まで得点が入らない緊張感ある試合で、最後の最後にサヨナラホームラン打ったようなもんじゃない。

松林 その過程をまったく見せずにホームランだけ見せられても困るよね(笑)。

ガンツ 今回はタイトルマッチなんだから試合の行方がどうなるかを興味深く見せるようにやっておくのがあたりまえだと思うんだよね。それだったら野球だってホームラン競争やったほうがわかりやすいですよ。テレビ側が格闘技の試合に対してやってることってそれと同じだよ。

――でも、あの試合をフルで流せるかというと、その土壌は日本にはないんですよね。

ガンツ だからハッキリ言うと退化してるんだよ。PRIDEでは寝技主体のノゲイラの試合はちゃんとフルで流されてたんだから。それがいまの地上波に耐えられないというなら、視聴者の格闘技を見る目が退化してるんだって。で、それを提供する側がそう仕向けてる。今回の問題はサップを重宝したとかそういうことじゃなくて、格闘技をつまらなく提供しているあの姿勢ですよ。PRIDEのときはああじゃなかったもん。

松林 今回の青木vsハンセンを『PRIDE武士道』でやってたら、地上波放送はともかくライブとしてはかなりバチッとハマったと思うんだよね。

高谷を相手に、フェザー級GPの頂点を目指して緊張感のある名勝負を演じた所英男。しかし、この試合ですら視聴率ではサップにかなわないというから、非常に萎える。

“大衆”をナメんな! 座談会

※注
真剣に
読まないように!

kamiの一週間 出張版!

松 もう一週間前の話だけど、10.6『DREAM.11』では熱戦が繰り広げられた。
竹内 フェザー級GPのファイナル、ハンセンvs青木などは、非常にハイレベルな闘いだったよな。
松 あとはミノワマンがチェ・ホンマンを見事にヒールホールドで下した試合もおおいに盛り上がった。
竹内 でも、あの日一番客席が熱くなったのは、あれだろう。
松 なんだよ。
竹内 もちろん、高谷裕之vs所英男戦の最中に起こった客席の乱闘だよ!
松 熱くなった意味が違うだろ!
竹内 あの乱闘の決着戦は大晦日に行なわれます。
松 やるわけないだろ! 今後はそういうトラブルがないよう、DREAMは警備を強化するって言ってるんだから。
竹内 よし、ミスター高橋の警備会社に警備を頼もう!
松 そんな警備会社ないよ! それが頓挫して、“高橋本”が出ちゃったんだよ!
竹内 じゃあ、今後はDREAMも入場口に金属探知器を設置。さらにリングサイドでエンセン井上と村上和成が睨みをきかせるようにしよう。
松 それじゃ、まるっきり『ジ・アウトサイダー』だろ! やっぱり熱い試合はいいけど、安全に観戦できるようにしてほしいよな。
竹内 そんなトラブルはちょっとあったものの、高谷vs所をはじめとしたフェザー級GPは、まさに激闘だったな。
松 優勝はビビアーノだったけど、DREAMのこの階級は実力者ぞろいだし、王座は安泰とはいえないだろう。これからが楽しみだよ。
竹内 あとはKIDが復活してくれることを願うよ。
松 そしてやっぱり、この日の主役はヨアキム・ハンセンからDREAMライト級王座を奪取した青木真也だろう。
竹内 いや～、青木は凄かったなあ。まさかヨアキム・ハンセンに秒殺勝ちするとはな。
松 えっ? 青木は最終ラウンド残り数秒のところでの劇的な一本勝ちだろ。
竹内 でも、テレビで観たら2～3分で極めてたぞ。
松 それはおもいっきり編集されてるんだよ!
竹内 テレビで観るかぎりはテイクダウンして、金玉蹴られて、またテイクダウンして一本勝ち。
松 だいたいおまえは会場で試合観てるだろ!
竹内 わざと言ってみました。
松 わざわざ嫌味なこと言うな! そして青木vsハンセンの試合後、川尻達也が次の挑戦者に名乗りを挙げた。
竹内 でも、青木は挑戦を受けるかどうか明言は避けたんだよな。
松 そう。「検討します」と、かつて宇野薫が川尻に対戦を迫られたときに言った言葉で返してたな。
竹内 なるほど。ということは宇野と同じように「検討します」→「結局、川尻とはやりません」→「DREAM離れてUFC参戦」ということか。
松 考えすぎだ! そんなわけないだろ! いいかげんにしろ!

——やっぱりそれは「大衆向け＝おもしろい」「マニアック＝つまらない」というムードが悪い意味でも影響をおよぼしてるんですかね。

松林　でもさ、いまの格闘家で世間に届いてる選手っているのかな？

ガンツ　う〜ん、亀田興毅と石井慧くらいじゃないですか。

松林　魔裟斗は届いてない？

ガンツ　04年に山本KIDとやったときくらいは届いてましたけど、いまは「知られている選手」にすぎないでしょうね。だからこそ魔裟斗が出てればザッピングの手を止めるんでしょうけど。

——結論は「世間は亀田興毅と石井慧にまかせとけ！」か。内藤戦はホントに楽しみですし。

ガンツ　これぞ〝大衆向け〟の格闘技ですよ！

——よく考えたら、亀田にしても石井にしても、それこそ内藤にしても、その〝大衆性〟というのは、持って生まれたものよりも、時間をかけたり突発的な出来事によって磨かれたところは強いじゃないですか。でも、マット界って「顔がいいからお茶の間向け」とかそういうレベルで大衆を語ってきたところはある。いや、確かに重要な要素かもしれんけどさ（笑）。

ガンツ　「大衆をナメんな！」って話ですよ（笑）。だから、数年前まで熱い格闘技ファンってたくさんいたんだよね。でもそれが少しずつ離れていって、本来求心力がある桜庭とか川尻の試合が、あからさまな顔見せだったりしたら、ますます離れるし、戻ってこようとも思わない。逆に青木や所くんたちフェザー級GPの選手がやってることがピエロに見えちゃうもん。彼らがピエロに見えちゃうって本当に異常事態だよ。

——だからチャンピオンになっているのに「青木はUFCに行ったほうがいい」っていう声は高まるわけですよね。

松林　でも、DREAMのライト級は今後どうなるんだろうね？　これで青木くんが川尻に勝ったらDREAMでは青木くんのテーマがなくなるんじゃない？

ガンツ　いや普通、チャンピオンというのは下から上がってくる選手を倒してベルトを守り続けるのが常ですからね。なんか、マネージメントサイドのせいなのか、チャンピオンになったら下のヤツの挑戦は受けないみたいな、へんな文化ができつつあるけど。

松林　でも、青木くんが川尻に勝ったら、さらに上を目指すしかないんじゃないか？

ガンツ　そのときはDREAMで王座を守り続けるのもいいし、ストライクフォースでジョシュ・トムソンとやるのもいいし、BJペンを目指すのもいいし、そこは青木が決めることですよね。ただ、いまの〝テレビ格闘技〟の環境にいるよりも、青木が外へ勝負に打って出たほうがおもしろそうな気がするなあ。

“大衆”をナメんな！座談会

ライト級チャンピオンのベルトを奪取し、今後の方向性が気になる青木。DREAMに青木がいるといないのとでは、まったく世界観が変わってくるが、青木の頭の中にはどんな絵が描かれているのだろうか。

本来求心力がある桜庭や川尻が顔見せなら、ますます離れる

——ちょっと話を戻しますけど、スーパーハルクは全否定ですか？

ガンツ　いや、全然。簡単に言っちゃうとそこに勝負論があればなんでもいい。だからミノワマンvsホンマンはOKなんですよ。なぜかというと、ホンマンってスーパーヘビー級だけど寝技も何にもできない選手じゃない。対するミノワマンは、寝技はできるけどミドル級の身体でしょ。これは勝負としては成り立ってるもんね。あの対格差を跳ね返したミノワマンはあっぱれですよ。でも、サクの相手はローキックのガードも知らないボクサーでしょ。あれは一般視聴者だって「このボクサー、何もできない」というのはわかる。あのボクサーがテイクダウンディフェンスを身につけてればOKなんですよ。でも、あれじゃ、わざとできないヤツ連れてきたって思われてもしょうがないよ。

——大衆はけっこう敏感ですよね。視聴者をバカにしちゃいけないって。

ガンツ　かつての桜庭ファンがその思いを共有できないというのは寂しすぎるよ。40歳の桜庭のチャレンジにファンも乗りたい気持ちでいっぱいなんだから。サクの心意気に乗れるようなマッチメイクをしてほしい。

——だから今回の煽りVで桜庭が「オレ、逃げたことありますか？」って言ってたけど、「桜庭、頼むから今回だけは逃げてくれ！」って思いましたもん（笑）。

ガンツ　「3日前に出場が決まりました」と言っておいて、あの煽りVの用意周到さ。これは「最初から決まってたんでしょ？」って思われるじゃん。小細工はいらないって。もうオレは小さい頃からTBSの番組ばかりを観て育った男として情けないよ！

——TBSチルドレンとしては、もっとうまくダマしてくれ（笑）。

ガンツ　TBSってさ、『ウルトラマン』とか『8時だヨ！全員集合』とか、子ども向け番組を大人が真剣になって緻密に作ってて、いま観てもおもしろいものを作ってたわけでしょ。いまやってるTBSってなんだよ、子どももダマせない子ども騙しばっかりじゃないか！

松林　そうは言っても、沢村忠とかのキックボクシングもやってたけどね（笑）。

——だいたいグレート草津の国際プロレス時代から、TBSには選手を育てるセンスがないんだから。

ガンツ　じゃあ、あきらめますか……って、俺はあきらめられないよ!!

【09年10月8日／都内・エンタープレインにて収録】

©みのもけんじ

眠れる森のサダハルンバが

ネットに目覚めた!? んあ～。

黒魔術が解かれた K-1帝国

文筆家であり、音楽家

菊地成孔

誰がなんと言おうとK-1で一時代を築いた我らが武蔵がついに引退！
となれば、この方のお話を聞かないわけにはいくまい。
"谷川黒魔術"という名フレーズの生みの親である菊地氏が語る、
武蔵引退から見えてくるK-1帝国の迷走とは!?

聞き手／ジャン斉藤　試合写真／乾晋也

武蔵はPCで世論とのパイプができたから引退した気がします

――菊地さん、今年は魔裟斗が大晦日に引退し、『ハッスル』からは髙田総統がいなくなり、いろんなものが終わる年なのかなって思うんですよ。

菊地　あぁ、確かに。ちなみにK－1の危機説っていうのも耳にしますよね。実際にはどうなんですか？

――WEBなんかでも噂にはなってますね。谷川さんは前号で「K－1はなくならないよ〜」って言ってましたけど（笑）。そんな中で今回は、菊地さんが以前、ウチのインタビューで「谷川さんから〝永遠の命〟を保障されている」と語った、〝K－1黒魔術〟の象徴である武蔵の引退を中心にお話を聞きたいな、と。

菊地　わかりました。

――そもそも武蔵は今回のワールドGPの出場資格はなかったのに、「もう引退するから出させてくれ」という凄い理由で参戦したわけなんですが。

菊地　それは武蔵本人からですか？

――はい（笑）。通常は世界予選を勝ち上がった選手が出るんですけど、今回はファン投票で3名まで推薦枠で出られることになって、その中で武蔵もギリギリ滑り込みということらしいです。

菊地　今回はテレビ的には〝負けたら引退〟っていう作りでしたね。試合後のコメントでも「今後のことは谷川さんと話して決めるんですか？」とマスコミに聞かれた武蔵が、「いや、負けたら引退ということなので引退します」って言ってる映像が入ってましたけど。

――でも、意外と試合は評判がよかったので谷川さんはさっそく、次の大会のリザーブマッチで武蔵を入れようとしたり、来年の3月に引退興行をやろうとしたりと、なんだかんだであと2回くらい闘わせようとしてるんですけど（笑）。菊地さんから見て今回の武蔵の試合はいかがでしたか？

菊地　よかったですよ。試合自体は〝武蔵流〟と呼ばれる闘いの中にもアグレッシブなものが見えたというか。まぁ、ワタシもそこまで武蔵の試合をウォッチしてるファンでもないんですけど（笑）。

――あくまでイメージとしてだ、と（笑）。

菊地　武蔵の試合で印象深いシーンである金的攻撃が出るとか出ないとか、そういうのは置いといて（笑）。あとはドレッシングルームで武蔵の顔がボコボコに腫れてるのがよかったですよね。照明の強いリング上じゃわからないんだけど、凄絶な試合だったんだな、と。だから、試合はけっしておもしろくはないんですけども、ハードだったっていうのは伝わってきて。

――おもしろくはないけどよかった、と（笑）。

菊地　観客席にいた武蔵のご両親もあんまり悲痛な顔してないんですよね。お父さんなんて最後までニヤニヤしていて。あの感じも含めて、武蔵にはあんまり思い入れがないワタシでも単純におもしろかったです。ただ、武蔵もこれで引退かと思うと、角田信朗や佐竹雅昭もとっくにいない中で、「いままでよくやったんだな」っていう思いは去来しますよね。今回、ワタシは『YouTube』でこの試合を観たんですけど、映像を探してる最中に、武蔵の引退試合が映ってるテレビ画面をビデオ撮影して、その動画をアップしてる人を見つけたんですよ。で、その人が撮りながら泣いてる様子がわかって。

――えぇ!?

菊地　感動してすすり泣いてるんですよ。あれは何かのパロディとかじゃなく、武蔵が引退してガチで泣いてるんだっていう部分でちょっと新鮮でしたね（笑）。

――それは貴重な映像ですねぇ。

菊地　やっぱり世の中には凄いコンサバティブな人がいて、〝日本の格闘技としてのK－1の歴史〟という文脈に対して、凄くまじめに入り込んでるというか。あの映像は迫力があるんで観ることをオススメします（笑）。

――自分の周りには熱狂的な武蔵ファンという人はいないので、そういう話は新鮮ですね。

菊地　そういえば、以前、ワタシが「武蔵は谷川黒魔術によって、時が止まってる中で生きている」ということを言ってからもう1年ぐらい経ちますかね？

――ウチのインタビューでの発言ですね。「武蔵はインターネットのない世界の住人」だという（笑）。

菊地　そうでした（笑）。あのときの武蔵はパソコンというツールを持っていなくて、世論を知らない空間に閉じ込められたキャラクターみたいなものだと仮説を立てたわけですけど。

――そのときに谷川さんにもその匂いを感じるというお話をされてましたよね。谷川さんの根本にあるのは分析や批評をあまり恐れていないということで、それは〝インターネット以前〟の発想だという。

菊地　そうですね。でも、最近の谷川さんは世相がありそうな感じがするんですよね。つまりパソコンを持ってそうな雰囲気に変わってきて。で、どうやら武蔵もパソコンをついに買ったという情報が『格通』に出てたみたいで。

――インターネットという文明に触れたんですよね（笑）。

菊地　ワタシは武蔵のブログは見て

世界と闘えるヘビー級K-1戦士として、03&04年のGPでは準優勝という輝かしい成績を誇る武蔵。しかし、不可思議な判定で贔屓されたり、一大会で金的を3発食らったり、最近ではMMAファイターに秒殺されたりと、どこかズンドコな姿ばかりが印象深いのも確か。K-1の功労者には違いないのだが……。

ないんでわからないんですけど、たぶん毎日「今日はこれ食った」とかそういうのが上がってる程度だとは思うんですけど。

――たぶんそうでしょう（笑）。

菊地　そういうことを考えていくと、おそらく武蔵はパソコンを使うようになってから世論とのパイプができてしまい、そこからあっというまに引退したんじゃないかなっていう感じはありますね。

――あー、なるほど！

菊地　まぁ、パソコンなんか関係なく、ただ単に肉体的な部分で引退したと思いますけど（笑）。でも武蔵の現役生活を考えると、ここ2、3年はわかりませんけど、それ以前の十数年っていうのは〝時が止まった〟と思わせます。もし、早い時期に武蔵に世論とのパイプがあったら、もっと激しく摩滅してたと思うんですよね。たとえば、プロレスのインディー団体の人たちは、みんな世論を気にしてるように見えるんですよ。

――それはあるかもしれないですね。

菊地　そうすると摩滅も早い。ネットによってマイナスの情報が入ってきて、ガクッと崩されるわけじゃないですか？　谷川―武蔵はそれがない国の住民に見えた。でも、ある日、パソコンでその情報の扉を開けた。それによって引退まで一気に導かれたかのような感じはありますね。

――パソコンを持ったがために（笑）。

菊地　やはり情報を見ればいいかというわけではなくて、たとえば見すぎて身動きとれないということは音楽なんかにも凄いあるんですよね。「これをやっちゃうと、いままで支持してたやつらが炎上するんじゃないか」っていうこととか。さっきのインディー団体の話じゃないですが、さまざまなクリエーターの世界で、ネット世論縛りでがんじがらめになってる人々がいっぱいいるんですよ。

――ネットの意見に対して恐れを持っている、と。

菊地　ワタシの世代から見ると、「そんなに神経質になって胃が痛いでしょ。見なきゃいいじゃない、イヤなら」って思うんですけど、彼らにとっては日常的なことなんですよね。世論の反応を見越して動くなんて、昔は政治家が記者を通してやることだったのに、いまはインディーバンドの人が自宅で直でやるようになっています。

――ヘタに動けなくなるわけですね。

菊地　ネガティブジャッジを最小限に食い止めようとすると、どうしても守り型になり、動きが牽制的になりがちです。いまの若い団体はそういう感じなんじゃないかと思いますね。あと、武蔵の引退試合を観て思ったのは、対戦したバンナもネットは見てないんだろうなってことで（笑）。

――確かにバンナも見てなさそうですね（笑）。

菊地　ワタシは今回、バンナもとても印象的だったんですね。おそらく武蔵の引退試合ということで、ひさしぶりにK―1を観た人たちもいると思うんですけど、想像するにみんな「バンナは老けた」って思ったんじゃないでしょうか。

――バンナも武蔵同様に十数年も第一線で闘い続けてますからね。

菊地　確かにバンナは老けたし体力的な衰えも見てとれた。でもそれ以上に思ったのが〝ヨゴレ感〟なんですよ。

――ヨゴレ！　ど、どういうことでしょうか？

菊地　つまり、バンナは一回MMAをやって、安田忠夫に負けている。あれはどう考えてもヨゴレですよね。

――あぁ、確かにあれによって汚れた感じはしますね。

菊地　これはFEGの黒魔術だと思うんですけど、K―1の創成期から活躍している選手たちは一律、みんな汚れてるんですよね。あのアーネスト・ホーストですらプロレスをやってるんだから。

――W―1でボブ・サップと闘ってますね。

菊地　そのK―1に対して、たとえばUFCはヨゴレの感じがまったくないんですよね。前号で谷川さんが「あれはアメリカローカルだ」とかいろいろ言ってますけど、少なくとも汚れてはいない。

――なるほど。

菊地　しかも負けてるという（笑）。

――イメージとして大きいですよね。

菊地　「乖離」といって「抑圧」と区別されるんですが、ぐっと押さえ込むのではなく、フワーと霧散してしまうというか、そんなかたちで多くの人がなかったことにしてるんでしょうね。あれは何かの一過性の間違いだというような感じで。まあ黒魔術ですね。

――ピーター・アーツも大山峻護にあっさり負けてますからね（笑）。

菊地　あの汚れた季節を、もう一回過去として引き受け直さないとK―1の時は先に進まないでしょう。とはいえそういう意味では、相対的に今回の武蔵は汚れてなく見えたんですよね。たとえ武蔵がどんなに金的だらけだったり、不思議な試合だらけだったりしても（笑）。

――ダハハハハ！

菊地　一時期、バンナやアーツたちが時代の流れの不思議なエアポケットみたいなところにグルグル翻弄されて、プロレスラーと闘った。しかもそれが若い時期ではなく円熟期にやらされて、それがあとあと意味を持つかといえば、単に一過性のもので、そのあともすっとぼけて生かされてきた事実に、K―1という団体の業を感じずにはいられなかったですね。K―1の一期生はほとんどヨゴレですもんね。

――きれいなのはアンディ・フグくらいですかね

菊地　フグは純潔の象徴ですよね。で、武蔵の場合でいうと、みんなプロ

世紀の番狂わせと言われた安田vsバンナは 、01年の『Dynamite!!』でK-1vs猪木軍のメインとして行なわれた。バンナは安田の転落人生からの再生ストーリーの恰好の当て馬になってしまったのだ。

武蔵ズンドコバウト

普通の森昭生（本名）に戻ります……？

[03.6.29『K-1 BEAST II 2003』]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ

○ vs モンターニャ・シウバ×
（2R 反則）

モンターニャとK-1ルールで対戦した武蔵。しかし、大巨人は試合中にブチ切れて武蔵をマウントパンチ！　一発で失神した武蔵は試合後、「K-1というものがわかりにくくなった……」とポツリ。なんかかわいそう。

[04.5.3 新日本プロレス『NEXESS』]
東京・東京ドーム

○ vs 柴田勝頼×
（2R 2分0秒 KO）

武蔵唯一の“ヨゴレ”バウトは、ルールが試合当日まで決まらないなどなかなかのズンドコぶり。しかし、寝技20秒ルールの中、グローブ姿でアキレス腱固めを仕掛けられる武蔵というのもじつにシュールな絵であった。

[07.3.4『K-1 WORLD GP 2007 in YOKOHAMA』]
神奈川・横浜アリーナ

× vs 藤本祐介
（延長R 1分23秒 KO）

ヘビー級王座挑戦者決定戦として藤本と激突した武蔵。だが試合は膠着三昧。すると角田レフェリーが「両者消極的なままなら、失格!」と、いま話題の角ちゃん裁定!　これに動揺したのか、武蔵は直後にアッサリKO負け……。

[08.12.31『Dynamite!!』]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ

× vs ゲガール・ムサシ
（1R 2分32秒 KO）

この試合までにvsMMAファイターでK-1勢の敗戦が続き、追い込まれた武蔵。しかし、会場のアウェー感にやられたのか、ムサシのパンチをおもしろいように被弾してKO負け!　引退前の試合がこの一戦というのもなんともかんとも。

最近の谷川さんの発言はヤバイ。黒魔術もなくなっちゃってます

レスやMMAをやってる中で、寸前のところでやっていないというか。

——あ、思い出しましたけど、残念ながら武蔵は新日本のリングで柴田勝頼とやってるんですよね。

菊地　しまった、ホントだ（笑）。

——でも、あれは異種格闘技戦という体でしたけど。

菊地　うーむ。だからやってないようなイメージがあるのかもしれませんね。そうか、武蔵も汚れてなくはないんですね。でも、まぁ試合に勝ってるという意味で、バンナが安田に負けたみたいな痛いヨゴレ感はないですね。目くそ鼻くそという言葉が思い浮かびますが（笑）。

——あのときのバンナは当初は藤田和之戦が予定されてて、K−1最強っていうイメージでしたから、よけいに汚れたところはあるかもしれないですね。あと、先ほど菊地さんが「最近の谷川さんにパソコンを持ってる感がする」っていうのはあながち間違いじゃないんですよ。いま、スポーツ新聞なんかでもK−1の扱いが縮小してるんで、谷川さんが『YouTube』を使った情報発信を真剣に考えてるんですよね。実際に『YouTube』と提携して『K−1チャンネル』を立ち上げたりしてますし。

菊地　なるほど。もう、最近の谷川さんのインタビューを読むかぎり感覚的に危険だと思いますね。言ってることがもうヤバイですよ。

——ヤバイ（笑）。ちなみにそれはどういったところが？

菊地　全体（笑）。

——ダハハハハ！

菊地　もう黒魔術感もなくなっちゃいましたよね。普通に傾斜していく中で、傾斜しまいと闘っている普通の人っていう感じになっちゃってて。PRIDEは潰れませんと絶叫していた髙田延彦と同じオーラに。以前の「こんなこと言うのか⁉」っていう、バカ負けというかバカ勝ちするような感じがまったくないし。「これから『YouTube』格闘技になるかも」というような発言自体が、そもそも失敗する人の言い方ですよ。

——失敗しますか（笑）。

菊地　もう的から外れてるっていうか。確かに『YouTube』は凄いですよ、立ち上がってからたったの4年間で官公庁とテレビ局を巻き込んだわけですから。官公庁もテレビ局も提携なんて言ってるけど『YouTube』主導なわけですし。

——驚異的なツールですよね。

菊地　で、たとえば自民党がネット動画の影響力に目をつけて、ニコニコ動画に「麻生自民党チャンネル」を持ったりしましたけど、結局自民党は歴史的な大敗を喫しましたよね。あのとき自民党は「ニューメディアに出ればイケる」と思ったんでしょう。あれと今回の谷川さんは似ているというか（笑）。

——あ〜、麻生政権とかかぶりますか（笑）。

菊地　だから、ちょっと遅くかつズレてるわけですよね。勝つ人っていうのは「早くない？　しかもこれでいいの？」っていう動き方から、びっくりするような成功を上げる。まあ、先見の明というやつですが、いまさら声高に「活字から『YouTube』の時代」などと言うことを含めて、すべてがズレちゃってる。「UFC？　あんなもんはアメリカローカルですよ」という発言も、見事なまでに旧日本陸軍ですよね。

かつて石井館長はマット界きっての切れ者として、そのアイデアマンぶりを発揮。その最大の発明であるK-1というネーミングも、空手やキックではなく“カズヨシ一番”の略だと言われたり言われなかったり。

——ただ、政治みたいに取って代わる政党が出てくればいいんですけど、『戦極』もそういう感じじゃないですしね。

菊地　そうですね。そもそも日本の格闘技の歴史って一般企業とは違って、自ら積極的に一度団体を解体して先に進んだってことが一回もないじゃないですか？　旅路のはてと言うのかな、追い詰められて追い詰められてのたれ死にというか、帝国が傾斜して終焉を迎えるというか。

——そんな時期に武蔵と魔裟斗が引退していくのもどこか象徴的で。

菊地　それもある種の必然かもしれないですね。いま、DREAMと『戦極』がまったく届いてこないじゃないですか。僕は〝ネーミング〟って凄い大切だと思うんですよ。たとえばF−1の〝F〟を〝K〟にしてK−1と名づけたのは、凄くいいネーミングだと思うんですよね。

——いまやすっかり世間にも浸透してますもんね。

菊地　日本にはネーミングだけで広告代理店が何億もらえるっていう時代があって、ネーミングっていうのは近代的な広告のあり方も象徴していると同時に、古典的な言霊みたいな要素もある。そう考えると、DREAMと『戦極』にはネーミングの力が足りないと思うんです。『戦極』には、「『戦極』って⁉」という感じでで、ちょっとおもしろ味がある気はするんですけど（笑）。

——『戦極』も『SENGOKU RAIDEN CHAMPIONSHIP』、略して〝SRC〟に名称変更するんですけど、このネーミングはどうですか？

菊地　ああ……うーんと、最後で落ちましたね（笑）。略語にしないほうが良かったような。

——ダハハハハ！　落ちましたか（笑）。

菊地　まぁ、『戦極』にはまだ多少おもしろ味があるのに対して、DREAMはちょっとひどすぎましたよね。変態座談会も含め、誰もが指摘していたこととはいえ。

——ひどすぎますか（笑）。

菊地　格闘技史上最悪（笑）。さかのぼれば、あれだけブームになったUWFだってWWFと同じ、三語の略語であるという意味で、さほど新しくはなかった。でも、それが〝U〟って呼ばれるようになってネーミングの力を持ったわけです。第二次Uはいま考えるとソフトはダメだったかもしれないけれど、あれだけのムーブメントになったというのは、一つには名前の力によるところが大きかったと思うんですよね。

——なるほど。

菊地　そのUWFが散ったあとにできたリングスとパンクラスもいい名前ですよね。いまでもパンクラスとリングスが残っているのは、あれは名前がいいからだと思います。

——もはや名前だけが存続してる感じもありますけど（笑）。

菊地　まあ、それだって凄いじゃないですか（笑）。あと、PRIDEもはじめは大会の名称だったのが、あたかも団体の名称のようになったって

菊地成孔

DREAMに力がなく見えるのは名前がダメだからだと思います

いう経緯はいいですよね。大会名と団体名が曖昧なまま、一大ブランドに成長したっていう。リングスの団体名がKOKにはならなかったように、ああいったパターンはいままでになかったですから。『HERO'S』なんかも名前がダメだったと思いますね。

——『HERO'S』もダメですか（笑）。

菊地　前田日明が「ヒーローズだっけ？　ヒーローだっけ？」っていうくらいですしね（笑）。

——で、上井文彦さんが会見中に「ヒーローズって書いてヒーローって読むんです！」って小声でささやいていたっていう（笑）。

菊地　しかし、一方で「内実が伴えばどんな名前だっていい」っていう考え方はあります。格闘技の話から地滑りしちゃいますけど、たとえばね、大学なんかでメディア論の話をするときに、「テレビはメディアとして影響力を失なったのか？　ネットの時代なのか？」っていうテーマが必ず出てくるんですよ。

——なるほど。

菊地　そのときの僕の答えとしては、テレビはまだファシズムみたいな力を持っていて、でも逆にそういうふうに見えないからこそ力を振るうんだ、と。いま、一番日本人の立ち振る舞いや社会的な思考を決定してる存在って、お笑い芸人だと思うんですね。80年代までのお笑い芸人っていうのはキテレツというか、端的に軽いキ〇〇イであって、そういう人々を笑うということが庶民の精神の浄化になっていたわけですが、いまのお笑い芸人っていうのは正反対で、空気を読んで巧みにその場を捌くようなクレバーな人たちが集まってるというか。痛くて怖いキ〇〇イの啓示的な力よりも、社会性を重視し、コスパ最高値で全員が生きることこそクールでクレバーなんだっていうことを、毎日バラエティ番組で啓蒙してると思うんですよ。

——なるほど。

菊地　KYも全員でブロックして痛くないようにする、と（笑）。そういう社会モデルをお笑い芸人が実践してますよね。ネットの中の人々の立ち振る舞いは、いまのところネットの中でしかコピーされないけれども、バラエティにおける話し方、処し方は社会生活全般の中でコピーされている。そういう意味ではまだテレビは強い、と。

——はい。

菊地　で、先ほどのネーミングの話につながるんですが、いまのお笑い芸人の芸名というのは、完全にフラットで、もうなんでもいいのだというふうに見えます。たとえばU字工事にしろ、次長課長にしろ、ブラックマヨネーズにしろ、違和感はまったくない。単に本名でもいい。いまワタシが凄く興味があるのが、若い芸人さんが芸名をつける瞬間に何を考えてるのかってことなんですが。

——確かに（笑）。

菊地　身の回りのものを見て適当に決めるのか、凄く考えて決めるのか想像もつかない。昔はコントの人はモダンな名前で、漫才の人は青空球児・好児みたいな野暮ったい感じだった。それがいつからかテレビの中でマッシュされちゃって、漫才でもコントみたいな芸名になり、お笑いだけではなく、バンド名なんかも含め、ネーミングという行為が平坦化していって、傑出した名前を許さないというか。「痛み」の存在を許さないというか。

——あぁ、そうですね。

菊地　これは言うまでもなく、国民の不安と、治安感覚、社会感覚と無関係ではありません。どんなにキテレツで、言いづらい名前をつけたとしても、あっというまに痛みは消される方向で処理されるでしょう。ここに言霊の重要性を見失なわせる構造があり、DREAMという名前はそういう世の中のありように、一番悪いかたちで沿っちゃったと思うんですよ。

——なるほど。

菊地　言葉の力を軽視、もしくはつかめなかった者にはそれなりの結果が出ます。K-1というネーミングは石井元館長の最大の発明ですよ。石井元館長は年代的にもコピーライト世代の人で、ネーミングの重要性を知っていたから、武蔵っていう、〝ちと痛い名前〟を積極的につけ、そして気がつけば角田や佐竹っていう本名の人が消えていき、武蔵と魔裟斗が月と太陽のようにK-1を支えてきたわけじゃないですか。

——確かにそうですね。

菊地　そういう意味では名前の力で切り裂いていく〝石井イズム〟は実践されてきた。でもいまやK-1、武蔵、魔裟斗、そして言霊の力に導かれたフグ、ホースト、レ・バンナ、ボンヤスキー、バダ・ハリ、ホンマンといった〝力のある本名〟まで駆動してきた15年間が終わりを迎え、ある種の賞味期限切れになってきてる。ネーミングというのは、なんだっていいんだと思える時代になった。しかし、団体としては一番フレッシュなはずのDREAMがまったく力がなく見えるのは、やはりひとえに名前がダメだからだと思います。

——なんでダメだったんですかね？

菊地　変態座談会では「夢」というワードはターザン山本さんの呪われた形見であるという達見が展開されていましたが（笑）、ワタシが感じるのは、ネーミングしたときのイージーさと弱さですね。大変だったんで余裕がなかったという事情に、名前なんてなんでもいいという世相のワナにきれいにハマった感があります。説明になってませんけど、お笑いのチーム名やバンド名という世界と、格闘技団体名という世界は違うんですね。『戦極』というのは、それに比べると微っ妙な（笑）。

——今度はなにしろRAIDENですからね（笑）。

菊地　得体の知れない力は感じられなくもありませんが（笑）。K-1でいえば〝K-1甲子園〟っていうネーミングには力があると思いますよ。K-1が生んだ、最後の強い言葉じゃないですかね。そう思うと選手の名前もいい（笑）。

——谷川さんが高校生ファイターを寵愛するのもあながち間違いではないんですね（笑）。今日はありがとうございました。

【09年10月3日／都内・菊地氏の事務所にて収録】

きくち・なるよし■1963年6月14日生まれ。音楽家、文筆家。ジャズミュージシャンとして活動する一方、音楽、映画、料理、ファッションなどの著作多数。『kamipro』の論客としても知られ、谷川貞治FEG代表のキャッチフレーズ"谷川黒魔術"の生みの親でもある。格闘技批評に『サイコロジカル・ボディ・ブルース解凍』(白夜ライブラリー)。

勲vsヴァンダレイ・シウバが実現!

よUFCが
へ本気になった!!

撮影／金山フヒト

ついに世界最大のMMAメジャー団体がアジア制覇へ!!

かねてから日本進出が噂されていたものの、なかなかその具体性は見えてこなかったUFC。しかし、ここに来てその動きが一気に活発になってきた……ような気がする。そんなムードがあるのだ。

それが如実に表われたのが、10月13日に都内ホテルで行なわれた格闘技ゲーム「UFC 2009 Undisputed」発売&「UFC登竜門ジ・アルティメット・ファイター」WOWOW放送開始記念記者会見でのこと。この会見にはUFCで活躍する宇野薫、岡見勇信、秋山成勲のほか、WECを主戦場とする水垣偉弥が出席した。

その席上では、来年2月に開催される『UFC110』（米国・ラスベガス）、『UFC111』（オーストラリア・シドニー）の2大会のどちらかで、秋山成勲vsヴァンダレ・シウバが行なわれることが発表された。ともにかつて日本を主戦場とし、PRIDEミドル級王者だったシウバと『HERO'S』ライトヘビー級王者だった秋山によるドリームマッチが海を越えて実現！ もちろん、この一戦を世界で最も注目するのは、両者の活躍を見続けてきた我々日本人ファンだろう。

そもそもUFC入り当初から対戦したい相手としてシウバの名を挙げていた秋山。今回、デビュー2戦目にして世界的な知名度を誇るシウバとの一戦がマッチメイクされた裏には、韓国市場に絶大な知名度を誇る秋山への期待の高さが読みとれる。日本のファンからすれば、シウバが〝戦友〟桜庭和志の敵を討つという構図になる。きっとシウバはSAKUベルトを肩からぶら下げて、阪神タイガースのキャップをかぶって入場するに違いない!!（勝手な妄想）。

また、この会見ではUFCに再挑戦中の宇野薫が11・21『UFC106』（米国・ラスベガス）で、ファブリシオ・カモエス戦に臨むことも発表。ちなみに同イベントにはヘビー級王者のブロック・レスナーやホジェリオ、さ

2010年2月大会で秋山成勲vs

いよいよ
アジア制覇へ

王者のブロック・レスナーやホジェリオ、さらにフィル・バローニなど、日本人になじみの深いファイターも多く参戦。

そして10・24『UFC104』では、ライトヘビー級王者のLYOTOがPRIDEミドル級GP王者のマウリシオ・ショーグンを挑戦者に迎える防衛戦のほか、日本から岡見勇信と吉田善行が出場。今秋以降のUFCは日本のMMAファンは目が離せないラインナップになっているのだ（決してWOWOWの宣伝ページではありません）。

また、会見席上には姿を現わさなかったものの、今回はUFCのマッチメイカーのジョー・シウバ、さらにはかつてPRIDE FC WORLDWIDEの社長を務めていたジェイミー・ポラックの野郎も来日。

ま、まさかPRIDE復活……!? なんてことは2億パーセントありえないが、会見後に行なわれたという懇親会では、UFC関係者からは「●●●は今後どうするんだ?」「△△はUFCに興味はないのか」などと日本人選手の名前が飛び交っており、新たな日本人ファイター獲得のための来日なのかもしれない。実際、最近もUFCが日本のビッグイベントに参戦経験のある選手と契約寸前まで事が運んだものの、諸事情により合意に至らなかったという噂も流れている……。

さらにUFCはビッグイベントにかぎらず、日本の各団体の王者にも触手を伸ばしているという話もまことしやかにささやかれている。なかには日本のファンが「え、そんなところまで?」と思うような選手にまで、青田買いのようなかたちで声をかけているケースもあるとか。

次のページは日本を主戦場とする外国人選手の海外流失のケースに触れているが、このままだと日本人選手のさらなる人材流出は避けられないだろう。来年の今頃は、日本を取り巻く格闘技界の勢力図が大きく変わってもなんらおかしくはない。UFC旋風、そしてダナ・ホワイトの高笑いが日本を席巻する!?

キング・モー、ストライクフォースと契約!!

うわ〜ん、外国人スターがいなくなっちゃうよ〜!!

外国人ファイターの〝海外流出〟が止まらな〜い!!

『戦極〜第十一陣〜』のポスターのメインビジュアルとして使われていたのは、『戦極』から生まれた超新星キング・モーだった。しかし、『戦極』の國保広報は先日行なわれた記者会見で、「もう帰ってこないんじゃないですかねぇ」と、今後の『戦極』出場の可能性がチョー低いことをあきらかにした。すわ、DREAM参戦!? ……なんて騒がれたのは数年前の日本マット界のこと。〝MMAの首都〟が日本からアメリカに移ったいま、選手が最終的に目指すのはアメリカになってしまった。事実、キング・モーはヒョードル獲得で勢いに乗るストライクフォースとの契約に合意。話し合い次第では、同団体と提携中のDREAM登場もありえなくもないだろうけども、これからのモーの主戦場はアメリカになる。

アメリカを選択したのは、モーだけではない。ゲーガル・ムサシ、ホナウド・ジャカレイ、ジェイソン・〝メイヘム〟・ミラーらDREAMの外国人ファイターたちも日本再登場の可能性を残しつつ、軸足はストライクフォースに移し気味だ。11月7日のストライクフォースでは、ムサシvsソクジュというスーパーハルクで幻に終わったビッグカードが実現する。ソクジュvsサップよりこっちが見たかったよ……。

ズバリ、ウエルター級(76キロ)以上の階級は、ファイトマネーやスポンサードの面でアメリカとの差が出てきてしまった。ライト級以下は日本とはそれほど待遇に差はない模様だが、MMAブームに湧くアメリカだけに、軽量級もビジネスとして確立されていくのは明白だ。「俺は日本が大好きさ!」なんて殊勝なコメントを残している外国人選手たちも、いつどうなってもおかしくねぇんですよ、マジメな話。まあ、プロだから自分の腕を高く買ってくれるところで勝負するのはあたりまえのこと。だけども、ムサシvsソクジュが見たかったなあ……。

本誌じゃ読めないインタビュー

ここに載ってます!!

10.25パンクラスで初防衛戦
フライ級キング・オブ・パンクラス

砂辺光久

インタビュー 絶賛公開中!!

美女格闘技『ジュエルス』BLOG

注目の美女格闘技イベント『ジュエルス』のBLOGを毎日更新中。月替わりの10月担当は富田里奈です!!

金沢"GK"克彦 こちらプロレス村役場ドットコム

元『週刊ゴング』編集長・金沢"GK"克彦氏が、プロレス界の最前線で見てきたこと、取材したことを週一回のコラムで激筆!!

ポッドキャスト番組『mimipro』

カリスマ司会者・原タコヤキ君がお届けするプロレス&格闘技トーク番組。多彩なゲストも登場、ここでしか聞けない話もあります!!

試合速報

注目の試合の内容をいち早く速報します。試合の写真はもちろん、試合後のコメントなども細かくレポート!! 生観戦後も必読ですよ。

ニュース

カード発表や重大発表など、規模の大小にかかわらず記者会見の模様を素早くお伝えします。最新情報はここで読もう!!

最新号情報

次号の表紙は? 内容は? そんな疑問にいち早くお答えします。雑誌『kamipro』およびkamipro booksシリーズの発売情報はこちらで!!

青木真也『週刊!? ワオ木真也』を一部公開中です!!

プロレス&MMAのニュースサイト

kamipro.com

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
カミプロドットコム

無料です!

レッツ毎日アクセス http://www.kamipro.com/

人の痛みがわかる読者プレゼント

kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①～⑦の質問の答えをご明記の上、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は2009年11月26日(月)頃発送予定です)。

【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦大晦日に一番見たいカードは?

【宛先】〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス『kamipro』編集部
「日本最後」係まで

※応募締切は2009年11月15日(木)当日消印有効

PRESENT*01

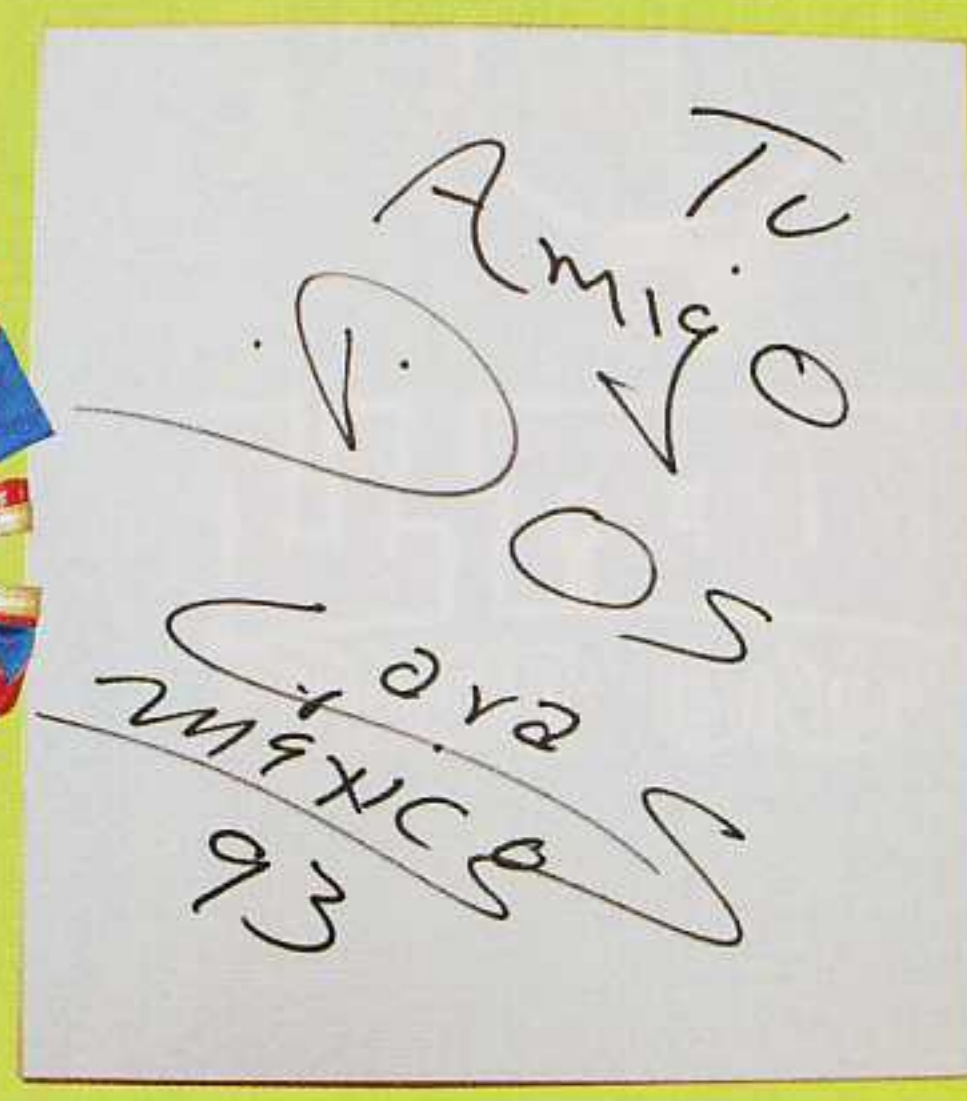
サイン入り

1名様

ドスカラス サイン入りマスク&サイン色紙

[闘道館]

アロンカナレス製のドスカラスのサイン入りマスク(販売価格15,000円)にアミーゴへの色紙もつけてプレゼント!! 闘道館はコスチュームやグッズを多数販売中です!!

闘道館■http://www.toudoukan.com/Page/TOP

PRESENT*02

サイン入り

3名様

単行本
ブル中野サイン入り『金網の青春』

[非売品]

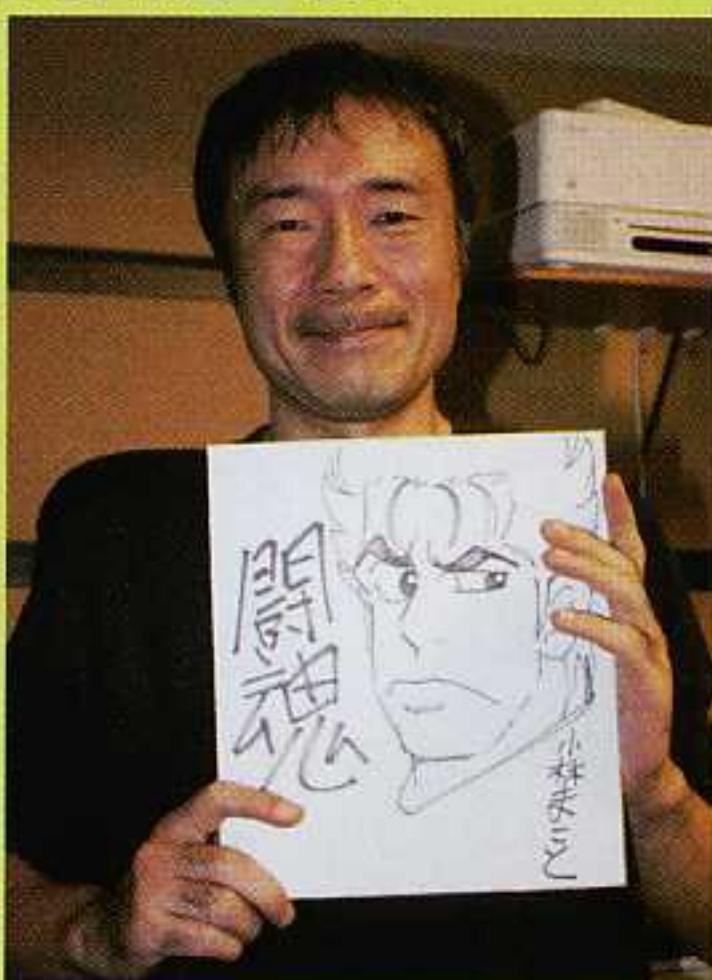
奇跡の登場となったブル様から、かつてご自身が書いた自伝『金網の青春』にサインを入れていただきました。貴重すぎる逸品です。それにしてもお美しい!!

PRESENT*03

1名様

小林まことサイン色紙

[非売品]

プロレスファンのバイブルとなったマンガ『1・2の三四郎』など名作を多数生み出した小林まこと先生の貴重なサイン色紙をプレゼント!

PRESENT*04

1名様

高谷裕之サイン色紙

[高谷軍団]

『DREAMフェザー級グランプリ』で準優勝をはたした高谷裕之のサイン色紙をプレゼント! 「筋トレしろ」というメッセージ入りです。

高谷裕之オフィシャルブログ■http://evil-fist.syncl.jp/

PRESENT*05

1名様

ソクジュ使用済みTシャツ

[非売品]

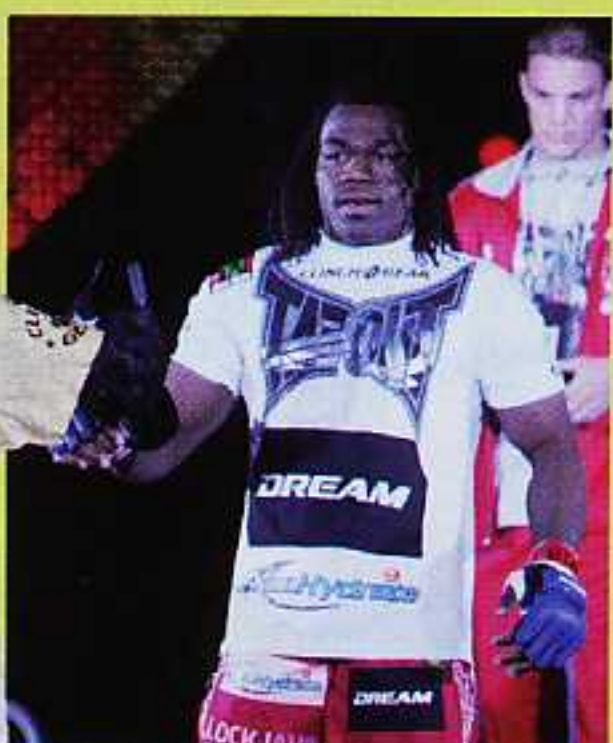
『DREAM.11』に参戦したソクジュのセコンドを務めた凄腕整骨師ケン・ヤマモト先生が試合後の本人からもらってきてくれたTシャツです。これは貴重だ!!

DREAM■http://www.dreamofficial.com/

PRESENT*06

1名様

BACK

FRONT

所英男『TOKORO 11』Tシャツ

[リバーサル/5,040円(税込)]

所が大ファンの某球団をモチーフにした『DREAM.11』のタイミングで出された新作Tシャツ!! サイズはMです。リバーサルのHPでは別カラーも発売中です。

リバーサル■http://www.rvddw.com/

PRESENT*07

1名様

菊池茂夫写真集
『ROCKER'S TATOO ATACKS!』

[ミリオン出版/¥1,890(税込)]

本誌でおなじみのロック写真家・菊池茂夫 vs ミュージシャン59人のTATOO写真集!! 帯文を書いた須藤元気と菊池さんのTATOO対談も収録です!!

菊池茂夫DIARY OF PHOTO ASSASSIN 4■http://plaza.rakuten.co.jp/

PRESENT*08

1名様

DVD
『JWP激闘史』団体対抗戦2 vs全女&GAEA JAPAN編

[クエスト/¥5,880(税込)]

セールス好調なJWP女子プロレスのDVDシリーズ。いま本誌の柳澤健氏が連載で発掘中の全盛期の全女との対抗戦など、貴重な映像を収録!!

PRESENT*09

1名様

DVD
『Krush ライト級 GP 2009』開幕戦 Round.1

[クエスト/¥5,040(税込)]

青木真也も熱狂しているK-1ルールを採用したキックボクシング、Krush。盛り上がりを見せるKrushライト級グランプリAブロックの1回戦&準々決勝戦収録。

PRESENT*10

1名様

DVD
『Krush ライト級 GP 2009』開幕戦 Round.2

[クエスト/¥5,040(税込)]

K-1完全協力のもとに開催された全試合K-1ルールのKrushライト級グランプリBブロックの1回戦&準々決勝戦を収録。石川直生のカッコよすぎる姿を目撃せよ!!

株式会社クエスト■http://www.queststation.com/

kamipro140 応募券
アマサーファー

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

こちらでも毎週プレゼント実施中!! http://kamipro.com/

kamipro 紙のプロレス
No.140
2009年11月6日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョロ
松下ミワ
スズキィ
八木賢太郎（ジハードショックのため非番）

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
ジャイ子

編集次長（ウォッカ2着で大撃沈）
松林 貴

デザインGM
出田さん（TwoThree）

デザイニングマネージャー
金井ヒサくん（TwoThree）

デザイン
松坂マツくん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
鐘田やっちゃん
白木みのる（以上、TwoThree）

トメさん
はなえちゃん（以上、さおとめの事務所）

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
山口比佐夫
吉場正和
平 専英
戸成嘉則
タイコウクニヨシ
梅木麗子
丸山剛史

お勘定
工藤ちゃん

ヤサイマシマシニンニク
入江二郎（TwoThree）

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

業務部
樽本"出社足止め"義之

編集庶務
原 正典
山内ユリコ

終身名誉編集庶務
高木由美子

編集チアガール
金川"ナツコ"奈津子
白倉"クララ"明子

みゆき通り
廣橋久美子

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）

発売元
株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177東京都千代田区富士見2-13-3

印刷
図書印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

■広告掲載のお問い合わせは下記まで
株式会社エンターブレイン
スポーツ企画編集部 ☎03-3265-7166

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート]
☎0570-060-555
（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00～17:00）
メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン（URL: http://www.enterbrain.co.jp/）、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。

11・7ストライクフォースで、ついに金網デビュー！

そうだ! ヒョードルに逢いに行こう!!

NEXT ISSUE

初のケージ大会の行方は!? 10.25『DREAM.12』速報!!

kamipro Special 2009 DECEMBERは11月5日（木）発売予定!

11.7『戦極～第十一陣～』速報&大晦日情報満載!!

No.141は11月24日（火）発売予定!

※地域によっては多少発売が送れることもありますよね（微笑）。